早乙女貢
権謀
上
文春文庫

文春文庫

権謀

(上)

早乙女貢

権謀(上)

早乙女貢

春文庫

文春文庫

権謀

(上)

早乙女貢

文藝春秋

権謀（上）

青年

長崎を訪れたことのある人は、誰しも感じるであろうが、地形的に見て、実に天然の良港をなしている。

三百メートル前後の山稜の間に深く切りこまれたようにえぐられた長崎湾は、こうした地形の特徴として水深も不足なく、東シナ海の風濤から船と港を完全に守ってくれる。

湾外の伊王島など大小十数の島々が波浪をやわらげ、屛風のように屹立した稲佐山の丘陵が西風をさえぎっているのだ。湾口が南を向いているのも好条件である。

この良港を発見したのはポルトガルの宣教師という。

元亀元年春、大村氏に乞うて交易と布教活動の根拠地としたのが今日の長崎発展の由来という。が、それまで無人の浜だったのではない。

応永ごろ地頭となった長崎小太郎の末裔甚左衛門頼景が大村氏の被官として長崎城を築き、権勢を誇っていたのである。

元亀の前年、永禄といえば、中央的には川中島の戦いなどのあった天文・弘治の後で、足利将軍は義輝・義秋（のち義昭と改名）が争い、新興勢力として織田信長が擡頭してきた、もっとも戦

国らしい激動の時代。
その永禄八年の春——三月のはじめの朝まだき。
長崎湾口、神崎ノ鼻を一衣帯水にのぞむ蓑尾郷の浜に流れついたものがある。
丸太を五、六本並べただけの筏(いかだ)である。
その上に一人の若者が縛りつけられていた。
「お爺ィ、死人だよゥ」
発見したのは、漁師の娘だった。
十四歳のおつる。漁師の娘には惜しいきりょうで、長崎の侍たちの中には、だいぶ目をつけている者もいる、という噂だが、本人はまだ、童女の感情らしい。
今朝も、貝を拾いに浜へ出た。
昨夜、ちょっとした嵐があった。大風で荒れた翌朝は、珍しい貝が浜へあがることがあるのだ。
「なんじゃい、大仰な声ば出しよって、南蛮貝でも拾いよったとな」
「死人よ、死人が流れついたと」
「溺れたとじゃろ、昨夜はあげな嵐じゃったけんのう」
「ううん……」
そうじゃない、と力説しようとするのだが、驚きと昂奮でうまく言えないのだ。
おつるは夢中で老人を引っ張って小屋から出た。
東に山を背負っているので浜辺を朝日が染めるのは遅い。
空は水色に澄み、雲が美しく色づいて、昨夜の嵐も嘘のように、水面は凪いでいる。
この美しい朝に、残酷な情景だった。筏に縛りつけられた若者ははげしい波に洗われて、肌着

は千切れ、下帯だけの逞しい五体もぐったりとして生気がない。
浜育ちだけに、おつるは馴れていた。左胸に耳をつけて鼓動を聞くと、ぱっと目を輝かした。
「お爺ィ、生きてるよゥ」
その声に呼びさまされたように若者は、かすかに呻いた。
からだは冷えていた。冷えきっていた。
普通の体力気力だったら、とっくに死んでいたろう。
このむごい私刑(リンチ)にあう前か、流されているうちに何かにぶつかったのか、半裸の肌に無数の傷があった。
生々しい傷口は、血まで洗い流して、無気味に口をあけていた。この若者の異常なほどの気力が激浪と冷水に耐えぬいたにちがいない。
「お爺ィ、早く！」
おつるは気丈だった。
ナタを持ってきて、固く、ひき締った麻縄を切りほどくと、老人と二人で小屋の中へ運んだ。
「火ばどんどん燃やすとよか。わしゃ村の衆が気のつかんうちに筏ば始末してくるけん」
「筏なんかどうでもよかとよ」
「うんにゃ、始末したほうがよか」
老人は、孫娘に一々説明しているひまもないように、ナタを持って小屋を出ていった。
(どげな事情か知らんばってんがムゴかことばする)
まだ幼な顔を残した若者なのに。
こんな残酷な私刑をした以上、助かったと知ったら、またどんな手をのばしてくるかしれない。

乱世を生きてきた六十年の智恵だった。
筏はバラバラにしてしまえば、ただの流木になる。
老人が戻ってきたときは、若者はいろりのそばで水を飲んでいた。
「おう、気がついたごとあるな。どぎゃん風じゃ工合は」
「おかげで生きかえった」
笑おうとしたが、痛みが走ったらしく、うっと語尾をのんで眉をひそめた。
「あ、まだ無理をしたらいかんばい。寝とくほうがよか」
若者は素直にこの言葉にしたがった。
年齢は十六、七だろう。筋骨逞しく、苦痛に時々、顔をゆがめるが凜々しい顔だちだ。
眉が濃く、唇が赤い。少しばかりのあいだに、肌の色艶も死人の色からよみがえっていた。
粗朶(そだ)火の赤い色のせいではない。しおれていた草木が、慈雨を得て生き生きとよみがえるように、生気がみなぎって、見る見る充実してくるのだ。
「どぎゃん事情があるか知らんばってん、安心して養生するがよかたい。ひどか目に逢うたもんな」
「私は……悪いことはしていない」
「よかよか、何も話さんでよか、名も素姓も知らんほうが気楽たい」
そう言われると、かえって隠しておけない。命の恩人なのだ。
「——城之介」
と、名乗った。
「やれやれ、御丁寧なことたい。わしゃ弥助じゃ」

「あたしは、おつる」
ペコリと、頭を下げて、
「ねえ、お爺ィ、気つけ薬にお酒がよかとやないね」
「そうじゃな、与八ンとこさ行って一升借りて来るがよか」
大きな瓢箪を抱くようにして、出ていったと思うと、間なしに駈けもどってきた。
「お爺ィ、お侍がいっぱい来るよ」
武士が大勢やってくる。
おつるが顔色を変えたのは、その物々しい様子を見たからだった。
兜こそかぶってはいなかったが小具足に槍薙刀を持った、十数人の一団だった。
浜辺で何やら声高に話しながら歩きまわっている様子が尋常ではなかった。
(探している!)
筏を探しているのだ。
城之介にとっては、
(敵!)
と感じた。
「探しにきたとよ、城之介さまを探しとるのよ」
「叱ッ、声がふとか」
弥助老人は制止して、戸口からのぞいたが、
「来よった、間違いなか」
と、おつるの言葉を裏書した。

道具というほどのものはない、貧しい小屋のうちに、破れつづらがある。弥助老人はそこから、ぼろ布に包まれた細長いものをとりだした。

布をひらくと、一振の刀が出て来た。拵（こしらえ）のしっかりした由緒ありげな大脇差である。

刃渡り二尺ほどもあろうか。かなり反りがふかい。

「さ、これば持って、藁の中へ隠れんされ」

考えているひまはない。城之介は、言われた通りに、土間の藁の中へもぐりこんだ。

漁師小屋だが、縄をなったり蓆（むしろ）を編んだり、何かと藁は日常に役に立つ。綿がないと藁蒲団も珍しくない。

「息苦しかばってん、がまんして」

おつるが、頭の上に蓆をかけ、蓑をかぶせた。

横柄な喚き声が、戸口に迫っていた。ほとんど間一髪だった。

「おやじ、居るか」

ひげ面がのぞいた。

槍も薙刀も抜き身である。いうまでもなく、かれらは長崎甚左衛門頼景の家臣たちだった。

この蓑尾郷のあたりは、長崎氏の所領でも南のはずれで、宿縁の深堀家との境に近いから、争いが常に絶えない。

「おやじ、浜で変わった物ば見んじゃったか」

「へえ、変わった物て何かいな」

「筏だ。人間が一匹、縛られとったはずじゃ」

「知りまっせんが」

「隠すと、為にならんぜ」

「隠すも何も、知らんもんは知らんですたい」

弥助老人は、藁の上に坐って、縄をないはじめている。

「熱い」とひげ面がしかめて、

「やけに火ば燃しとるな、火事になるぜ。もう寒かなかろうが」

「年寄りに冷えこみはこたえますけん」

「娘も冷えとるか」

ひげ面はおつるをみた。

「娘の尻は、どげん暑かときでも冷えとるがのう」

赤い口が舌なめずりした。

おつるは恐怖と不安で、わなわなしていたのだ。その様子も、捜索者たちの眼に不審にうつったのかもしれぬ。

娘のおびえている姿は、男には刺激的なものだ。荒々しい血をかきたてずにはいない。

胸や腰のあたりに、女らしいふくらみが、粗末な小袖の上からもはっきりわかる。

気持の上では清純な少女でも、成育したからだが放つ色香は蔽うべくもない。本人が意識していないだけに、みずみずしく、処女肌が匂うようだ。

ひげ面の武士は、この娘の評判を思いだした。

「おつるという名だったの」

「……」

ぴくっと、娘の肩がふるえた。

青い顔だった。唇が動いたが声が出ない。
「ははは、何もそぎゃん恐がることはなか、とって食おうと言わんたい」
「……」
「そん代り、抱いちゃってもよか」
ぬっと、入ってきた。
「これ、何ばなさるとな」
弥助老人があわてて、ナタをつかむのを、じろりと見て、
「爺はすっこんどれ。くたばりぞこないに用はなか」
「うんにゃ、お侍でも、孫娘に手ばかけたら、許さん」
「言うわ、言うわ」
ひげ面は巨軀をゆすって哄笑した。
それから戸外(おもて)の部下たちに、ほかの家を探すように、命令した。
弥助老人のけんまくに怖れをなしたのではなかった。部下たちを追いはらったのは、いやしい目的があったからだ。
「邪魔者が去(い)んだわ」
と、戸をたてて、ふりかえった顔は、いろりの炎をうけて、ぎらぎら脂光りしている。
「さて、ゆるりと聞こうたい。本当に筏に縛られとった奴を知らんとか」
「知らん」
「爺に聞いちょらん。おつる、答えろ」
「は、はい……」

「昨夜、四郎ヶ島のあたりで流れとったのを、漁師で見たやつがいる。潮の流れと風向きからいっても、この辺に、流れついたはずたい。筏を引き上げたらしかあともあるけんな」
「……」
「若僧ばってんが、五島の海賊じゃ、なかま割れして筏流しされよった。生きとりゃ捕えて責め問いする。どうせ打首じゃが、死体でも曝首(さらし)にする」
そう言いながら、おつるの表情をうかがっているのだ。
おつるも弥助老人も平静をよそおいながらも、城之介の潜んでいる藁の山が気にかかってならない。
さぞ息苦しいだろうと思う気持が、ちらちらと視線を走らせる。
(面妖だど……)
ひげ面は気がついた。
不審の眼で見れば、異常な状態はそれとわかる。
かれは土足のまま床へあがると、いろりから火のついた粗朶を抜きとってにやりとした。
「あっ、何ばしなさっと」
乾いた藁だ。ぱっと燃えあがった。
弥助老人が武者ぶりつくのをどうと蹴倒すや、ぼっと藁の山へ投げた――。
たまぎるような悲鳴をあげて、おつるが走り寄る。弥助老人もあわてて駈けよる。
その藁の中からはね起きた城之介の姿に、ひげ面は哄笑した。
「出て来よったな、小僧。そぎゃんところに隠れちょって、助かるばし思うてか」
この髭の武将の失敗は、おのれの腕を信じすぎたことであろう。

小さな筏に縛りつけられて、半死半生になっていた若者——というだけで、舐めてかかっていたのだ。

「観念しよれ、どっちみちその首は鳥がかっぽじるとたい。来いッ」

「わかった」と城之介はいった。

「見つかった以上、しかたがない。だが、火を消さんと家が燃える」

「ははは、こぎゃん、ぼろ小屋が燃えよが倒れよが、知ったこっちゃなかたい。来い！」

城之介は唇を嚙んだ。

その間にも、藁はどんどん燃えているのだ。おつるも弥助老人もありあう水桶をぶちまけたが、それぐらいでは消えそうにない。

「首にしても、連れてゆくたい」

ぎらりと髭は抜刀した。

これまでだった。ぱっと城之介は燃え藁を蹴上げるや、抜き打ちにすくい斬りの一刀を走らしている。

膝から腿を斬られて、のけぞりながら、腕いっぱいに叩きつけてきたのをかわしざまに、踏みこんで二撃を袈裟がけに——的確にきまった。

しゃーっと血が霧のようにしぶいた。断末魔の咆哮をあげてぶっ倒れたのをふりかえりもせず城之介は、藁の火を消しにかかった。

「待ちんされ」

弥助老人はあきらめたように、かぶりをふって、

「こぎゃんことになったら、もうどうしようもなか。この小屋は燃やすしかなかですたい」

「なぜだ」

「この死骸な隠せまっせん。お前さま、こいつの鎧ばはいで着なされ、そして火事さわぎにまぎれて逃げるがよか」

愚図愚図していれば、煙を不審に感じて連中がもどってこよう。

城之介は素早く、死体から具足をひきはいだ。血を拭いているひまはない。そのまま着込むと、濡れ蓆を頭にかぶった。

「それでよか。おつるばひっさらって走るがよかたい。その方が、奴らの目ばくらませる」

「お爺ィも逃げんと……」

「わしのことはよか、早よ、裏山へ入って南さ行けば御領外に出る。野母崎で落ち合うけんな」

弥助が残り火をあふった。いろりの中にもそこらのものを投げこんだから、ぼうっと燃え上り、炎が天井までとどき、柱や棟がめらめらと音をたてて燃えはじめた。

その煙と火に、漸く気がついたらしく、火事だ、と叫び合うのが聞こえた。

「ゆくぞ」

城之介はおつるを横抱きにするや濡れ蓆に顔を隠して飛びだした。

妖気

その少し前、長崎甚左衛門頼景（初名頼純）は顔も洗わずに酒杯をかたむけ、
「まだ捕まらんのか」
真っ赤になって吼えていた。
「おれが領内に流れついたのが、本当なら、とり逃したら笑いものじゃ、草の根をわけても捜しだせ」
「手配りしてございます。御安心のほどを」
重臣の戸町惣兵衛重方がこたえた。
「ねずみ一匹、逃しはしませぬ」
自信にみちた言葉である。
事実、この長崎氏の勢力は、このあたりでは大村純忠についで強大であった。甚左衛門は純忠の被官大名である。
長崎城は長崎港の奥、金比羅山の南がわの丘にあった。天然の要害で、鶴ノ城、あるいは龍ノ城との別称もあったというから、かなりの規模を持っていたさまが想像できる。

その望楼からは、入江が一望に見わたせる。入江に入ってくる船影も手にとるようにわかる。入江の口はむろん要所に烽火台がそなえられ不審の船を見れば、のろしで知らせるようになっていた。
少し後に、宣教師ワリニャニが長崎のことをイエズス会に報告した文によると、
〈この場所（長崎）は天然的な城塞である。いかなる日本の領主も武力をもってこれを占領し得ないであろう〉
と、書いている。
また、三百年ほど後に、吉田松陰が、長崎に遊んだ日記の中に、
〈城山ニ登リ長崎ヲ望ミ、小魯恩ヲナス、山ノ形勢、峯火山其後ニ興リ昆比羅山其右ニ連リ、彦山其左ニ峙シ、宜カナ、長崎甚左衛門ナルモノ地利ヲ恃ミ……〉
云々とある。
山城である。城は戦さのときにたてこもるためで、日ごろは山すその屋形に住んでいる。むろん、屋形といっても、周辺は濠を掘り土塀をめぐらし、所々に矢はざ間を切り、望楼もそなえていた。
甚左衛門は身のたけ六尺を超える巨軀である。顔も大きく、もみあげが黒い炎のようだ。
ギヤマンの酒杯に透ける真紅の酒を、もう五、六杯も飲み干していた。
赤酒、とも珍陀酒とも称う。ブドー酒である。近ごろ平戸をさけて、横瀬ノ浦に入ってくるようになった南蛮船から手に入れたものであった。
「美味い！」
舌をならした。

「戸町、われも飲め」
「忝(かたじけ)なき仰せながら」
「いやか」
「血でございますな、まるで。血を飲むような気がしまして」
「甘いぞ。南蛮人の血かもしれんさ、ははは」
豪放に笑った瞬間、ぽとり、と酒杯が落ち、けたたましい音をたてて割れた。
（どうした？）
ぎょっとした。
瞠目して割れたギヤマンの酒杯を眺めている。
甚左衛門はまだ壮年だ。酒好きだが、手のふるえる歳ではない。
それに、日本の盃やぐい呑みとちがって、ギヤマンの酒杯は細足に底がひらたい。手からすべるはずがなかった。
が、すべった。
すべり落ちただけではない。
異様に感じたのは、粉々に砕けたことであった。
「殿……」
と、戸町惣兵衛が眉をひそめて、
「如何なされました」
「うむ」
「ギヤマンの破片は足に刺さりまする。これ、女ども、とり片づけい」

「いや、待て」
甚左衛門はなおも、夢から醒めぬような表情で、小姓が差し出す三方から新しい酒杯をとりあげた。
珍陀(チンタ)酒を注がせると、ぐいと、一息にあけた。それからだった。わざと、手からすべらせたのだ。
さっきとほとんど同じ——無骨な手から、すべり落ちた酒杯は、しかし、割れることもなく転がったのである。
第三者の眼からは、さっきと少しのちがいもない。
「面妖でございますな」
戸町惣兵衛も首をひねった。
「あまりの違い……」
最初のは、みじんに砕けている。
次のは、全然、割れずに転がった。
ギヤマンの材質も大きさも同じものなのだ。
真っ赤だった甚左衛門の顔が歪み、眼はまだ焦点が定まらなかった。戸町などの感じた不審以上の、濃い疑惑に包まれていた。
（おれは落とさなかった。いや、かりに手が呆(ほう)けて、落としたとしてもだ、割れはせぬ）
それをたしかめてみるために、二度目に落としてみたのだ。
（誰かが、引っ張った……）
そう感じた。酒杯は、勢いよく落ちた。

叩きつけたのだ。叩きつけなければ、みじんには砕けぬ。
「誰が?」
思わず見まわした。
戸町をはじめ、君側の者たちは啞然としている。
甚左衛門の不審はかれらに通じようもない。あり得ないことなのだ。
座には六、七人いた。その目の前で、誰が、主君の手から酒杯をひったくる者があろう。
あり得ないこと。
(いや、たしかだ、誰かが……)
ぎろりと、濁った眼であたりを見まわしたとき、天井ですさまじい音がした。
ねずみが十匹ばかりで走り回る音だった。
「なんじゃ、狂いねずみめら」
ふり仰ぐ——その視野の中に、ふっと、影が入った。
回廊の縁先である。影が一つ、音もなく入ってきて、坐った。
部屋の中に妖気が流れた——。
音もなく、その影は忍びこんだのである。
天井を見上げた一瞬であった。
影に気がついたとき、天井のねずみの狂躁は、嘘のようにやんでいた。
「だ、誰だ!」
端近にいた若侍が、ひき吊るような声をだして、刀をつかんだ。
「………」

にやりと、笑ったようである。
妖気がはれ、その奇怪な男の風貌をあらわした。
「——わしじゃ」
ゆらりと、簀ノ子に腰をおろしている。
異様、というしかない。年齢性別民族の見当もつかない。
赤茶けた蓬髪を、うしろで藁で束ねている。ひょろりと背が高い。眉毛があるかなしかにうすいのも無気味だが、奥眼がぎらりと大きいのに、眸(ひとみ)はどこを見ているのか、虚ろに灰色だ。
頬骨が飛びだしそうに削げた頬——痩軀鶴の如く、という形容があるが、枯木に着物を着せたようだ。
広袖の柿色の衣(ころも)である。
唐人のようでもあり、赤茶けた毛髪や灰色の眼、その長身などは南蛮人の血が入っているようでもある。
「わしじゃ、どうなされたのか」
ほとんど歯の抜けた黒い口をあけて、みんなの緊張をあざけるように見まわしている。
「うぬか、果心(かしん)か」
甚左衛門は、腰をおとした。
この奇怪な人物なら、さきごろから長崎の城下に住んでいる。
どこから来たのか、どこへ行くのか、誰も知らぬ。
果心と名乗った。
一切の素姓が不明だが、奇妙な術をつかう。だから、興味と、それ以上に怖れの眼で見られて

いるが、本人はひょうひょうとして好きなときふらりと屋形へあらわれる。
果心居士と呼ばれているが、この男が、何か食べるところを見た者はいない。
霞を喰っているわけではない。
酒が好きらしい。いつも、瓢簞を腰にぶら下げ、曲った杖を手にしている。
「何しに来おった」
甚左衛門は苦々しげに言い、酒杯をとったが、
（こいつか！）
と、気がついた。
「こりゃ、果心、また、いたずらしおったな」
「ほ。なんのことかの」
「とぼけるな！」
「聞いておる」
「ギヤマンの盃を、ぶち砕いたのはうぬであろう」
「知らんよ。おぬしが、とり落としたのであろう。それ、それ、手がふるえておる」
そう言われると、手がふるえ、指先から知覚がなくなるような気がした。あわてて、甚左衛門は酒杯を置いた。
（目くらましじゃ！）
手に持ったギヤマンの酒杯を、妖しいワザですくい落とされ、叩き割られたのだ。
（奇ッ怪なやつ！）
えたいの知れない果心居士の無気味さは、領主の権力でも手に負えない。

「いたずらはよせ、ギヤマンは急には手に入らぬ」
甚左衛門はそう言い、そのおのれの言葉が媚びるような調子になったことに、腹が立った。
（こんな幻術師に、嘲弄されて、がまんせねばならんのか、わしともあろうものが！）
風か、影のような相手であった。権威も武力も、この男の前には、まるで意味をなさぬ。
「ギヤマンで一杯、チンタ酒を頂戴したいな」
ぬけぬけと、果心居士は言った。
「のどがかわいてな」
「水でも飲んだらどうだ、水なら入江にうんとある」
「チンタ酒がよろしいわな」
これを聞こえないように、甚左衛門は大きな、あくびをした。
「眠い……」
無視した。
帰れよがしである。が、果心居士は、けろりとしている。小鬢のあたりの毛を一本抜いた。
ふうッと吹き飛ばす。
赤茶けた一本の毛——風に乗って、くるくるっと、宙に舞ったと思うと、すーっと、部屋の中へ流れこんできた。
「………」
甚左衛門は、その毛が、鼻の穴へ入ったような気がした。懐紙をだして束のまま、洟をかんだ。
が、まだ、鼻の中がむずむずする。
指を突っこんで、掃除をはじめた。癇性らしく、

「ええい、くそ！　気持の悪い。毛抜きじゃ、毛抜き」

小姓が、蒔絵の文筥を捧げる。銀の毛抜きも南蛮渡来のものである。

ところが、鼻毛を抜きはじめると、

「これこれ、鼻毛をむやみに抜くと、血を吹くぞな」

「なんの」

「血を……」

「うるさい！」

「血……」

その言葉に誘われたように、ぴッと鼻毛を抜いたとたん、しゅっと血を吹いた。

鼻血。

しゅッしゅッ……あとからあとから血は流れだす。あわてて、手拭をあてたが、あふれる血汐は、とまる気配もなく、ものすごい勢いで、手拭を真っ赤に染め、さらに、膝から床いっぱいに流れてやまず、またたく間に、血の池になってしまった。

「わッ、こりゃなんと」

「殿！　殿！」

狼狽して、甚左衛門たちは血の池から逃れようともがいた。

あわただしく走って来た者の声に、はっと夢からさめたように、甚左衛門は、あたりを見まわした。

血の池どころか――、

血と見えたのは、真っ赤なチンタ酒が膝前にぶちまけられて、目くらまされたにすぎなかった。

（くそ！　目くらましにやられたのか！）

血と見えたのは、真っ赤なチンタ酒。南蛮船より手に入れた貴重な酒だったそれをぶちまけての目くらまし。甚左衛門はかっとなった。

「ぬッ、まやかしが！　愚弄しおるか」

刀をつかんで立ち上ると、つかつかと簀ノ子へ出た。

奇怪な老幻術師――果心居士は、風が吹いたほどにも感じないように、ひそりと坐っている。

「許さぬ！」

抜刀しようとした。

「ほ……抜かしゃるな」

「うぬ！」

「家来衆を斬るのか」

「なに？」

ふーっと靄が目の前に掠めた。

果心居士だと思ったのは、注進に来た家来だった。

「――そちか」

甚左衛門は、刀の柄から手を離して、ほっと息をついた。

「彼奴は？」

その果心居士は、四、五間はなれたところで、涼しい顔をしているではないか。

怒りで胸が破れそうだったが、まだ肩で息をついている家来の報告は、それどころではなかった。

「殿……お手配の海賊を……」
「どうした、捕えたか」
「それが、残念ながら、とり逃しよりました」
「ちぇッ、たわけが」
怒気をまともに受けて、その男は口ごもった。
「安岡十蔵どのば斬り、弥助小屋に火ば放って、裏山へ逃げこんだごたるふうで」
「追え、追うて、ぶった斬れ」
足踏みして、甚左衛門は怒鳴りたてた。
「はあ、追うちょります」
「深堀にでも逃げこまれたら、どぎゃん仕様もなかぞ、たわけが！」
うすら笑いを浮かべて、聞くともなしに聞いていた果心居士が、
「ははァ、あれか」
と、首をのばした。
ここから、城下の家並みを越えて入江の口が見える。その左手に、煙のあがっているのが見えるような気がした。
「燃えている……」
「どこだ」
と、甚左衛門も、簀ノ子の端に立ったが、
「どこだ、煙も何も見えんぞ」
「はは、お前さまには見えんじゃろ、わしには見える。その男が逃げてゆくさまもな、手にとる

ようにわかる」
「………」
「若い男じゃな。凛々しい顔をしておる」
「………」
「それに、女ご」
「なに、女が一緒か」
「小娘じゃがの、うむ、まだ男を知らん腰つきじゃの」
「弥助の娘か」
それなら聞いたことがある。家来たちが、噂をしていた。それほどの女なら、召し出してみようか、と思っていた矢先なのである。
「そやつの名は」
「城之介……とだけしかわかりまっせん」と、注進した男は、おどおどしながら、
「十蔵どのが、臨終のきわに、申しのこされた名前ですたい」
娘も一緒だとすると、
(一石二鳥というわけだ)
甚左衛門は、思わず、ほくそ笑んだ。
感情のない枯れきった顔で、聞いていた果心居士は、そのとき、ふらりと腰をあげている。
「さて、行くとしようかの」
独りごとだ。いや、それが、この奇妙な幻術師のあいさつだった。
「待て、果心」

「待っても、チンタ酒は飲ませてくれんでの」

「そ、それは、うぬが、ぶちまけてしもうたくせに。勿体ないことをしおる」

「なんの」と、しなびれた顔がふりむいて、

「もう一瓶、あるわな」

ぐっと甚左衛門は詰まった。

なんでも見透す奴だ。怒りよりも恐怖が先に立つ。

「ほほ、預けておくぞな」

ぬけぬけと言う。

「もどってくるまでな。そのときはギヤマンに一杯、飲ませるがよいぞな」

「うむ。わしの頼みを……」

「わかっておる」と、また黒い口に、乱杭歯を二、三本、にょきっと見せて、

「捕えるのじゃろ、その二人」

「さ、左様」

「わしゃ、タダ酒は飲まぬでの。さっきは、前払い……一杯飲んだら、いまごろは、ここへ、その二人が並んどったわ」

「いまからでも遅くはあるまい」

「ほほ、少々高くつく」

焦らすように、

「二杯じゃな」

「二杯でも三杯でもよいわッ、早よういって……」

「二杯でよい。一人、一杯じゃ。城之介で一杯、娘で一杯……」

「わかった」

怒りもならず、甚左衛門はいまいましげに、

「用意して、待っておる」

「ほほ、ほほ……」

空洞を吹く風のような、奇妙な笑い声で、

「急いだほうがよいの、急ぎには、木ノ葉舟がよい」

「……」

啞然としている前で、果心居士は、縁先の楓に手をかけた。

唐土が原産という、春なのに赤い葉をつけた一本の楓である。一丈あまりで幹もほそい。唐傘のように枝をひろげた下に立って、果心居士が、ちょっと幹を揺すると、はらはらと、赤い葉が散った。

赤茶けた蓬髪と柿色の衣の果心居士は、赤い葉っぱに包まれて、

「ほほ、ほほ……」

葉っぱはほとんど全部が、晩秋のように散り果てて、枯骨を包んだかに見えた。

その奇妙な笑い声が、やんで、はっと甚左衛門はさめた。

二、三枚の葉が散っているだけで果心居士の姿は、ない。

妖異の人、果心。

読者は、この奇怪なワザを見て、思いあたるふしがあるかもしれない。

インド魔術に似ている。

それも道理で、本朝に渡ってきた幻術と称するものは、インド魔術と発生を同じくしている。

多くの宗教が、その発生期に於て、怪異な、魔力をひそめていたことは、婆羅門(バラモン)教や、中国の道教などから見てもわかるが、幻術の威力もまたその要素だったのである。

ペルシャ文化がインドに入り、天竺文化となって中国へ入り、東洋色を強めて日本へ渡ってきたのが奈良朝のころだが、のちの能・文楽などの原初形態ともいうべき散楽のうちに、この〃幻術〃も含まれていた。

当時、中国では〃百戯〃の中に入れていて、曲芸や物真似とも同じようなあつかいを受けているが、これが、本朝では密教などと結びついて、呪術を加え、神秘な幻妖の術として、ひそかに伝承されてきたのである。

その奇体なまやかしが、世間を騒がせたのは、平安朝のころからで、『今昔物語』などにも散見されるところだ。

果心居士が、その生いたちはどうであれ、この流れを汲む者であることは疑いない。

なお、ついでに述べておくと、この〃居士〃というのは学徳ありて仕官せざる人、出家せずに仏道の修行をする人、などをさす。

在野の処士にして学たかき点でも、その幻術が道教や密教の秘奥を会得した上に立っている点でも、果心の居士たる所以がある。

伊賀という瘦地が生んだ、貧困なるがゆえの忍者などとは、同じように見えて大いなる違いがある。

幻妖の無気味さは、神秘性を帯びていた。

果心居士に俗欲の臭いがないのもそのゆえである。恬然たる姿には、いうなれば、神韻びょう

びょうたるものが漂っているのだ。

その果心居士。

長崎甚左衛門頼景が目くらましからさめて、唖然としているころ、すでに、四、五町も離れた丘の上の稜線を風のようにゆく。

走っているのではない。

涼しい顔で歩いているのだが、常人の走るに似て、さらに早い。

城下をはずれると、弥助小屋を焼く火がすぐ屋根の向こうに見えた。

果心居士は、しかし、途中で道をそれた。

弥助小屋に行って、なんとか十蔵の愚かな死体を見てもしかたがない。尾根に立つと、その曲りくねった蛇杖(へびづえ)を立てた。

(城之介はいずこか)

唱えるともなく、唇が動く。

風は南から吹いた。蛇杖は北へ倒れる。

「雲気東方ヨリ起リ、南風タメニ烈シ……運の強い若者じゃな」

北方は長崎城を指している。風の起こるところ精気在(あ)りの象(しょう)である。果心居士は、南へ杣道(そまみち)を歩きだした。

緑に包まれた山稜である。

長崎近辺は高山はない。二、三百メートルから六百メートルどまりの適度な高さで、濃淡の緑が春陽に映えて、その中にところどころ、雪を残したように見えるのは山桜であろうか。

「やはり、あそこじゃナ」

果心居士は峰に立つと、ひとり合点した。
思った通り、という満足感である。
戸町岳の北西の山腹に、とろりと碧みをたたえた湖がある。その湖に望んで、鬱蒼たる樹林の間に古寺が見えた。
このあたりはほとんど道らしい道はない。雑草の生い茂った小道は、もう長い間、ろくに人が通らなかったことを物語っていた。
山門もくちはてて傾いているが扁額だけはどうやら読める。
白連山長楽寺。禅宗の寺であるが、こう廃寺同様となっては、宗派も何もない。もしも住んでいる者がいたら、禅師も狐狸のたぐいと見られてもしかたがない。
「ふむ、居るな……」
昨夜の雨でゆるんだ急な小道は常人なら滑りおちる。
果心居士は、まるきり空気のように身軽くおりてくる。
庫裏のあたりで、匂いがした。何やら煮ているらしい。
「芋粥じゃナ」
と、果心居士は中をのぞいた。
庫裏には、大入道がひとり、炉端に大あぐらをかいて寂然としていたが、その言葉でおっくうそうにふりむいた。
あまり肥っているので、首だけねじるわけにはいかず、からだ半分ゆらりとこちらをむいた。
「――居士かい」
達磨が面壁九年目に、やっと動いたという感じである。

「わしじゃ」
「まだ、このあたりに居たのかのう、もはや天竺へ去んだと思うちょったがの」
「そのつもりでいた……」
黒い口をあけて、果心居士はうっそり笑った。
「気が変わった」
「ほう、いつから」
「いまさっき、の」
「と、申されると」
大入道の目がぎょろりと光った。
「何やら、おもしろうなったでの、ほほ、ほほ……」
「何がおもしろい？」
「あれさ……」
と、ほそい顎をしゃくって、
「あの二人さ」
「……」
大入道が灰の中に手を突っこんだ。大きな手である。
灰の中から隠していた脇差を抜きとるのが見えた。
「無駄じゃがの」
と、意にも介せず、ゆらりと炉端に向かいあって坐るのを、
「去ぬるがよいぞ、居士」

「のぼせまいて、禅師」
「犬は去ね」
言いざまに、果心居士の胸へ脇差の片手突き――常人の二倍はありそうな巨軀なのに、意外に素早い動作だった。
ほとんど、からだを動かしたとも見えなかった。
果心居士は、あの不可解な笑いをたたえている。
大入道の禅師が、巨体からしぼりだすような咆哮で、灰まみれの脇差を突きかけたのにも、軽く、ふわりと衣の袖をひるがえしただけである。
ただ、ふわりと――。
春風を呼んだにすぎない衣のひとふりだった。
「あっ！」
脇差は、宙に飛んでいる。
大入道自身、どうして、手から脇差がぬけたか、わけがわからなかった。
一転、大きく弧を描いて、脇差は、板戸にぶつかり、突き刺さっている。
板戸には、水際の葦とかささぎが一羽。その眼玉のあたりに突き刺さっている。
「禅師、気が早い」
果心居士は、怒りもせずに、
「二つのむだをしたのう、一つには、わしに刃をむけても、役に立たん、いま一つは、その要もないということじゃ」
「――長崎の城に」と、大きく息をついて、

「出入りしているおぬしゆえ」
「それそれ、早まるまい」
と、板戸に顎をしゃくった。
あの蛇杖で、板戸をするりとあけた。
重い板戸である。杖の先が、ひょいとふれただけで、すべるように開いた。
杖が招く。
「来よ……」
せまい納戸になったそこには、城之介とおつるがひそんでいたのである。
城之介は、いざといえば抜刀するばかりに、刀の柄に手をかけていたが、果心居士の幻妙のワザに呆然となっていた。
板戸の隙間から、一部始終をのぞいていたのだ。
「来よ……城之介」
蛇杖が招く。
杖の先が、ふわりふわり、宙に円を描いている。
その円は、あたかも水が渦を巻いて吸いこまれるように、おそろしい勢いで、かれを吸い寄せている。
刀の柄に手をかけたまま、抜きもならず、手を放しもならず、城之介は、竜巻に巻きこまれたように、宙に浮くのを感じた。
「あ……？」
すーっ、と吸い寄せられた。

「ほほ、ほ……」
果心居士の声だけが、その耳に聞こえた。ふっと、その声がとぎれたとき、城之介は炉端に引き据えられていた。
「案じることはない。わしゃ、長崎甚左の家来ではないぞな」
「では」
「ただの居士よ。果心と呼べ」
そういい、炉にかけた鍋の蓋をあけて、
「やはりな、芋粥……」
匂いを楽しんだだけである。
「城之介は、運が強い。もって生まれた運の勢いじゃナ、親は誰じゃ」
「運が強い。もって生まれた運の勢いが強い」
こう、喝破して、
「父御は誰じゃ」
と、聞いたのは、常人に非ず、と睨んだからであろう。
城之介の身にそなわった天運、その〝星〟を尋常のものではないと見た果心居士の、しかし得心のいく答えは得られなかった。
「知りませぬ」
城之介は、きっぱりとこたえている。
「私は、平戸で生まれた……それだけです」
並よりも、からだは大きかった。十歳ぐらいから、船で働いた。炊夫(かしぎ)の手伝いの洗い子である。

壱岐や対馬から、朝鮮にも交易に行った。
何度か難破したこともある。
海賊船の乗組みになったのは、二年前からだった。
海賊といっても、ただ沿岸を荒しまわったり、航行の船をむやみと襲うという時代は過ぎている。
ことにこの近海の海賊は、どこかの大名の庇護下にあった。
もともと松浦党にしても、五島一族にしても、先祖は海賊稼業だったのだ。
城之介の乗った船は五島を根拠地とし、大村純忠との相互関係がある。
平戸はいうまでもなく松浦党の松浦隆信の根拠地で、西九州一円を掌握せんとして威をふるい、相神浦、壱岐、佐世保、日宇、早岐(はいき)、彼杵(そのぎ)一帯に手をのばしていた。
大村純忠はその脅威の裏をかくべく、五島海賊に平戸襲撃を依頼した。
平戸に放火して、住人をみな殺しにし、混乱に乗じて、一気に平戸城を襲う計画をたてた。
城之介が反対したのは、平戸の街に放火するという点である。
平戸には、知人がいる。育ててくれた恩人だ。
放火の手引きに利用しようとした連中に抵抗した城之介は、
〝掟(おきて)〟によって、筏流し、の目にあったのだ。
五島の海賊は、中国人で全盛時には三千人の輩下を率いた王直(おうちょく)の流れを汲んでいる。
私刑(リンチ)もまた東シナ海の海賊流であった。
大村純忠は激怒して、

「さむらいの掟では、裏切り者ははたもの（磔刑）にかけた上、サラシ首にするぞ」
と、勢力圏の被官大名、豪族、地頭らに命じて、沿岸一帯を探させたのだ。
城之介に秘密を暴露されてはたまらぬ。
平戸襲撃のことも、それ以外の大村氏と五島海賊との関係を洩らされるおそれもある。
城之介なる少年が、もし生きていれば、抹殺せよ、との厳命だった。
大入道の禅師、名は愚門。おつるや弥助は檀家というだけでなく何かと世話になっている。坊主は、ことに禅坊主は庶民が文盲の時代の知識である。
事情を聞いて、
「愚門にまかせなさい」
と、ひきうけたのだ。
破れ寺の愚門。
自らそう称している愚門禅師。
不惑はとっくに越しているらしい。俗欲の外にいて、悠然と山間の小寺を守っている。
大の権力嫌いだ。この辺は地形が変化多く、長崎領とも深堀領ともつかない。
戦国時代は領地の境界など、大体、山の稜線か、川などが主たるもので、村落でもあれば別だがそうでないところは、大まかなものだった。
むろん愚門禅師は、
「どっちゃからも寺領はビタ一文もろうとらん」
したがって、どちらの支配も受けない、と豪語している。
豪快な名僧である。腕力も強い。こんな破れ寺でも、なにがしの寺宝があるかもしれぬと忍び

こんできた野盗四、五人を、如意棒でとりひしいだほどだ。
その愚門ですら、果心居士の夢幻風影の前には、子供扱いだった。
「いずれ、ここにも侍がくる」
と、果心居士はいった。
「城之介の身は、わしが引き受けようわさ」
軽く言ってのけたが、ちらりとおつるを見た。
女は困る、という意味か、二人では目立つ、というのか。
俗を抜けて、仙に遊ぶ幻妖の老爺には、若い男女の気持を理解するものがないのか。
おつるは黙ったまま、目を伏せた。
恐怖と混乱の数刻だった。
幼い胸には、突然に襲ってきた黒い竜巻も、それが明日はどうなるか、予想もつかない。
この破れ寺にかくまわれて、ほっとしてから、混乱はしずまったが、恐怖と不安は去らなかった。
（悪いことだったろうか？）
ただ、筏に縛られていた少年を哀れんだだけではないか。
少年がどんなことをしたかしらない。
城之介も悪事はおかしていない、と言っているが、おつるのひたむきな、少女らしい感情は、少年の行為が悪か善か、批判する以前の、率直なものだった。
少年は死にかけていたのだ。
ごく自然の人情でした行為が、運命の歯車を狂わせることになってしまおうとは。

幼い胸にも、しかし、城之介を死の一歩手前で救ったということが、ほのぼのとした喜びになっている。山路を逃げてくる間も、城之介はしっかり手を握っていてくれた。

これまでにおぼえなかった、温かいものが、胸を包んでいる。

まだ、その思いが、

（恋！）

と、まだ意識するには、少し距離があったけれども。

恐怖と不安のなかにも、だからひそかな喜びがまじっていたのは否めない。侍たちに追われている城之介と別れてしまえば、おつるには直接的な追及はなくなる——。

城之介を救けてからの数時間、一度もそんなことを考えなかったおつるだ。

果心居士の冷たい眼は、少女の淡い夢をひき裂いたのである。

甘い肌

その十日ほど後。

城之介は平戸の港を歩いていた。

春の陽が漸く黄ばみはじめた時刻で、往来の人も多く、ざわめきに揺れている。

この肥前の、というより九州の西北端にある良港は、戦国時代にもっとも活気を呈したところである。

古くは博多ノ津や唐津とともに玄界灘に面した三ノ津として栄えたし、ことに室町期に入ってからこのあたりの豪族松浦氏の勢力がぬきんでてきて、その根拠となった平戸の繁栄をもたらすことになった。

同じ良港でも博多や唐津よりも平戸が、この時代に栄えるに至った理由の一つは、永年にわたって松浦氏が掌握していたことにある。

松浦党の内部では常に勢力争いがあったにしても、平戸に根拠を置くという姿勢は変わらず、港を発展させた。

松浦七党と俗に言われるが、戦国乱離のうちに多様性を帯びて、分裂と統合を繰り返し、いま

では松浦三十六党と称し、松浦肥前守隆信がそのほとんどを支配していた。
平戸を称して、
（海賊によって栄え、海賊によって亡びた街）
という人もいる。
一面の真実でもあり、要約した評ではあるが、松浦一族は、いわゆる海賊とは性格が少し違う。
われわれの概念での〝海賊〟はただ、海上に商船を襲い、海賊同士が戦い、港々を荒しまわることをさす。
中国や韓国で畏怖して称したところの、
〝倭寇〟
の中心が松浦一党にあることは勿論だが、ただ、暴虐に放火殺人掠奪に終始したわけではない。
交易が主目的であり、卑劣な官辺の重税や慣例を無視した横暴さに対して、武をもって抗したにすぎない。
内国的には肥前の西北の松浦郡を領する武士である以上、戦国の争いから逃れ得ない。竜造寺氏や、有馬氏、千葉氏、少弐氏などとの抗争を繰り返してきていた。
武士としての信義と、海商としてのそれを合致させたところに内外の飛躍と、松浦党の存続があった。
前に述べた、明海賊の五峰王直が、松浦に逃れて来て本拠をかまえたのも、松浦一党の信義に厚い証拠だ。
この王直が住んでいた唐風の屋敷あとが、現在、印山寺屋敷として、昔のおもかげを伝えているが、明国の商船も安心して入港してくるし、南蛮船も往来して、交易が盛んになっている。

松浦氏が、むろん税金もとるが交易を奨めたから、内外の船舶が輻湊して、一日千本の帆柱の林立を見るほどの繁栄を誇っていた。
だから、平戸の港町は雑多なおもしろさがある。
城之介も初めてではないのに見飽きない。
「あら、城之介さま！」
ふいに女の声がした――。
「城之介さま、もしっ」
反射的に、城之介の左手は刀の鯉口にかかっていた。
「ねえ、お待ちなさんせ」
「……………」
城之介はふりかえった。
織るような群集の往来である。
声の主は見えない。平戸には女が多い。武家に町人に漁師、農民。あらゆる階層の妻女や娘たちや、淫らな嬌声をあげて昼間から男を招く遊び女たち――。
はなやいだ声が、それだった。
「ここよ、城之介さま」
白い手が出窓の粗格子からひらひらした。
「お見忘れ？　夕月ですよぉ、ほら、いつぞや……」
男の心をくすぐるような甘ったるい含み笑い。
二、三人往来の男たちが、好奇の目をむけた。

城之介は笠の下で赤くなった。

思い出した。ふた月ほど前に、ひそかに平戸に来た。海賊たちは時々、息ぬきに派手に遊ぶ。そのとき、無理に連れてゆかれた遊女屋である。

たしか、銀杏屋とかいった。柿色の大のれんに銀杏の紋が白く染め抜いてあったのをおぼえている。

そのときが、城之介のはじめての経験だったのだ。つまり、夕月が、かれを〃男〃にした。

城之介には、面映ゆいことだし、嫌悪感のほうが強かったが、夕月にしてみれば忘れ難い客だ。

城之介が、女体に触れるのがはじめてと知ると、夕月は狂喜して手ほどきをした。

「うれしい！　ほんとにいいの？　ほんとうに？」

罰が当たらないかしら、とさえ言った。商売気ぬきで、溺れた。

済んでから、何を思ってか、しくしく泣いた。

はじめは嫌悪で一ぱいだったが、ひとたび女体を知ると、そして、魔性のもの、とばかり思っていた化粧の女に、意外な涙を見ると、城之介は愛しさを感じていた。

僅かな銭で、どんな男にも肌の切り売りをする汚れた女の悲しさは、少年の理解の外だ。

どうやって慰めていいか、まごついていると、涙に濡れた顔をあげて、夕月は恥ずかしそうに、淡く微笑んだ。

「ごめんなさい、つい悲しくなって……でもいいの、お前さまのせいじゃない」

それから送り出すために立ち上ったが、

「また来て下さいな」

と、抱きすがった。背伸びするようにして、城之介の唇を吸った。

少年はとまどい、来れるかどうかわからない、と言った。

「正直ね」夕月はころころと笑い、

「いいの、来れなくっても。でもいつか来て下さると思いたい……そう思っていたいの」

あらたな涙が、またきらりと光った——。

その女なのだ。

城之介は真っ赤になると、笠をかたむけて、足早やに立ち去ろうとした。

「待って、あたしよ」

夕月は、草履を突っかけて走り出てきた。笠の下をのぞきこむようにして、

「やっぱり城之介さま。ね、おぼえているでしょ、お寄りして」

「いや、今日は……」

何といって断わっていいか。

こうした遊女たちと戯れる言葉を知らない城之介である。

往来の男たちは、そんな情景ににやにやして通りすぎながら、

「ほ、ほ、想われ男じゃな、果報者よ」

「わしも、女ごに顔をおぼえられるほどになりたいもンじゃて」

「遊女は客の顔なぞ、おぼえんわな。おぼえるのは、男のアレじゃ、あそこじゃ、えへへへ」

卑猥な笑い声を立てたり、聞こえよがしの嫌味だ。

当時堺と並ぶ二大港、今日ふうに言うなら国際港だ。往来の男女の服装も雑多だ。身分も人種も多種多様だから、悪い意味の都会的弥次馬根性で、げらげら笑っている。

恥ずかしいだけではない。あまり人目に立ちたくない。

大村一党の手からは、果心居士のおかげで逃れ得たが、この平戸でも、どこにどんな眼が光っているかもしれない。

五島海賊の私刑(リンチ)から脱したものの、秘密の漏洩をおそれるなかまが、城之介の生存を許すはずはなかった。

「放してくれ」

と、城之介は言った。

「用がある」

「あら、でもちょっとだけ」

「用があるのだ」

「ほんとうに？」

怨むような眼――あの眼なのだ。いまにも、涙がにじみそうに見えて、

「あれから、ずっと、待っていたのに……」

女の匂いは、それだけで男をしびれさせるものだ。夕月が袖を動かすたびに、そら焚きの、濃い香料がたちのぼって、城之介の顔を包みこむ。

それは甘い肌の匂いといりまじって、あのときの官能の疼きを思いださずにはいられない。

それに、ぴたりと吸いつくような、なめらかな肌――こんな汚れた商売とは思えない美しい肌は天成の麗質だろうか。

逡巡している城之介の気持を見抜いたように、夕月は抱きついたまま、ふり仰いで言った。

「ねえ、ちょっとだけ、お寄りして、ね、お話しするだけなら、いいでしょ。京のお話しをしてあげる」

夕月は京生まれだと言った。言葉がきれいで、城之介の耳には、こころよい笛か琴の音に聞こえたのだ。

「ありがたいが」と、城之介は率直に言うしかなかった。

「銭がないのだ」

その言葉を待っていたように、

「その銭は私が出してやろうじゃないか」

野太い声で言ったやつがいる。

商人ていの男である。

四十半ばか、鋭い眼と肉の厚い顔に落ち着きと自信があふれている。

「突然で、妙な申し出だと思うだろうが、気まぐれさ、若い者の困っているところを見ると、見捨ててゆけぬ性分でね」

と、夕月に笑いかけた。

お供は三人。

一人は大きな革財布をかつぎ、一人は長い三尺もある竹の筒をささげるようにしている。

その竹筒は蓋(ふた)つきで中ほどから金襴の小袋がぶら下がっている。何か知れないが、ご大層なものという感じだ。

四人とも刀は一腰ずつ差しているが、武士でないことは、服装や物腰でわかる。

「こんな美い女に袖を引かれて、拒むなァ勿体ない話だぜ」

と、また夕月に笑いかけて、

「わしなら、大喜びであがるがのう」

「親方は、情けぶかい」

と、竹筒をささげた方が言った。

「そやさかい女どもに好かれるのだわな」

と、財布持ちがつづけた。

「気前がよすぎるさかい」

「堺で南蛮屋十兵衛いうたら、五本の指に入る大分限や、その身上も女どもにみんなくれてやる気や」

こちらに聞かせるような会話なのだ。

「やい、何をごちゃごちゃ言いよるかいな。さあ、この若い衆にあげ代を出してやんな」

と、大様らしく十兵衛は財布持ちに顎をしゃくった。

お供を叱りながらも、その追従も計算のうちという感じで、城之介は、かっとなった。

「いやだ!」

と、どなっていた。

「変なまねをするな」

十兵衛もお供たちも、一瞬、たじろいだが、

「おいおい、何もそう……」

「人の銭で女買いをする城之介ではないぞ」

どなったついでに、夕月の手もふり払った。

丁度、そのとき、お城のほうから十数頭の騎馬が砂塵を巻いて走ってくるのが見えた。

血気の武者たちであろう。小具足に身をかため、槍をかいこんで、馬上に身を伏せ、はげしく

馬腹を蹴って疾走してくるのだ。

「危ねい」

「うわっ、蹴殺されまいぞ」

往来の群集は、悲鳴をあげた。どどっと道の左右へ——家並みの軒下に押し合うように雪崩れこんだ。

地軸をゆるがすような馬蹄のひびきを残して、騎馬は走りすぎたが、もうもうたる砂埃りが、屋根の上まで舞い上って、女たちの被衣をふかくさせた。城之介は、この騒ぎにまぎれて、見世棚の小路へ——。

「あいつのあとを尾けるんだ」

十兵衛の言葉が終わらぬうちに、一番若いやつが走りだした。

尾行されているとは知らぬ。

城之介は小路を抜けると、唐人街を通って田ノ浦のほうに向かった。

城下を出はずれたあたりの段落の陰に、貧しげな小屋が数軒、肩を寄せあうようにして建っている。

こけら葺きの屋根が格子止めで重石を幾つも載せてあるのは風に飛ばないためだ。平戸島も五島に劣らず、暴風雨の被害が多い。

「おばば……」

戸口で呼ぶと、女の顔が出た。

「あ、お前は」

近所の漁師の女房だった。

「城之介さんかいね。おばばが、危なかとたい、よかとこへ来なさった、早よう」
幼時にここで育った城之介の顔を、おぼえていたらしい。
せまく暗い床に、老婆がうすい胸をあえがしていた。城之介を育ててくれたお粂ばばである。
「お、来たかえ、来たかえ」
「おばば……」
「よく来ておくれた、おまえに渡したいものがあるのでねえ……」
ふるえる手で、お粂は枕のなかから何やら包みをとりだした。
汚ない布でくるまれたもの。
「あけてみなされ」
布は糸で縫い止めてあった。厳重な包みだ。その布の中は反古紙でたんねんに何重にも包まれていた。
「おお、これは！」
はっとみんな瞠目をしてのぞきこんだ。
うす紙にくるまれた手ざわりで、
（数珠(じゅず)のような……）
だが、数珠ではなかった。
銀の首飾りと黄金の十字架。
「まあ、綺麗なクルス！」
女たちがざわめいた。
仄暗いあばらやの中で隙間洩る陽光をうけて燦然(さんぜん)と輝いた。

城之介は呆然としていた。
むろん十字架(クルス)を見るのははじめてではない。この平戸では信者が多い。松浦氏が保護を与えて布教を許したからであるが、去年もフロイスという宣教師が来て、ポルトガルとの貿易を正式にとりきめた上に、サンタ・マリヤ教会を建てている。
「おばば、これをどうして？」
「お秋がのう、死ぬる前に……」
おばばは言いさして苦しげに咳きこんだ。
お秋とは、城之介の母である。かれの記憶には美しいおもかげがあるが、何しろ幼時のことで、聖母マリヤの画像と重なっているかもしれなかった。
黄金の十字架を打ちかえして眺めた城之介は、そこに小さな文字が彫ってあるのに目をとめた。
　天文二十年
　マダレイナ
と、読めた。お秋の洗礼名であろうか。
（母は吉利支丹だったのか？）
愕然としたとき、戸外で何やら罵りたてる声が聞こえた。
「やァ、怪しい奴がのぞいちょるばい！」
「逃がすでね」「とっ捕まえろ」
「ぶっくらわせ」「人ン家ばのぞきよる、ふとか奴ばい」
おばばが危篤だと聞いて、村人たちが集まってきていたのだ。
のぞき見していた男は、玄海きたえの荒っぽい漁師たちに、殴られて、

「助けとくなはれ、盗人やおへんで、わけがあるのや」
喚きながら、引きずられてきた。
「な、わいや、わいや、ほら、さっき、遊女町で、ほら、あんときの、さっきや、思い出してんか」
さかんに証明しようとするのだが、もともと小心者なのか、恐怖と痛みで、顔をゆがめて、泣き喚いている。
「な、な、城之介はん、わいは」
「南蛮屋の？」
「そうや、その南蛮屋十兵衛の手代や、親方の言いつけで、あとをつけてきたんや」
手代はほっとしたように、べらべらとしゃべりだした。
「何も盗みしようちゅうのやないで、親方は、城之介はんを連れて来いちゅうのや。な、堺で南蛮屋ちゅうたら知らん者は居らんで。せやけど、そ、その黄金のクルスは、どない因縁があるのかいな」
立て板に水というか、とめどない。
「おまえの知らぬ……と」
城之介は十字架を握りしめた。
母のことをもっと聞きたい、と思った。
が、気がつくと老婆は、息をしていなかった。半ば口をあけ、眼はとろんと城之介を見上げたまま動かなくなった。
「あれェ、おばばが」

「死によったばい」
まわりからみんなのぞきこんで声をあげた。
十字を切る者もいたし、手を合わせる者、南無阿弥陀仏の声とハレルヤの祈りが、入り混った。
（死んだ……）
城之介はクルスを握ったまま声を失っていた。
母が吉利支丹に入信したことも知らなかった。マダレイナの洗礼名があることも。
もの心ついたときは、母はいなかった。城之介は十歳ちかくまで、このお粂ばあさまに育てられたのだ。
父の名を知りたいと思った。
おばばも息をひきとった今、城之介の血縁は見知らぬ〝父〟しかいない。
「おいたわしいこっちゃけど、老齢やさかい、寿命や、迷わず成仏しやはりま」
手代は慰め顔に言い、このおばばさまも吉利支丹かいな、仏さまやのうて天使ちゅうもんにならはるのかいな、ハライソ(天国)と極楽はどない違うんやろ、と首をひねった。
当時の貧しい庶民のとむらいは簡単なものだった。その夕暮には墓地へ埋めた。
家のことや何かはいっさい、近所の人の勝手にまかせて、城之介は街へもどっている。
その首には、マダレイナと彫られた黄金の十字架がぶら下がっていた。
南蛮屋の手代はおかしな男だった。
うすあばたのある顔がおそろしく長くて、下半面がしゃくれ上っている。自然、鼻腔が上唇に接近しているのだが、その唇をつき出すようにして、ぺらぺらとしゃべるのだ。

「わては、徳次ちゅう名だす、せやけど、誰も徳次、呼んでくれはらしまへん、八丁徳、八丁徳、呼ばれま。わての口から言うのもおかしいが、足では誰にも負けしまへんね。つまり八丁飛びノ徳、八丁ひと足の徳、ちゅうわけで、へい、南蛮屋でも重宝な男だんね」

「人のあとを尾けるのもうまいからな」

「えへっ、こら痛い」

八丁徳は額をぴしゃりと叩いて首をすくめた。

南蛮屋十兵衛が何の用があるというのか。城之介に興味を持ったのは、遊女の夕月に関してのことだろうか。

遊女町が盛んなのは、都市の発展の象徴であることは、古今東西変わりはない。戦国時代は男の時代であるように、女郎買いにも道徳的抵抗はない。

ことに平戸の浮かれ女といえば、明国や韓国の女も多く、その意味でも、諸国の客が集まる。後世とちがって、料理屋などというものはないし、旅宿も木賃の原始的形態だった。江戸時代の旅籠は酌婦名義で女郎を許したが、乱世は女郎屋が先で、宿泊を兼ねている。

街道の宿駅などは、当初、代官所や長者屋敷が旅人を泊めたものだ。港町になると、船人の交易と酒色が主だから、どうしても狭斜の巷となる。

歌舞音曲に紅灯の、いわゆる柳暗花明の華やかさは後世で想うほどではないにせよ、運まかせ浪まかせの船乗りたちの上陸にともなう喜びは、後世の比ではなかったろう。

この四年ほど後の記録だが、ポルトガル宣教師が岐阜（織田信長の城下）で泊まった宿は、問屋が旅籠をかねたものだったから、諸国の商人が繁く出入りして、馬車や荷車が店先に混雑し、室内では酒を飲む者、唄う者、博奕の騒ぎが喧嘩沙汰になるし、そのうるささは言語を絶するもの

で、宣教師は二階へ移してもらって、ほっとしたとある。

平戸の街の喧騒も、またこれに劣らないものだったろう。

明国人や韓国人の、それぞれのお国言葉が入り乱れると、岐阜の比ではない。

南蛮屋十兵衛は待っていた。

手代や女たちを侍らして、酒肴を並べ、上機嫌だった。

「遅かったな」

と、猩々のように赤らんだ顔が笑った。

「おかげで堺へもどるのが一日おくれたがのう」

「だれも待ってくれとは頼んでいない」

城之介は突っかかるように言った。

「こんなところには来たくはなかったんだ」

昂然と城之介は言った。

「おれは……」

一座を見まわして、わざと、言い放った。

「墓場から来たばかりだ」

まあ、と女たちは埃りを払うように手を振って、肩をすくめる。

「ととと、そないな事、なにもここで言わんかて」

八丁徳があわてて遮ろうとしたが、堰を切ったように、城之介は言いつづけた。

「死人を葬ってきたところだ。死人の臭いがついている。こんな者が来たら酒がまずいだろ」

怒ると思った十兵衛は、意外にも、肩をゆすって笑いだしていたのである。

「ははは、なんの酒がまずいものか。人間はどうせ一度は死ぬるものだわさ」
「……」
「生まれてきた者は、やがて死ぬ、こいつァデウス(天主)でもなんともならないさ、人間の運命というやつさ」
「……」
「どうせ死ぬるものなら、生きているうちの人生、たんと楽しまねば嘘じゃ」
十兵衛は、ぐいと大盃を一息にあけると、
「城之介さんとやら、酒も女も生きているうちのことだ、まあ飲まっしゃれ」
あまりに泰然とした十兵衛に、気を呑まれたように、城之介は盃を受けとってしまった。
商人といっても、この時代は武士の性根と変わらない。剛腹放胆でなければ、兵火のなかで儲け仕事などできない。
「その酒と女も、もとは銭さ。銭を儲けるやつがこの世は勝ち……」
十兵衛は、また噴きあげるような笑いで、
「さ、何ば愚図愚図しとらすかいの、ついでやらんな」
このあたりの方言で女をうながした。
うまいものだ。硬軟自在というか、年少の城之介など、小指でふりまわされている感じだった。
「ねえ……」
銚子を持った女がにじりよった。
銚子といっても、後世のような徳利を小さくしたものではない。金属製の長い柄のついた、酒を注ぐもので、諸口(もろぐち)と片口とある。

鍋で酒を煮て、提子(ひさげ)にそそぎ、さらに、提子から銚子に入れて、食膳に侍るわけである。
「酒か……」
飲んでやろう、と城之介は坐りなおした。
(飲むのなら、負けぬ)
なみなみとつがれたのを、口に運びかけて、ふと止めた。
南蛮屋十兵衛の表情は弛んで、唇もとは笑っているが、眼は凶々(まがまが)しいまでに光って、胸もとを見ていた。
黄金の十字架が襟もとからのぞいている。
かなり飲んでいた。気持よさそうに笑っていた。
が、その眼は、酔ってもいず、笑ってもいなかった。
凝ッと城之介の胸もとを見ていた。襟から銀鎖と黄金の十字架がのぞいている。
(さっきは、たしか、していなかった……)
と、南蛮屋十兵衛は思った。
(こいつ、吉利支丹か?)
その眼を感じたように、城之介は飲みかけた盃を、口からはなして、
「やっぱり、いやだ」と、言った。
「この酒は飲めない」
「どうした?」
「いやだ、縁もゆかりもない者から、馳走になりたくない」
生意気言うで、と手代たちは顔を見合わせた。

十兵衛は、笑いは消していたが黙って、盃につがせると、ぐっと一気にあおって、ふーっと、酒気を吐いた。
「うまい、これは特別に博多から取り寄せた練貫酒だぞ、伏見酒に劣らぬコクがあるわ……」
それから、はじめて気がついたように、
「おや、どうして飲まん？　あ、そうか、縁もゆかりもないとか言うたようだったな……」
「さっき、逢ったばかりで、なんの縁も……」
「ははは、逢うたのが縁さ。とこれは冗談だが、縁があるのや」
「……」
「二つある」
と、また十兵衛は酒を飲んだ。
「一つは、夕月のことさ。この平戸では、いやさ、西国一の女じゃろな。博多も室ノ津も、豊後の府内でも、たいがいの女ご街は知っとるが、夕月ほどの女はいない……」
遊女を買ったからといって、縁にはならない。そんな理屈がなりたつなら、何百人、何千人が縁につながるではないか。
城之介のそんな表情も、はじめからわかっていたというふうに、十兵衛は、心の奥をのぞきこむような眼をした。
「ただの縁ではないさ」
「……」
「城之介も十兵衛も、ただの客ではない。まあ待たっしゃい、聞くのだな。つまりだ、夕月は城之介に惚れている。十兵衛は夕月に惚れている……それもさ、ただの惚れかたではない、両方と

もだ、こりゃ、ふかい縁といわんでどうする」
理屈だ。
十兵衛は若者が沈黙したのを見ると、調子に乗ったように、
「であろうが、ははは、恋がたきは、場合によっては刃傷沙汰にもなる。殺しあいさ、女をはさんでの……これほど深い縁はないぞ」
笑顔の中に冷たく光る十兵衛の目はそれが冗談でないことを物語っている。
「もう一つとは？」
と、城之介が食いつくように、促したとき、
「——あれ、城之介さま、やっぱり来てくれはりましたのね」
夕月が屏風のかげからあらわれた。
夕月だ。
疲れたようにしどけなく裾を曳いて、屏風のかげから出て来た。あっと目を輝かせると、
「城之介さま、来てくれはったのね、うれしい！」
崩れるように、夕月は城之介の肩にしなだれかかった。
美しく化粧したばかりの顔だったが、衣紋はくずれているし、若者のするどい嗅覚が、
（いま客をとったばかりじゃないか……）
と、感じさせた。
（けがらわしい！）
むっと顔をそむけるのを、
「あら、こわいお顔……」

一層、すねたように、べったりとふとももをくっつけて坐った。

そんな若い男女を、南蛮屋十兵衛は、にやにやしながら眺めている。恋がたきにしては、悠然たるものだ。最後の勝利は、おれのものだ、という自信であろう。

盃を置くと、手代(てだい)に顎をしゃくった。

あの捧げていた、奇妙な竹筒である。細く、長い。節(ふし)を巧みに用いてある。

蓋をすぽん、とあけると、白磁のなめらかな艶が見えた。

陶器である。陶器の三尺もある大煙管(きせる)。かなり重い様子。だが、立派なものである。

煙草は先ごろから、やはり南蛮船でもたらされて、急激にひろまっていた。煙管も、鉄や、赤銅、竹などで、いろいろ作られている。

十兵衛は馴れた手つきで煙管を指先でまわした。三尺ちかくある陶器の大煙管を、無造作に指でひねるように軽々ともてあそんでいるのは、この男、見かけよりも力があるらしい。

金襴の小袋は多葉粉(たばこ)袋で、雁首を突っこむと、傍らの女がいそいそと詰める。

燭の炎に雁首を近づけるようなことはしない。女が捻りの芯付木で火をとって、雁首に近づけてくれるのを、泰然と待っている。

商人(あきんど)といってもさながら一国の城主のような傲慢さである。

金銀の威力が、そうさせるのだろうか。

「もう一つの縁とはなんだ」

城之介は突っかかるように言った。

「おまえの親父……」

「なに！」

「城之介、おまえは親父どのの顔を知らんやろ」

「……」

「よく似とる、そっくりや、生きうつし、ちゅうやつや。どや、逢いたいやろ、逢いとうないか、逢いたいわなァ、父子の血は消そうちゅうて消せるもんやおへん」

ねっとりと、臍(へそ)をなでるような声になっている。威(おど)したり構えたり、そうかと思うと、わざと、のびやかな、京訛(みやこなま)りになって、やわやわと感傷に訴えてくる。

「——いたい」

城之介は呻くように言った。

「どこだ、どこに居るのだ父は」

「京(みやこ)さ」

と、南蛮屋十兵衛は、うまそうに紫煙を吹きあげて、

「来るかね」

「京……」

「来るなら、連れていってやる。南蛮屋の梵天丸(ぼんてんまる)は、おまえ一人を余分に乗せても沈まへんさかいな」

どっと、手代たちが哄笑した。

女たちも、お愛想のように、笑いにしたがった。

城之介は自分が笑われているような気がして、十兵衛を睨んだまま、こう言ってでた。

「父の名を知りたい」

「そらあかん」

あっさりといなされた。
「それを言うたら、実も蓋もないわ。京へ着くまでのお楽しみや」
「——わたしを嬲(なぶ)るつもりか」
「そないことあらへんで」
十兵衛は完全に城之介をとらえたと思った。やんわりと気勢を削(そ)いでから、冷たく傲慢な表情にかえった。
「逢うときまで、楽しみをとっておいてやろうというのさ。十兵衛の親切さ、有難く思うんだな」
「……」
「楽しみが倍になるやないか。な、それがよかろ、南蛮屋十兵衛は嘘を吐かん男だ、唐天竺まで正直者で通っている。一緒に来るがいい、なあに、淋しかないさ、客人はおまえ一人やない、夕月も一緒さ」
「夕月も？」
まさか、と城之介は女を見た。
驚きだけではない。咎めるような強い視線に、笑顔でこたえようとしたのがかたくこわばった。
声が出ず、黙ってうなずき、目を伏せた。
長い睫毛が、こまかく顫えているのが、こうした境遇の女の哀しさを訴えているようだった。
(——身請けされたのか……)
売り物買い物の女だ、たとえ気にそまなくても、大金を積まれては言いなりになるしかない。
それに、京生まれの女にとってはたとえ泉州の堺でも、この九州の平戸にくらべれば、目と鼻

の近さだ。十兵衛の身請け話は渡りに舟だったにちがいない。
が、城之介の若さは、
(惚れてなんかいない)
と、気持を否定しながらも、ああした媚を見せた女が、十兵衛の持ち物になってしまうのかと思うと、苛だたしい思いにかられるのだ。
女にも、それが痛いほどよくわかるのか、
「ねえ、御一緒に堺まで行きましょ」
眼が謎めいて、妖しく光った。
身請けされても、心までは……という意味にとったのは、城之介の甘さだろうか。
城之介が口ごもっているうちに十兵衛は逡巡をうちきるように、
「それで決まった」と吠えた。
「風向きがよけりゃ、今夜のうちにも船出じゃ」
その語尾をさえぎるようにして、飛びこんで来た女がある。この銀杏屋の女将だった。
「お客さん、すぐ逃げたがよか、下に五島衆が多勢……」
五島衆とは五島出身の海賊をさしての言葉だ。この平戸の松浦氏とは敵対関係にある大村氏の息がかかっているが、こうした連中は金銀しだいで、敵にも味方にもなるから、港に来ているというだけでは松浦の役人も追い払えない。
「来たか！」
城之介は刀をつかんで膝を起こした。
「ぬかりのない奴らだ」

やはり城下に一味の〝眼〟が配られていたのであろう。
「城之介、五島の海賊なかまに狙われているいきさつ、わしも知っておるぞ」
と、南蛮屋十兵衛は親しみの口調で言った。
「おまえの運命も、これできまったな」
「なんと」
「こんなところに、うろうろして居れんちゅうことじゃ。気がすすまんじゃろが、梵天丸に乗れ、あとはこの十兵衛が引きうけた」
「命があったら」
城之介がなげやりな言葉で応えたとき、はじめて白い歯を見せている。
「うむ、若いくせに、胆がふといやつだの」
「もしも命があったら、あとはおまかせする」
階下にざわざわと群れた荒くれ男たちの殺気は、十中八九まで、かれを絶望的にした。
人間を殺すこと、あたかも蚤や虱をひねるくらいにしか考えていない連中だ。その狂気じみた殺戮感情は、誰よりも城之介は知っている。
「城之介はどこじゃあ」
階下で吼える声がした。
「逃げようちゅうても、どぎゃんもならんば」
「あきらめたがよか、ここへ入ったとは、ちゃっと見たけんな。隠れても無駄たい」
どかどかと、階段を踏み鳴らして、数人が駆けのぼってきた。
この時代、二階造りの女郎屋は珍しい。背後がちょっとした丘になっているので、こうした建

築にしたらしい。だから、裏の蔀窓（しとみ）を上げると、屋根の端が、丘に迫っている。
「さ、こっちから外へ出られますえ」
夕月が、板蔀をあげながらふりかえる。
十兵衛たちも立ち上っていた。
「城之介、もしもばらばらになったら梵天丸で落ち合おう、おまえが来るまで、錨（いかり）はあげずに待っている」
「わかった」
うなずいたとき、屏風が煽られたように蹴倒され、手に手に抜刀した五島海賊衆が潮焼けした顔をのぞかせた。
「居たな」
「ほう、やっぱりな」
「運の強い奴ちゃ、あの筏流しでよくもいのちが保（も）ったもんたい」
「そのいのちも、今夜かぎり」
喚いて斬りこんできた刀に、ぱしゃっと、提子（ひさげ）が当たってかん高い音をたてた。酒が飛び散った。
とっさに投げつけられた提子を、刀で受けたので、ばしゃッと酒が飛び散った。
その男は、顔面いっぱいに酒を浴びて、のけぞっている。次の奴も一瞬、ひるんだ。
その隙に、南蛮屋の手代たちは抜刀していた。
商人といっても、乱世の商売だ。一つ間違えばいのちを失う。刀や槍つかいのワザは、心得ている。

「ぶった斬れ」

五島海賊の一人が吼えたのへ、

「斬られたいか」

と、怒鳴りかえしたのは南蛮屋十兵衛である。

「わしらが酒と女を楽しんでいるところに踏みこんでくるとはええ度胸や、南蛮屋は泉州堺の談合衆、南蛮商に御免の身分、それと知っての喧嘩売りか」

勢いこんできた連中は、この一喝に出鼻をくじかれて、たじろいだ。

「聞けば五島衆とのことじゃが、五島衆は女郎屋荒しもするのかい、呆れた和郎どんじゃ」

十兵衛が故意に大声で笑うと、手代たちも、げらげらと笑った。

「南蛮屋だと！」

気勢を削がれたなかまをかきわけるようにして、ぬっと顔を出した者がある。

頭分(かしらぶん)だろうか、肩幅も広く、上背もある、隻眼の男だ。その片眼はむごたらしく切り裂かれた肉がまくれあがったままで、顎の張った精悍な顔をひときわふてぶてしく見せている。

「南蛮屋がどげんした、この肥前へ来たら、ただの小商人たい。ふとか面(つら)ばするな」

ふとか面したら打ち殺さるばい、とほかの連中たちも口々に叫んだ。

「まあ待て」

と、片眼は余裕を見せて、激昂する輩下をおさえると、

「おとなしゅうひっこむ者にゃ手ば出さんけん、その青二才ば、黙ってこっちへ渡してくれりゃよかたい」

「城之介は、もはや南蛮屋の家人や。犬や猫の子じゃあるめいし、手軽く渡せるもんやないで」

手代の一人が十兵衛に代わってこたえたのと、その城之介が朔風の耳朶を切る叫びとともに、おどりあがって、抜き打ちの一刀を叩きつけたのは、ほとんど同時だった。

血が飛び、絶叫が混乱の口火をきった。

五島海賊たちの間で暮らしていた城之介には、何といおうとも静かな話し合いなど所詮不可能なことを知っていたのである。

（力だ、それしかない！）

血ぶるいして、次の奴へ向かった。

右側から斬りこんできた刀を受け流して、左へ一刀を送り、あいた胸へどんと体当たりをくれる。

怒号が逆落としにはしご段を転落していった。

初太刀で斬り伏せたはずのやつが、血まみれの顔をあげて、最後の気力をしぼって、さっと城之介のもろ足をないだ——。

一瞬、城之介は跳んでいる。

反射的な動作だった。剣法も兵法もない。斬りおぼえにおぼえた剣使い、身のこなしである。殺気と刃風に、転瞬に対応する動作は斬り合いのなかでしかおぼえられない。

敵を倒す。

刃の下をくぐる。

このいのちの欲求が必然的に自得させたものにすぎない。年齢の如何よりも、どれだけ、実際に血風を浴びたか、だ。

咄嗟に宙にはねた空間を、虚しくその男の刀は薙いで走った。

それが最後の気力だったのだ。ばたりと刀を落として動かなくなった。

その間に、そこここで激しい斬り合いがはじまり、屏風が倒れ、唐紙が蹴破られ、柱や鴨居は余勢に傷つけられたり、血しぶきを浴びた。

流れた血汐が、足をすくう。天井が低く、せまい場所では、足場のいいほうが有利だ。

階下から駈けのぼってくる五島衆の混乱を幸いに、城之介と南蛮屋一家は、縦横に斬りまくって、

「もういい、走れ」

血ぶるいして、十兵衛は手代たちへ声をかけた。

「船へ」

そのとき、城之介は逃げる敵を追って、はしご段を半ばおりかけていたのである。

「城之介、深追いすまい」

十兵衛の言葉を、はっきりとうしろ耳に聞いた。

が、たしかに、城之介は勢いに乗じて追いこみすぎていた。

十兵衛たちが屋根伝いに裏の丘へ走りでたあとにつづこうとしたが、

「彼奴、逃がすな」

海賊たちが追いすがってきた。

「斬れ、足を斬れ!」

「刀を投げろ」

窓わくに足をかけたとき、ぴゅっと、刀が飛んできた。身をひねってさけた。二本目が、手をかすめた。

「城之介さま!」

悲痛な夕月の声は、蝗(いなご)のように飛びかかってきた男たちにかき消された。

「殺すな」と、誰かが叫んだ。

「あのことを聞くのだ、殺すのはそれからだ」

最初に飛びかかってきた男が、右腕に死に物狂いで抱きこんだための不覚だった。

「放せ!」

ふり放そうとしたが、血で足がすべった。

うしろから、前から、腰にも抱きつかれた、ぶっ倒れたところに折り重なった。

髪をつかまれ、血の海のなかに顔を突っこまれて、息が出来なかった。

「ひっくくるがよか、若かくせに力のある奴じゃけん」

手をうしろにねじられ、関節がはずれるかと思われるばかり、高手小手に縛り上げられた。ご丁寧に、余り縄を首にかけられ胸前で菱がた十文字にきつく回されては、もはやどうあがいても無駄だった。

娼家はどういうものか、数軒ずつ固まっている。

その銀杏屋の隣りに輪違い屋というのがある。

長い、膝下までかくれる柿いろの暖簾に、二ツ輪がからんだ紋を白抜きにして、これが屋号。

この紋章は見ようによっては、客と遊女が脚か腕をからめたさまを暗示している。

こちらは、しかし銀杏屋ほど粒がそろっていないのか、あまり繁盛していない様子だった。

その上、妙な客があった。

「変な客ばい、縁起の悪かなあ」

と、親父と女将がぼそぼそ内緒で話しながら線香を立てていたが、同じ揚代（あげだい）を払って女を買う客でも、青楼（みせ）に景気をつけて、後を引く福の神と、なんとなく陰性で、それきりぱたりと客足を断ってしまう、貧之神とがある。

だから盛り塩したり、招き猫を飼ったり、といろいろ縁起をかつぐわけだ。

その異形の客が来たのが、日が暮れて一刻ほど経ってから——これは城之介が八丁徳に案内されて隣りの銀杏屋にあがった直後にあたる。

風体（ふうてい）が異形で無気味だったが、金払いはよかった。

「二人前じゃよ」

ぽんと払った。

（にせ金かもしれんばい）

そう思われるのも無理はない。

およそ、金銭には縁のなさそうな老人なのだ。異様な、唐人風のいわゆる仙人がそのまま、絵から抜け出てきたような、飄々たる姿だが、現実の、俗欲の剝きだされた遊女屋では、なんともちぐはぐで、ただ汚ならしいだけだ。

もはや、読者にはそのイメージが浮かんでいよう。妖異の幻術師果心居士。

何を間違って、遊女買いに来たのか。

枯れきった老骨は、女体を必要としないはずだが、そう見るのは俗人のひが目かもしれない。

一ト切り銀三文目を二人前払って、

「おまえと、おまえ」

あの蛇杖で、女を指名すると、

「どこじゃな、寝間は」

すーっと風のようにあがった。

指名された女たちは、うす気味悪そうに肩をすくめて、

「うち、好かん」

「いやらしかごたるねえ」

その時刻、粗格子の顔見世には化粧首は七つ八つ並んでいたから、結構、目鼻がととのい、ほ

っそりと優美な女もいた。
が、果心居士はそうした女には目もくれず、ぽってりと小肥りの色の白い若い女を指している。
顔の造作や、化粧の巧拙は二ノ次か。
若い、みずみずしい肉体をそなえていることで、二人の女は共通していた。
裏の崖下になる湿っぽい部屋に案内された果心居士は、
「ほほ、裸になってもらおうか」
と、果心居士は言った。
「――裸に？」
「二人とも、ぜんぶ脱ぐのじゃな、ぜんぶ」
女たちは顔を見合わせて、いやだあ、と肩をすくめた。
強い抵抗ではない。揚代金を先払いされているし、どうせ売り物買い物の女の肌だ。どう扱われようと文句はいえない。
ただ、ちょっと拗ねて見せただけだ。娼婦にもそれなりのプライドはある。
それに、一人ならまだしも、同輩のてまえ、ひょいひょいと脱ぐ女に思われたくない。
「これこれ、早くせぬか、寒けりゃ火桶を運ばせようかの」
果心居士は、垢じみた蒲団に枯木を横たえたように、寝た。
広袖の天女の羽衣のように、ふわりと軽く透けた素絹だから、裸になるのは早い。
女たち二人が、ちらと見、あわてて眼をそむけたのは、老人の股間である。頭髪は赤茶けて、半ばは白く末枯れているが、下腹部にへそまで蔽うばかりに繁茂したそれは、雄偉な部分にふさわしく黒々としていた。

（ばけもののごたるばい……）
化け物でも客は客だ。
「早よせんかの……」
そう促すのだが、別段、あせっているふうではない。
むしろ、まごまごしている女たちの羞じらいに決断を与えてやるというような、そんな促しかたである。
老人の枯木の裸身を見ると、
「しかたなかもンね……」
と、照れくさそうに一人がいい、
「ほんなごと、二人も一ぺんにどげんしなさると？」
と、会話でまぎらしながら、もう一人も屏風のかげに入ろうとする。
「あ、これこれ、どうせ裸になるのに、隠れることはない」
「でも……」
「そこで脱ぐがよい」
「はいはい、仰せの通りにしますたい」
「脱ぎゃよかとでっしょ」
くすくす笑いながらも、ふてくされたように、角立った動作で、するするっと、細帯を解く。
さすがに下着を肌からおとすときは、しゃがんでうしろをむいた。
そんな若い女の姿態を、果心居士は、どこを見ているのかわからないような、虚ろな眼で見まもっていて、

「さ、ここへ寝ろや」
左右を示した。
一糸まとわぬ女の裸身を左右に寝かせると、老人の両手は、これを抱きすくめた。
「あれェ」
「ほほほ、これがわしの法楽じゃでの。ほほ、何ほどのことはあるまいが、三位一体、三体法楽……陰陽陰、これを合して空となす、羽化登仙して遊べば長寿を得られるわの……」
老人の声が夢の中の囁きのように聞こえ、娼婦の身を忘れて、二人とも五彩の雲の上を泳いでいるような気がしてきた。
老木である。枝葉も枯れている。枯木なら、とっくに朽ちて倒れているのに、奇妙に緑の葉をつけたり、若い芽をだしたりしている木があるが、果心居士の老骨には、そのような不思議さがあった。
下腹部の黒々としたものもそれなら、雄偉にそそり立った見事なまでの肉体もそれだ。
にもかかわらず――。
二人の女性裸身を左右に抱きながら、そのたけりたつものを、慰めようとしないのである。
「こやつが、気の早い……」
と、別人のものを見るように、冷やかな眼をむけて果心居士は、
「さ、俗界を離れて俗心を解脱するがよい、この世はまぼろし……夢の世に夢を見よ……」
ぴた、と肌と肌を合わせて、百千の毛穴から生気を吸っている。
若いぴちぴちした女のからだの生気を、干し涸れた草木が慈雨を吸うように、吸いこむのだ。
女は二人とも、完全に果心居士の幻妖の術にかかって、うっとりとなって――その放心の状態

にあるとき、生気は拡散し、それを皺々の皮膚が吸収してやまない。
常の男のように、果心が女のうちに入ろうとしないのは、その喜びが消耗以外のものではないことを熟知しているからだ。
「わしも八十までは、夜毎に用いたがな」
と、いつか述懐したことがある。
「八十過ぎてからは、せぬ。肌を合わせて洩らさず、存分に楽しんでおるわ」
いのちの泉を内と外より摂る、という。
内よりとは酒のことであろう。そして、外より、とはこの接して洩らさぬ皮膚からの生気の充実が老人を生き延びさせているのであろう。すでにして百歳を超えたか、あるいは、それに近いか。
世の常の老翁にない矍鑠ぶりもこの秘密に負うところが多いのであろう。
むろん、食餌も酒のほかに、秘奥があるにちがいない。
ともあれ、果心居士を中にして左右の若い女体は四肢も胸も腹もぴたりと貼りついたように動かず、仄暗い灯の炎がちらちらするなかで、陶酔の呻きを洩らしていた。
隣家で騒ぎが起こったのも、二人の女はすぐに気がつかなかった。
それだけ、深く術に陥ちこんでいたのである。
生気は精気である。若さのもつ血も皮膚の弾力も、短時間に老体に吸引され、女の意識は空に浮遊していた。
隣家の騒ぎは――。
いうまでもなく、城之介を襲った五島海賊衆たち、これを迎え撃った南蛮屋十兵衛とその手代

たちによって巻きおこされた騒擾である。
色街での酔い痴れた男たちの喧嘩口論は珍しくないが、集団での斬り合いはさすがにめったにない。
女たちが漸く正気にかえったとき、女体にはさまれていた老人の姿は、かき消すように消えていた。

「殺す前に聞かにゃならんたい」
頬にざっくり一太刀切りこまれた血を拭いながら、にくにくしげに一人が言った。
死体が幾つかあったし、足腰の立たない奴も数人いたし、生き残った連中も、大なり小なりの手傷を負っている。
せまい女郎屋の二階での争闘はやはり小人数の城之介や南蛮屋たちに分があったのだ。
だから、漸く数人がかりでねじ伏せ縛り上げた城之介に、憎しみをぶちまけるようになる。
「吐くがよか」
と、白刃を胸もとに突きつけて、
「この平戸の焼き討ちのこと、誰かにしゃべったろうが」
「……」
「そいつの名ば聞こう」
「……」
城之介は無言だった。
たとえ正直に答えても、答えなくても結果は同じなのだ。

男の意地もある。あの筏流しのひどい目に合わされた復讐は一応してやった。いま死んでも、悔いは少ない。
（父と……）
南蛮屋十兵衛が父と逢わしてやるといったが、京は遠い。こうなった以上、それも諦めるしかない。諦めることには城之介は幼少から馴れていた。
度胸を決めた身には恐いものはなかった。
きっと、唇を結んで、睨みかえすのを、
「なんとか言わんかい」
ぐいと、髻をつかんで、引き倒される。
肩を土足で踏んづけられ、脇腹のあたりを蹴られた。
「往生ぎわの悪か奴ちゃ」
「打ち殺してしまおうや」
「待て、急ぐことはなかたい、こいつがあの一件ばしゃべっとらんなら、心配することは、何もなかけんな」
残っていたのは十人ばかりである。
城之介を足までぐるぐる巻きにすると、二、三人で担いだ。
「船まで連れてゆけ、こんどはただの筏流しにはせん、船で曳いて鱶の餌食にするがよか」
月の明るい夜である。
城之介を担いだ者を中にはさむようにして、前後を守り、五島海賊衆は銀杏屋を出た。
銀杏屋にしてみれば、とんだ騒動で、損害は莫大だが、何しろ山犬、海狼の群れだ。松浦藩の

役人が五、六人来たくらいでは、歯が立たない。
　うっかり訴えでても、あとの祟りが恐ろしい。
「大損させられた上に、死骸の始末までせんならんとは、なんちゅう貧乏神に見込まれたこっちゃろか、桑原桑原」
　内所で小さくなっているのを、一顧もせずに、どかどかと出てゆく。先に立った連中は槍や刀を月光にぎらつかせていたが、どうしたことか、ふいに先が止まった。
「おい、どげんしたとかい」
「変なやつが居る」
　往来の真ん中に、誰か坐っていた。
　道の真ん中に坐りこんだ男。
　色街である。夜はかなり更けていたが、よその街とちがって、まだ往来は絶えていない。
　銀杏屋の騒動で集まった弥次馬が、一行が出てくるのを見ると、ぱっと、散って遠巻きにした。
　その町衆たちを威嚇しながら通りぬけようとしたとき、どっかと坐った男がいたのだ。
「なんじゃあ、うぬは」
　先頭の男が、小薙刀をとりなおした。
「そこで何ばしとるんじゃい」
「邪魔せんと、失せんかい」
　そんな声もどこ吹く風かというように、動こうとしない影は、果心居士。
　若い女の生気を吸収したせいかどうか、にたにたしながら、一行を眺めている。
「どこにお出でかな」

　月光にぎらつく刀も、歯牙にもかけないような悠然たる果心居士だ。
「うぬ、どこに行こうと、うぬのような唐人乞食の知ったことかい」
　先頭のやつが毒吐いた。
「ほほ、唐人乞食か」
「去ね」
　やにわに、小薙刀をふりあげると、ぴゅっと、ふりおろした。
　威しもある。が、それだけではない。斬るのに手加減する手合いではない。
　刹那――。
　果心居士の衣がひるがえった。
　ひらりと舞いあがって、ふわふわとかれらの頭上におちてきたのは、切り裂かれた衣の一部だった。
「やった！」
　と、誰か叫んだ。
　が、三日月なりの刃がすべるように半円を描いたあとに、果心居士の姿は悠然とかき消されていたのである。
「――ど、どこじゃ」
「居ない！」
「消えよった？……」
　呆然となって周囲を見まわした。
　月明の夜だし、そぞめきの客を誘う如く粗格子の内から明るい灯が洩れている往来だ。

いかに敏捷な者でも多勢の目をくらまして走るのは難い。まことに、
（消えた……）
という感じだった。
まやかしにあったような気持で、
「行こう、行こう、あんまり愚図ついちょると、城侍がくるばい」
「来たっちゃ、どうちゅうこともなかばってん、ま、けが人も居ることじゃし……」
急ごう、と歩きだした。
ところが、色街を出て、二丁とゆかぬうちに、
「あれっ、あやつは……」
なんと、果心居士がまた前方に坐っているではないか。
「さっきの奴ばい」
「ばけものだ、弓矢にかけて射止めちゃれ」
言下に矢羽根の音が起こった。
びゅ、びゅッと数本の矢が、果心居士の痩軀めがけて飛んだ。
まだ鉄砲は伝来したばかりで普遍化していない。海賊衆の飛道具も弓矢が多い。
数本の矢は虚しく、闇の底を走り、地表を滑った。
果心居士の姿は動くとも見えず忽然と消えていたのである。
恰も、そこにいたのがすでに実体ではなく、虚像であったように、あとには黒々と深い闇の空間があるばかりであった。
「ちぇッ、なんちゅうこった、あの爺いは狐か狸の変化したもんじゃろか」

「たわけたことば言いなんな、平戸の狐化けなど聞いたことがなか」
「狐でも狸でも、海にゃ入ってこんばい、早く、船へ帰ろうで」
海上生活者は、迷信や化け物に弱い。早々に浜辺近くまでやってきたとき、なんと、またあの老人が居たではないか。
「ちゃッ、また出よった」
果心居士は坐っている。
瓢簞をかたむけて、盃にそそいでは、うまそうに飲んでいる。路傍に坐って、まるでお祭りかなんぞを見物しながら酒を楽しんでいるような、寛々たる風情である。
ぐるぐる巻きの城之介を担ぎ、けが人を助けての一行がぞろぞろやってくるのを、村祭りの山車でも見るように果心居士は、にやにやしながら眺めている。
「こんどこそ、ぶっ殺せ」
あわてて矢をつがえ、刀を振り直すのを頭分のやつが、おしとどめて、
「やめちょけ、触らぬ神に祟りなしじゃ」
「神さんやなか、化け物たい」
「同じことばい、知らんふりしたほうがよか。見るな見るな」
見るな、と言われても、どうしても気になる。
さっきからのことがなければ、無視もできるが、あれだけ愚弄されたのだ。うす気味悪さと、憎しみで、ちらちら見ながら、通りすぎようとすると、
「あ、これこれ、待たっしゃれ、皆の衆」
と、果心居士の方から呼びとめて、

「なにをそう急いで行くのかの、どうじゃ、ここで一献(いっこん)やらんかい。美味いぞよ……」

盞にそそいではぐびりぐびり、いかにもこの世の珍味という飲みっぷりだ。

いつの間にか、行列はとまってしまって、みんな、果心居士の手もとに視線をそそいでいる。

「そら、そら、美味い酒じゃ、誰が飲んでも美味い酒じゃ、酒のほうで飲まれたいというておるぞ、ほれ、ほれ、ほれ……」

タラタラと瓢箪からそそがれる酒が、盞にみち、もりこぼれそうになり、海賊衆たちは、思わず生唾をのんだ。

「あっ、こぼれる！」

あら勿体なや、といやしい感情がみんなをひきつけた。目くらましは意識を集中させて、妄夢(もうむ)にとらえることだ。

盞をあふれた酒は地にこぼれ、流れ、たちまちみんなの足もとをおかして、酒の池となり、海となり、波浪がおこって、かれらを呑みこんだ。

果心居士のこぼす酒が、たちまち池となり、海となり、かれらを浸すや、風浪おこって、猛然と呑みこもうとしている。

「カッ、助けてくれェ」

「お、溺れる溺れる」

海水には強い海賊衆だが、酒の海となると、まるで酒に顔を突っこまされたようだ。

もうろうとなって、手足を動かし、あっぷあっぷしているころ、当の果心居士は城之介の縄をほどいて、小舟に乗っていた。船頭は南蛮屋の梵天丸の水夫だった。浜辺で待っていたのである。

同じ目くらましでも、長崎の城で甚左衛門たちが真っ赤な血の池を泳がされたのとはちがう。

あのときは、一瓶のチンタ酒で化現されたものだが、こんどは、目くらまされて、海の中へ入っている。

浜辺に近い場所を、果心居士が選んだのは、そのためだったのである。

瓢箪からこぼれる酒に気を奪われて、海中へ踏みこんでいることに気がつかない。もうろうとなって海中にどんどん深く進みながら、まだ酒の海に在るような気がしている。

「へへっ、あの餓鬼ら、気狂いしてけつかる」

逞しい腕で棹をこぎながら、水夫はうれしそうに笑った。

「ざまァ見さらせ。へへっ、あれが海賊衆とは、呆れたもんや。なァ、爺さま、あいつらは……あれっ？」

ふりかえった水夫は、そこに城之介の姿しか見えないことに仰天した。

「爺さまは？……」

水中へおちたのか、と思った。

奇妙な老翁という以外には知らぬ。五島海賊衆が海へ走りこんだことも、目くらましに操られてのことだということも知らなかった。

(果心居士が、また助けてくれたのか……)

城之介も手足の縄を切りほどかれるまで夢心地で、

礼を言うひまもなく、姿を消している。

まことに奇妙な居士だ。城之介を救けても、一文の得にもならないのに。幻妙不可思議な術を駆使して救い出すと、いさぎよく姿を消している。

この平戸へ逃げてきたときも、横瀬浦へ入っていた明国船に乗せてもらった。果心居士がどう

いう手を用いたのかわからない。明国語も流暢にこなしたし、船人たちはこの老翁を畏敬するふうだった。

さて、城之介を収容した南蛮屋の梵天丸は、ただちに帆をあげて港を出た。

やっと迷夢からさめた連中が、数隻の小舟で港外の親船に漕ぎよせようとしたところが、ふいに引き潮にのって、流れはじめた。

船上には留守居に四、五人いるだけで、

「うわっ、どんどん流れてゆくばい、一体どぎゃんなっとると」

錨綱があざやかに切断されていることに気づいたが、逆帆をあげて、入江に坐礁するしか、船を止める手段はなかったのである。

三好三人衆

(これが海だろうか?)

瀬戸内海に入ると、城之介はまず、その穏やかさに驚きの目を見はった。

(湖だな、まるで……)

東シナ海や玄界灘のすさまじさが、五島海賊衆についての概念だったから、これほど凪(な)いだ静かな水面は、池に小舟を浮かべているかのようで、どうしても海だという気がしない。

「――城之介さま」

いつか、うしろに夕月が立っていて微笑みかけた。

「どこを見てはったの」

にこっと小首をかしげて、

「あの島?　それとも、あっちの小島かしら」

「うん……凪いでいるなあ」

正直に感想が口をついて出る。

「あら、平戸の外海とは違いますのえ、この内海(うちうみ)は荒れている方が珍しいおすねん」

夕月はおかしそうに身をくねらせて笑った。
城之介を笑っているのではない。
うれしくてしかたがないのだ。京生まれの身が、九州の果てに流れてくるには、こうした女たちの珍しからぬ事情があったのだろう。
それが、どんなに辛く、哀しいことだったか、一人の男の持ち物になろうとなるまいと、ともかく畿内にもどれるということは、大変な喜びだったのだ。
女ひとりでは旅も出来ない乱世である。何百里も離れた九州平戸は僻遠の地だ。京へ帰れる日があろうとは、夢にも考えられなかった。
南蛮屋十兵衛の申し出に、すがりついたのもわかる気がする。
夕月の気持が、十兵衛を、客としても、男としても、好きではないことが、わかっているだけにその思いは哀れなほどだった。
(よほど、うれしいのだな……)
城之介は、彼女のことを考えまいとしていた。
幾ら払ったかしらぬが、夕月は、十兵衛の持ち物だし、かれ自身、十兵衛の家人――食客とも家来ともつかぬ、妙な立場なのだ。
なまじ、一度、肌を合わせたことがあるだけに、ときとすると、息苦しくなることがある。
夕月の何気ない身のこなしにも春を売る女の、身についた濃艶なものが、若者を息苦しくするのだ。
女の方は無意識で、船上で無邪気な童女のようにはしゃいだり、事実、邪心はないらしいのだが、身についた色香は消しようがない。

表情でも、動作でも、したたるばかりの色気で、その嬌めかしさ、城之介ばかりではなく、南蛮屋の手代や船頭水夫たちに、生唾をのませることが多い。
いまも、ただ、そばに立っているだけなのだが、風の具合か、甘酸っぱいような、若い熟(う)れた肌の匂いが、城之介には強烈で心を平静にさせない。
そんなことは意識にないのか、夕月が、
「ねえ、城之介さま、あの……」
と、身をすり寄せて何か言おうとしたとき、ふいに耳を殴りつけるような轟然たる音がした。
愕然として二人はふりかえった。
その面(おもて)を、キナ臭い異様な煙が吹いた。
「はははは、はははは、命中したぞ」
小莫迦にしたような、哄笑である。
艫(とも)のほうに南蛮屋十兵衛が鉄砲をかまえていた。
羽にでもあたったらしい。鳶が一羽苦しげに鳴きながら落ちてくるところだった。
「どうや、大したものやろう城之介、おぬしの腕前はどうかいの」
ばさばさっと、音が聞こえるほど、ふなばた近くを、鳶はもがきながら落下していった。
「私なら」
と、城之介は昂然と言った。
「鳶を苦しませるようなことはせぬ」
生意気に聞こえたに違いない。一瞬、十兵衛の顔に動いたものがある。
が、すぐに笑いにまぎらした。

「ははは、若い。わしは羽を狙ったのだ。胴体を撃つよりは、そのほうが難しいぞ」
「……」
強がりだったかどうか。
城之介の言葉には、夕月のことが含まれている。十兵衛の表情が変わったのはそれを察したからだろう。
十兵衛が鉄砲の自慢をしたのは、今度の平戸交易も、鉄砲が大半を占めていたからだった。
周知のように、ムスケット銃、いわゆる種子島銃が伝来したのはこの二十年あまり前になる。
中世から近代への最も大きな変革の資となったのはこの火砲であり、古い戦法を一新せしめるだけの威力を備えていたことはいうまでもないが、永禄の初年までは、各大名たちの間で、鉄砲への欲求は並々ならぬものがあっても、供給は需要をみたすに至らなかった。
時折来航する南蛮船の数は知れていたし、寄港地も限られていた上に、ポルトガル人の方では、日本征服の意図を持っていたし、鉄砲の輸入に熱心ではなかったからである。
大名たちが、欲しがれば欲しがるほど、値段は高くなるし、有利な取り引きが出来る。
鉄砲を餌に、欲しいものを入手出来たのだ。
必然的に、大名たちは鍛冶の者に命じて貴重な舶来ムスケット銃をお手本に、鋳造させようとしたが、強力な火薬をつかうものだけに、容易ではなかった。
当時、和泉、堺、近江国友村、豊後府内、肥前平戸などに、これら鉄砲鍛冶の鍛練場が設けられ、まがりなりにも、鉄砲が出来るようになっていたが、量産にはほど遠く、欠陥も少なくなかった。

鋳造銃身よりは鍛造のほうがすぐれているが、発射したとたんに破裂して銃手を殺傷することが少なくなかった。
南蛮屋十兵衛が、平戸で購入した百挺のムスケット銃は正真の舶来品であった。
(鉄砲さえあれば!)
野望に胸をふくらませた誰もが思うことだった。
従来の飛道具といえば弓矢くらいで、明国からは石火矢などのほかに、鉄砲まがいのものも伝来していたが、命中率も悪く、ほとんど実用の役に立たない。
少し後のことだが、明国へは日本製の鉄砲が輸出されている。
南蛮――といっても、当時日本への直接的な経路は呂宋（ルソン）つまりフィリピンのマニラやインドから来たもので、日本に一たん入ってから、明国へ渡来するというのは地理的に見ておかしいようだが、歴史的にはそういう事実がある。
ともかく鉄砲がほしい。
大名から野伏（のぶし）まで、そう思った。
(鉄砲の数が、そのまま領地の広さに比例するのだ)
この着眼が、織田信長を飛躍させたのである。
南蛮屋十兵衛がもとめてきた舶来の鉄砲百挺も、もはや買い手がきまっていた。
「どうだ、城之介、試してみるか」
と、まだ余煙をたゆたわせている鉄砲を差し出した。
「鳥を撃つのがいやなら、矢羽でもよいわ。矢に小旗でも結んで放ち、それを撃つ」
「なるほど、おもしろいな」

城之介はぴかぴか光っている新筒を受けとった。
風を手でかこうようにして、銃口から火薬を注ぐ。
火薬の分量も着弾距離と鉛玉の重さに密接な関係があるのだ。
「弓だ、徳次」
「へい、小旗を結ぶのかいな」
と、八丁徳が甲板下へおりていったが、すぐに顔を出した。
「あきまへん」
「どうした、小旗はないか」
「恰好なのがあらしまへんね、わての褌なら……」
「阿呆！」
「褌なら赤うて、よう見えるさかい、的に狙いやすいやおへんか、あきまへんか。ほなら、好えもンがありまっせ」
すっと引っこんだ。
出てきたときには一本の矢の羽根に紐で瓢箪をぶら下げている。
「これなら、的になりまっせ」
「阿呆だな。それでは瓢箪が弦にあたって飛ぶまいが」
「さよか、好え智恵おまへんか」
城之介は苦笑した。
「矢尻にぶら下げたらどうだ」
「そやそや、そうさせて貰いまっさ」

矢尻のつけ根から五寸ばかりの紐で吊ると、八丁徳は弓をひきしぼった。
「よろしいか、放つときは声をかけとくなはれ」
「いつでもいいぞ」
自信がある。
「それ！」
きって放つ。瓢箪をぶら下げた矢は青空へ向かって、飛んだ。
だーん、銃声とともに、瓢箪がぱっと割れた。
城之介は引き金に指をかけたままである。誰かが、先に撃ったのだ。
「誰が……？」
城之介は手元を見た。
引き金には指はかけたままだ。火縄もおちていない。火薬と弾丸もそのまま、発射していない。
が、銃声とともに、あざやかに砕けた瓢箪が、はらはらと落ちてきた。
「誰が撃ったのだ」
南蛮屋十兵衛も怒りの眼であたりを見回した。
甲板上の、誰もが鉄砲を持っていない。
「城之介さま、あれを……」
夕月が海上を指さした。
そこに一艘の小舟が浮かんでいた。
船頭のほかに、女が一人。その手に鉄砲が握られているではないか。
「あいつや！」

かっとなったように、八丁徳が弓を足元に叩きつけて、
「こけにしくさって！　やい！　そこの……」
卑猥な言葉を大声で怒鳴った。
「女だてらに鉄砲撃ちよって、それも、わての、わての瓢箪……」
腹がたって、真っ赤になって絶句している。
ぶるぶるとふるえて、
「貸しとくれやす」
ひったくるように、城之介の手から鉄砲をとって、
「瓢箪の代わりや、食え」
狙った。
火薬も弾丸もこめたままだし、火縄も待ちかねたように、ぶすぶすいぶっている。
「待て、八丁徳」
十兵衛が制したのと、引き金を引くのと同時だった。
轟然と新式鉄砲は火を吹いた。
寸前――小船の船頭と女が、ふなばたから、おどろくべき早さで海中へ飛びこむのが見えた。
女の黒髪が、ぱっとひろがり、白い脚が宙を蹴った。
まさか、飛びこむとは思っていなかったので、梵天丸の船上では、わっとどよめいた。
八丁徳の撃った弾丸は小舟のへさきに当たって、木片が小さくはじけ飛ぶのが見えた。
船頭と女を呑みこんだ水面は、それきり、二人の姿を見せず、とろりとおさまっている。
「なんじゃろ、あやつら……」

むろん、命中していないから、二人ともももぐっているのであろう。
船は燧灘（ひうちなだ）を通っている。
伊予の新居浜あたりの沖合である。何という島か、松林の濃緑と赤土の山肌を削ぎたてたような島々の間を、梵天丸は通っているのだったが、その島々の陰から、突然、
えっさ、えっさ、えっさ……。
舟人の掛声が聞こえてきた。
見よ。
奇妙な小旗をみよしとともに立てて、ふなばたに楯を並べた小舟が、幾艘も――五艘、七艘、十艘……一せいに漕ぎだしてきたではないか。
「海賊だ！」
南蛮屋十兵衛が叫んだ。
「鉄砲をとれ、弾丸をこめろ」
遠く南海の荒海をこえて、フィリピンからマラッカ海峡あたりまでも、往来した堺の南蛮屋である。これまでも、どれだけの襲撃を受けたかしれない。
臨機の行動は迅速であった。
「鉄砲の用意じゃ」
十兵衛のひと声で、手代たちから舟子、炊夫（かしぎ）までてきぱきと行動した。
用意の鉄砲を持ち出し、ずらりと、ふなばたに並ぶ。槍、手かぎ、大薙刀。
弾丸方、火薬方とわかれてこまめに銃に装填する者もいる。
連発はできないから、撃つ者と火薬の用意とは別の手でする。

手ぎわのよさも何回と知れず死線を超えてきたことの熟練である。
梵天丸の乗り組みは、十兵衛の指揮のもとに、呼吸を合わせて、ばたばたと用意をととのえた。
「伊予の海でひとあばれか」
と、城之介は、その敏速さに驚嘆しながらも、また血が燃えてくるのを感じている。
「夕月、下に隠れていろ」
十兵衛が怒鳴った。
「いいえ、あたしも、お手つだいしたい」
「阿呆、その肌に掠り傷されても、わしの損じゃわい」
そういう十兵衛の顔は、もはや商人のそれではなく、南蛮往来の逞しい〝男〟の顔であった。
「小八、下へ連れてゆけ」
炊夫見習いの少年に、十兵衛は強い調子で命令した。
「でも……」
と、まだ、ためらうのを、
「親方の言う通りだ」と、鉄砲をとりながら城之介も言った。
「女にうろうろされては、戦さができない」
城之介の言葉のほうが、夕月には説得力があったようである。
「お気をつけて……」
ふかい眼ざしは、城之介へむけられたものだった。
十兵衛はにやりとして、
「城之介、おまえも下へ行ったほうがいいかもしれんな」

「いやだ」
「泣くぞ、おぬしが死ねば」
「……」
「わしが死んだら、喜ぶかもしれへんがな」
自嘲的な言葉だったが、十兵衛の顔は、この争闘を前にして、生々としたものになっていた。
梵天丸の乗り組みたちの、誰もが戦さの恐怖や悲壮さはなく、むしろ祭りの前の多忙さに昂奮しているような、そんな感じだった。
用意の鉄砲は各自にゆきわたったが、火薬と弾丸ごめの者は、あの売り物の新品の鉄砲をどんどん運んできて弾丸ごめをはじめる。
こう書くと、長いようだが、近くの小島のかげから多数の戦さ舟が漕ぎだしてから、五分とたっていない。迅速さは驚くばかりだ。
左右のふなばたにとりつく人数の配置もきまっていたようである。
ずらりと筒先を揃えると、十兵衛の命令を待つ。
えっさ、えっさ……ゆく手を遮るように十数艘の戦さ舟が、漕ぎ寄せてきた。
奇襲の戦さ舟は一様ではなかった。
十数人乗っているものもあれば五、六人のものもある。そこらの小舟をかき集めてきた、という感じだった。
だが、へさきとともの小旗や、楯を並べて矢弾を防ぐ装置は一様で、鉄砲、弓、槍、長柄や短い手鉤など、得物はばらばらだった。
波もおだやかな、風光明媚な瀬戸内海の、燧灘である。死闘を展開するには、勿体ない晴れた

日で、かれらの表情が見えるほどの近くまで、引き寄せてから、
「撃て！」
南蛮屋十兵衛は大喝した。
どどどッと、数十挺の鉄砲が一せいに火を吹いた。
轟々たる音響が海上にとどろき、むうっと臭い硝煙があたりにたちこめた。
その濃煙のかなたで、悲鳴と叫喚がつづいて、海中へ転落する音が聞こえた。
向こうからも、閃光と銃声とともに、ふなばたが削られ、矢が頭上を掠めた。
海賊たちの小舟戦法は、鉄砲の合い間を縫って漕ぎ寄せ、八方からよじのぼって斬りこむ――というのにある。洋の東西を問わず、十五、六世紀までの海賊は、それが常態であった。

　余談になるが、筆者は先般、数人の作家たちと森重流の火縄銃の試射をやった。十匁玉で黒色火薬を用い、横浜富岡射撃場で曇天の日に敢行したのだが、そのすさまじい音響と、硝煙は一発であたりが一瞬、濃霧の感を呈したことを実感している。

　尚、熟練者が早撃ちを披露したとき計ると、切火縄で一分間に五発を撃った。鉄砲伝来当初は連続撃ちよりも、その威力に重きを置かれたろうから、一発撃っては、銃身を掃除し、火薬をそそぎ、弾丸をこめ、火皿に導火薬（これは特に粉末にしてある）をそそいで、狙い撃つ――この操作に一分以上は要したと思われる。

南蛮屋十兵衛はこの欠陥をのぞくのに、二ノ弾丸、三ノ鉄砲の順を習得させていたのである。
もっとも、鉄砲の余分がなければできないのだが、一発撃ったやつを、うしろの者が玉薬をこめる間、すでに用意のもので撃つ。
それをうしろに渡すまでに、もう次の用意が出来ている――。

この撃ち手と、玉薬方との交換がスムーズに行なわれることにより、連続射撃が魔術めいた速さで行なわれる。
小舟の海賊たちも仰天したらしい。
漕ぎ寄せるひまもなく、撃ってくるのだ。
近よるほどに、楯をぶち抜いた玉がなお殺傷の力を持っていたから、狂ったように陣鉦を鳴らして、逃走にうつった。
「やあ、逃げよる」
梵天丸では、ふなばたを叩いて喚声をあげた。
「油断すまいぞ、また襲ってくるかもしれん」
船足をはやめて、梵天丸は一路和泉堺をめざしたが、鉄砲の用意も怠りなく、帆柱の上の見張りも二人にした。
一人では四方を見わたすのが難しい。
小半刻交替くらいで、代わらせる。
「あんまり景色がいいさかい、気ィゆるんであきまへん」
交替でおりてきた八丁徳がとろりとした眼つきをしている。
たしかに、この小島を点在させた内海の風景は申し分ない。
「私ははじめてだから見あきないが、しじゅう行き来していれば珍しくないだろう」
城之介が言うと、
「そないことあらへん、好え景色は好え景色や」
と、八丁徳はむきになって、

「女ごもそうや、好え女はいつ見ても好え、悪い女は、いつ見ても悪い、違いまっか」
「そうかな」
「そうでんがな、こない歌がありまっせ……」
この男、酒が入っているときもしらふのときも陽気な調子に変わりはない。
身ぶり手真似で唄いだした。
〽人の妻見て
　わが妻見れば——
　深山の奥の
　こけ猿めが、
　雨にしょぼ濡れて
　ついつくぼうたに
　さも似たよ……
おどけて、猿の面をつくっている。
城之介が笑いだすと、
「どないだす、猿女房は何年つれ添うても猿女房でんがな」
「そういうものか」
「そういうものでんがな」
「だが、猿女房がいやなら、別れたらいい」
「そない、楽々と別れられしまへんね。そやさかい、気ィつけんとあかんのや」
八丁徳はますます雄弁になって、

「城之介はん、好え男やさかい、堺ノ津でも、京へ行っても、女ごがたかって来て、大変なことになりまっせ、妙なのつかんだらおしまいや」
「つかまなければいい」
「わからんお人やなァ、あっちゃでつかまえるがな。女ごのほうで誘いかけるがな」
「そんなものか」
「呆れた。頼りないこっちゃ、こら、向こうへ着くまで、教えこまにゃなりまへんな」
「女のことはいいよ、八丁徳」
と、城之介は真顔になって言った。
「京のことを聞きたい」
「よろしゅおます」
「いまは天下が乱れているが、畿内は四国の三好家が圧えているとか、聞いた。足利将軍さまも、三好どのの思いのままとか、そのへんがよくわからぬ。教えてくれるか」
「へえ、へえ、わっちも、ようけ知っとるわけやないけども、ま、だいたいのことなら……」
八丁徳が話してくれたのは、あまりに意外なことだった。
八丁徳の話では、いま天下の権力者といえる者はいない、ということだった。
京には何百年かつづいた天子がいて、本当は天子という位だから偉いわけだろうが、足利将軍がこれも十何代かつづいているほど権力がある。
　ところが、それはおもてむきで実は将軍の支配下である守護代や管領という身分の者が勢力を持っていて、天子や将軍は、名目だけのものになっているという。
　その名声と旗は利用するが、実権は多勢の武士を養っている大名が握っている。

たとえば、四国の阿波の細川家も、もともと足利氏の一族だが、阿波の守護大名としてのし上り、数代のうちに権勢を得、さきごろ死んだ晴元は、管領となって実力をふるったが、被官の三好氏が頭を持ち上げて争い、いまや三好一族にあらずば、人にあらずというほど、三好家が、四国から京畿一円を掌握している。

したがって、いまの時代は、ただ高い位や身分だからといって人は頭を下げなければ、恐れもしない。

「実力やな、力や、力のない者はどない高い位があってもしゃないわ」

その高い位だって、力さえあれば奪える。

「天子や将軍にだってなれるというのか」

城之介は言った。

九州の果てで、海賊の群れにまじり、西海の天地しかしらなかったこの血気の青年には、中央のこうした情勢は、ただ、おどろきでしかなかった。

「そら、チット無理や」

八丁徳は言い方が悪かったかなと思った。

「天子は、その天子やさかいな」

「将軍だって、力だろう。力のある者が、最初はなったのだろ、その足利将軍のはじめだって」

「そらそうやけど、こない世の中やったら、将軍の力を利用して好え思いするのが、いっち徳やないか。細川家かて三好家かて、みんなそうだっせ、わざと喧嘩吹きかけて、ごじゃんとやっつけて、そのあとで、仲直りするんや、もう向こうさんでは頭が上がらへんがな」

「そんなものか」

「そんなものや……」

三好家は、之長、元長とつづいて、長慶（はじめ範長）というのが出てから急速に勢力を伸ばした。

長慶が細川晴元をしのいで実権を握ったのは、名流というほかに、一族に武将が多かったからだ。叔父や弟が多く、これらが武将としても秀でていた。

そのために、どこまでも手をひろげることが出来た。

四国といっても、出身地の阿波が本貫で、讃岐、淡路と、四国の東半分というわけだが、京畿に隣接したこれらの地が分国ということは、絶対的な強みがある。

自由市堺との密接な関係も三好氏の伸長に欠かせない。

戦国時代というと、一般的には織田信長や、秀吉や、家康やを思い浮かべる。

これらの武将たちが、名前だけでイメージが浮かぶほど有名なのは、徳川家康が天下をとって、将軍となり徳川幕府をひらき、いわゆる江戸時代が現出し、それが今日の首都東京にひきつがれるという画期的な歴史を作ったからであり、それと関連して、秀吉、信長が江戸時代でも人口に膾炙していたからである。

むろん、秀吉の人気は浮浪児から天下人にのし上ったという、出世ばなしのいわば鼻祖としての知名度が高かったし、この二人と三角点をなす位置に信長がいた。

三人三様の性格も、またきわだっていたことで、れいの鳴かぬなら鳴かしてみしょうホトトギスの狂歌なども、かれらの親しみからの読人知らず、だ。

戦国時代というと、この三人の時代、というふうに安直に思われていて、この三角点の範疇にある武将たちは、たとえば、明智光秀、伊達政宗、加藤清正とか石田三成なども知られるのだが、

この少し前の三好長慶やその一族、細川晴元たちになってくると、とたんに知名度が低くなる。
これには、いろんな理由があるだろうが、家康などとは、ほとんど関わりがなかった点も、その一つだろう。
時代的には、さして離れていない。
信長とは後に三好長慶の懐ろ刀松永弾正の線で関係が生じてくるわけで、年号としては、天文・弘治・永禄それから天正の初めに及ぶから、一般の知識でいえば、上杉謙信、武田信玄の時代。

この小説の時点は、永禄八年三月下旬。
川中島の謙信と信玄の争いは将軍義輝のあつかいで、一時和睦したかたちになり、おのおの自国内治政に忙しい。
家康もそうだ。漸く三河を安定したところで、信長もさきごろ、尾張から野望の手をのばし妻の父斎藤道三、伜の竜興を追いだして美濃を掌握し、井口城に移って岐阜と称したばかり。
したがって、この永禄八年の春は、兵火のおさまったかに見えた奇妙な小康状態にあった。
面白いのは、これが乱世の終息とは、とても思えない、燠火の熱がそこら一帯に赤い色を見せていることだ。
ひとたび突風が吹けば、たちまち炎は猛然と劫火になる。
その状態だった。
しかし、こういう小康でも、庶民たちには有難いのだ。
「さすがは将軍さまや」
と、将軍義輝に感謝する者も多かった。

義輝自身、実をいえば、長い戦争に嫌気がさしてきてのことだ。
戦さをする武将の心理には、
(勝つ)
見込みがあってする場合と攻められたから、しかたなく、
(戦う)
場合との、どっちかだ。
将軍義輝の場合、そのどちらでもなかった——。
剣豪将軍。
又は、
兵法将軍。
いくらかは揶揄も入っているかもしれないが、おおむね称賛だ。
古今、名ある武将の数は多く、征夷大将軍の節刀を拝受した者も少なくないが、本来武将であるべき将軍にして、武辺者であった者は意外に少ない。
本来の肩書きと、その地位の高さが、名実をたがえてしまったのであろう。
そうした中にあって、この義輝だけは、名実ともに将軍であり、剣客としても、聞こえていた。
兵法(剣法)将軍と呼ばれるゆえんは、塚原卜伝を師として、新当流を学び、その奥義をきわめ、特に、秘太刀の技法〈一ノ太刀〉の極意を得たことや、好んで兵法者を招き、しばしば御所の庭で試合を行なうなどのことが、喧伝されたことによる。
事実、義輝の剣法は、大名手づまの域を超えたものであった。その証は、後に、詳述する。
細川晴元は名分を明らかにするために足利将軍父子にべったりとついていた。

一時なかま割れしたことがあったが、晴元の方で放さない。将軍にしても、もともと将軍の軍勢というものはないのだから、細川管領の勢力と離れたくない。

義輝が将軍職についたのは、天文十六年だが、まだ父なる前将軍義晴は存命だった。

父子は、晴元の勢力が弱く、長慶に度々追われては江州へ落ち、坂本に近い大嶽の中尾に山城を築いたりした。

義晴は穴太でみじめに死に、長慶の軍が迫ると、義輝は、堅田に逃れ、さらに朽木谷に移る——というふうに、放浪の歳月を送らねばならなかった。

こうしたことが、

(なんのために戦さをしているのか)

と、疑問に感じるようになってきたのだろう。

この当時の戦さには、およそ意味はない。おのおのが、正義を叫んでいるだけで、要は権勢欲から出たものだから、

(その権力をみとめてやりさえすればいいのだ)

意地にとらわれていることの無意味をさとった。

細川晴元と和睦させることにした。三好長慶が晴元・将軍の連合軍に指向したのは、父の元長を殺された怨みがあり、その仇をとったので、これ以上、無益な戦さはさけようという義輝の提案をすぐにうけ入れた。

むろん条件付きではあったが。

こうして和議がなり、義輝は漸く、京へ帰ることが出来た。

この当時の武将の多くがそうであるように(信長は例外)三好長慶は、将軍に憎しみを持っていない。

むしろ、愛敬に近い感情だ。足利の血すじへの憧憬もあったろう、招かれると、嬉々として上洛した。

条件とは細川晴元が入道して出家するということ。

晴元の子総明丸というのが五歳だったので、将来は長慶が責任をもって守り立てるという。

その間、細川の家督は一族の氏綱が継ぐ。

長慶は管領になろうとしなかった。その地位を望まなかったので、旧主を下剋上したことにはならない。総明丸を守って名分をたてている。

長慶は当時の武将のうちでは、欲のないほうといえる。

三好家の嗣子に生まれていろんな意味で厚遇され、苦労が比較的少なかったからであろう。

実権は旧主をしのぎ、将軍義輝の信任を得ることになり、御相伴衆ということになると、手放しで喜んだ。

これは相談役か最高顧問とでもいうところであろうか。儀式の席次などは管領の次だ。格式は高い。

義輝の参内に供奉(ぐぶ)して、長慶は修理大夫、倅の孫二郎慶興(義興)も筑前守に任ぜられるという栄誉に輝いた。

こうして三好長慶の名は畿内外にひびくようになったのだが、これには、かれが族長であったということが、大いにプラスになっている。

前にちょっと触れたが、長慶には弟が多い。

すぐの弟は豊前守義賢(之康)といい、主君の阿波の守護細川讃岐守持隆を謀殺して、その側妾を奪い、阿波に君臨していたし、その次の弟摂津守冬康は淡路の豪族安宅氏を相続して実権を握り、さらに末弟の民部大輔一存は讃岐の豪族十河を継いで、やはり三好コンツェルンの一翼を担った。

ことに十河一存はその豪勇ゆえに〝夜叉十河〟〝鬼十河〟とおそれられたほどで、長慶にとってはこの三人の弟によって後顧の憂いなく京摂に馬を進めることが出来たのだ。

長慶のこうした伸長の参謀は、家老の松永弾正久秀だった。

この男のことは後に述べるが、これまでの長慶の戦略や出所進退いずれも久秀の方寸に出ざるはないといわれる。

その久秀は大和経路の拠点として信貴山城により、さらに多聞城を築いた。

当時、三好一族の勢力圏は、山城・摂津・河内・大和・和泉・淡路・阿波・讃岐とひろがり、将軍義輝をも自家薬籠中のものとした長慶の勢威は大へんなものになっていた。

こうした三好兄弟の勢いは、

「やがて、天下を握るであろう」

と、噂された。

誰の目にも、そう見えた。ところが、この団結が崩れた。まず、仲違いであり、死が来た。

人間の不信感は、一家の繁栄と安泰を得たときにくる。

長慶は、文学の道に通じて、当時の武将に珍しい、文化人的せんさいな感情がある。それは甘さであり、弱さだ。

この性格の、武将としての欠陥があらわれたのが、弟への不信感だ。長慶は弟の冬康を疑い、

謀殺した。

「弟を殺したのか？」

城之介には信じられなかった。

「実の弟を」

「珍しいことやおまへんがな、親子兄弟でん、天下が目の前にぶら下ったら、気持が違うて来まんね」

「……」

「殺すか殺されるかやないか」

八丁徳には、城之介の疑問と驚きのほうが理解できない。

「それはそうだが……」

理屈ではわかる。

父の面影を胸に描くしかない城之介にとっては、

（もし、兄弟があったら……）

どんなに心強く、楽しいか。

ない者ほどそれをほしがるのが人間ではあろうが、城之介にはいかに現世が乱離の様相を呈してはいても、実感として親子兄弟が殺しあうのは、納得できなかった。

それほどに、男にとって、天下の権を握る、ということは魅力的なことか？

（鬼になって、天下をとったところで、何が楽しいだろう）

そう口に出しかけてやめた。

八丁徳に一笑に付されてしまいそうな気がしたからである。
(ソラ、城之介はんが子供ちゅうことや)
人生がわかっていない、と蔑まれそうだった。
それは、
(男になっていない)
ということだ。
男の本性が闘争心にあり、征服欲や権勢欲はそこから発した。
(男の冥加ちゅうもんや)
である。
(金と名誉と権力があったら、女でん、酒でん、好きなことができるやないか)
八丁徳は下司をまるだしにするが、どんなに立派な口実をもうけても、男の欲望は所詮そのあたりかもしれない。
「冬康ちゅう弟だけやない、ほかの弟はんの死も、どうも、あやしいちゅう、評判だすがな……」
十河一存は湯治にゆく途中、馬から落ちて死んだ。
すぐの弟の三好義賢(之康―実休)はその翌年、久米田の戦さで討死したが、〔三好家成立之事〕や〔三好記〕によると、流れ矢で胸板を射ぬかれて死んだとある。
〝流れ矢〟とわざわざことわってあるところが謎を秘めている。
さらに翌年、長慶の長子筑前守義興が変死している。
黄疸だというのだ。

「弟どころか、わが子を?」
城之介は、思わず叫んでいた。
「そんな、ばかな」
「ばかなこっちゃがな、人間ちゅうもンはあてにならへん」
「しかし……」
「もっとも、同じ毒殺でも、ほかの誰かがやったちゅう話もあるさかいな」
「ほかの誰か、というと」
「御家来衆や、腹黒い男や」
八丁徳はなぜか言葉を濁した。
「そういう噂が出るだけのことがあるのや。そらな、まだ世間では知らんことで、大きな声で言うたら、首がとぶけどな……」
その京畿一円の権勢家、長慶が、実はすでに死んでいるらしい、というのである。
すでに死んでいる?
足利将軍、義輝の御相伴衆として四位下修理大夫三好長慶の名は京畿に冠たるものがある。
その長慶が死んだなら、世間に洩れぬはずがない。
「死人が、天下を圧えているというのか?」
「へえ、九分通り確かな話や」
八丁徳は、城之介の疑問はもっともながら、出来ないこっちゃない、と言った。
「生ける孔明、死せるナントカを走らす、という故事もおます」
なかなか博学なのだ。

「三好一党の頭が死んだちゅうことになると、ばらばらになっちまうよって、まんだ生きとることにしとこう、てなことや。謀叛おこす手合いが出て来たら面倒やさかいな」

三好長慶が生駒山脈の西麓、突き出た断崖の上にある飯盛山城を修築して守城としたのは、御相伴衆になった、永禄三年の冬である。つまり五年前だ。

この飯盛山城の規模は山城としても雄大で、近世城郭の様相を見せて発展の可能性があったことが、外人宣教師の本国への報告書にも詳しく語られていることでわかる。

長慶はこの城に居ることになっている。

城中で死んだのなら、

（隠せないこともない……）

城之介も、話を聞いているうちにわかってきた。

一般庶民には、城内がどうなっているかうかがい知れない。山城となれば、なおさらだ。

その喪を秘めることも出来ないことではない。

「なんせ、お世嗣（甥、十河一存の子義継）が小さいよってな、大きゅうなるまでごまかすつもりでっしゃろ、ごまかしきれるかどうか、わからへんけど」

京を含んで五畿内、四国にまで勢力を持っているという三好一族も、実は万代不易というのではないらしい。

むしろ、ちょっと押せば、ぐらつきそうに、屋台骨は貧弱な感じがする。

大きいのは屋根のひろがりだけで、柱は細く、腐れはじめているようだ。

前に述べたように、弟たちも次々と死に、いまでは、三好長慶のもとに、三人衆と呼ばれる一族の者が、その勢力を支えているという。

三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通の三人。

「この三人が三人衆や。三好三人衆……三好家のえらぶつや。ところが、この三人衆の上に、もう一人、えらぶつが居りまんね」

「それは？」

「弾正さま」

と、八丁徳は言った。

「松永弾正久秀さま、このお方が実は三好家の腕利き……」

言いかけて、何を見たのか、首をのばした。

「あれ、変なのが来まっせ」

さっきから気になっていたのであろう。

ずっとうしろのほうだが、小舟が三艘、水尾を慕うようについてくる。

「あやつらか？」

「よう見えへんけど、しつこい奴ちゃ」

遠い。

何人乗っているのかもわからない。木ノ葉が三片——水に浮かんでいるように見える。

が、この梵天丸との距離が、近くもならず、離れもしない。ということは意識的に、つかずはなれずに尾行しているわけだ。

「性懲りもない」

八丁徳は小手をかざして舌打ちした。

燧灘をすぎて、船は岬を右手に近く見ながら、塩飽七島に入ってきた。

ここはもう讃岐の沖合いだから伊予の海賊はあきらめたろう。やがて、それらの小舟の影は見えなくなった。

「油断するな、船虫はどこからでも出てくるものだ」

南蛮屋十兵衛は注意を怠らず、水や食物の補給にも港へよることを避けた。

東讃岐の志度湾へ入ってきたのは、ここなら安全というだけでなしに、十河家に頼まれていたからである。

長慶の弟の十河一存は事故死して、あとを兄の子の存保が継いでいる。

堺の町衆と三好家との持ちつ持たれつの関係は後に述べることになるが、南蛮屋たちにしてみれば、安全な商売の相手であった。

梵天丸が港に入っていったのは、夕方である。

巨船を迎えて港は賑わった。小舟で漕ぎ寄せてきては、野菜や米麦やいろいろな物を売ろうとする。

「酒はいらんか、餅もあるけに」

水夫(かこ)たちは、ふなばたから見下して、

「餅はいらんがの、餅肌なら買うがのう」

「サメ肌の女はよう買わんで」

などとからかうのも港へ入った楽しみだ。

土を踏めるという、喜びが、海の荒くれ者を解放的にしている。

物売りは男もいれば、女もいる。渋皮のむけた女もいる。だいたい讃岐女は美女が多い。

「うち(私)の肌はなめっこいがよう」

髪を手拭で包んだ女が、手をふった。

夕闇中で、たしかに色白の顔が花が咲いたように浮かんでいる。

「なめっこいかどうか、触らんとわからへんがな」

「おとッしゃ(恐ろしや)」

「なんの、可愛がるちゅうこっちゃ」

「ほいなら、ま、泣かされるけによぉ」

けらけらと女は笑った。

すごく健康的な感じだった。そんな応酬で、女は餅を盛った籠を抱えて、縄梯子をするすると上ってきた。

馴れた動作だった。

いかにも、浜育ち、といった感じの女だ。

二十歳前後であろうか。十四、五歳が適齢期だった時代だから、はたち、といえば若年増なのだが、爽やかに健康な姿態は疲れたところがない。

肌理(きめ)のこまかさ、というよりも、はつらつとした生気が肌を清らかに見せている。

「うちの餅食ったら、もう去(い)ぬことはでけんでよう」

餅を盛った籠をどさりと置いて、女はみんなを見まわした。

粗末な小袖の胸がはだけて、まるく張りきった乳房が、なかばのぞいているが、隠そうともしない。

「餅より、そのおっぱいが好えぞな」

「喰うかえ」

女は両手で、自分の胸乳をすくいだすような大げさな身ぶりをし、それから、また、けらけらと笑った。
梵天丸の乗り組みは面白がって、わいわいと寄ってきた。
その間にも、酒売りのおやじや干柿売りの老婆などがどんどん船へ上ってくる。
まるで甲板上が市場になったようなさわぎだ。
南蛮屋十兵衛は城之介を連れて上陸している。夕月も、きれいな空気を吸いに甲板へ出てきた。
「おや、おいしそうな干柿やないの」
と、吊し柿をつまみあげて、
「なんぼかえ」
「一吊し十文下せえ」
老婆は淳朴そうな顔をくしゃくしゃにして言った。
「やけんど五束なら四十文にするがの」
「そんなに食べられへんわ」
夕月は笑った。
干柿を受けとって、鳥目を払っていると、ふと横顔に痛いほどの視線を感じた。
ふりむくと、眼が合った。
餅を売りに来た女だ。
あわてて、そらそうとしたのは何故だろう。それもおかしいと思いなおしたのか、にっと笑った。八重歯が白い。
男を誘いこまずにいないような魅惑的な笑顔だったが、その眼には笑いがない。

眼だけは笑っていない。
さりげなくその眼をそらすと、八重歯の女は、
「さあ、餅は早く買わんと、おしまいになるよ」
と、男たちに呼びかけている。
夕月は不審を感じた。八重歯の女の視線は、他意なく、むけられたというものではなかった。
「あのひと……」
と、夕月は老婆に言った。
「娘さんかえ」
老婆は、ちらりと見て、手を振った。
「知らへな」
「……」
「うちらの連れ(仲間)やないわ」
「でも、一緒に商売して……」
「知らへな」
そっけない。むしろ、他国者が商売を荒している、というような態度だった。
暫くして気がついてみると、その女の姿は消えていた。
そのほかには、別段とりたてて怪しむ理由はなかった。
女同士のきわめて微細な感情のふれあいにすぎない。
それきり、夕月はその餅売りの女のことは忘れてしまった。
荷役も済んで、その夜は港外に船泊まりした。安全な港とはわかっていても、念を入れるのが

南蛮屋十兵衛である。
　無理のない三交代で、八丁徳が番に立ったのは、子(ね)ノ刻から丑ノ刻まで——深夜でもっともねむいときだ。
（損なクジひきよった）
　と、人一倍、寝つきのよい男だから、こんな役目は死ぬより辛い。
　だが、〝損なクジ〟は、それどころではなかった。大失敗してしまったのである。
（眠気ざましや……）
　と、船倉へおりて、酒を盗み飲みした。
　夕景に積み込んだばかりの讃岐酒だ。一合ばかり、ぐーっと一気に飲み干して、ふーっと息をついたとき、その暗がりに、ふと何やら動く影が見えた。
「はてな？……」
　眼をしばたたいた。
　八丁徳は船燈をあげてみた。
　魚油をたたえた火皿で、燈芯を二本三本より合わして、灯の大小を調節する。
　火薬や縄など、燃え易いものがあるから、引火をおそれて炎は小さくしてある。
　船倉の中は暗い。隅々はほとんど真っ暗な闇に塗りつぶされている。
「やい！」と、その闇にむかって八丁徳は呼びかけた。
「そこのやつ、出てこい」
　声が低かったのは、自信がなかったからだ。

　影——と見たが、眼のあやまりかもしれない。
　はっきりと、不審な者の影を見ていたら、大声を出したろう。ものの影におびえて、騒いだなどと笑われたくない。
「やい！　たしかに見たんや、出てさらせ」
　八丁徳は刀に手をかけた。抜いた。突き出すようにして、そろそろと、積荷のかげへ進みよると、
「待って、怪しかもンやないけに」
　女の白い顔が出た。
　八丁徳は二度びっくりした。
　人がいたというだけでも、二分くらいの確信しかなかったうえに、それが、餅売りの八重歯の女というのも驚きだった。
「汝(わ)れァ……こんなところで何しちょったんや」
「——決まってらいナ、お前さまを待っちょったんやないか」
「へ？　何というた」
　八丁徳は耳を疑った。
　女は艶然と笑って近よると、
「あたし、好きになったんよ、ねえ……あたしは美沙(みさ)というの」
　餅を売っていたときとは別人のように、言葉の調子も変わっていたが、八丁徳は、この降って湧いたような幸運に有頂天になっていた。
　人世は計算通りにゆかない。

思いがけない幸運にめぐまれることもあるし、また不幸が突然襲ってくることがある。

それが人間のおもしろさでもあり、免れ難い悲しさでもあろう。

(ふえっ、わっちに惚れる女もあったのかいな)

どんな自信のない者でも、うぬぼれ鏡というやつは懐中に収めている、と西洋の諺にある。

うぬぼれ、とはすべからく他動的なものだ。常に他との比較で成り立つ。

(ぴちぴちして、おもろい女や、あない弾んだからだは、あそこもしまりが良うてよろし)

てきぱきとした動作で、愛嬌をふりまきながら餅を売っていた女の姿態に、よだれを流さんばかりだった八丁徳なのだ。

そのときの表情を、この美沙と名乗る女はおぼえていたのか。

「わっちをおぼえていたのけ」

八丁徳の声はうわずっている。

女は、また、にッと笑った。

「おぼえちょったどころよ」

おぼえていたどころじゃない、という。

はてな、その言葉の訛りはたしか伊予のあたりではないかという気がした。

はっきりしたものではない。夕方とは言葉づかいが変わっていたがそれも、

(好きな男を隠れ待っちょったさかい、嬉しゅうてわくわくしとる)

せいだ、と思った。

美沙はすすんで、八丁徳にしがみついたのだ。

男なら捨てておかない、こんな女に抱きつかれては、もう警戒心も自制心もなくなってしまって、

「ほんまかいな、うッ」

眼を白黒しているうちに唇を唇でふたをされてしまった。

しがみついたときに、すでに美沙は胸をはだけていた。

海の女らしく解放的な情熱が、この女に、こうした大胆なふるまいをさせるのか。

胸をあらわにするのが、癖のようだ。

ゆたかで、張りのある乳房は、たしかに女の自慢するにたるものだった。

八丁徳は目が眩むような思いで美沙を抱くと、その場に崩れた。

もう、見張りの義務も、梵天丸の船中であることさえ忘れたような昂奮が、かれをとらえていた。

けものめいた男女の激情のそばを——二間とはなれぬところを、幾つかの影が通りすぎていったのを、八丁徳は知らない。

たとえ、眼のすみにちらりと入ったとしても、この歓喜のさなかでは気がつくはずもない。

「好えで、好えで……」

八丁徳が、たちまちにして、放ち果てたのは、これほどの女体ははじめてだったからだ。

「あれェ、もうかえ」

美沙は不満そうに、

「馬鹿ッたらし、もう一度……」

と、手をのばしてきた。

この船中から、百挺の鉄砲が消えているのが発見されたのは、翌日、船が播磨灘の真中へんに来てからである。
「なんとしたこっちゃ？」
「鉄砲が消えよった……ひゃく、百挺もじゃ」
みんな狐につままれたような気持で、
「わしら、夢ェ見ちょるんじゃないかい」
積荷の箱には、外目には異常はなかった。が、中身は、そっくり蒸発していたのである。
そのことに気付いたのは、夜明けに播磨灘に出た梵天丸が、荒浪に遭って揺れはじめたからだ。
風が出て、進路が狂った。明石海峡をぬけるのがコースだから、播磨灘を東北へのぼるつもりが、南へかなり流されていた。
へたをすると、鳴門の渦にひきこまれる。潮流の関係もあったが、波浪が荒く、船は大きく揺れて、積荷が転がりはじめて、やっと気がついたのである。
「なんや、からみたいやで」
重い鉄砲が入っているはずの木箱が、ごろごろ動くのだ。
開けてみると、みんな空箱になっていた。湿気ないように、菰包みにしていたのが、そっくり消えていた。
「誰が……船から盗みやがったのか」
日頃冷静な南蛮屋十兵衛も、落ち着きを失い、真っ赤になって、
「探せ、探し出せ、ひょっとすると、誰か悪戯しおって……」
命令しながらも、その自信はなかった。当時としては巨大な船でも、百挺もの鉄砲を隠せるところはない。

「どこでやられたか。たしか、昨日の昼間まではあったはずだ」
とすれば、蒸発したのは、昨夜ということになる。
三人の夜番が呼ばれた。
「汝ら、居眠りしとったのやないか、鉄砲百挺ぬすまれたのも、気づかざったのか」
居眠りしたことおへんがな、と三人ともこたえたが、八丁徳の声は自信がない。
(あいつや、あの女や、美沙ちゅう女や！)
居眠りこそしなかったが、美沙の甘肌に狂った時間――あの間に鉄砲を盗まれたにちがいない。
とすれば、海賊か。八丁徳は伊予の海で瓢箪を撃った女海賊を思いだした。
(あいつや、執念っこう尾けてきて、昨夜も小舟を寄せて、なかまが運びだしたのやな……)
切腹もンや、と思った。
「居眠りはせェへんかったけど、実は、わっちがへまなことを」
白状しかけたとき、火事だァ、という叫びが聞こえた。
たちまち船内は騒然となった。失火か放火かわからない。油と藁が燃えあがって、積荷から竜骨にめらめらと炎が移ってゆく。鉄砲とは別にしておいた玉薬がかえって、危険を誘った。
「逃げろ、爆発するぞ」
城之介は、恐怖で足がすくんだ夕月を抱いて、舷側から身をおどらした。ばらばらとみんな、とびこむ。しぶきがおもてを打ったとたん、轟然たる大音響とともに、梵天丸は火を噴いた。

堺の女

松永弾正久秀には奇妙な癖があった。
次から次と女あさりをしていたかと思うと、ぱったりそれがやむ。
急に女ぎらいになったように、どんな美女にもふりむかなくなる。
宗教でもそうだ。
一時、禅に凝った。凝ったように見えた。ひと月の余も坐禅したりして、人がその成果を聞くと、
「腹がへった」
と、言っただけである。
馬に興味をおぼえて、名馬といわれるものを、やたらと集めて、厩舎を建て増ししても追いつかず城内、馬だらけになってしまったこともある。
刀剣の場合もそうだ。
馬や刀は、戦さに不可欠のものだが、あり余っても始末に困る。騎馬と、走り衆といわれる足軽などの歩卒との陣立て掛け引きが戦さの勝敗をきめるから、騎馬ばかりでもだめだし、刀より

槍を重んじる気風も、まだ強かった。
弾正久秀は、名刀を集め、連日のように、生き胴だめしをした。
罪囚を曳き出しては斬る。
生き胴に不自由はなかった。
年貢をおさめず反抗した農民や、夜盗、火つけなどである。
ことに、野伏せり盗賊のたぐいは、鼠のように、捕えても打ち殺しても、あとをたたない。
乱世の象徴ともいえた。
戦火で家を焼かれ、田畑を荒され、作物を徴発されてしまっては温順で勤勉な農民も、反抗せざるを得ないし、腕っぷしの強い者は、盗賊化するか、兵隊になるしかない。
城下に放火して商家を襲った夜盗の首領は、生き胴だめしに曳き出されると、
「大名とは勝手なものじゃ」
と、うそぶいた。
土壇にくくられてからも、
「戦さで何十人何百人殺そうとも町や村を焼き払おうとも、勝ちさえすりゃ、大名じゃ御領主さまじゃと、官位も貰えるが、一人二人を殺して銭の一貫盗んでも人殺しの盗賊のといわれて、生き胴か、間尺にあわん話よ」
「泣き言か」
「理屈に合わんと言うたまでよ、大名も盗人も変わりはない。国を盗むか、銭を盗むか……」
「ならば、国を盗め」
眉毛一すじ動かさず、弾正久秀は、無銘備前物をふりおろした。

切れ味の悪い刀は、分に応じて家臣たちにくれてやった。

この名刀えらびにも飽きたように、やがてやめた。

その盗賊の臨終の言葉に動かされたのではない。動かされるような弾正久秀ではない。

坐禅をやめたように、〈やめたくなったから〉やめた。それだけだ。

もともとかれは酒が強い。毎晩あびるほど飲んだ。陣所でも飲んだ。いくら飲んでも乱れたり崩れたりすることがなかった。

その酒も、さきごろから、ぷっつりやめた。

酒をやめたせいか、甘いものを好むようになった。いまも堺の大絵図を見ながら、饅頭を食べている。

松永弾正久秀と饅頭。

このイメージにはいささか滑稽感がつきまとう。

久秀といえば剃刀のような利け者で剛強の武将という上に、冷酷残忍という評もある。

頬骨の突き出た痩頬で、鷹のようなするどい眼と、奇妙な赤みを帯びて冷たくうすい唇を持った筋骨質の男を想像する。

後年のかれには、そうした性格がもたらす風貌が、ぬきさしならないものとなってあらわれてくるのだが、このころは、まだ世間の評判が描くイメージとは、かなり異った風貌だったようだ。

鼻下の髭は八ノ字ほど大げさでなく、刈りこまれ、ゆったりと中年の肉がついたからだとひきしまった頬には、自信と、磊落さが見えた。

どちらかといえば奥眼なせいか久秀は人と応対するとき、わざと眉をひらくようにする。

眉と眼が迫っているのは、険悪な相とされている。自ら、それをさけるだけの細心さを持つのは、意識せざるを得ないものがあるからであった。

ともあれ、このころの弾正久秀の風貌が、三好長慶の懐ろ刀として、三好一族の信頼を一身に集めて、家老の身ながら、具眼の士には、長慶のあとがまを狙う野望も仄見えていたはずである。

三好一族の結束が固ければ固いほど、この外様である久秀の存在は異質の輝きを放ってくるからだ。

もともと三好一党には傑出した人物がいない。

異才がいないから、どんぐりの背くらべで、連袂しているともいえるし、ある時期には強力に見える。が、張りぼてはいかに大きくても、中がもろい。

弾正久秀が悠然とした姿勢を崩さないのは、かえって底知れぬ男の強さとなって、三人衆たちも一目置いていた。

久秀の行動が、人々の意表をつくのは屢々だが、あれほどの酒好きが酒をぷっつりやめたのにも、驚かされている。

久秀は、また饅頭に手をのばした。

この饅頭は、いうならば中国のマントウと呼んだ方が早い。製法が伝来したのは、かなり以前だが、豚や猪の肉を詰めて、小麦粉で包み蒸したものだ。

堺の絵図が目の前にある。

大絵図である。畳二枚ほどの紙を貼りあわしたものに、街すじ、海など、色ちがいに描かれている。

「こうやって見ていると、まるでわしが、鳥にでもなったようじゃな」

と、小姓に言った。

大絵図を長押にかけて、饅頭を食べながら、見ているのだ。
この大絵図は堺の会合衆三十六人から政所に献上してきたものである。
「申し上げます。紅屋が御挨拶に参上しました」
取り次ぎの者が、入側のところから告げた。
紅屋が来たという。
この堺は自由市として三十六人の分限者による合議制で町運営されている。
かれらを会合衆というのは、その意味からだ。
紅屋はなかでも重だった者である。
「通せ」
堺の町絵図から眼を離さず、松永弾正久秀は横柄に言った。
取り次ぎの者に案内されて、紅屋が次の間に平伏したときも、ふりかえろうとはせず、
「久しいな、元気か」
「おかげさまで、元気すぎて、肥りすぎましての。横に転がったほうが早いくらいで、はい」
紅屋は、肥満したからだを、重そうに膝でにじり寄ってきた。
久秀の口辺に、皮肉な笑いが浮かんだ。
(儲けるだけ儲けて、腹が重くなったとみえる)
銭を孕んだ巾着で、腹が大きく見えるのではない。
(こいつらは銭を呑んでいる。儲けが腹の肉をだぶつかせるのだ)
世間では、こうした堺の分限者たちのことを、
〈腹腫れ町人〉

と呼んでいる。
恰幅がいいことが、それだけで裕福な生活の象徴とされる時代の哀しさだ。
政治の不均衡と、へんぱな経済が貧富の差を甚しくしていた時代である。
紅屋の風貌は、この〝腹腫れ町人〟の典型だった。
「おぬしがくれたこの絵図、なかなかによう描けている。一目で堺の広さ、道すじ、東西南北、手にとるようじゃ」
「はい。政所に備える品としても、必要かと存じまして」
「よく、気がつくの」
久秀はまた饅頭に手をのばした。
「はいその気のつくところで、本町の菓子司が、新しい蒸羊羹をこしらえましたので御試食願いたいと申しまして、持参いたしました」
酒をやめたという噂が伝わると次から次へと甘いものを献上してくる。
(わしも腹腫れにするつもり)
弾正久秀は苦笑した。
この堺に〝政所〟とよばれる、役所が設けられたのは、三好之長の代である。
堺は自由市ではあるが、この乱世に商人だけで、おのれの街を完全に守るということは難しい。
常に誰か強力な大名の保護下にあっての〝自由〟であった。
当時は〝楽市〟とも称した。商人はいまでもそうだが、
(先を読む)
眼を持っている。

明日の支配者を読みとるのに、才がある。保身が生んだ処世の術であろう。
大名の経済的要求を満たしてやる代わりに、外敵から守って貰う。こうしたギブ・アンド・テイクは本朝では珍しい。堺だけが、その方法で兵火を避け、繁栄してきた。
ギブ・アンド・テイクの条理は堺を兵火から守って貰う代わりに、軍用金を提供、あるいは兵力のもとめにも応じる、というにある。
堺の含み資産は大きい。
温存するだけではなく、この港街が存続してこそ、将来も物産の集積所として、船載物の輸入口としての発展繁栄は、はかりしれない。
戦さに勝っても、堺がほろびてしまえば、うまみがない。
それを思うと、敵も味方も、なるべく、街を破壊すまいとした。
経済力への依存と憧憬は、この乱世の大名たちの常に忘れ得ないことだった。
戦国時代というと、ただ、やたらと戦さをし、殺し合ったように思っている人が多いが、そうした乱れた世の中だからこそ、金の力がものをいう。
話が飛ぶが、後年、関ヶ原合戦の際、黒田如水は豊前中津の城門前に、金銀を積みあげて、兵隊を募集し、応募してくる者に、
「支度金じゃ」
と、手づかみで与えたという。
堺の持つ、有形無形の富力、信用度がどれくらいの財産になるかわからない。
そうした憧憬の中で、堺は発展していた。
三好之長はかつて(永正元年)海船浜に宏壮豪奢な屋形を築き、出入りの船舶を検し、堺への侵

寇を見張るに幸いな高楼をかまえた。
これが〝政所〟の起こりである。
松永弾正はたいてい信貴山城にいて、時々、この政所にやってくる。
一種の矢銭、棟別銭のかたちできまった額を徴収している。
堺の会合衆たちは、別に納屋衆とも呼ばれるように、納屋貸し、つまり倉庫業を兼ねている者が多く、はじめ十人の合議制が、このころは三十六人になっていたのを見ても、その発展ぶりがわかる。
当時の思想はかなりに現世的なもので、ぼろ儲けもするが、また大いに使って遊ぶ、という風潮が一般的で、会合衆たちの間では茶ノ湯が流行している。
千利休(宗易)も、そうしたなかのひとりで、後年ほど、有名ではない。当時は利休の師にあたる皮屋の武野紹鷗が第一人者だ。
利休のわび茶の完成は、これ以後である。
ともあれ、堺の富商で、茶ノ道を知らぬ者はなく、この紅屋も宗陽という名がある。
したがって、武将たちの間にも茶ノ湯はひろまり、豪商たちとの交際の必要からも、茶をやらぬ者はない。
弾正久秀は、紅屋宗陽の持参した蒸羊羹をつまむと、
「ふむ、珍しいな」と、うなずいて、
「茶うけによいようじゃが」
それから、庭の方をむいて、
「味はどうかの」

返事はなく、ふわりと陽炎のもえるように影があらわれた。

紅屋はぎょっとした。

はじめ、弾正久秀が犬にでもたわむれの声をかけたのかと思った。

この〝政所〟には犬も猫もいない。

が、そう思った。久秀の声の調子も態度も、それ以外のものではなかった。

「……」

誰もいるはずのない庭先に、忽然と、その影があらわれた。

影は、犬のように、はいつくばって平伏した。

「とらせる」

久秀は、蒸羊羹を、ぽんとほうった。

その男は、つとのびあがるように、頭をあげて、素早く受けとめると、がつがつとむさぼり食った。

まるで乞食が、腐れ肉か何かを貰って食っているような、みじめったらしい姿に見え、紅屋は眉をひそめた。

(何も、犬のような真似をさせいでもよかろうに)

馴らされているのか。飼い馴らされた犬のように、柔順で忠実な男なのだ。

眉をひそめた紅屋は、

(この男は?)

と、あらためて、その装束に奇異を感じた。

鼠色とも燻し朽葉ともつかぬ、異様な色目で、筒袖、軽衫(かるさん)ようの袴で、頭巾におもてを包んで

いる。

投げ与えられた蒸羊羹を食べるために、下半面を蔽った部分をぐいとひき剝いでいたのだが、食べおわるや、素早く、もとにもどし、眼ばかりとなった。

(これが……)

と、紅屋は思いあたった。

(忍びノ者か?)

噂には聞いている。

伊賀ノ国に魔性めいた忍びノ者が棲むという。江州甲賀ノ里にも、そのたぐいが棲むとか。

その賤(いや)しげな容子といい、ふるまいといい、それらの者にちがいない。

武将である松永弾正久秀は、手先に、飼っているのであろう。

(ものの用には立つかも知れへんが、こない連中に、身のまわりをうろうろされるのはかなわん)

よほど胆がふとくないと、出来るこっちゃない、と感心したり呆れたりした。

食べ終わってからも、凝っと、その場にうずくまっていた。

「どうじゃ、うまいか?」

久秀が聞く。

〈美味でございます〉

忍びノ者は平伏してこたえた。

声は久秀の背後の屛風のうしろから聞こえたような気がした。

「ほんとうに、うまいか」

〈ほんとうに、美味でござりました……〉
声は、天井から聞こえたようで、紅屋は思わず、天井をふり仰いだ。
それから、視線をもどしたとき忍者の姿は消えていた。
久秀には別段、奇異でもなかったようである。そういえば、忍者の名も呼ばなかった。が忽然とあらわれた。そして、忽然と消えている。
「馳走になろうか」
久秀ははじめて口に入れた。
(忍びノ者には、名が無いのやろか?)
紅屋は呆然としている。
松永弾正久秀は忍者の名を呼ばなかった。が、名がないはずはない。
わざと呼ばなかったのかもしれぬ。
(わしに隠すつもりでかいな)
豪放に見えるが、久秀はそつのない男だ。
卒爾ということがない。兎ノ毛で突いたほどの隙もない。
そちらに気をとられて、紅屋は久秀がなぜ忍者に蒸羊羹を食べさせたか、毒味をさせたのではないかということを考えるゆとりを失っていた。
忍びノ者を手足のように自由に使いこなせば、
(どないことでも出来るわな。たとえば、商売仇を殺すことも、店を焼くことも、船を沈めることも……あっ)
紅屋は思いだした。

「南蛮屋のことをお聞き及びでございますか」
「梵天丸が沈んだことか」
弾正久秀はうなずいた。表情は変わらなかったが、動揺は隠せない。
「——知っておる」
「ただの沈没ではございませぬ。播磨灘で爆発したという噂でございます」
「火薬が……」
多くは言わぬ。
が、紅屋の知るところでは、南蛮屋十兵衛は平戸から新式鉄砲を大量に買い込んでくることになっていた。
それが、弾正久秀の発注によるものであることも聞いている。
(百挺の鉄砲と玉薬が、わしの手から抜けた……)
漫然と買い入れようとしたのではない。
目的があった。
その目的も、
(暫くお預けだな)
久秀は思いきりがよい。
無理押しをしないのが、かれの特性であり、栄達の秘訣だった。
戦前にヨーロッパをふるえ上らせた、〝青髭〟という殺人鬼の話を記憶している方もいるだろう。
金持の未亡人と結婚しては次々と毒殺していったのだが、むやみに殺したのではない。

〈チャンスを待ったのさ〉

と、かれは捕まってから得々と手口を饒舌っている。

〈人間は生身だからね、いつか病気になる。ちょっとした風邪でいいのさ、その病気に乗じて、ちょいと毒を盛る。それだけさ〉

からだが弱ったときは、僅かの毒物でも利き目がある。

この、機会を待つ——慎重さが松永弾正の成功の綱をつかませたのだ。

名もない牢人者が、名門三好家に仕えてここまでのし上るには尋常一様の手段ではできない。

(あせらないことだ、人生は長いのだ)

久秀が、三好家で頭角をあらわしたときはすでに四十不惑に近かった。が、かれはあせらなかった。

機会を狙った。徐々に、無理のない行動と速度で、地位を固めてきた。

鉄砲百挺を入手し損ねた、とすれば、

(機会は、まだある……)

松永弾正は、いさぎよく計画を捨てた。

次の計画を練りはじめた。

(鉄砲は別の会合衆に頼めばよい。茜屋でも能登屋でも……)

その鉄砲だが——、

梵天丸が爆破炎上した日から二日後に、西ノ浜に陸上げされた荷物がある。

大きな木箱が五個で、菰包みされている。

「大事な品物やさけ、あんじょう扱うてや」

十人ほどの一団だったが、そんな口を利く女が主人らしく、まだ若いのに、男たちはへいへいと言いなりになっている。

女に命令されるとは、だらしない男たちのようだが、動作もてきぱきしているし、いずれも潮焼けの赤銅色の肌が逞しい。

借りたのは皮屋の納屋であった。

預り証の割符をしっかりおさめると、女は供を二人連れただけで辻でわかれた。

「では、伊予御前、わしらはここで」

「ああ、おまえら、へましたらあかんで」

あの餅売りの際や、八丁徳の前で見せた愛嬌はない。

が、これは美沙にちがいない。

多勢の海賊たちを顎で使うときは、愛嬌をふりまいてはおれないのであろう。

二人の男を連れた美沙は、堺の街を歩いてゆく。

「栄えとるわな、堺の街は」

一人が言った。雲つくばかりの背丈だが、横がなく、ひょろりとしている。

「なんぼでも栄えるがええわな、そっくり、こっちゃへ貰うだけやよって」

ずんぐりと背の低い方が、鉢のひらいた頭をふりたてて、にたにたしている。

背高の方が矢太、低い方が団六という。

いずれも村上水軍の流れを汲むこの一党の中では、気が利いた方だ。二人とも、おそろしく長い刀を横たえている。団六のほうは足が短いから、刀の鐺が地面を曳きずる。短い刀を差せばよいのに、長いやつを離したくないのか、鐺に車をつけている。

したがって、団六が歩いてゆくと、スルスルと車がまわって一条の線を引く。
「小袖を売る見世棚が、このあたりにあったはず」
と、美沙は辻に立って見まわした。
伊予御前と呼ばれているのは、村上水軍の名のある者の血をひいているのかもしれない。八丁徳の放った矢瓢箪を狙撃したり、餅売りに化けたりしたところは、生きのいい海の女だったが、南大小路町の呉服棚から出てきたときは、摺箔に金糸の縫いとりした豪奢な小袖に、水色の被衣をきた、身分ある上臈姫になりきっていた。
「――どこのお姫さまかと思うで」
「みんな振りかえりよるがな」
矢太と団六は、伊予御前の美沙のお供をして歩くのが嬉しくてたまらない様子だ。
堺の街すじは、当時の日本では京にまして美麗で、殷賑を誇っていた。
およそ二万人の人口を擁していたという。家数にして四、五千軒はあったらしい。
この時代よりずっと前の大永年間の記録では堺の北荘では、表二階を作ることを禁止していて、その十年ほど後には、二階屋が作られていたことが茶ノ湯の記録などでわかる。
堺の街の繁昌ぶりを記録したものは日本側にあまりなく、むしろ外人宣教師などの書翰に詳しい。
たとえば、永禄五年に耶蘇会士のビレラが書いたものに、
　日本全国堺の町より安全なる所なく、他の諸国に於て動乱あるも、此町にはかつて無く、敗者も勝者も、此町に来住すれば皆平和に生活し、諸人相和し他人に害を加うる者なし、市街に於てはかつて紛擾起こることなく……市街には悉く門ありて番人を附し、紛擾あれば直ちにこ

れを閉ず――。
と、市民による自衛手段の完備を描いている。
――町は甚だ堅固にして、西方は海を以て、又他の側は深き堀を以て囲まれ常に水充満せり。
博多や長崎なども一時そうした自由市の性格があったが、堀をめぐらして、
〝この堺の町には、それぞれの町に二つの門があって、夜になると閉じる習慣があり、門は番人によって吊錠で閉ざされた〟
とフロイスの日本史にあるほど厳重なものではない。
それだけ、〝堺と称する大きく且つ富裕なる町〟だったのだ。
街が繁昌すると、堀や木戸だけでは防ぎきれないから、武力も貯えるようになる。諸国から流れてくる牢人者の強壮な者を選んで私兵とした。
〝応仁兵乱の後、商人みな僭上して兵士の如く、大刀を帯び弓箭を握り軍役に従う〟
もとより自衛以外ではない。商人は戦さは好まない。金儲けが目的だ。
堺には当時、日本中の富の十分ノ一が集まっていたとさえいわれる。
南荘、北荘と二分する大小路には二階屋が立ち並び、呉服物を商う見世棚から、飾り物、道具類、薬種屋、魚屋、酒屋、それらのほかに、馬具屋、塗物師、皮屋、刀師、弓師、鎧師など、職人の忙しく働く姿があった。
往来の男女の服装も、よそよりも整っている。
だが、高価な小袖に帯、被衣をまとい化粧した伊予御前の美沙の姿は、きわだって美しい。
「見馴れん顔やが、あの衣裳といい尋常やない、三好さまのゆかりのお方とちゃうか」
往来の者は、目を見張った。

その視線を浴びながら、美沙の一行は政所へやってきた。
「どちらからお出でじゃ」
革袴の門番が、槍を握り直した。
美沙はにこりとした。槍などこわくない。が、淑やかで気高い姫御前になりきっているから、
「怪しいものではございませぬ。わたくしは、阿波の者」
「阿波の？」
「仔細あって、名乗れませぬが、政所の弾正さまに、さる品物を献上にまいった者。お取り次ぎ下されませ」
普通なら、こんなあいまいな訪問者は取り次がれないが、なにしろ、目のさめるような美貌だし、やんごとない風情だから、
（追い帰して、あとでお咎め喰うたら、わやや）
奏者番に注進に行った。
美沙が通されたのは、庭中の茶室である。
皮屋の武野紹鷗によって作られた茶室である。後世の千利休ほど〈わび〉てはいないが、禅茶の落ち着きはある。
暫く待たされた。
近くで、鹿おどしの音がしている。街中なのに、ここには眠いほどの静寂があった。
矢太と団六は供待ちにひき離されている。美沙はしかし、心細さなどない。ひとつの目的に立ちむかったときの、武者ぶるいにすら似たときめきを感じていた。
海賊は常に板子一枚下は地獄という覚悟ができている。

風炉では茶釜が音をたてていた。
美沙のために茶をふるまおうというのではなく、松永弾正は、これから、茶を飲もうとしているところだったのであろう。
やがて、弾正久秀があらわれた。
少しいざって平伏する美沙をじろりと見て、亭主の席に着くと、
「阿波から来たか」
と、はじめて、声をかけた。
「はじめて見る顔だな」
「はい、わたくし……」
「阿波の生まれか」
「………」
「ではあるまい。面立（おもだ）ちが、阿波とは違うな。そなたの顔は、どちらかといえば讃岐か、伊予……」
美沙はぎくりとして、と胸をつかれた。
「伊予だな」
断定的に言いきって、
「伊予の女が、阿波から来たとは。なにしに、わしをたばかる」
歯に衣（きぬ）着せぬ。ずけずけ言われて、美沙は用意してきた言葉を失った。
「あの……」
「なんだ」

容赦のない男である。〝弾正〟の官は借りものではない。秋霜烈日のきびしさだった。
「お許しを……」
と、美沙は白状してしまった。
「伊予と申しても、お逢い下さるまいゆえ、阿波と申せば、御引見かなえられようかと……」
「わかった。で、用は何じゃ」
弾正久秀は厚手の天目(てんもく)に茶を入れ、湯をそそぐと茶筅を動かしはじめた。
「あの、鉄砲を……」
おそるおそる美沙は言った。
〈鉄砲……〉
と聞いても、松永弾正久秀の表情には変わりがなかった。
素知らぬ顔で、茶筅を動かしている。
聞こえたのか聞こえないのか。こうした腹芸には馴れているのであろう。もっとも興味を惹く言葉には、もっとも無関心を装う。それが、取り引きの場合の、初歩的な反応だった。
武辺一点張りの戦国武将の中で弾正久秀の擡頭は、こうした商人の駆け引きにも通じていることにあった。
堺の繁栄ぶりと、それを支えた町衆の狡智。
ただ強いだけでは、天下をとれぬことを知悉した弾正久秀の深謀は、博識と人心収攬の巧妙さに基盤を置いている。
(南蛮屋が運んでくるはずだった鉄砲百挺……)
梵天丸の謎の爆破沈没で、播磨灘の藻屑と消えたところに、この妖艶な伊予の女の口から、

〈鉄砲を……〉
との言葉を聞いたのだ。
飛びつきたい思いを、さらさらと茶筅の動きにまぎらした。
その様子を美沙は凝っと見まもりながら、
「南蛮渡りの新式鉄砲が、百挺ございます」
「……」
「お買い上げ願おう思うて、堺へ持って参じました」
「百挺か」
「はい」
もしも弾正久秀の動作に、その心のゆらぎを見たとすれば、茶筅を動かすのが長すぎたことであろう。
その茶は、妖しく美しい客へ振舞うのではなかった。
弾正は女の話も、その存在さえ無視した態度で、ゆっくりとおのれの口へ運んでいる。
むろん招かれた客ではない。が目の前で、茶釜が松籟の音をたて茶を容(い)れているのを見ると咽喉がぐびりとなった。
当時の〝茶ノ湯〟は専ら公武庶人を問わず、男のたしなむものだった。
が、女でも、その作法はどうであれ、香ばしい苦みに咽喉をうるおすのは悪くはなかった。
もっとも、こうした気持になるのも、海賊たちを顎で使う伊予御前の男まさりの気性に由来するのかもしれない。
弾正久秀は、ゆっくりと茶を喫しおわると、どこにある？　と、ぼつりといった。

「その鉄砲百挺」
「堺に持ってきてございます」
と、そこは美沙も負けずにそらした。
「御用命ならば、四半刻のうちに運ばせましょうほどに」
食えぬやつだ、と、あらためて弾正久秀は美沙を見つめた。女も、たじろぎもせず、ただ見かえす。
豹の目だ、と思った。
「品物を見ねば、の」
「これに持参しました」
かたわらの、錦の袋からムスケット銃をひきだした。
（この女？……）
あやしむように、かれは女を見、鉄砲を見た。
（まさか、同じものでは？）
だが、偶然の符合というには、数が合いすぎている。時間的に見ても、合致しすぎる。
（梵天丸の鉄砲が百挺、この女の持参したのが百挺……）
どちらも南蛮渡りの新式ムスケット銃。
（沈没した梵天丸から、引き上げたのではないか？）
この疑念は当然だった。
だがこの鉄砲は水をくぐった様子はない。金具のところは、ぴかぴか光っているし、木の部分も新品の艶を見せて、火皿や火縄をはさむあたりにも、火薬の燃焼したあとがない。

この堺にも、鉄砲鍛冶がいる。橘屋又三郎が種子島にわたって製法を習って帰って以後、桜之町の芝辻清右衛門などがしきりに製造しているが、照準の狂いが多く、重すぎる。
「見事なものだ」
松永弾正は、持ち上げてみて、そのほどよい重さと、銃身の平衡度に一驚した。
「これと同じものが百挺あるのか、真に」
「ござりまする」
「一挺いかほどじゃ」
「まずお試し下されませ。その一挺は献上仕りまするほどに」
弾正久秀はしかし、軽率に発砲するようなことはしない。
「誰ぞに命じよう」
と、傍らへ置いた。
新銃の場合は危険がともなう。
内部に亀裂か気泡でもあると、炸裂して撃ち手を殺傷する。
「御懸念なら、わたくしが」
と、美沙は微笑んだ。
火薬も革袋に持参していたのである。
「そちが鉄砲操るのか」
「いささか」
「女だてらにの。腕前見よう」
火薬を詰めて、鉛玉をこめる。火縄に火を点じて仕掛ける。その順序も狂いなく、手つきも馴

れたものだった。
　茶室から出ると、美沙は鉄砲をかまえた。
　みごとな巨岩を配した庭である。美沙が狙ったのは、土佐の赤石の上に止まった一羽の雀だった。
　距離はおよそ二十間。
「あの雀を……」
　と、狙った。
　片膝を立てて、水平に鉄砲をかまえた美沙の姿は、艶めいたなかに凛々しさがあり、弾正久秀は呆れたような心持ちで見まもっている。
　撃った。
　轟然と火が吹いた。その一瞬に意外にも、雀に向かっていた筒口が、つと、あらぬ方へそれ、ぱっと雀が舞い立つのが見えた。
「御覧の通り、照準も狂いがありませぬ」
　濛々と硝煙が立ちこめたなかで、美沙がにこりと振りかえった。
「はて、命中せなんだではないか、雀は、あそこに……」
「いいえ、あたりました」
「たばかるな、雀は掠り傷もおわずに……」
「いいえ」
　と、爽やかに伊予御前の美沙は笑顔を消さず、
「命中しました。左の耳が吹っ飛んだはず」

「左の耳？……」
「はい、あの土塀から窺っていた男の左の耳」
　雀を狙うと見せて、その不審な男を撃ったのだ。
　松永弾正は、さすがに二ノ句がつげなかった。
（この女、ただ者ではない……）
　不審な男のことは問題ではなかった。
　あの忍びノ者に違いない。伊賀赤目ノ木鼠と呼ばれる男だ。
　弾正久秀の飼い犬として、身辺警護に見張っていたのであろう。美沙に見つかったのが、最初の失敗であり、その鉄砲玉を避けることが出来なかったのも、忍びノ者としては不覚。
（ワザが鈍ったか、彼奴……）
　所詮は飼い犬だ。役立たなくなれば捨てるだけであった。
　塀ぎわに行ってみると、血が点々としたたっている。
「あとを尾けましょうか」
　と、美沙は誇らしげに言った。
「仰せならば、わたくしの手ノ者に即刻……」
「その要はない」
　苦いものを含んだように、弾正久秀は言った。
「百挺そっくり購おうぞ」
「御代は？」
「引き替えにとらせる」

「では、明日運んでまいりまする。つきましては、御約定しるしを頂戴しとうございます」
「一札、書けとか」
「賜われば忝けのうございます」
若いくせに、ふてぶてしいほどの度胸のある女だ。
弾正久秀は、
(おれに似ているな)
と、すら感じた。
これほど、はっきりものを言う女を、かつて知らない。歯ごたえのある女に、むしろ好感すら抱いた。

矢太と団六を連れて、伊予御前の美沙が戻ってきたのは、市小路の木賃宿だった。
木賃宿で二階を借り切ったのは十一人もの多人数だからだ。
「うまくいったさかい、明日は大金を摑めるのや」
ゆるゆると手足をのばして、美沙は、ああ肩が凝った、と言った。
「容儀ぶるのは、えらいわ。ちっとの儲けでやれることやないねん」
「ほんでも、伊予御前のお姫さまぶりは、よかったでえ、抱きつきたいくらいやったわ」
「ド阿呆、甘えた口を利きよると指を詰めさすで」
「堪忍堪忍、冗談やがな」
「しゃァない、淫ら犬や。さっさと湯屋街の化粧首でん抱いて来いな」
男たちが追い出されてゆくのを、大屋根のうだつのかげから凝っと見おろしている眼があった。

頭に繃帯していて、左の耳のあたり、べっとりと血がこびりついている。

堺の人々は贅沢である。風呂屋が多い。蒸風呂もあれば、すい風呂もある。
湯屋町には垢すり女——湯女を置いて、これが、客の垢どころか、湯上りの酒の相手から、極楽へ誘う弁天になる。
ここの木賃宿にも、すい風呂があった。
裏の中庭に面して、簡単な囲いで、大きな桶が据えてある。へっついで沸かした湯をそそぐものである。
美沙は、野郎どもを湯屋町へ遊びにゆかせたあと、風呂に入った。
裸になっても革財布だけは離さない。丁銀豆板銀など銀銭と一緒に五梱の鉄砲箱の預かり証文——割符が入れてある。松永弾正の一札も入っている。
革財布の口をしめた紐は手くびに縛ってあるから、失いようはない。
(用心ぶかい女だ……)
伊賀の忍び、木鼠はそんな姿を、天窓の一角からのぞき見していた。
すんなりと伸びた四肢の美しさも、色づいた肌から匂いたつ甘やかな女の色香も、この目的にだけしか興味を示さない非情な忍びの目には魅力としてうつらないようであった。
(あの革財布を……)
如何にして手に入れるか。
目的はそこにあった。
強引に奪うのなら楽だ。が、それでは納屋のほうが押えられる。

（わしの耳をうち砕いた女……鉛玉一発が幾らにつくか、思い知らせてくれようぞ）
忍びの身にとって、五感はいのちにひとしい。闇を透す眼、匂いを嗅ぎわける鼻、遠くの音を聞きとる耳――五感、六感も、所詮はこの三つの感覚を基にしている。
左の耳は、外耳を完全にふっ飛ばされていた。
木鼠は、
〈弾正さま手飼いの身〉
として、看視していたにすぎない。
美沙が、それを〝怪しの者〟と見たのは誤りである。
が、忍びノ者は、役目に従っているとき、たとえ間違いであっても、生死の苦情はいえない立場にある。
常人の眼から〝忍ぶ〟のが特技の身では、それを見破られたことが、すでに敗北であった。
（あだをしてくれる）
木鼠はおもった。
陰湿な性格は、忍びノ者に共通している。さっぱりと男らしく敗北を認めるくらいなら、白日の下を歩く道を選ぶ。
女に、〝あだ〟をする道は二つ。
一つは女体を凌辱する。
いま一つは財を奪う。
その二つしかない。鉄砲を売り込みに来た女から、鉄砲を奪う。これくらい、利き目のある仕返しはない。

湯からあがった女は、肌を拭く間も、革財布の紐を口にくわえている。
（いまに見ろやい）
木鼠は指先をこすり合わせた。
男たちはまだ帰らない。
久しぶりの堺の女の肌にうつつをぬかしているのだろう。
海の上で、けもの染みた情欲をぎらつかせる男たちを、輩下として自由に動かすのは、かなり難しいことだった。
村上水軍の首領の血に対する畏敬の念も、この下剋上の世の中では、期待できない。
実力がものをいう。
（女とあなどったら、承知せえへんで）
そのためには、男まさりの行動が必要だった。非情にも残忍にもなった。
いまでは、
（むかしの美沙は死んだ、いま生きているのは……）
男なのだ、とすら、自分であきらめていた。
八丁徳を、女の武器である甘肌でとろかしはしても、身心ともに、情欲に溺れることはない。
初めから終いまで、すべては目的のためだった。
（そうでなければ……あんな！）
八丁徳のような男に、肌をなぶらせるものか。
ちょっとした手管（てくだ）に、うつつを抜かしている間に、鉄砲を運びだしたのだ。
海上での襲撃も小あたりして、相手が強い場合は、あとを尾行して、物売りに化けたり船頭に

扮したりして、隙を窺う。

鉄砲をすっかり盗んだあとで、火を仕掛けたのも、唐渡りの方法だった。

小桶の中に蠟燭を立て火をつけておく。蠟燭の長さで時間を調節するわけだが、燃えつきたとき、火が燃え移るように、木ッ端とか紙屑とかを詰めてある。場合によっては油をかけておく。

積荷の間に置かれた〝仕掛け火〟は、幸い発見されずに、梵天丸は播磨灘へ出たのだ。

美沙の一党にしてみれば、伊予灘で、数人のなかまが撃ち倒された復讐でもある。

梵天丸は計画通り爆発炎上して沈没したから、そっくり奪った新品の鉄砲を金に代えれば、海賊稼業は成功だった。

（しくじることはあらへん、弾正さまも一筆書いてくれはったし）

美沙はゆたかな気持だった。

一つには豪奢な小袖に被衣した自分の姿が、思ったよりも美しく、その恍惚感に陶酔できた。

長い間忘れていた、自分自身に出逢ったような〝女〟の感情の中に浸れそうだった。

木賃の二階の隅に屛風を立て回して、横になると、いつか眠りにおちた。

何か花の香でも嗅いでいるような妖しい匂いが屛風のうちに漂っていたのを思いだしたのは、翌日、かなり陽が高くなってからである。

（寝すごした！　あたしとしたことが、一体どないしたのやろ）

美沙は革財布の中身がそっくり無くなっているのに気がついて、はっとなった。まさかと疑いながらも、すぐに矢太を浜辺の納屋に走らしたが、もはや鉄砲百挺の木箱は誰ともしれぬ者に運び去られた後だった。

唐人蔵

城之介がその鉄砲のことを聞いたのは、堺の浜へ上陸した直後であった。

正直なところ、城之介にとって鉄砲百挺の盗難紛失は、

（いったい、誰が、どんな方法でやったのか？）

という、驚きをともなった興味を出なかったし、梵天丸を爆破され、夕月とともに波間に漂ってからは、

（死ねぬ……）

ただ、生きることを考えた。

波浪ははげしかったが、五島沖でも度々波浪と闘ったことがある城之介だ。

水練には自信があった。が、夕月という足手まといがいる。

鉄砲のことなど考えるゆとりはない。溺れかける夕月をはげましはげまし、やっと淡路の近くまで泳いで、漁師に救けられたのだ。

梵天丸の乗り組みたちも、海には馴れていただろうが、運の悪い者は爆発の際、負傷している。

目の前で悲鳴を残して、沈んでゆくのを何人も見た。南蛮屋十兵衛も八丁徳も、波間に見かけ

たように思ったが定かではない。
淡路の小さな漁村に救われたのは城之介と夕月しかいなかったか、消息の知りようはない。
(ともあれ、堺にゆけばよい……)
南蛮屋を訊ねてゆけばよい。そう思った。
「十兵衛どのは、殺しても死ぬような男じゃないからな」
「ええ、きっと、堺に……」
そういう夕月の気持は、かなり複雑なものがあったようだ。
京へ帰れるかもしれない。堺のある和泉と山城のくには九州から見れば、隣りのようなものだから――その希望が、南蛮屋十兵衛の身請け話に乗らせたのだ。
心から、十兵衛に惚れてのことではない。
むしろ、城之介と波間に漂っている間、ある満足感さえ感じていた。
(二人で死ぬのなら……)
水を呑んで苦しくなったときはそう思った。
(城之介さまとなら、いっそうれしい……)
客の選り好みは許されない娼婦の夕月が、はじめて心をひらいた男である。
運命へのあきらめは早い。
だが、二人の力が尽きかけたとき、漁船が漕ぎ寄せてきたのだ。
こうして助かってみると、人間は贅沢なもので、
(いつまでも、城之介さまと一緒にいたい……)
と、欲が出てくる。

(このまま、京へ逃げようかしら……南蛮屋さんには悪いけれど)
そんな気も起こった。
(身請けの金は、後で、なんとかして払えば)
堺の街の灯が段々近づいてくると、口数が少なくなった夕月の気持がわかるのか、城之介もさっきから口をつぐんでいる。
(一緒に逃げようと言ってくれさえすれば……)
すがるように城之介を見上げたとき、浜辺で火を焚き、何やら騒いでいる一団が見えた。
堺の浜である。
もう夜は更けている。親切な淡路の漁師が、
「堺は逃げやへんで、明日の朝にしたらええやないか」
と、言ってくれたが、一刻も早く南蛮屋の安否を知りたかった。
梵天丸が難破してから、二日目になる。爆破のショックと波浪に弄ばれた疲れで、夕月はまる一日寝込んでしまったのである。
まだ、面やつれしているのが、夜の海の上で、白い花が咲いたように、妖しく浮きあがっている。
(城之介さまには、あたしの気持がわからない……)
それが哀しかった。
わからないのではない。城之介も辛い。ただ、かれの若さと、そして淡泊な気性が、いさぎよく思い切っていることだ。
(泥棒猫のような真似は、おれにはできない)

ある意味で、南蛮屋十兵衛は恩人なのだ。
生死の定かでないのをよいことに、夕月の肌を盗むようなことはできない。夕月の身が、大金で買いとられているだけに、愛しあっているという事実も、かえって力を失ってしまう。
南蛮屋に行くことが、恐ろしいことのように思えてきたとき、小舟は浜へ着いた。
干船や破船の間に網が干してあったり、貿易の港と漁港との渾然としたままの浜辺である。
その焚火も——、
漁師たちが、酒盛りでもしているように見えた。
七、八人の男たちが、焚火をかこんで車座になり、夜の更けゆくのも知らぬげに、酒をあおり、歌をうたい、なかには踊っている影もある。
「——はァ、儲かったァ、儲かったァ」
と、手拍子うってはやしながら濁み声をはりあげているのが、聞こえた。
城之介が、ふと足をとめたのはその即興的らしい歌詞のなかに、
〝鉄砲〟
という語が聞こえたからである。

〽はァ、儲かったァ、はァ、儲かったァ
　鉄砲運んで儲かったァ
　一挺一貫
　百挺百貫
　儲かったァ儲かったァ

（あいつらの言っていることは、鉄砲百挺……百挺という数ではぴったりだが）

夕月に目くばせして、傍らへ寄っていった。
その人々は、浜辺なので漁師だと思ったがそうではないらしい。
服装はこんな時代だから、それぞれ雑多で、腰きり布子の者もいれば、ぞろりと長い厚司をきた者もいる。刀を差した者もいるし町人らしい男、牢人らしい男、みんな酒気を発して、そのおもてが火明りに、真っ赤に見える。
「——ちょっと聞きたい」
城之介は近づいた。
「鉄砲百挺を運んだとは、どこへ運んだのだ？」
手近の一人に聞いた。無精髭の顔がふりむいた。酔っている。言葉をかけられてふりむいたのだが、意味がわからなかったらしい。とろんとした眼で、
「はァ、儲かったがな、重かったがな」
と、男は歯ぐきを剝きだして笑った。
「ほうれ、鉄砲百挺、重かったァ重かったァ、肩の骨が折れたそやでェ、もちっと貰わにゃ、ひきあわんでェ……」
「その百挺だ」
と、城之介は、隣りの男へ言った。
「その鉄砲の持ち主は誰なのだ。知っているなら、名前を……」
「なんやて？」
「教えてくれ、鉄砲の持ち主だ」
「はァ、鉄砲、なにするのや、おまえ、鉄砲持っちょるやないけ」

みんなげらげら笑いだした。城之介により添った夕月が、酔眼を惹いたらしい。
「男の鉄砲は一つありゃ、二つといらんやないか」
「ほんま。タマは二つあらへんと」
またげらげら笑っている。
城之介はいらだった。大人たちの好色的な軽口を受け流すには若すぎた。
夕月の妖しい美しさに酔って開放的になった男たちは野卑な好奇心をわかせているのだろう。
「おぬしたちは、誰に雇われているのだ」
と、質問を変えてみた。
「へ？　誰やて？　阿呆かいな」
肩を怒らしたやつもいる。
「わしらは天下の牢人や、御主なぞいるかいな」
「天上天下唯我独尊や」
「せやけど、銭稼ぎはするわな」
「銭さえくれりゃ、人殺しも盗みも、仰せのままや」
どうも大変な連中だ。
いよいよ城之介は百挺の鉄砲が梵天丸から盗まれたものに違いないと思った。
「銭さえ貰やァ、どこからどこへ運ぼうと、へへっ、勝手やさかい安々とは、教えへんで」
「そやそや、聞きたいんなら、銭コ出しなはれ」
「銭コ出しよったら、なんでん教えるがな、茜屋の後家が色好きで、能登屋の娘がかわらけで」
何しろ酔っているから始末に悪い。

「わたしは、一文も持たぬ」
「ほなら、あきらめ」
「だが、知りたい……」
「ほなら、銭コの代わりに、その女ゴでん好えで、抱かせりゃ、教えるがな」
夕月は、思わず、城之介の背にかくれた。
男は軽く言ったつもりだろうが、酔いは理性を痺らせているし、どだい分別など無い連中だ。
「ええ考えや、勘十だけひとり占めはあかんで、わしらもお相伴や」
盃を捨てて、みんな立ち上った。
「なにをする」
「教えたる。安いもんや、減るもんやないさかい」
焚火の明りに地獄の赤鬼のように見えた。城之介は刀に手をかけた。暗い浜辺には、他に人影もない。勝手知らぬ街だ。斬りぬけるしかない——。
初めての土地というのは、それだけで心理的に不安がある。
その上、夜なのだ。えたいの知れぬ牢人野伏せりたち——強盗強姦火つけなど、悪事なら何でもやりかねない連中たち七、八人が、悪酔いした上に、数を頼んで夕月に襲いかかろうとしている。
「何をする。わたしはただ鉄砲のことを知りたいだけだ。誰が百挺もの鉄砲を、どこへ……」
「せやさかい、教えたるがな」
片目がただれたように、赤むけた男が、鯉口をきったり、おさめたり、ぱちぱち鍔音させながら、

「その女ゴ、抱かせてくれりゃ、教えたるでェ」
「無茶をいうな」
いざとなったら、斬るしかない。城之介は、夕月をかばい、手は刀にかけたまま、油断なくじりじりと退りながら、
「教えてくれれば、礼はする」
一せいにみんな笑った。
「阿呆。いま一文なしや言うたばかりやないか」
「そや、そや、一文なしで何で礼ができるのや、その女ゴの肌なら勘忍したる」
一度にこの連中が飛びかかってきたら城之介も自信がない。一人ならば、なんとしてでも斬りぬけられるかもしれないが、夕月をかばって闘うには。
「わたしは嘘は吐かぬ」
と、城之介はみんなを見まわしてはっきりと言った。
「その鉄砲は、おそらく、梵天丸から奪われたものと思うのだ」
「梵天丸やて?」
「だから、事情がわかれば、南蛮屋から、礼銀が出る」
「ほんまか」
急に、みんなの態度が変わった。
南蛮屋の名前は知らぬ者はないという。この無頼の者たちが態度を変えたことで、堺の会合衆のなかでも、知られた存在だということがはっきりした。
「あれは南蛮屋のものかいな」

「ほなら、あないところに……」
言いかけた男が、急に声をつまらせると、棒立ちになった。
「く、苦しい！……」
咽喉をかきむしるように、手を這わせて、がくっとえびなりになり、二、三歩たたらを踏んで砂の上に崩れおれた。
「どないしたンや……あっ、わいも、咽喉が……」
その男だけではなかった。
まるで、次々に物ノ怪にでも襲われたように、みんな苦しみはじめたのだ。
あんなに景気よく、楽しげであったのが、一変して地獄図絵に変わったように、苦悶の絶叫を噴き、怒号して、七転八倒、砂の上をもがきまわった。
「毒だ、毒をのまされたのだ」
苦悶はただちに死をもたらしている。血を吐き、四肢をふるわして次々と息絶えてゆく。城之介ははっと我にかえって、残った男を抱きおこした。
「おい、鉄砲はどこへ運んだ、どこだ、どこにある……」
断末魔のけいれんのなかで、唇が動いた。何か言った。よく聞きとれない——。
「なんといった？」
声はよく聞きとれなかった。
血を噴いて、はげしく咳きこみ、ふるえる唇が、何か、言葉を洩らしたが、意味をなさぬ言葉に聞こえたのである。
「と、とう……」

語尾は低く消えるように、
「とうじん……」
それっきり絶えている。
「とうじん？　なんだ、とうじん、とは、何だ、おい！」
はげしく揺すったが、もう一声もない。あわててほかの者も見まわした。みんな血を吐いて苦悶の形相すさまじく、悶絶している。
「毒だ、毒酒を呑まされたのだ」
ほかに考えられぬ。
八人とも、ぜんぶ同じような死にざまだということが、それを証明している。
「せっかく聞きだそうとしたのにわけのわからぬ言葉では」
城之介が呆然となっていると、
「とうじん……唐人ではないやろか」
と、つぶやくように夕月が言った。
「平戸にも唐人街があったけど、この堺には……」
「あの唐人か？」
男の最後の言葉は、唐人――唐人に渡したというのだろうか。
考えられないことではなかった。
唐土(明国)に比べて鉄砲は本朝のほうが流布している。日本鍛冶の作る鉄砲は、南蛮物より数段劣るが、隣邦よりは優秀なので、向こうで輸入するというほどだ。
(唐人といっても、この街には多勢いるだろうに)

どうやって探すか。
ともあれ、南蛮屋をたずねて、十兵衛の安否を知ってからだ。十兵衛が戻っていさえすれば、話は早い。
城之介は夕月を促して歩きだした。
これだけの毒殺の惨状が、目のあたり行われても、城之介は感情を苛まれるようなことはない。こうしたことには無感動になっていた。人間の死を、一々哀しんだり歎いたりしていたら、生きてゆけない時代であった。
この名も知れぬ連中が八人も目の前で死んでも、単にその場へ来あわせただけの関わり合いでしかない。鉄砲百挺の手がかりがつかめただけでも、むしろ、幸運というべきだ。
だが、幸運だったろうか。
十歩とゆかないうちに、南の方から松明の火が幾つも走ってきた。
「やや、ほんまや」
「死んでけつかる、ひィふゥみィ……八人もや」
「あ、あやしい奴が」
城之介のどこが怪しかったのか、排他的な自治体が、見馴れぬ者を警戒するのは、今も昔も変わらない。
ばらばらと数人の影がとりまいた。
「うぬやな、あん者どもを殺しよったのは」
一人が嚙みつくように怒鳴った。
「袖に血がついとるやないか、それが何よりの証拠や」

「誤解だ」
　城之介は叫んだ。
「おれが殺したんじゃない」
「そう、誤解どっせ、うちらやないよってに」
　夕月もびくびくしてはいられない。城之介の袖をしっかり握っていたが、むきになって抗議した。
　が、目の前に八人もの苦悶の死体があり、その血が——抱きおこしたとき、ついたのだが——袖に附着しているのだから、これは疑われてもしかたがなかった。
　城之介は、刀に手をかけて、
「この者たちを、おれは知らぬ。殺す理由はない」
「銭を盗るためやろ」
「おれは一文も持たぬ。調べてみるがいい」
「さァて。そいつらを殺したところへ、わてらが来たよって、盗らなんだのやろ」
「そんな……」
と、夕月は涙ぐんで、
「あんまりや、つい、いまさっき淡路から、着いたばかりやし、そないなこと……」
「言いたいことあったら、出るところへ出て、言うたらええわい」
　刀を抜くひまはなかった。数人が一度に左右から腕をおさえた。
　こうなったらしかたはない。死んだ無頼者たちと違って、ともかくこの町の治安にたずさわる連中だ。事情さえわかれば疑いを解いてくれるだろう。

　そう思って城之介はおとなしくその〝出るところへ出る〟ことにした。
「逃げはせぬ、放せ」
「何いうてけつかるねん、放したら盗ッ人鳶ひゅうーひょろ、や」
　そこらの漁船のとも綱で縛り上げようとする。そんなもので手を縛られてはたまらない。皮が剝けてしまう。
「信じてくれ、おれは何もしていない、よって、この刀も渡す」
「当たりまえや」
　だが、なかには、幾らか城之介の態度に悪びれぬものを感じたように、
「あない言うちょるのや、縛らんでもええやないか」
と、とりなす者もあった。
　夕月もこうなったら、覚悟をきめるしかない。男たちの手が、故意に襟や帯にかかるのを払いのけて、
「どこか知らへんけど、ゆきましょ」
と、城之介の傍らに身をよせた。
　連れてゆかれたのは、町衆の会所のようなところだった。頑丈な格子のはまった牢屋が設けてあるのには驚いた。
「さァ、ここへ入りさらせ」
　突き飛ばされた。
「手荒なことをするな。南蛮屋へ問い合わせてくれればわかるのだ。十兵衛どのと梵天丸に乗ってきた者だ」

城之介たちが会所へ連れこまれるのを見送っていた影がある。浜辺でも破船のかげから、一部始終を見まもっていたのだ。

その男は闇の中で、声のない笑いを洩らして歩きだした。いうまでもなく、松永弾正に使われていた忍者〝木鼠〟であった。

堺の自治体は、私兵を抱えてさながら城下のような警備を怠りない。

〝怪しい〟というだけで、かれらは目を光らせるし、いわんや〝強盗〟と聞けば、おっとり刀で飛びだす。

浜辺で毒殺された八人の死体とそこに呆然としていた他所者と条件がそろっていれば牢に投げこまれるのも仕方はない。

忍者〈木鼠〉の素振りは、かれが密告者にほかならないことを物語っている。

鉄砲百挺を盗み出したかれは、あの無頼者たちを、少額の金で釣って、どこかへ運ばせたのだ。

毒殺はむろん、予定の行為だったろう。

城之介と夕月の不運は、その場へ行きあわせたことである。

（――なあに、南蛮屋へ問いさえすれば、すぐに身の証が立つはずだ）

城之介はそう信じた。信じたかった。夕月をこれ以上、心配させたくない。

「南蛮屋を知っているだろう、調べてくれ」

牢格子につかまって再三叫ぶのを、

「うるさい奴っちゃ、もう、とっくに走っとるさかいに」

「そうか、それなら安心だ。十兵衛どのさえ来てくれれば」

「親方に言って、ひどい目にあわせてやるよってに、いまのうちに詫びたが利口どすえ」

と、夕月も牢番を眇（すが）めた。

眇めたほうが、艶になる。美貌は得なものだ。

だが、その艶めいた表情も、冷水を浴びせられたように蒼ざめてしまったのは、四半刻と経たぬうちだった。

「――なんや、こん奴ら？」

見知らぬ男が、町衆に案内されてくると、のぞきこんだ。

額の狭い、単純そうな顔をした男だ。

「見たことあらへん」

南蛮屋の手代だという。

「そうだ、まだ逢ったことはない、いま堺に着いたばかりなのだ。おれたちは十兵衛どのの計らいで、平戸から梵天丸に乗ってきた」

「ふうん、梵天丸は沈んだがな」

うそつきめ、という顔だ。

「汝らだけ、救かったというのかいな」

「そうだ、おれは五島の者だから泳ぎは巧みだ」

「てまえで、巧みだちゅうことに、巧みなもンは居らへんで」

「この女を助けての泳ぎだから、容易ではなかった」

「……」

「運がよかった。渦のほうへ流されなかった、それに漁師に助けられたのだ」

そこまで言っても、まだ信じない。

獅子っ鼻のさきにうす笑いを漂わせて、
「ほんで、助け上げられたちゅうのかいな、ほかに誰一人、生き戻っとらんのやで」
「聞いてくれ、淡路の漁師が知っている！」
城之介は絶叫した。
その南蛮屋の手代にしてみれば頭から信じないのだから、
（わざわざ淡路へ問い合わせるなど小面倒なこっちゃ）
第一、〝淡路の漁師〟と抽象的なことを言っても、探すのは大変だ。
見たこともない男女が、
（死のうと生きようと、知ったことかいな）
である。
乱世にひとり繁栄をむさぼる堺の大商人の気持はそんなものだ。
城之介は去ろうとする南蛮屋の手代を呼びとめた。
「待ってくれ」
「なんじゃい」
「名前を聞いておきたい」
「ふうん、聞いてどうする。朝晩お線香立てて拝むのかいな、わいは南蛮屋の万兵衛や、地獄への土産にさらせ」
肩をゆすって出てゆく。
牢番や町衆は顔を合わせて、
「これで決まったようなものや」

「――久しぶりの観物やな」
「――楽しみやな……」
なんの話なのか。
城之介は叫び疲れたように、がっくりしてしまった。
激浪を泳ぎぬいたときの疲れが一時に出たように、夕月も、もう言葉がない。
「こんなところにくるのじゃなかった……」
やがて城之介が、思いだしたように言った。
「堺の奴らは、みんな鬼に見えるなあ。あいつら、おれたちの生胆でも抜きとる気じゃないか」
夕月の気をひきたてようとしてわざとおどけた調子で言ったが、夕月は乗ってこない。
「どないなるのやろ……」
「望みがないな、牢を破るしか」
だが、木口もがっちりしたものを使い、容易に破れそうもない。何しろ、商人たちは金があるから細木や薄板で間に合わせるようなことはしない。
「いっそ死ぬのなら……」
夕月はにじり寄ってきた。仄暗いなかで、むっと女の匂いが、城之介の情感を呼びさまそうとする。
「夕月」
思わず、城之介も、女の肩を抱き、引きよせた。
ああ、とせつない声を洩らして女体が胸に崩れてきた。かっと五体の血が漲り、力が満ちて、
城之介は抱きしめた。

はげしく頬ずりし、唇を寄せあったとき、
「——そのへんで、やめとき」
すぐ傍で、声がした。
二人は、あっと飛び離れている。まさか、そんな近くに、人がいようとは思わなかったのである。
牢の中は暗かっただけでなく、奥の壁際が、はげしい屋根の勾配で（建物の都合でそうなっていたのであろうか）その隅に、誰かが寝ていたのだ。はじめ寝具としての蓆が丸められているとしか思わなかったのだが、それは人間だったのである。
「傍でええことされたら、たまらんがな。ちっとは遠慮しいな」
突然、暗やみから声をかけられて、飛び離れた二人だったが、蓆の中から顔がのぞいているのに二重にびっくりして、夕月はまた城之介にすがりついている。
「なんだ、おまえは」
と、城之介は夕月を片手抱きにしたまま眼を凝らした。
「なんやて？　わいは人間やないか、藁ヅトやないで」
「いや、何をしているんだ、なんで、そんなところにいる」
「阿呆陀羅（あほんだら）言わんときぃな、誰が好きで、こないところにいるかい、おまえらと、一緒や」
「ああそうか」
ここは牢屋だ。この男も何か悪事をしたか、その容疑かで、叩きこまれたのだろう。
それにしても、帯でぐるぐる巻きにされて、荒縄で首や胴や足もとなど、四、五カ所も、固く縛ってある。

藁苞（わらづと）ともいい、帯ぐるみ、簀巻（すま）き、ともいう。
「なんや、へんなこと感心せんでホドいてや、昨日から動けへんで、手も足も痺れて、かなわんわ」
蓆から上半面出ている顔が、奇妙に白い。
十六、七か、若い感じだ。
夕月は、まだ恐がっていたが、城之介は、固く縛った縄を解いてやった。蓆の下も、膝のあたりと、腕を縛られていた。
「やれやれ、ひでェ目に逢うたでェ」
身を起こしたのを見ると、ひょろりと痩せている。額がやけに目立って広い。そのくせげっそり痩せて両頬を削いだように、顎がとがっている。そのうえに奥眼だ。鼠のような眼がきょろきょろしている。
「城之介はん言うたな、わいは弥九郎や。そっちゃは夕月、美い女や、一目で惚れてん」
ずけずけと言うのだが、線が細いから憎めない。
城之介の頸飾りを見て、
「あれ、おまはん、吉利支丹かいな、そのロザリオでわかるよってに」
「わいのおやじもそうや、せやけどわいは違うで、吉利支丹やあらへん、そやかて一向宗でも禅宗でもない、そない抹香臭いもん、ねっから好かんねん」
「おれも吉利支丹というわけではないのだが」
「ソラ話がわかる。おやじときたら、デウス（天主）の教えとかで酒と女をやめて、聖人になれちゅうのやで、アホくさ……」

大酒飲んで暴れて、菰巻きにされたというのだ。こんなことは一度や二度ではないという。
「性悪のおやじ持ったら、かなわんわ。おのれが息子を、こない牢にほうりこませて、懲らしめや言いよるねん」
おかしな男と同囚になったものだ。どう見ても十七、八にしか見えないが、妙に大人びた口をきく。
「さっき、堺の悪口を言いよったがな、あれは、ほんまや」
「済まぬ、つい……」
「なに、ほんまや。おまえ、明日は、首が飛ぶでェ」
首が飛ぶ——。
おどかしではない。町衆の態度はそれを意味していた。自治体というものは、内の結束があるだけに、排他的であり、非情なのだ。
濠をめぐらして、木戸を設けているのも、内と外との厳然たる区別であり、町の為にならぬような存在は容赦なく、始末してしまう。
「うつらうつらに、話はおよそ聞いたによって、濡れ衣やいうことは、わいにはわかるけどな、石頭どもには、ようわからんやろ」
「打ち首か……」
「そや」
あっさりという。
「打ち首、はたもの（磔刑）、火焙り、鋸引き、牛裂き……なんでん好きな連中や」
「……」

「つまりやな、わいみたいに好きなことをせえへんので、そない酷いことを見て喜ぶんや、嫌な女房に頭押えられて、好きな女もよう抱かん、好きな酒もよう飲まん、好きな博奕もようせん……こない連中は、処刑（しおき）が好きで戦さ好き、つまりやな、狂人やな、哀れなこっちゃ」
大酒喰って、簀巻きにされるほうが、まだしも正常だというのらしい。
「——助かる道はないか」
「ないことはない」
弥九郎は無造作に言った。
「会合衆の誰かが請け人になるのやな……」
「そのほかは？」
「あらへん、地獄へ一本道や」
南蛮屋十兵衛が死んだなら、ほかには会合衆に知り人はない。二人とも絶望に閉ざされたとき、
「ある」
「政所に駆けこむのやな」
弥九郎は手を打った。
それしかない、となれば実行に移すしかない。
「せやけど、土産がないとあかんねん、おまえ鉄砲百挺がどうとかちゅう話やったが、その場所知ってんのかいな」
「うむ、まあな……」
よくは知らぬ。断末魔の苦悶の中で遺した男の言葉は、
〝とうじん〟

それだけだ。

「知ってりゃ、ええ土産になる。この堺ではな、実利のないことは、どないことでもあかんのや、儲け、儲けだけやねん」

三人が脱牢したのは、夜が明けぬうちである。

夕月が小用を申し出たのが、第一の手段だった。女のこればかりは意地悪な牢番でも拒めない。

「仕様がない、女だけや、女だけやで」

睨みつけて鍵をあける。夕月が先へ出る——とたんに、弥九郎が飛びだし、城之介も躍り出た。

「あ、何さらす」

その顔を束ねた縄で打ちのめした。のけぞるやつの腰から、刀を抜きとるや、詰所へ。転瞬の早さである。物音に驚いて飛び出してきた二人を峰打ちで薙ぎ伏せた。暁闇の街へ走り出す前に、城之介は、おのれの刀を取り戻すことを忘れなかった。

松永弾正久秀は、この時刻、すでに起床している。

健康に留意しているかれは、朝が早い。暁闇のうちに床を蹴って、冷水をかぶる。前にも述べたように、ひとつ事に凝る男である。いかに厳寒でも、欠かしたことはない。起きぬけの冷水は、身心を爽やかにし、思考力を明晰にする。どんなことでも、生ぬるいことが嫌いな弾正久秀であった。

さっぱりしたところで、弓を引くか、槍づかいするか、馬に乗る。

城に在るときは、城下をひとめぐりする。

これには、城下の街すじの様子や、季節による天候の相違などとの関連性を、いつも把握しているという、効果がある。

民政をおろそかにしては、大名としての地盤にひびが入ることを充分心得ていた。こうした心映えは、当時めずらしいといわねばならない。

名誉ある武者の槍合わせ、名乗りをあげての一騎討ち、を主眼とした源平のころの士風は、もはや廃（すた）れかけている。

そうした〝名誉〟を第一義としたゆとりを失ってきたのが、応仁以来の兵乱である。乱世とは、すでに、その心情の美しさが失われたことを意味する。

大名も農民も、上臈娘も娼婦も六十余州の人間が、すべて物欲に狂奔している。

生きるためには、人間の誇りを捨て、野獣化しなければならない時代だった。

武士は如何にして出世しようかと焦り、〝名誉〟や〝信義礼節〟の残滓との相剋に悩んだ。

早くその鎖を断ち切った者が、乱世の勝利者ともいえた。

武田信玄に上杉謙信が、敵でありながら塩を送った美談は、謙信の持つ〝誇り〟であり、そのゆえに、かれは天下の覇者たり得なかった。

乱世にあっては、そうした美徳は、

〝弱さ〟

でしかなかったのである。

素姓も知れぬ一介の牢人上りの松永久秀が細川管領の三好家の中で、のし上り、大名となり、今では、三好一族を支配する勢いを示しているのも、士風や美徳を、憫笑するだけの、

〝強さ〟

を持っているからだった。

強い、ことが正義とされる時代である以上、たしかに美を尊重することは、退歩であることを

免れない。

細川家といい三好家といい、伝統ある名家であり、名家の美しさも弱さも持ち合わせたところに、松永久秀の強さが擡頭できる素地があった。

その強さは、地虫の強さであり、おのれの成功に鑑みて、かれは土民の底力を識っている。民政をおろそかにしないのはそのためであった。

個人の戦さから、集団の戦闘に移行している乱世には、その主力は足軽と総称される部隊にある。その大半は農民であり、町衆であり、浮浪の徒であった。

「申し上げます」

宿直の者が来たとき、松永弾正久秀は、井戸水を浴びていた。

一片の贅肉も許さぬ、全身これ針金を入れたような、筋骨質である。冷水が肩にあたり砕けて、暁闇の中に飛散し、背中や胸に滝つ瀬となって流れる。

むろん下帯はしめている。数本の小柄を忍ばせているのは、武辺のたしなみである。

数回水をかぶるうちに、肌はかっかっとほてってくる。これを荒布でごしごしこする。下帯をとりかえるのは、下着を着てからだ。

「なに、薬屋の伜が来たと？」

ぎろりとした感じで、久秀はふりかえった。

「あの極道者が、何しに……」

「同じ年ごろの男女を伴のうておりまする」

「若い女だな……」

聞きかえしたのは興味を起こしたらしい。

「待たせておけ」

ゆっくりと着物を着ながら、弾正久秀は、薬屋の小伜が……と呟いた。

(何をしに来おったか、かように早くから)

小西弥九郎。

ちょっと名からうける感じが、うすあばたの蒼白く痩せた若者にふさわしくない。が、しかたはない。この名前は、代々、小西家で世襲的に名乗っている。

もともと小西一族はこの堺では隠然たる勢力があった。天文初年のころの資料などでも、石山本願寺が堺の坊を建てるとき、小西宗左衛門が寄進調達したので、本願寺の証如が感謝した記録があり、渡唐船のことなどについて、南北十人衆の代表となったり、その家産と勢力がおよそ推測できる。

天文の末から天正へかけての小西一族のうちの筆頭人はルイス・フロイスをして、

〃さながら王侯の如き〃

と、豪奢な生活ぶりに驚歎させた小西隆佐である。

隆佐も若年には弥九郎と名乗っていたことが茶人津田宗及の茶会の記録などでもわかるが、この城之介と脱牢した弥九郎は、隆佐の子となっているだけで、実の子ではない。

が、後に豊臣秀吉に寵愛され、五奉行の一人となり、熊本宇土の城主として大国を領し、さらに石田三成と組んで、徳川家康を相手に、いわゆる関ヶ原合戦を挑んだほどの男だ。素地は充分に幼時に見えたにちがいない。

戦国時代の強いばかりで無能な武将の多いなかに、小西摂津守行長が、経済観念にたけ、朝鮮出兵のときはおびただしい大軍の軍備糧食その他配船などに采配をふるったことから見ても、計

数的な能力のあったことは疑いない。

隆佐が見込んで養子にしたらしい。諸般の事情から、そう思われるふしがある。

こうした大家族主義にあっては一族の中の優秀な子を、家長の後継ぎにすることはよくあることだ。

ところが、この才子、目から鼻へ抜けすぎた——。

才子、才に溺れるという。

十で神童、十五で天才、二十歳すぎれば、タダの人——などともいうが、案外、これが真を衝いている。

幼児の神童性というものも、磨き訓育しないと、凡人になってしまう。

幼年に甘やかされた記憶と自信が逆作用して、長じるほどに凡庸のおのれに劣等感をおぼえることが強く、しばしば、自殺に走ってしまうケースが多い。

小西弥九郎は少し違う。

おのれの才への自信は過剰なほどだった。が、ひねくれて放埒に身をもち崩したのは、生まれがいやしいためだ。

母は一族の小西橘左衛門の妾で、弥九郎は生まれると間もなく、養子にやられた。岡山の商人魚屋某のもとで、幼時を過ごした。

ところが数年で、橘左衛門の妻が死に、母が後妻におさまったので、呼び戻された。この幸福は二、三年しかない。母は安心したかのように、はやり病いでぽっくりと逝った。

物心つくとから、こんな複雑な家族関係のもとに育ったのだから、精神が屈折の多い、意固地なものになるのも無理はない。なまじの頭のよさが、真摯な気持をなくしてしまうのだ。

小西隆佐の嗣子になってから小遣いに不自由しなくなると、一層、遊びがはげしくなった。

実父の橘左衛門も薬種屋として分限者だし、母の死後、三度目の妻になった女が気がよくて、小遣いはくれるし、条件はそろいすぎている。

酒と女——その酒も乱酔する。酒乱になる者は、気の弱さを日ごろ隠しているのが露呈するのだといわれるが、小西弥九郎はたしかに頭はよいが、そして金に不自由はしないだけで、風采はあがらないし、腕力がない。

つまり、男らしいところが、自他ともに欠けている。その劣等感が、酔うと出るのだ。

暴れ出したら手がつけられない。

「しゃァないわな、そないときはこらしめや、一晩牢にぶちこんどくがええ」

小西隆佐がそういうのだ。町衆たちも、やとわれた番人たちも、だから遠慮なく、弥九郎が悪酔いして、眼がすわってくると、蓆と荒縄持って待機するということになる。

そんな弥九郎の評判は、むろん松永弾正久秀の耳に入っていたのである。

(何しに来たか?)

久秀もひとかどの男だ。

世間の常識的な眼のようには弥九郎を見ていない。

(使いようによっては、切れる奴なのだが……)

仕度を整えて久秀はおりていった。

三人は待っていた。

庭先に膝をついていた三人は久秀が大股に歩いてきたのを見て顔をあげた。

(このひとが?……)

城之介は、このときはじめて久秀と視線を合わしたのである。
「——城之介？」
松永弾正久秀は、口のなかでくりかえした。
「城之介か……」
そのとき久秀は言い知れぬ懐しみを感じている。それが何に由縁するものか、そのときはわからなかった。人間の感情の不思議さは初対面ですら愛憎の違いがある。
「こういうしだいやよってに、牢を脱けだしましてん」
小西弥九郎は、一部始終をかいつまんで話した。
「——鉄砲百挺といったな」
久秀は城之介に聞きかえした。
「面妖な話だ」
この場合、どう考えても、あの伊予の女の売り込みがおかしい。
美沙という女は鉄砲百挺持ってくると確約したまま、姿もあらわさない。
「——ともかく、その鉄砲百挺、どこにあるか、じゃ」
「はい、その場所がはっきりしませぬ。ただ……」
「……」
「とうじん、とうじん、としか」
「唐人、とな」
久秀も首をかしげた。
（唐人……唐人町、唐人船……）

ともあれ、内懐ろに飛びこんできた窮鳥である。それも土産を持ってきている。
話を聞くほどに、浜の下手人とは思われぬ。
（澄んだ眼をしてるな……）
実感だった。
鏡の中に見る自分の、野望に燃える眼とは違う。野心を持たぬ男は屑だ、と、思い、口にもだしたことのある久秀だったが、その城之介の表情と眼の美しさには、何か心の安らぎをすら感じたのである。
「飯でも食わしてやれい」
家臣に言いつけて、久秀は馬に乗った。日課の朝駈けである。
もう夜は明けかけていて、乳色の霧が流れるなかに、朝の早い漁師や、魚屋などが忙しそうに歩いていた。
街々の木戸には、抜き身の槍や鉄砲に火縄をぶすぶすいぶらした男たちが三々五々集まっていて、時に、けわしい眼を通行人にむけたり、笠をかむった者を見ると、駈け寄って、笠のうちをのぞいたりした。口取り、草履とり二人きりの供人数で馬を走らせてくる弾正久秀を見ると、かれらはあわてて、槍の穂先を背後にかくして、おじぎをした。
その一群れに、かれは馬脚をゆるめて近よった。
「——話は聞いた。まだ捕まらぬか？」
「はい、すばしっこい奴で、ですがお廓内にいるはずゆえ今日中にはとっ捕まえまする。女連れじゃによって、濠外へは出ていますまい」
町々の手配は完璧であった。会合衆からの指令は四半刻とかからずに南北町中にゆきわたる。

(この組織を大名が持てば、天下を動かせるなァ)
久秀は思案しながら馬を走らせてゆく。
(とうじん、とうじん……)
これはどう考えても、〝唐人〟でしかない。
(唐人か、唐人船……唐人屋敷、唐人町……)
何か楽しい謎解きでもしているようであった。
町衆たちが右往左往して探している脱牢の若衆たちと女が、政所にかくまわれていると知ったら、どんな顔をするか。
会合衆三十六人に支配されている堺の自治体と、保護を与えている三好家の持ちつ持たれつの関係は奇妙なものであった。
三好長慶の〝御相伴衆〟という役職は、足利御所に於て、管領に次いで高い席次だ。ほとんど、これまで長袖衆たちが占めていたのを、細川管領をしのいで勢力を得た長慶が賜わったのである。
その三好家の実権は、ほとんど松永弾正が握るところとなっている、という噂だった。
堺の町衆たちは、目先が利くから、
(次は弾正さまの天下になるかもしれんさかいに)
と、態度が変わってきている。
松永弾正久秀にしても、
(堺の町衆と、巨大な財宝を、利用できるやつが、天下を制す……それは、つまり、わしじゃな)
と胸算用している。
〝唐人……〟

の謎が、ふっと解けたのはその小西屋隆佐の店の前へ来たときだった。
(唐人蔵だ!)
ちがいない。
唐人は、唐人蔵だったのだ。
あまりに簡単で、関連性がありすぎたので、わからなかった。
(唐人蔵なら、鉄砲百挺らくらくと入るし……)
その名称が、俗な表現だったので、気がつかなかったにすぎない。
その蔵は、見世棚つづきの裏にある。もとは、他の納屋衆と同じようなものだったが、弥九郎の実父薬種商橘右衛門が、蔵を貸してくれと言ってきて、薬草を半歳ほど納めていたことがある。
それから蔵の中に薬草の臭気がしみついてしまった。
客足が目に見えて落ち、いつも蔵の中は、がらんどうになることが多くなった。
干し物はむろん、着物にも、薬の臭いがしみこんで抜けなくなった。
「値ェ下げるによって」
と、なんとかして蔵の満杯を狙っていたが、以来誰も品物を預けたがらない。
(鉄砲なら……)
薬の臭いがうつるということも少ない。火縄銃だから、火薬の燃える臭いだけでも、かき消せる。
松永弾正は馬からおりた。
小西屋隆佐の店先である。
「少々、見せて貰いたいものがあったでな」
と、弾正久秀は隆佐を呼んで言った。隆佐は朝食の途中だったが飯を噛み噛みあらわれた。

「これはお珍しい、弾正さまがわざわざ、むさ苦しいところへお出でとは」
どうして唐人蔵と呼ばれるようになったのかわからない。唐風を模して造ったのか、煉瓦を用いた部分があって、人がそう呼んだのかもしれない。
とにかく、がっしりとして、耐火に完璧なだけに、薬草の臭いが脱けないのだろう。
その唐人蔵の広さは、鉄砲百挺のひそかなかくし場所としてはうってつけだったのである。
「おぬしのところの唐人蔵のことだが」
茶を喫し終わって、松永弾正久秀は言った。
「なかなかに頑丈に出来ているという評判だの」
「はあ、こればかりは自慢できまする」
と、小西隆佐は、いかにも大商人らしい、寛濶さで、
「まず、この堺では、あれ以上の納屋はございますまい。火にも水にも、左様、去年の地震にも、びくともしませなんだな」
納屋貸し（倉庫業）衆としての、売り込み口調になるのはしかたがない。
隆佐としては、三好家の武器などの一時保管などの必要から、弾正久秀が話をきりだしたのだと思った。
商人らしいすばやい計算が働いている。前述したように、三好家の保護を得ている関係から、通常の取り引きというわけにはいかない。
（多少は値ぎられても……）
唐人蔵の完璧性が理解されれば結果的には得だ。
「見せて貰おうか」

「光栄にございます。では、早速に……」
隆佐は肥満したからだにもかかわらず、そそくさと膝を起こした。
中庭を通って裏へゆく。
使用人が多勢立ち働いている。活気があった。堺の景気がわかる。貿易港であり集散地であり、また最大の消費都市でもある堺の街の動きは、そのまま、日本の経済の縮図といえる。
唐人蔵の中へ入ると、如何にも噂通りの薬草の臭いが、強烈に鼻を刺した。
「この臭い、消えぬのか」
「弱りました。炭を入れたり、硫黄をいぶしてみたりはしましたが、駄目ですな」
「臭いが強いわりには……」
と、弾正久秀は蔵の中を見まわして言った。
「荷が入っているの」
「はい、臭いなどかまわぬと申されましてな」
（鉄砲だ！）
咽喉の鳴るような心持ちで、久秀は眼を据えていた。
薦で巻かれ、さらに束ねてござでくるんで、固く縛ってある。それが幾つもあるのだ。一包みをほどいてみれば、すぐにわかるのだが、その必要もなかった。
目分量でもわかった。
（百挺……これだな。十挺一包みとして十束。それに玉薬の箱であろう。あれは）
そう看破すると、久秀は表情をととのえた。さり気なくこう聞いた。
「どんな中身か知らぬが、預け主は誰じゃな」

耳の傷は、おのれで血止めした。
忍びノ者は、能う限り、おのれの始末に、他をわずらわせぬ。秘密の漏洩を恐れることもあるが、しんそこから、他者を信用しない。
不信が、かれらを支えていた。
人間の弱さを〝情〟にありとするかれらの自戒は、それなりに正しかったが、連帯のないもろさも悟らねばならなかった。
忍びノ者たちは、時に小さな集団を組んで、仕事に当たることがある。
が、そうした横のつながりのない者のほうが多かったのである。つながりは、必然的に報酬の細分化を意味し、それを嫌う者たちは、
（おれの血と汗で稼いだものは、おれだけのもの）
と、独りで生き、独りで死ぬこともいとわなかった。
そこに、化生ノ者とさげすまれる忍者の思想と生き方があらわされている。
忍者、木鼠――かれの運命もまた、この陰惨な陰ノ道のもたらしたその範疇からはみ出すこと

はできなかった。
その夜、木鼠は弾正久秀に命令されている。
「思案がある。囮（おとり）になれい」
「……」
「浜辺で怪し火を焚き、影走りせい」
影走り。
この忍びノ術は、かつて木鼠が久秀の面前でこころみ、感歎させたものである。
つまり、影を生じ、影を走らす。
衆目を一点に集め、右に左に弄び、その虚に、目的を行なうのワザである。
まず、怪し火を以てせよ、というのは、〝影走り〟をより強力にするためであった。
そうまでするのは、
「三人を放つ」
ためという。
三人が――厳密には城之介が浜辺で無頼者八人を毒殺したという容疑の黒白はこの場合問題ではない。
堺の政所の性格は、町衆と敵対しては成り立たない。三人が政所にかくまわれていることが、町衆に知れると、三好家との関係が悪化するのはいうまでもない。
ともあれ、三人は脱牢者なのだ。
（放つ）
ことは、政所の局外中立を意味する。

忍者木鼠は、久秀の言葉を、言葉通りにうけとった。
常ならば、
(言葉の裏は?)
と、考える。
そこまで気を回さなかったのはまだ、傷の痛みと、心に鬱屈があったからである。
主人である弾正久秀に鉄砲百挺を売りつける方策。むろん、誰かを使っての売り込みである。
いま一つは、
(あの女を弄ぶってやりたい)
片耳を鉄砲の試射で吹っ飛ばされた怨みばらしだ。鉄砲百挺と玉薬そっくり奪っただけではまだ、腹は癒えない。
「火と影……如何なる方法を用いてもよろしゅうござりまするか」
そのとき、忍者木鼠の胸に黒くわだかまった復讐の念——どろどろした澱りのようなそれに、松永弾正久秀は気づくべくもなかった。
かれは、ある目的のために、三人の利用法を思いついたにすぎない。
それぞれの思惑が、ばらばらのようでいて、ある一点で奇妙な調和をなして、堺の街に夜のとばりをおろしたのである。
春の夜にしては、やや暖かい闇は、何やら魔性めいて、夜気もとろりと天鵞絨の粘りをもっていた。海上では南風が吹いているのかもしれない。
この夜気を重いものに感じていた女が、浜に近い木賃宿の二階にいた。
伊予御前の美沙である。

寝込んでいる間に、納屋の預り証(割符)や弾正の一筆までそっくり奪われ、梵天丸から苦心して奪った鉄砲百挺と玉薬が空に消えた。
(このままでは、帰れない……)
なかまの海賊たちに顔むけできない。
というより、女首領という地位のぐらつきだった。
荒くれ者たちを、これまでかよわい女の身で支配してこれたのも父祖の威名と村上水軍の海の掟があったからだ。
神出鬼没の行動や、機知にとんだ攻略は、航行する商人船を畏怖させ、通行銭を払って安全を保証する、というのが多かった。
むやみと襲うことはしない。この堺の船でも、納屋衆によっては通行銭を年ぎめ何艘というふうに払っている。
南蛮屋十兵衛は豪気の男だから、鼻で笑って、鐚銭一文払わなかったのである。
(——やっつけてやった!)
美沙は得意であった。
それが一夜にして、こうなろうとは。
ひき連れてきた野郎ども、矢太や団六をはじめ、十人の男たちの態度も、急に変わったようだ。
「鉄砲がなくなっちゃ、どないもならんねや、伊予へ帰るしかあんめい」
意気消沈して、そんな意見が出たが、
「もう一日だけ」
美沙は言い張った。

その一日が、どれだけの効力を発揮するか、自信はなかった。

が、とにかく、一日中、男たちが八方に散って、鉄砲の行方をさぐっている。

そして、聞き得たものは、その運び手になったらしい八人の無頼者が、浜辺で毒殺されたということだ。

（城之介という若い男……）

梵天丸の生き残りだとわかったが、顔はおぼえていない。ただ、女の方には、その美しさゆえに記憶がある。

その二人も脱牢したという。

ふっつりと糸は切れてしまった。

（手ぶらで帰るしかない……）

眠れぬ夜の、重い闇にいつしか、妙な芳香が漂いはじめていた。美沙はとろとろと、誘いこまれながら、はっと気がついた。

（あの匂いや……）

（あの匂い……）

危険を、美沙は直感している。

何とも言いようのない、奇妙に魅惑的な芳香だった。

甘く、動物的な麝香を含んだような、抵抗し難いその芳香に包まれて、美沙は自制心を失い、こころよい夢の花園にさまよい——まるで、男に抱かれたような安楽と陶酔のはてに、ぐったりと熟睡して、あの割符などを奪われてしまったのである。

（悪魔の誘い）

と、言ってよかった。

自分では気丈なつもりでも、やはり〝女〟なのだ。

〝女〟の弱さもろさ、受動的な生理を、その妖しい〝誘いの気〟は浸して自由を奪った。

いまも——、

（いけない、この誘惑に負けては駄目……）

と、必死にあらがいながら、とろとろとなってゆく。

おのれの手で帯をとき、男の手を待つかのように、生々と張りきって、荒いあえぎに、波をうつ双の乳房を、

「ああ……」

われとわが手でつかみ、揉みしだいている。

もう、五彩の美しく温かい雲に包まれて、自分の手が、何をしているのかも、そこが、どこかも、すべての自覚がなかった。

あるものは、ただ、快感だけ。

発情した動物の体臭に栗の花がまざったような、妖しい芳香のなかで、彼女自身、花弁か、蝶か何かになったような、忘我の境地にあった。

やわやわと乳房のまわりを撫で、乳首をつまみ、強く、弱く、そそりたてるように乳首を両手におさめて、つかみ、揉みあげる。

せつなく吐く息にも、生臭いような情炎がある。乳首は、すでに色づいて、固く欲情していた。

女体は燃えるように熱く、いっさいの布がわずらわしくて、美沙はいつしか全裸になっている。

仄暗い木賃宿の二階の一隅であった。

屏風を立ててはいるが、もしも客が多かったら、これは異様に妖美な情景で耳目をそばだてずにはいられなかったろう。

幸い、客は少ない。

輩下の荒くれ男たちは今夜も湯屋町に出かけていたし、矢太と団六は露地角の酒店で、飲みながら博奕にうさをまぎらしている。

客は、他国の小商人が二、三人と堺見物に来たような老人夫婦——それきりで、美沙が狂いはじめる前にみんな眠りこんでいる。やはり、その妖しの夜気に眠らされていたのであろうか。

屏風のわきに、小さな香炉がおいてあり、一炷のけむりが、ゆらゆらとたちのぼり、天井にとどいてひろがり、重い春の夜気に溶けている。

それが、秘香か。

ひとり裸身を波うたせて悶える美沙が、半ば狂ったように、長い髪をばさっと投げだして、うつ伏せになったとき——あたかも、それを待っていたように、するすると黒い影が近より、女体におおいかぶさった。

「あ、いや！　いや！」

そのとき、美沙は夢のなかではあったが拒んでいる。

これまでも、男は何人か知ってはいる。が、常に彼女の立場は村上水軍の領袖の血を引いて有利なところにいた。

〝犯される〟

という、経験はない。むしろ、男を〝犯した〟ほうだ。

それが、何ということだろう、淫夢に包まれ、さながら、淫虫の支配を受けているように、五

体に力がなく、身動きもままにならない。奇妙な性感だけが、五体をとろとろにしている。

正常な男女の睦みの姿勢ではなく、これまで彼女が、けものじみて屈辱的だと思い拒んできた姿態——背後からのしかかられ、とらえられ、犯される、という情けないかたちになっていたことだ。

だから、拒みはしたが、しかし夢の中である。

屈辱もすぐに忘れ、いや、屈辱的な姿勢だけに、いっそう、受動の快感が、全身をとろかして、美沙はすすり泣きながら、とめどなくたかまる快感の中で身をふるわしていた。

背後の影の行為は、憎しみの相手に槍か刀を突き立て——それは泣き叫ぶ相手でも、すでにムクロとなった者でも同じであるかのような、残忍な、殺戮的な行為であった。

「ああ、もう……し、死ぬ……」

殺される！

その意識が、雲間が切れて、ちらりと太陽が顔を出すように、ふうっときれめ、きれめによみがえったが、それも、たちまちに、潮の寄せくるように、あふれる泉のような快美の恍惚感の中に呑みこまれてわからなくなってしまった。

「——他愛ない」

失神した女体から、静かに離れた影がつぶやいた。

「口ほどにもない、ただの女性じゃが……おれの耳をふっ飛ばしたのは許せぬ」

これはいうまでもなく、伊賀忍びノ木鼠だったのである。

「それだけの礼はして貰うぞ」

木鼠が、松永弾正久秀の命令を受けながら、その方法について、一言問い返したのは、このこ

とだったようである。

木鼠は、むろん、美沙を犯す、という行為で、淫靡な喜びと、ひとつの復讐の満足を味わったにちがいない。

かれは、おのれをすばやく始末すると、裸女を片手抱きにした。

意外なほどの力であった。力ではなく、術かもしれぬ。

美沙に一糸もまとわせなかっただけでなく、木鼠も化生している。

前髪を垂らし、小袖の色合い、袴のくびれ具合い――これは城之介に化けている。

美沙の裸身を抱えると、屋根に出た。

屋根の上を風のように走りだしている。屋根は瓦ばかりでなく、板敷きが多い。そこを走る男と片手抱きにされた裸女の白い肌は、寝入りばなの眼をさまさせるに充分だった。

露地角の酒店で白馬を飲みながら博奕をしていた矢太と団六は、屋上を、物の怪のように走る影をほとんど同時に認めている。

「ひえっ、夜鳥じゃ」

「すだま」

そして、また二人とも、その異様な黒影に抱えられた女首領の白い肌を見た。

「姐さ！」

「伊予御前が？……」

矢太は盃をとり落としたし、団六は三コの骰子（さいころ）を投げ捨てて、

「助けにゃァの」

刀を摑んで走りだした。

はじめ、その影は人とは見えなかった。露地の道をはさんで、屋根から屋根へひらりと飛ぶすばやさは、まるでムササビだったし、白い裸女が鳥のように、夜空を横切るようにも見えた。

矢太たちのように海賊を生業（なりわい）として、異常な世界にある者は、こうした事態に気がつくのが早いが一般人が目をとめるのは遅い。

怪鳥のように屋根から屋根をとび、走ってゆく影は、大小路通りへ降りた。

「待っちょれ」

「御前を何処へ」

喚きながら矢太が長い刀を抜いた。

二人とも足が速い。瞬く間に追いすがった。

影はふりかえった。にたりと白い歯を見せた。

「喰え」

ぱっと片手をひるがえした。

二人の足元に何やらまいた。

「あっ、痛てて」

矢太と団六は足を抱えて飛び退った。忍びノ者が追跡者を阻むに使用するまき菱だった。

いうまでもなく伊賀の忍者赤目ノ木鼠である。

この男にして、人目に立つような拙劣な行動をしたのは面妖だ。

もっと巧みなワザを持っているはずであった。

木鼠が浜ノ町に至ったとき、突然浜辺の破船から火を噴いた。静寂をひき裂いて、轟然たる大音響とともに爆発し、火焔が天に冲するように噴き上った。

この怪し火は、木鼠が得意の仕掛け火であった。
堺の町の人々は仰天して表へ飛びだした。
その騒ぎの中を、木鼠は裸身の美沙を抱いて走り回っている。
木戸の番人を蹴倒しては、
「城之介や」
と、一言叫んで、突っ走る。
「捕えてみろ、おれは城之介」
素早い。
その声を聞いた次の瞬間には、木鼠の姿はない。
「城之介だ、牢破りの城之介やで」
「女を抱いとったで」
「浜の方へ逃げよった。早よ追わんかいな」
木戸の番人も血気の者たちも、押っとり刀で浜辺へ駈けだす。
城之介と小西屋の弥九郎と女の三人——堺の町の治安を乱す下手人と目されたその三人は、木鼠の囮走りで市民の注意が浜辺へむけられているころ、政所裏の小路を闇にまぎれて走り出ていた。
政所（政庁）は堺の南荘にある。
その裏口から小路へ出た城之介ら三人は、闇に身をくるむようにして、北荘へ向かった。
浜辺の方で火焔と轟音がし、家々から飛びだした男が、中には女までも、走ってゆく。
「この隙だ」

と、小西屋の弥九郎はうすあばたの、白胡瓜のような顔をにたにたさせて、
「霜台さまは、頭がええわいな」
と、先へ立った。
霜台とは弾正のことだ。唐名である。
弾正とは検察官であり裁判長の職名だから、凜然たる霜のきびしさから由縁したものであろう。
後に松永弾正久秀は、号のようにこの〝霜台〟を用いている。
さて、この三人の潜行に、いささかの難しい点があったとすれば、南と北との境をつなぐ大通り大小路通りを越すことだけだった。
この大路を越してしまえば、あとは小路を縫ってゆくだけだ。
北荘の宿屋町大道の北寄東側に小西屋の宏壮な構えがあった。
ここが小西弥九郎の養家なのである。
三人がここへ逃げたことを、忍者の木鼠は知らぬ。
ただ、
（浜に仕掛け火して、町衆の目を浜辺へそらせ）
とだけ松永弾正に命令されていたのだ。
普通のときなら、それでも三人の行方について、あの鋭い鼻を利かしたのかもしれぬ。
木鼠の関心は、
（あの女を）
と、伊予御前の美沙にしぼられていたのである。
鉄砲の試し撃ちで、木鼠の片耳を吹っ飛ばした女。

忍者の憎しみは陰にこもる。

〃耐え忍ぶ〃ことがこの人外の化生ノ者たちの宿命ではあったが、それだけに、また憎悪の根は深く一度怨んだら、終生許すことがない。

裸身の美沙を小脇に抱えて、走りながら木鼠は、

(どんな恥をかかせてくれようかな、この女)

と、陰湿な期待で胸をわななかせているのだった。

松明と喚声が浜辺を埋めてくるのだ。木鼠は美沙の裸身を船の蔭に横たえると、両脚を荒綱でしっかり結んだ。

「ふふふふ、たっぷりと礼をしてやるからな」

それから干網の中へ、美沙の頭を突っこむようにし、黒髪をからめた。

百千の髪の毛が網の目にこぼれ絡んだ。

こうしておけば、発見されてもすぐに自由になれない。

髪が網にひっかかって、一々、それをほどくのに時間がかかる。その間中、美沙は全裸を野卑な男たちの眼にさらさなければならないのである。

「死にたいほどの恥をかけば、おれの怨みがどんなものか、わかろうわさ」

木鼠は塩っぽい闇の中で、残忍な笑いを洩らした。

美沙の裸身を、網からめにして姿を消した忍者赤目ノ木鼠は、けろりとした顔で湯屋町にあらわれている。

巧みな変身である。

城之介の扮装を解いて、漁師のような恰好になっていた。

美沙の輩下たち——村上水軍の流れを汲む伊予の海賊たちは、湯屋町で湯女を買い、酒と湯気とにのぼせて、

「いつまで、こないところにいるんや」

「早よ伊予の海へ帰らな、仕様ねいがな」

「もう銭もないちゅうに、御前は何を考えてくさるのかいな」

「がいに頭の好え御前やけんの、何ぞ考えとるのやろ」

がさつな海の男たちにとって、堺の女は、離れ難い魅力がある。

浜辺の怪し火も、脱牢騒ぎもこの楽しみを捨ててまで飛びだす気にはならない。

「ほれ、もそっとこっちゃへ来んかい」

と、湯女たちを引き寄せて、淫らな楽しみに手を這わせていると、

〈浜に行け〉

誰かが言った。

え？と聞き耳をたてた。女たちにも聞こえたのである。

〈浜に行くのだ、早く〉

また聞こえた。

「なんやて、なんかいうちょったかいな」

「何も言わんぞな」

「うんにゃ、聞こえたぞな、もし」

そら耳ではなかった。又、聞こえたのだ。

〈伊予御前が危ない、早く、浜へ行け〉

こんどは、はっきりと男たちみんなが聞いた。
さしもの酔いもさめてしまうような言葉だった。
〈北浜に南蛮船の破船がある。その近くじゃ、伊予御前が、裸でな死にかけているわ〉
その声が何者なのか、なぜそのような忠告をしてくれたのか、そこまで考える余裕はなかった。
かれらが夢からさめたように、一度に刀を掴んで飛びだしたのは、矢太と団六がびっこを曳きひき、戻ってきて、
「御前がさらわれちょったがの、汝ら、なにをうじゃじゃけてくさる」
と、狼狽の声をあげてからだった。
(讐(あだ)をしてくれたわい……)
忍者赤目ノ木鼠は、満ち足りた思いで歩いていた。
弾正久秀の命令を行ないながら、その範疇で、美沙の肌をなぶり、さらしものにして恥をかかせる……陰湿な復讐をした。
その成功も、忍びノ者としての思いつきやワザを重んじる身の自己満足を助長させるものだった。
その幸福感を裏付けているのはあの横領した船載鉄砲百挺と玉薬等である。
(あいつを弾正に買わせる……こんな小気味のよいことはないわ)
闇の小路で木鼠はにんまり笑った。湯屋町の裏小路にある小さな家へ吸いこまれるように入っていった。
「——お前さまかえ？」
ねっとりと甘ったるい女の声がした。

赤目ノ木鼠は、ものうげなその声を聞くと、
「ああ、わしだ」
と、落ち着いて応えている。
草履を脱ぎ、どっかりと上り框に腰をおろした姿からも、赤目の忍者という陰惨な翳りはどこにもなく、ややくたびれたような、普遍的な中年者がそこにいるだけだった。
この家にくると、木鼠という名も陰の世界に生きる生業も忘れてしまう。
そこにいるのは木鼠ではなかった。舶載物を扱う小商人の杵三という実直者がいるだけだった。
キネズミのキネゾーとは、ふざけた変名だが、木鼠はしんそこ、この家にくると気がしずまる。
湯女あがりの、お孝というこの女は、無知でだらしがなくて、お人善しだった。この女と話したり寝たりしている分には、何一つ、気を遣うことはない。
余分な詮索をするような猜疑深さもないし、贅沢でもない。
木鼠が与える適当な銀で、小ぎれいに生活している。いまの境遇に結構満足しているのだ。
人目をはばかる、陰に生きる忍者には、こうした息抜きの場が必要だった。
この家にいて〝杵三〟になっている間、かれはもっとも人間的な呼吸が出来るのだ。
それはまた、明日の緊張と危険へのエネルギーを貯える場でもあった。
「なんや、騒がしいこっちゃな」
「ほんまに。御牢を脱けたとか何とか、えらい騒ぎだすがな」
「腹が減ったわ。おっとその前に湯に入りたいわ」
「あれェ、町風呂へ入って来なはればよかったのに」
「何いうてけつかるねん、お前と二人でゆっくり楽しもう思うて来たんやないか」

「嬉しいこと言うてくれはる」
てもなくお孝は喜んでしまう。
小さな桶風呂だが、二人で湯をこぼしながらふざけて垢を落とし、軽く酒を飲んで飯を食い
――何の変哲もないが、小さな満足を得た小市民にかえった一夜を過ごした木鼠は、翌日、陽がかなり高くなってから、この家を出た。
こざっぱりとした小袖に道服を羽織って、何処から見ても、小商人のていである。
むろん、人相も変えてある。
かれが行ったのは、宿屋町の小西屋隆佐の家だった。
「先日、荷をお願いした者でございますがな」
と、割符を見せた。
「今宵、受けとりに参りたく思いますので、ちょっと改めさせておくなはれ」
「どうぞ、蔵の方へお出で」
唐人蔵である。
重い扉をあけて、中の鉄砲の荷を調べた木鼠は、ほっとした。
（誰も唐人蔵とは気がつくまい）
だが、かれが鉄砲の包みを改めているのを凝って見守っている眼が、幾つかあった――。
その眼は――、
この家の伜の弥九郎と城之介、それに夕月の三人だったのである。
伊賀の忍者、赤目ノ木鼠ともあろう男が、その、
〃潜み眼〃

に気がつかなかったのは、不覚というしかない。
常に綱渡りしているにひとしい忍者は、一点、疎漏があれば、惨落の淵へもんどり打つ。
昨夜からの成功にすっかり気をよくしていたことが、弛緩となって、その眼に気づかせなかった。
文字通り致命的な卒爾だったのである。
もとより、城之介たちは、その男――木鼠も杵三も、見るのははじめて。
松永弾正の飼っている忍者のやつしとは、むろん、知る由もない。
（来たぞ）
と、城之介は目くばせした。
（あいつだ）
（罠にかかったな）
弥九郎も唇の端を歪(ま)げて、
（すぐ注進するか）
弾正は鉄砲を運んできた男を突きとめるために、三人に張込みを依頼したのだ。
その〃陰の男〃が判明すれば、おのずと城之介の濡れ衣もはれる。
それだけでなく、梵天丸を爆破した元兇も浮かび上ってくるにちがいない。
（あの男が？……）
一見、平凡な小商人ていの男。
ただ、ふっと瞬間に見せた表情に、きびしく油断のないものがあった。目つきにも、凶々(まがまが)しく、
鋭い光りが、

（尋常の者ではない）
と、感じさせた。
そこで飛び出したい思いを、必死に耐えていたのである。
（急ぐな）
と、弥九郎が腕を押さえて、
「夜になって、引き取りにくると言うとるやないか、霜台さまにも注進してくるよってな」
「逃げはすまいか」
「なんの、あの鉄砲百挺あるのや、あれだけのお宝、捨てられるかいな」
商売人の一族に生まれただけあって弥九郎は利に敏い。
かれは政所へ注進するのにも、他へ洩らすような下手なことはしない。
薬草を紙袋に入れて、それを届けるような顔で、やってきた。
弥九郎自身は、どうせ堺では勢力家の小西一族の、それも筆頭の隆佐の跡取りだから、町会の牢を脱けたところで、どうということはない。
城之介と夕月の行方を問われるのが面倒だから、弥九郎は頭巾をかぶった。
「御注文の品をお届けに参りました」
と、政所に入ると取り次ぎの者が受けとろうとするのを、
「用法がチト難しいゆえ、直々にお話せんとあきまへん」
通されたのは庭である。松永弾正は弓を手にしていた。
「来たか？」
と、振りむきもせずに言った。

鉄砲百挺と玉薬を運ぶには、少なくとも四、五人の人数が要る――。
と思われたのに、宵闇の中に木鼠こと〝杵三〟があらわれたときは孤身だった。
「人足衆は？」
「それが、なかなか集まらんのでね」
「……」
「お手間じゃろが、御手を貸してもらいたいのや。それ、手間賃ははずみますよってに」
手間賃を出すなら問題はない。納屋貸し衆には人足は常雇いしてある。
話を取り決めると、小西隆佐は、
「如何でございましょうかな、人足が集まるまで、お茶でも」
隆佐はいうまでもなく、堺の茶人として聞こえている。
その茶室も一見の価値のあるものであった。
（いいな……）
と、木鼠は思った。
茶室をのぞいたことは何度もある。夜をわがものの忍者には、垣や塀は役に立たない。天下一の茶室だと聞けば、案内も乞わずに勝手にのぞきにゆける。
それは、しかし、女一人の寝所や男女の交合の場をのぞくにもひとしく、あくまでも〝陰の眼〟にすぎなかった。
忍者はあらゆる階層に扮するために、見様見真似で、一応は何でもこなす。
茶ノ湯の作法なども、そうであった。殊に茶ノ湯が盛んで、堺では茶人と称されることが、会

合衆の条件みたいになっている。
木鼠が、隆佐に誘われて、
(おれも茶人のように……)
と、思ったのは、日蔭に育った花が、ふと、日に照らされたい、と思うに似た、迷いであったろうか。
茶人の〝心〟はよくわからない。動中に静をもとめるとか、禅の心とか、いろいろにいうが、木鼠のような傍観者にしてみれば、ただのアクセサリーのように見える。
(飲んでやろう、小西隆佐の茶の味を、味わってやろうわさ)
木鼠はおもった。
「では、お言葉に甘えて」
「おお、こちらへ」
隆佐は先に立った。
柴折戸を押して中庭へ入ると、世界が一変した。枯山水の凝った庭は、巨岩や鬱蒼たる樹木を配して、さながら深山幽谷にさまよいこんだようである。
竹林がある。一条の細路が木下闇を通っている。
そこを導かれてゆくと、一棟の茶室がかれらを待っていた。
飛び石には打ち水がしてあり、鹿おどしがコーンと、幽すい境にあるような錯覚をおこさせる。
堺の町なかなのに、庭の広さもかなりのものだが、ここには、日本一の騒々しい消費都市の姿はなく、茶の持つ厳粛なばかりの静寂がある。
招じられて、木鼠の杵三は、にじり口から入った。

「——待っていたぞ」
あの、聞き馴れた声が面を打った。
その声を聞いたとたん、木鼠の面に、さっと絶望が走った。
(計られた!)
という思いは、しかし、ほとんどなかった。
夜に生き、陰を走る忍者は、また、罠と常に対面している。
おのれが罠に仕掛けるときもあり、おのれが掛けられることもある。
〝罠〟自体に対する怒りや憎しみは常人の感覚とはかなり離れていたのである。
かれらを支配しているものは、そのワザに勝つか負けるか、であり、したがって、罠が巧みか拙か、というだけのきわめてかわいたものだった。
(松永弾正!)
木鼠は、びりっと、頭の芯から尻まで電光に打たれたように感じ、さながら不動金縛りの術にかけられたように、五体が動かなくなっていた。
位負け、というか、気に破れる、というか、雇い主である松永弾正久秀の一声は、それが思いがけなかっただけに、威力を発揮したのである。
「待っていたぞ、木鼠」
弾正は釜の前にいた。
釜は静かに松籟の音を立てて、この四畳半の中にあるものは、ふしぎなとろりと重い夜気であった。
一炷の灯のもとで、弾正久秀はおのれの茶室のように、どっかりとあぐらをかいている。

股の間に碗をひきよせて、サラサラと茶筅を動かしているのだ。

もしも——。

木鼠が、伊賀忍者の本性をあらわして拮抗するならば、のっけの一言を浴びたとたんであらねばならなかった。

そのときなら、木鼠が杵三に変化していたことが、弾正久秀を欺瞞する行為としての、少なくとも対等の地位にあったはずである。

一声で痺れたようにすくんだあと、かれはふたたび、みじめな飼い犬の立場にひきおろされていた。

そのあとにくるものは、盗み食いを見つかった、みじめったらしい小人の姿でしかなかった。

「おれがもとめた鉄砲百挺、と知っての悪戯か」

「いえ……」

「幾らで、おれに売りつけようと思った？」

「と、殿、てまえは……」

「伊賀のこけ猿が、笑止よな、この弾正を瞞着しようとしたか」

「決して……」

美沙への復讐だった、決して、弾正に高く売りつけるつもりでしたのではない、とごまかしを素早く胸で築きあげはしたものの、それが言葉にはならなかった。

唇がふるえ、額にねっとりと冷汗が吹いた。

「まあよい、わしを瞞すのは容易でないぞ。ところでせっかくの御入来じゃ、茶など一服、のんでゆけ」

毒を？——

瞬間に、木鼠は思った。

（おれに毒をのめというのか！）

松永弾正久秀はにやりとした。

はっ、となった木鼠の心を見透したように、言葉を重ねたのである。

「お前に、毒は盛らぬ」

「………」

「毒茶を飲むようなお前でもないからの」

その不可解な微笑は、何を意味していたろう、弾正久秀は悠々と、手さばきに一点、乱れなく、茶をいれている。

動揺は忍者木鼠だった。

冷たいものと、熱いものが、交互に五体に漲って、冷汗が吹き、眼が霞んだ。

（いかん、これでは……）

木鼠は、おのれを取り戻そうとした。

（忍びノ者に戻るのだ、伊賀ノ忍びは、もっと逞しくなければ。主を持たず、ワザをもって天下を生きる）

また、こう思った。

（弾正どのには、おさらば、といおう。それで済む。それで赤の他人だ。おれたちは、武士の主従とは違う……）

雇い主と、雇われた者。

それだけの仲ではないか。
決心して、木鼠は顔をあげた。
その顔へ、すかさず、弾正久秀は笑いかけた。
「飲むか？」
「……」
「毒の心配をしているな」
「いや、左様な」
「ははは、亭主がいれた茶だ、亭主が毒見しよう、ならば安心するじゃろ」
飲もうか？
いや、飲まないほうがいい——
その逡巡が、木鼠の生死の分岐点だったのである。
人心収攬に長けた弾正久秀の巧みさは、迷いもあらわな木鼠の眼を、ひたととらえて、茶碗を作法通りにとりあげると、自ら、口をつけ、半ばほどを飲んでみせた。
「結構……自分でいうのもおかしいがな、ははは」
ぐびり、と疑いなく嚥下したのである。
（毒は入っていない）
安心が木鼠の警戒をといた。
飲むか？　というふうに茶碗をおきかけて、木鼠を見た。
視線が合った。木鼠が弾正久秀の眼を見た、それが最後になった。
「頂戴致しまする……」

刹那、茶碗がすさまじい礫となって、木鼠の顔にとんでいた。とっさに叩き落とした。それだけのワザがこの雇われ忍者にはあった。
が、そこまでだった。
すっかり心を宥していた木鼠は忍者として本能的にとるべき次の行動——抜刀するか、跳び退くか、そのいずれをもとることを忘れ、
「何をなさいます？」
常人の非難をむけた。忍者が常人になったとき、死の手は迫る。
茶碗を投げつけた手で、脇差しを抜くや、弾正久秀の痩軀は、しない竹のように、跳ねて木鼠へ飛びかかっていた。
次の瞬間、木鼠は冷たいものが胸をすッと貫いたのをおぼえた。

（死なぬ！）
走りながら、忍者木鼠は思った。
かれが忍びノ者の本能をよみがえらせたのは、弾正久秀の脇差しが胸を貫いた瞬間である。
（死ぬものか……）
手刀が手くびを打った。
これが一瞬早ければ、白刃は手から離れたであろう。あるいは刀だったら、弾正久秀の右手は、手くびから切断されていたろう。
手刀は、切られたにひとしい痛みを与えはしたが、木鼠のほうに忍び道具も、刃物の用意もなかったのが不覚だった。
釜を蹴って、灰神楽の中を逃れ出るのが、やっとだった。
右の胸には、脇差しが刺さったままである。
むろん、弾正久秀は左を刺してきた。
それをさけた。反射的な動作だったが、茶碗を払い落とした際の体の崩れである。完全に逃れ

ることは出来なかった。右の胸に刃が通ったとき、
（心臓ではない！）
微かな安堵があった。
（すぐには、死なぬ……）
致命傷だという思いをふり払いながら、刀を抜きとらなかったのは、出血を慮ったからにほかならぬ。
前にも述べたように、血止めも何も携帯していない。それに深傷からしたたる血液は、逃走経路を明示する。
木鼠は走った。
走りながら、かれは伊賀の山谷を思った。幼時から、道なき道を、荊の路を、岩石の転がる谷を、ひたすら走って跋渉術の基礎訓練を受けた。
堺の街の小路から小路を抜けつつ、木鼠の脳裡には、伊賀の山が川が描かれていた。
（くそ！　死ぬものか）
執念は忍者を魔性にする。
闇を黒い突風となって駈け抜けた木鼠はお孝の家にたどりつくとさすがに精も根も尽きたようであった。
柴垣を飛び越えたのが、最後の力だった。
「だれ？……」
お孝の、あの甘い声を、木鼠は地面に横たわったまま、聞いた。
「まあ……あんたはん」

「手を、貸してんか」
ふがいないがしかたがない。
お孝の肩にすがると、板ノ間に寝かされた。木鼠は片頬を歪めて笑おうとしたが、笑いにならない。
お孝は胆をつぶして、これも声が出ない。血流しから鍔にかけてべっとりと血糊をまみれさせて木鼠の胸に突っ立った脇差しを、瞠目して見つめているだけだった。
「驚くな」
木鼠はかすれ声で言った。
「大したことやないで……」
「……」
「おれの言うことを、よく聞いてや」
「へ、へえ……」
「刀を、抜いてくれ、恐いことあらへん、胸に足を乗せて、両手で力一ぱい、引き抜くのや……」
お孝は真っ蒼になった。
「そないこと……あてには出来しまへんえ」
ぶるぶる顫えている。
「しっかりせえへんか」
致命傷を受けた木鼠のほうが、気丈なのだ。
「か、簡単なことやないか、刀を引き抜くだけ、や……」
「そやかて……」

お孝は立っているだけでも精一杯だった。膝が、がくがく顫え、いまにも倒れそうで、
「お医者を、呼んで来まひょ」
「阿呆が」
と、木鼠は呻いた。
「ええか、わしが言うように、するだけや」
「……」
「——鏝があったな」
「へ、へえ……」
「鏝を火に埋めろ、炭火に……そして、刀を抜きとるンや」
お孝は打たれたように、身をひるがえした。炭火に鏝を突っこむ。意味がわかったらしい。血止めにはそれしかない。少々の傷なら、膏薬か塗り薬で傷口がふさがる。戦場では馬糞を塗りこめる。後のことだが朝鮮ノ役では加藤清正の家来が、馬の小便を呑んでいる。
西欧医術でやる、針と糸での傷口の縫合は、幕末の蘭医からである。
お孝は当初の動顛から、いくらか落ち着きを取り戻してくると刀の柄に手をかけた。
「やってんか」
木鼠は弱々しくすがるような表情になって、
「さっきも言うたように、足をかけてな」
「あんたはんを踏んづけるなど、あて、ようしまへんねん」
「助かるかどうかの瀬戸際や、かめへん……」
指示する木鼠は目に見えて弱ってくるのだ。お孝は恐る恐る右足を木鼠の胸に乗せた。

「しゃっと、踏んばるんや」
「こうでっか」
「ほんで、刀をしっかり握ってな一気に引き抜いてや」
「大事おへんやろか」
「もう、肉が、刃に巻きこんどるさかい……力一杯せな、あかんで」
「へえ」
「ほんで、引き抜いたら、すぐに、焼鏝をあてる……傷口を、焼いて、ふさぐのや」
お孝は悲壮な顔付きになっていた。のんびりと囲われものの幸せを味わっていたのに、こんな大役を敢行する羽目になろうとは、夢にも思わなかったろう。
乱世の女だから、いざとなると気持も落ち着いてくる。
刀の柄に両手をかけるや、ぐいと、足の力をこめる。刹那、抜いた。
待っていたように、さッと血が噴いた。
血刀を投げ捨てるや、焼鏝をとってくる。炭火に焼かれて、真っ赤になっているやつを、じゅじゅッと傷口にあてた。
血と、皮膚の焦げる臭い——異様な煙がぼっと立ちのぼる。ぎええっと、木鼠は絶叫して、悶絶した。

城之介を訪ねてきた女がある。
茶室に血がしぶいてから小半刻ほど後である。
「まだ遠くはゆくまい、探せ」

と、松永弾正が町役人らに指示したり、小西屋の店先は、時ならぬ騒ぎで混雑している最中なのである。
「おれに？」
誰だろう。
この堺に、知人はいない。
松永弾正のおかげで、というより、〝杵三〟と称する怪しの男の出現によって、城之介の容疑が漸くはれたところだった。
「——城之介はんどすか」
その女は、凝っと見て言った。
むろん、はじめて見る顔だ。顔色が悪くて、何かそわそわしている様子が、尋常ではなかった。
「お呼びして来い、言われましてん」
「誰が？」
「へえ、それが、秘密なんどす」
「おかしな話だな」
「城之介はんだけに、是が非でも話がある言やはって」
南蛮屋十兵衛のことではないだろうか、と思った。
「大丈夫かしら、うち心配どっせ」
夕月が案じるのへ、
「なんの、幾らか堺の町の様子もわかった。すぐに帰ってくる」
疑いさえはれれば、怖れることは何もないのだ。

それに、相手は女だ。おとなしそうな女だから、どっちに転んでも大したことはない。
「——お孝どす」
道々、彼女は名乗った。
「済んまへん、こない夜おそく、呼び出したりして、堪忍しとくれやす」
「どこなのだ、場所は」
「遠いことおへん、実は御病人どすよって……」
病人？
ますます心当たりはない。
その家へ入って、はじめて合点がいった。
「わしだ」
（杵三！）
と、寝たまま、木鼠は言った。
「おぬしには迷惑かけたによってな……大事なことを知らせたい」
「あんたは」
城之介は、とっさに、松永弾正のことを思った。下手人とこうしたかたちで逢うことは、裏切りになるのではないか。
「わしは、杵三やない。実の名前は、伊賀の……いや、わしの名などどうでもええ。とにかく、わしはおぬしに借りがある」
「……」
「浜辺の八人……毒を盛ったのはわしじゃ」

「もはや、遅いわ」
「そうじゃ、もう、遅いな……いまさら、白状しても、詮ないかもしれん、せやけど、言わないでは、死ねんのや」
木鼠は微笑した。
お孝が、袖で面（おもて）を蔽い、身をふるわすのが見えた。
「わしは、わざと、八人殺しが、おぬしに疑いがかかるように仕向けた。別段のことはない。おぬしが、あの場に来合わしたからじゃ」
それだけの理由で、木鼠は城之介を呼んだのか？
傷口はふさいでも、木鼠には死期が迫っているのが自覚されたのではないか。
松永弾正久秀の脇差しは、その切れ味の良さと、弾正の憎しみをこめて、意外に深く木鼠の右胸部を刺した。
「あんたに、話しておきたいことがあるのや……」
「……」
「弾正……あの非情な男のことや、天下の松永弾正久秀、あの男は」
言いさして、はげしく咳き込んだ。あわてて、お孝が飛んできて、背中をさするのへ、
「ええがな、どうせ、言うだけ言うたら、あとは、地獄からお迎えがくるのや」
伊賀者は異郷で死ぬことに宿命的な諦めを抱いていた。
堺の土になること、それ自体に無念はなかったが、弾正久秀の走狗となって、その手にかかって果てることの皮肉な運命を嘲笑したいように、
「あの男には、用心せなあかん」

と、言った。

「人を疑うことを知らな、あかんで、あいつは、狸や、ムジナでその上、狐や……」

城之介は、言葉もなく、木鼠の杵三を見守っていた。気が違ったのではないかと思った。

城之介の眼には、松永弾正久秀という男は、この大都市の自治体の難しさを統べるのにふさわしい、強く、思慮ぶかい武将に見えたのである。

「——死んでゆこうという人間の言葉だ」

城之介の表情に腹立ったように木鼠は強く言った。

「聞くがいい。おれは、生まれは伊賀のくに赤目の里。小さいときから呼ばれた名は、木鼠……」

尋常な男ではないと思っていたから、城之介には別段の驚きはなく聞こえたのだが、お孝は愕然とした。

「あんたはん?……」

ちらりと、女に冷たい視線を投げただけで、木鼠は、

「おれは、ずっと、弾正に使われてきた……弾正の手足じゃったわ……左様、黒い手……いまの地位にのぼるまで、この、黒い手が、何人、人を殺してきたかしれぬわい」

「木鼠?……」

「おれの名だ、誰がつけてくれたかしらぬ……おれは、生まれるときから、こうして死んでゆくまで、日蔭で、ずっと日蔭を歩いてきたが……得たものは、何も、ない」

疲れ果てた忍者の顔がそこにあった。

その顔は見る見る萎えしぼんでゆくように見えた。いままで張り詰めていたものが、出血によ

って、一気に生気を喪ってゆく。

まるで、松永弾正という飼い手を失ったことによって、その生きている価値を認められないかのように——。

「弾正は……毒を以て人を殺す、毒そのものじゃ、三好一族も弾正に殺されたのじゃ……」

松永弾正久秀と三好一族の関係については、前に述べた。

四国の阿波を本貫の地とする三好一族は、応仁の乱以来の乱れに乗じて、五畿内外に威をふるい、いまでは三好長慶が将軍足利義輝との和によって、天下の実権を握り、御相伴衆に昇っている。

世間のひそかな噂では、すでにその長慶は病死し、執政の松永弾正と三好三人衆が政治を動かしているという。

この長慶は前代の三好元長の長子で、父の復讐戦に勝ってから、名をあげたのだが、その勢力を支えたのは、かれの弟たち——義賢、冬康、一存、冬長の四人がそれぞれに、阿淡讃三国に地盤を築いて、後顧の憂いをなくしていたからでもある。

このうち三人がすでに死んだことも前述した。

冬康は叛逆のゆえに誅し、一存は事故にあい、実休(義賢)は討死し、さらに長慶の伜義興も病死ということになっている。

こうしてほとんど、長慶の肉親藩屏は崩れてしまった。

いやでも執政の松永弾正久秀の姿が浮き上ってくる。

「——その、四人とも……」

と、忍者木鼠は、瀕死の床でこう告白したのである。

「わしが、手を下した……弾正の言いつけで、わしが、殺したのじゃ！」

もう、視覚もうすれているらしい。

そのうわごとめいた言葉にはそれゆえにこそ、真実味がこもっていて、城之介の耳をそばだたしめた。

忍者木鼠は言った――。

松永弾正久秀は策謀をもって、長慶の娘を妻にした。それだけではなく、まず、長慶に次いで勢力のあった三好義賢を誹謗して誅戮させようとした。

永禄三年のことである。

義賢は阿波の勝瑞城、いわゆる阿波屋形で主君の阿波守護細川讃岐守持隆をだまし討ちにして、その美妾小少将を奪い阿波を手におさめていた。

下剋上だ。その口実として、持隆の乱倫をあげ、その子真之を奉じると称して、世間の疑惑をそらした。

六郎真之を奉戴しているのは表むきで、実権は義賢が握った。

もともと持隆は武将の器ではない。長年つづいた管領家の血縁としての名前だけの守護大名だったにすぎない。

義賢は戦さ巧者で聞こえている。

阿波細川家の執政だった立場を利用しての下剋上だ。その意味では、松永弾正と類似しているのも奇妙だ。

戦国時代を下剋上の時代というが、こうしたことも、大きく時代色をあらわしている。

義賢はさらに剃髪して形だけは出家した。物外軒実休と称したのは、持隆を弑逆した直後である。

こうして阿波一国をわがものとした実休は奪った美女、小少将に男子二人を生ませている。上を長治、下を存保といい、長治は後に異父兄である真之と戦うことになる。

この義賢、実休という名のほうが通っているので、以後これを用いるが、実休は武将としての大器であった。実戦での強さは、兄長慶をしのぐものがあり、長慶も片腕として信頼していた。

二人とも当時の武将らしく、茶ノ湯をたしなみ、連歌にもたけているが、どちらかといえば、長慶の方は武将としてより歌人としての道のほうが肌に合っていた。

人間もいい。

長年の仇敵だった細川晴元と足利義輝連合軍を随所に破り、ねをあげた晴元が出家入道を条件に和睦を申し出ると、あっさり手を握り、晴元の子を立てるという譲歩までして宥している。

足利幕府の筆頭大名に認められ、修理大夫に任じられたりしていい気持になった長慶は、それ以上、文句はないと、淡泊なところを見せたのだが、晴元は狡猾だから、その後、また叛乱を起こしたりしている。

乱世の大名としては、晴元の方が普通で、長慶は寛大すぎた。

両者の相剋からすれば、当然、晴元を刎首すべきところだ。

そうした寛大さが、松永弾正をつけ上らせることになっている。

長慶の希みは、天下の大大名として、(管領職を希めるところまでいったのに、奪っていない)平和の政治をし、悠々と連歌などに興じていたい。まことに平和的だが、それを許さぬのが、この時代なのだ。

かれがそうした気持を大事にしていたのも、前記の弟たちの勢力が安定していたからであろう。

その中で最も頼りにしていたのが、実休なのである。
（あいつがいては）
と、弾正は思った。
（邪魔者は除かねば……）
松永弾正のような、出自もわからぬ、素姓いやしい男がのし上るには、正常な手段では難しい時代であった。
戦国といい、乱世という。
この乱れの、弱肉強食は、力さえあれば、一国一城を望めるには違いなかったが、それも、限度がある。
前にもちょっと述べたが、少し後の秀吉たちの時代よりは、窮屈なシキタリがまだ残っていた。
早い話が、実休にしても長慶にしても、おのれが亡(ほろぼ)し、或いは追放した細川氏の嗣子を奉戴して、管領なり守護なり、名目だけでも仰がねばならなかった。
伝統と家名がそれだけ強い。
世間が信用しないのだ。この時代より前の、北条早雲や斎藤道三が前者は関東十州を得、後者は美濃（大国である）一国を掌握するまでに大変な苦心を払っているのも、そうした世間の慣習や名誉というものが、いかに根強く深いものかを物語っている。
（天下に名をあげるには……）
弾正久秀は、三好家に仕えたときから、野望の炎を燃やしていたのだ。
（非情になることだ）
人間性を捨て去ることだ。

それしか、天下の武将になる道はない。
前記の斎藤道三も、美濃を奪うために、美濃の守護たる土岐の名をほしがったが、その前に土岐の家臣である、西村の名を継ぎ、長井と替え、さらに斎藤の名をおかした。
無知文盲が大半を占めた時代では、それほど姓氏が、人間の価値判断の要素となったのである。
北条五代の祖、早雲長氏にしてからが、東海より伊豆に手をのばし、
（天下を得るには、北条九代の後裔たるに如くはなし）
と、案じて、韮山で小大名の北条某の後家に入聟して、北条を名乗ったのが、出世の手はじめだった。
現代のように過剰なくらいの情報が、まるきり無いのだ。
交通も不便だし、政治もないにひとしい乱世。興信所もなければ戸籍などない。素姓も人格も調べようがない。
となれば、名家を名乗るだけである種の安心感を他に与えるし、それが信用につながった。
そうしたいっさいのものを持たぬ松永弾正は、
（他人がやれぬことを、やる！）
それが他人をしのぐことだと考えた。
人間は人間性を持ち、良心によって行動する。
（その良心を捨てるのだ）
野望の前には、神も仏も、いっさいを抛つ。
忍者木鼠が傭われたとき、もはや松永弾正は三好家の執政の地位にあった。
だから、それまでの区々の行動は知らぬ。

些細な役目は枚挙にいとまないから、割愛する。
瀕死の木鼠が城之介に伝えておきたかったのは、実休たちを次々と消していった方法である。
「――弾正は、実休どのが、邪魔であった……」
「……」
「消すのに、なんと、長慶どの自身の手でやらせようとしたことじゃ」
木鼠は言った。
実休が勢力の増大にしたがい長慶を亡きものにして、三好一族の筆頭者にならんとしている、
と。
〃長慶暗殺〃の密謀の書を偽造した。
宛先は弟の冬康と一存(かずまさ)。この二人の相談するていに見せかけたのだ。
この密書が鳴門で難破した船の破片と一緒に堺の浜へ流れついたことにした。
長慶の手に入るようにお膳立てするのは容易である。
一瞥した長慶は激怒した。
「実休め、わしを何と思うてか。急ぎ呼べ、この手で首はねてくれよう」
三好長慶は、根は温厚な男だ。
乱世には珍しい文人肌の武将だ。強いて、かれに似た武将を他にあげるとすれば、少し時代が下るが、明智光秀ぐらいではなかろうか。
内向型で、平和を好み、人を信じる。
いわば善良な性格である。こうした人ほど、背徳への怒りははげしい。
自分が人を信じるだけに、裏切りが許せないのだ。

光秀も横暴な信長によく仕えた。嘲罵されながらも、よく耐えた。
耐えるだけ耐えた。そのあいだに、憎しみが堆積していっている。
秀吉のような、陽気で小才の利く横着者は、どんなに怒鳴られてもいじめられても、けろりと受け流すから、あとへは残らない。
信長もあとから、
（怒鳴りすぎた）
と、思っても、光秀のほうがかっちりと受けとめて陰にこもっているから、
（キンカ頭め、おれを怨んでいるだろう）
と、ますます、うとましくなってくる。
こうした人間関係は、要領というしかないが、気質から出ているだけに、当事者も変えようはないまま、しこりを残すことになるのだ。
人が好いだけに、
（弟が、おれを！）
おれに刃を向けるなど、許せぬと、長慶は怒った。
（この手で首をはねてくれようぞ）
ただちに急使がとんだ。
実休は寝耳に水だ。わずかの供回りで、長慶の居城飯盛山城に出向いた。
このとき、実休が、
「身におぼえのなきこと」
と、抵抗して阿波にたてこもったら、どうなったかわからない。

当時、まだ長慶の勢力は、三好一統の最高地位にあり、とても敵対できなかったし、全く、おぼえがないことだったので、申しひらきに海を渡ってきたのだ。

それも軍勢を百人でもひき連れてきたなら、城内へ一歩入ったところで包み討ちにされていたろう。

供回りわずか五人。ものの本によると、三人だったともいう。

平服で謝罪にこられては、長慶も刀の柄から手を放さなければならなかった。

「全く、身におぼえなきこと」

と、実休は坊主頭をふりたてて弁明した。

「この書状は、汝れが書いたものであろうが」

突きつけられた密書にぎょっとなった。

全く、自分の筆跡だった。これはいうまでもなく、弾正が祐筆に命じて実休の癖を真似させたものだ。花押もそっくりで、実休自身が眼を疑ったほどだ。

が、文面にはもとより、憶えはない。

「罠じゃ、お屋形よ、これは罠じゃ」

実休はきっと弾正を睨んだ。

弾正久秀は顔色も変えぬ。

（おいたわしや）

とでもいうように、沈鬱な表情をたたえたまま、凝っと控えている。実休はぎろりと、濁った眼をむけて、

（彼奴！）

口走りそうになった。

かろうじておのれを押さえたのは、それこそ、何の証拠もないからであった。

実休を罠にかけ、三好一族を離反、内紛をおこそうとするような狡智の持主は、

（弾正めのほかにはいない！）

と、感じた。

ただ、感じたのだ。口外はできない。

証拠もなしにそんなことを言えば、立場は悪くなる。

好悪の感情しだいで、人間は動かされるものだ。先入観しだいで白も黒に見える。

実休はもともと、弾正久秀が嫌いだった。

自分よりは二十歳も違うようなこの男が無気味でならなかったのだ。

（しゃァしゃァとしおって、どこ吹く風という面じゃ）

歯ぎしりしたいような気持だった。

「――それがしの字ではない」

実休は突っぱねた。

「なんと、わしをたばかるか」

長慶はますます激昂した。太刀を左手にさげていたが、腕もからだも、わなわなしている。

「うぬの字じゃ！」

「………」

「うぬの他の書状と見くらべてみい、どこに違いがある」

長慶は顎をしゃくった。あらかじめ用意されていたのだ。小姓が書状の束を持参した。

もともと長慶と実休の兄弟は千熊丸、千満丸のころから、仲がよかった。書いたものも沢山ある。

実休は、静かにかぶりをふって見るまでもない、と言った。

「いかにも、よく似せてはある」

「なんじゃと」

「似せてはあるが似てはいるがそれがしの書いたものではない。そうではないか、御屋形。三好一族の栄えは、御屋形あってのもので、われら兄弟、手を結んでおればこそ、細川にも拮抗できたのじゃ、なんとして、御屋形に刃を向けようぞ」

長慶は、そうひらきなおられては、疑いの心ももろく崩れてくる。

そこへ大叔父の三好笑岩（孫七郎）が老軀に鞭うって馬を飛ばして来た。

とりなしに来たのである。

「実休が左様な叛心を抱くはずがないではないかの、まずお気を静めなされい」

笑岩が嗄れ声をふりしぼって長慶をなだめるのを他人事のように見ていながら、弾正は、

（失敗したな……）

と、思っていた。

後悔はない。こんどは失敗しなければいいのだ。このときの経験が後年で生かされている。

その〝手〟ではないが、翌永禄四年には、弟の一存の暗殺には成功している。

弟の一存。

これは讃岐の名家十河家を継いでいた。すなわち、十河民部大輔一存である。

強い、というならば、おそらく兄弟随一であろう。名将とか智謀の器ではない。剛力なのだ。

六尺二寸、八十貫余の巨体で、逞しい黒馬を腰で馭し、三間柄の大身の槍を苧（からむし）のようにふりまわして戦場を疾駆する姿は、文字通り〈鬼十河〉であり、〈夜叉十河〉と、恐れられた。

剛毅の男で、生まれつき癇症だった。

小鬢の毛がうるさいといって、大きな毛抜きで、ひまさえあればぴっぴっ、と抜く。

鉢のひらいた、大きな才槌頭がいつの間にかできてしまって、この頭が、また看板になった。

〈十河額〉

と、称して、荒武者どもは、好んで、この風を真似た。

乱世がおさまって、江戸時代になってからも、二、三十年の間、この十河額をつくって、剛強の武辺者を気取る者が後をたたなかったというから、その評判のほどが想像できる。

この十河一存も、また松永弾正久秀をきらっていた。

（三好家の血とは、合わぬ）

殊に、一存は豪傑肌の男の単純明快さで、弾正のような底知れぬ陰険な策謀家は、体質的に好きになれない。

実休の一件がおさまってから、間もなくである。

一存は瘡を患った。

一説によると室ノ津の遊女に移されたともいい、そのころから日本に上陸してきた梅毒の犠牲者だともいう。

ともあれ、一存は弱った。いかに剛毅の男でも病気には弱い。

堺には良医がいる。で、讃岐からやってきて、療治していたが、はかばかしくない。

「有馬の湯がよいそうじゃ」

そういう者があった。

溺れる者の藁だ。湯治にゆくことにした。その話を聞いたとき、弾正は久々に、うす笑いを洩らしている。

(好機じゃナ……)

かれは出発前に見舞いに来たが、一存の愛馬を見て、眉をしかめた。

「御出立の前に、縁起の悪いことを申すようじゃが」

「申されよ、わしは多少のことは気にかけぬ男だ」

「この馬、よろしくない。お取り替えなされませい」

「なんと」

「有馬温泉権現は葦毛の馬をお咎めになりますぞ、よろしくない、お取り替えなされ」

「馬鹿なことを」

「御神意に背いては……」

「信じぬ。左様なことは。わしは十河一存じゃぞ」

気勢を張った。病人によくある無意味な気勢だ。もっとも弾正の言葉に従うのは癪にさわる。

神罰だろうか?

有馬温泉へ行く途中で、馬が狂いだし、一存は落馬した。

その傷がもとで、間もなく死んだ。永禄四年五月一日という。

「――わしが、殺った……」

忍者木鼠は苦しい息の下から、笑いをのぞかせた。

「木下闇を通るところをな、狙うた……なに、手裏剣はつかわぬ、それ、神罰じゃでな……」

蛭――。

山蛭を用いた。

伊賀の忍びノ者は、しばしばこうした小さな生き物を用いる。蛇、蛙、蝙蝠、トカゲ等に、それらの習性をしり、本能を利用するのである。

山蛭の群れが、ばらばらと、葦毛の馬の上へ落ちてきて、馬を狼狽恐怖させ、狂ったような暴走になったのだ。

一存とても、健康なときなら、たとえ、突発的な狂走でも、落馬するようなことはなかったろう。

坂道だった。一存はもんどり打って落ち、肩と腰の骨をはずした。

剛強をもって天下に鳴った十河がみっともない落馬である。

その日から、かれは高熱を発し、有馬温泉に着いたときは、もう頭も上らぬ重病人になっていた。

一存が死んだと聞いたとき、弾正久秀は、

「見たか?」

と、念を押している。

猜疑深い三白眼を、木鼠はぞっとするような気持で思いだした。

「見たろうな、死にざまを」

確信するまで、安心ならない弾正の性質だった。

十河一存の死は、讃岐の十河家を悲歎させた。かれには世継ぎがいなかったのである。

実休の二子存保が養嗣子として十河家に入った。

(こんどは実休じゃ)

弾正は、また、機会を待った。
かれの狡智は、拙劣な焦りをしないことだった。じっくりと機会を待つ。
いかに用意周到な人間でも、四、六時緊張を持続できるものではない。かならず、隙が生じる。
弛緩がくる。
その〝刻〟を待てばいいのだ。
一存が病気になるのを待っていたから成功した。先の実休のときはそうした外的条件がいっさいないままに策謀した。その失敗を弾正は繰り返さない。
機会はすぐ来た。実休は戦さに出た。畠山勢と戦った。
畠山勢とは仇敵の仲といってよい。この戦さは前年の冬、飯盛山城の支城を急襲されて、一族の下野守政成などが討死するという有様で、その弔い合戦でもあった。
この政成の子が三人衆の一人政康（釣斎）である。
実休は総大将として弟の洲本城主安宅摂津守冬康、三好山城守康長、前記下野守政康ほか一族の武将らに軍勢およそ七千余人。当時としては大軍だ。
実休は久米田に布陣して、年を明けた。
和泉国岸和田城に押し寄せてきた畠山高政らと紀州の根来寺の僧兵らを混えた大軍と対峙して、
戦さの様子を仔細に述べている紙幅はない。〔足利季世記〕という本には、奮戦して名誉の討死をとげているように書いてあるが、事実は違う。奇怪な死にざまであった。

世間は因縁話が好きだ。また勧善懲悪を好む。
人の行動を悪か善かにきめつけ、その結果を規定したがる。これは仏教の影響でもあるが、その処世観を肯定したいからであろう。

三好義賢こと物外軒実休は、旧主細川讃岐守持隆を謀殺し、所領と側妾を奪った——つまり下剋上の最たるものと見なすことによって、その末路は、
〝横死〟
せねばならないとする。
三好実休の最後も、世人はそれを望んだのであろうか、〔足利季世記〕という写本によると、実休は久米田の合戦で討死した。
その死にざまは、こうだ。
はじめ優勢であった戦さが劣勢に転じ、三好山城守や下野守の手の者が散り散りになったので、実休の周囲は全く手うすになってしまった。
畠山高政の軍勢がどっと、ここへ攻めこんできた。実休の旗下らは必死にこれと斬り結びながら、
「もはや、支えきれませぬ。ここは一たん落ちのびまいらせて再起を」
と、すすめた。
が実休は、
「否とよ」
と、拒んだ。
「かくなりしは、身のさだめじゃ、いさぎよく死のうぞ」
旧主を殺して阿波の実権を握ったことの、良心の呵責に耐えきれず、悩んでいた実休は、夜ごと讃岐守の夢を見てうなされていたという。

この日の敗け戦さも、悪業がたたって運命が尽きたのだ、と思った。戦塵の中で一首の歌を詠んだ――。

草からす霜又今朝の日に消えて
報いの程は終にのがれず

そして僅か三十人ばかりの一族若党などとともに、大軍の中に突入して討死。首をあげたのは根来衆の任来左京で、馬上での槍交ぜで突き落としたという。

この日の敗戦で三好方の死者二百余人――。

だが、実休は三好兄弟の中でも長慶などより線の太い男だ。下剋上のうしろめたさなど感じるとは思えない。したがって、その〝むくいのほど〟などと詠むような小心さがあるはずがない。

連歌の心得があることは前に述べたが、だからといって精神が公卿によく見るような〝歌よみ〟の柔弱さと断じることは出来ない。当時の戦国武将はたいてい、連歌や茶をたしなむ。

話がそれるが、この実休の討死の報が来たとき、長慶は河内の国飯盛山城で連歌の会をもよおしていた。

すすきに混る蘆のひとむら

という句が出たが、あとをつけかねてみんな思案していた。

実休討死と聞いたときも、長慶は筆をなめて考えていたが、ちょっと待て、と言って、さらさらと付け句した。

古沼の浅きかたより野となりて

――名句として伝えられる。

さて、三好実休の討死の真相だが、

「――わしが、この手で……」

忍者木鼠は言った。

敗戦は事実であった。三好方はばたばたと仆れ、三好実休の本陣は手うすになっていた。

実休は床几に打ちかけ、

「なにとぞして盛りかえさねば」

と、諸将と策戦を案じていた。

〔三好記〕や〔三好家成之事〕などには、このとき、実休の周辺を守っていた諸将の名まで記してある。一宮長門守が実休の傍らにい、まわりに西条、篠原、三木等の武将が取り囲むようにしていた。

つまり、ほとんど隙間はなかった。

もしも〈流れ矢〉があったならば、これらの人楯に当たるはずであった。意志のないはずの〈流れ矢〉が、人楯の隙間を縫い、実休の左胸部に命中したことになる。

これを、たんに〝不運〟とか、〝悪の報い〟とするのはあまりに非科学的すぎるだろう。

「――近くからな、陣幕の蔭から、わしが射たのじゃ……」

木鼠の唇はもう色がなかった。

死に至る者の言や善し、という。地獄への道は善意で敷かれている、ともいう。いままさに死のうとする身が、虚言を弄するはずがない。それもわざわざ、城之介を呼んでだ。

「流れ矢……ということになったようじゃ。それでよい、ともかく実休が死ねば、松永弾正には邪魔者が一人、減ったことになる」

忍者木鼠は、〝影〟である。影は〝陰〟に生きる。その行為の効果だけが成功報酬につながる。

名声や栄誉はかれらにない。
ただ、かれらが手にするのは、
〈役に立つ男〉
というだけであった。
ついでに書いておくが、前述の実休の歌、草からす霜又今朝の日に消えて、報いの程は終にのがれず――は、『応仁後記』によると、草カラス霜ハ朝日ニハヤ消テ報ヒノ罪ハ遁サリケリ。となっている。
御丁寧に、これに弟の安宅冬康が返歌したとして、

報ヒトハ遙カ車ノ輪ノ外ニ
迫ルモ遠キミヨシ野ノ原

とある。これは浄めの歌を奉りしもの、というのだが、どうも後世の作者の作り詰めいている。話ができすぎているのだ。
忍者木鼠が活躍したのは、これらの暗殺ばかりではない。
久米田の合戦につづく、報復戦、三好方の巻き返しが、いわゆる河内教興寺表の合戦だが、このとき松永久秀は得意の謀略をめぐらした。
敵陣営の後方攪乱に、木鼠らを利用したのだ。
いわゆる細作。乱破・透破の活躍である。偽筆の密書を作って、敵陣営に疑心暗鬼を植えつける。
珍しい手ではないが、意外に効果的だ。
味方の将星の逆心に動揺したところを一気に総攻撃をかけて壊滅復讐戦は成ったのだが、これもすべて松永弾正の智略のたまものとして、三好家に於けるかれの地位は、これをさかいに際立

ったものとなった。
人間は多かれ少なかれ、野心がある。野望というほどのことはなくても、望みはある。
その望みに向かって、直接、手を伸ばすのは凡人である。望みをむきだすのは愚人である。
上手な男は、容易に心中を見せない。腹中何を蔵しているのかわからぬ。
松永弾正がそれだった。
かれは主人三好長慶のために尽くした。三好長慶の目的のために縁の下の力もち的努力をした。
それ自体、九十九パーセントまで、誠忠の士であり、その行為自体に嘘はない。
（三好家が大になる）
それは弾正のためにいいことだった。
（三好長慶が天下人となる）
それも弾正のために幸いなことだった。
（長慶が将軍となれば、おれが副将軍となる！）
その構図のために、弾正は智能を絞ったといってよい。
長慶を押し上げて、天下をとらせ、そのあとで、
（そっくり頂く）
そのため努力を惜しまない。
九十九パーセントの奉公に、一パーセントの陰謀である。その陰謀は、長慶は天下人になってもらいたいが、後継者たるべき肉親の存在を許さない――ための、
〝暗殺〟
だったのである。

したがって、弾正が長慶のために働く、という点では、いかなる角度から見ても、ソツはなかった。誰の眼にも不審の点はなかった。中傷のしようがない。むろん中傷や誹謗はあったが、この事実の前には、長慶の胸に猜疑心が起こるはずはなかった。

かえって、弾正を誹謗する者を長慶は憎んだ。

一つには弾正の方が、ずっと歳上だったせいもある。歳下なら、

(次の天下を、この手に)

という野心云々、の見方も出来るが、十三ほど年長であれば、先に死ぬのはどっちだ、と常識的な寿命を考える。

この常識の裏をかいたところに弾正の成功の秘密があるともいえる。

この教興寺表の戦勝は、三好長慶をして、一躍、河内・和泉・大和・山城・摂津五カ国の主として君臨させることになったが、同時に、三好家に於ける松永弾正の地位も、身分は執政にすぎないが、その人望、勢力は、長慶を抜いて、天下に知られるようになった。

むりもない。長慶はまるっきり傀儡になっていたのだ。

実休討死後、高屋・岸和田城も落ちて、城を取り巻かれるという際にも長慶は〝少モ不騒色紙短冊取リ出シ、和歌ヲ吟味シナカラ万事ハ和主(おぬし)ニマカスル也、ヨキニハカラヘト宣(のたま)ヒケル……とある。確かに功は弾正のものであろう。

(あと二人……)

弾正は次の暗殺の胸勘定をした。

(長慶の伜義興をまず殺る。それから、弟の冬康を片付けねばな)

忍者木鼠の仕事だった。

暗殺も容易ではない。

大別して二通りある。ともかく殺せばいいという場合は楽だ。

他殺と思わせずに、殺す——これが容易ではない。

三好長慶は、伜の義興を愛していた。

かれが幕府に出仕して御相伴衆に取り立てられ、修理大夫に任じられると、子息孫二郎慶興は筑前守に任じられた。長慶が望み、要請したのであろう。

孫二郎慶興はついで将軍義輝の一字を賜わり、義長と称したという。翌永禄四年、義輝が長慶亭を訪れた際のことが、〔細川両家記〕に記してあるが、それによると、義長は筑前守義興となっている。いつ改名したのかよくわからない。

ともあれ、義興は、長慶にとって目に入れても痛くない伜であり当然、三好一族の筆頭後継者と自他ともに認めていた。

それだけに、松永弾正にとっては、邪魔な存在だったのである。

「あせらず、ゆるりとやれ……弾正どのは、左様に申した、ゆるりと、ゆるりと……目立たぬようにな、と」

自然死——病死である。

一年ちかく、かかっている。教興寺表の戦さ後、義興は急激に軀を悪くし、連日、吐瀉や下痢がつづき、まるで体質が変わったように病身になった。

「水あたりであろう、戦さ場で飲む水は死人水というて、濁りがある。若者は水あたりすることがある」

水あたりなら、一時的だ。義興の場合、ひと月ふた月と続き、慢性のようになって、めっきり

と衰弱してきた。

　若者が衰弱して痩せほそるのは見るも哀れなものだ。その上、悪いことに永禄六年の春になると京都に春雷が荒れ狂って落雷や火事が多く、東寺の塔も雷火に罹った。

　こうした天災が、義興の奇怪な病状と結びつけて人々を不安に陥れたのは、不運というしかない。三好家の勢威そのものへも、庶民の反感がむけられて、

〃是ハ三好家余リニヲコリ（傲り）ヲ窮メ、天下ニ威勢ヲ震ヒ給フ故ニ天道ハ盈レハ闕ルナラヒナレハ……〃

と見られてもしかたがない。

　一喜一憂されて義興はどうやら春がすぎ、三伏の酷暑を持ちこたえたが、爽涼の秋も、もはや義興を恢復させる力はなかった。

　何の毒物を投与されたのか、義興の顔は黄いろくむくみ、眼が濁って、しきりと水を欲しがった。

「黄疸じゃナ」

と、医者は判じた。

　義興が危篤と伝わると、京の公卿たちの間では陰陽師に祈禱させたり、内侍所ではお神楽をあげて病魔退散を願った。

　病魔は退散するかもしれないが、忍者の細作を発見できなければ、毒物投与を止める手だてはない。

　義興は八月二十五日に、悶死している。

（次は……冬康を殺る！）

　弾正は哀憐の表情の下で黒い笑いを洩らした。

　忍者赤目ノ木鼠による暗殺——松永弾正の狡智は、その教唆も、毒の投与の尻尾もつかまれることはなかったが、人の為ることは、人の眼を免れることはできないのか。

〃如何ナル故アリテヤ、近ク召仕フ輩ノ内ヨリ食物ニ毒ヲ入テ奉リ、カク逝去アリト後ニ聞コエケリ、又松永ノワザトモ申シケル〃

　世間はひそかにそう噂した。

　松永弾正は鼻先きで笑った。

「わしを引きずり落とそうとする者が流した噂であろう」

　そして、こうも言った。

「さような噂を流した奴こそ、怪しいの、そやつを探さねばなるまいの」

　噂は、消えた。

　もっとも哀しんだのは父の長慶である。かれは、その後めっきりと衰えてきた。

　十河一存の子、義継を養嗣子にした。が、義継は非才であり、義興に及ぶべくもないので、長慶の心は晴れなかった。

　長慶が政務をなおざりにしはじめたことにより、三好一族の三人が、合議して行なうことになったのは、そのころからである。

　これが三好日向守長逸、同下野守政康、岩成主税助友通の三人で、三好三人衆といわれる所以だ。

　この三人を表面に出すことで松永弾正は世間の風当たりを避けている。むろん計算の上。三人に栄誉と権勢を与えていると見せかけて、その手綱はしっかりと弾正が握っていた。

弾正は多聞城のおのれの居城と長慶の飯盛山城とこの堺と、三カ所を往復しては地盤を固めていた。
　弾正が安宅摂津守冬康の抹殺に手を用いはじめたのは、義継が長慶の後嗣子になったころからである。その祝いの席で、冬康が席次のことで言い争った。
　冬康に、
〃叛心アリ〃
の流言が洩れ水の床を浸すようにじわじわとひろがって、長慶の心まで浸し、それがまぎれもない事実とまで思いこまれるところまで、弾正は直接の手を下そうとせず、ひたすらに、
〃反間〃
の策略を用いたのである。
　孤立した冬康は、申しひらきのために飯盛山城に伺候したところを長慶自身の手で誅戮された。
〔三好別記〕には異説がある。
　誅戮は摂津の芥川城で、手を下したのは吉成勘助、命じたのは三好三人衆だという。むろん孤身ではなく数百人の一族郎党が随行したが、みな殺しにされたという。
　こうして長慶は、巧妙な策謀にかかって、血縁を次々と失ってゆき、しまいには、おのれまで毒蜘蛛の巣の中で逃れられず死を迎えねばならなかった。
「長慶どのも、もはや死んでいる……わしがやはり毒をまいらせたのだ、が、三好一族のためにと称して、喪を秘めている……」
　赤目の忍者、木鼠のそれが最後の言葉だった。

炎

　弾正久秀は上機嫌だった。
「この鉄砲百挺はもともとわしのもの」
と言い、南蛮屋に人を走らせた。
「つらつら案じるに、この鉄砲はわしの注文で、十兵衛が肥前平戸から購うてきたものらしい。梵天丸の沈没により、人の手を転々としたが、やはり、わしの手に入った。これを天の配剤と言わずして、何と言おう」
　運が強い、と我ながら、弾正は思った。
「天、わしに助力賜わる証じゃ、この機をはずさず……」
目的のためには、どこまでも非情になれる、ということは、必要なものには、惜しみない犠牲を払う。
　南蛮屋に代銀の半金を支払ったのは、自分が正当な受取人であることを確認させるためであった。
「十兵衛が生きてあれば、すべてが判明しよう。死んだという確かな話もない以上、どこぞに生

きているかもしれぬ。もし戻ってきたら、これがその鉄砲と判ったならば、後金は払おうぞ」
南蛮屋では感激した。
弾正は、翌日にはこの話が堺中にひろがることを予測していた。
（何をするにしても、堺の納屋衆どもを味方にしておかねば）
商売人相手では、何よりも吝(しわ)いことがマイナスに作用する。
弾正の人気があるのは、これら納屋衆をはじめ堺の人々に、儲けさせることで、誰よりも理解があったからにほかならない。
「——ともかく、彼奴が悪心をおこしていたことがわかっただけでも幸いであった」
手飼いの忍者赤目ノ木鼠が、息をひきとるまでに、秘密のすべてを城之介に話したとは知らぬ弾正は、
（かえって、後くされなくしてよかった）
と、思っていた。
（おれが刺した一突き……名医でも一命をとりとめることはできぬはずだ）
すべての片がついた、と思っていたのである。
城之介は政所へ戻っても、木鼠のことはおくびにも出さなかった。
この乱世にあって、主といい従というも、君といい、臣というも（あてにならぬ……）という感慨が深かった。
単純では生き難い。
乱世のきびしさ、裏の裏をのぞいた思いだった。
ことに、

（松永弾正という男は……）
ある種の尊敬さえ抱いていたのが、微塵に砕けた——。
（権謀の鬼だ！）
そこまで非情冷酷になって得る〝天下ノ権〟とは一体何なのだ。
城之介にはわからない。
はっきりしていることは、この松永弾正の傍には一刻でも居たくないということだった。
「弥九郎、おれは、この堺に居たくない」
と、城之介は言った。
「ふうん、わからんこともないで、始めから、ええことなかったによって、何処へ行く？」
「堺を出るのなら、わいも行こ」
小西弥九郎も、うすあばたの頬をなでて、すぐに賛成した。
「わいも、この町は、評判悪いねん、好えこと無しや、何処ぞ、おもろいとこに行きたいわ」
「おれは、まるっきり知らぬ。畿内のことは……」
「ほなら、まかしとき」
あまり頼りになりそうもない小西弥九郎だが、はじめて本土をふんだ城之介には、唯一の友人だった。
「あの女ァ、どないするねん」
「——連れてゆこう」
と、言ってから城之介は思いだした。
「夕月は京生まれだと言っていた、京へ帰りたいだろう、京へ行こう、一緒に行こう」

「そら好え、京には美い女が仰山いるでえ、なんせ足利将軍のお膝もとや」
またにたりとした。
城之介たちは政所へ戻ったことを悔んだ。
鉄砲百挺が入手できたことで、浜辺の殺人も城之介には無関係とわかって、堺の町衆も容疑を解いている。
(弾正には言い出しにくい)
弾正の方では、城之介と夕月に肩入れするつもりになっている。
有難迷惑だった。
(あんな非情な男とは……)
おのれの目的に忠実なあまり、邪魔者は次々に殺してゆく。その野望にとって、城之介は今は邪魔者ではないが、いつ、殺られる立場になるかわからない。
忍者赤目ノ木鼠に秘密を聞いたことが、もし知れたら、とても無事では済まない。
(どうやって逃げだすか)
なまじ嘘を吐いて、口実をもうけても、弾正の炯眼は、すぐに見破ってしまうだろう。
(夕月と相談しなければ……)
困ったことに、弾正は夕月に興味を持ちはじめているらしかった。
その夜も、夕餉の給仕をさせて機嫌よく談笑していた。
「――そうか、京へ帰りたいか、九州の肥前くんだりから戻ってきたなら、殊にそんな気持になるのも、無理からぬのう」
「ほんに、夢のようどす。なんせ、九州の肥前といえば、遠い遠いとこどっしゃろ」

「知っている……」
「え?」
夕月は、手を休めて弾正を見た。
ふとく長い眉の下の、くぼんだ眼が、遠くを見ていた。思い出しているのだ。
「むかし……行ったことがある」
その眼には、この野望のかたまりのような男が、はじめて見せた心の和みがあった。
むかしを懐しむような……その眼の中には、どんな思い出が描かれていたのだろう。
「むかしな……ずっとむかしだ」
「十年くらい?」
「いや、もっとだ、二十年ちかくになる」
しみじみとした語調である。
春の夜の静けさが、この広い政所を包んでいた。
沈黙がくると、その静寂が痛いほど強く感じられるのである。
「――好きな女がいた」
弾正久秀は、ぽつりと言った。
まさか、この男の口から、そのような言葉が出ようとは思わなかった。
非情そのものの松永弾正久秀である。
政権への野望は巧妙に隠蔽はしていても、三好の執政としての手腕には、他の追随を許さぬものがある。
沈着冷静、決断に富む、戦国武将たる評判の弾正久秀にそのような情のもろさがあろうとは。

「――そのころのわしは、若かった。一本気であった……」

弾正久秀は、遠いむかしを思い出している。

「女がいた……」

「……」

「お秋という名だった、よい娘であったが、吉利支丹にかぶれてのう」

「まあ、吉利支丹に！」

「人が変わった。信仰の力は恐ろしいものじゃ、わしのすることなすこと、すべてが、神がお許しにならぬというてな、夜の床まで共にせざるようになった」

「……」

「お秋は、わしを信ぜず、黄金のクルスを信じるようになった。いつも首にかけてな」

「首飾りを？」

どこかで見たような気がした。

夕月は、あっと、思った。思いだした。あまりに近すぎたのでうっかりしていたのである。城之介が肌身離さず、黄金の十字架を首にかけているではないか。

「――そうじゃ、城之介もかけているのう」

と、弾正はうなずいた。

「よく似ておる。首飾りのクルスはどれも同じようなものであろう。城之介はなぜ掛けておるのかな、吉利支丹ではないようじゃがのう」

「きれいやさかい……」

と、夕月は女らしい見方をした。

この堺でも、銀や金のコンタツを首にかける女たちがいる。十字架も異国趣味としておおらかに受けとめているのが、この堺のよさかもしれない。

城之介の黄金の十字架を見せてもらったとき、字が彫ってあった。たしか、

マダレイナ

と、読めた。

平戸の娼家にはいろんな客が来たから、十字架の名がどういう場合に彫るものかは、知っている。

(マダレイナ……聖母さまの生まれた土地の名で、聖地ゆえに、信仰のしるしに、洗礼名とするひとが多いそうな)

口数の少ない城之介は、何も語ろうとしなかったが、そのマダレイナの字だけが記憶に残っている。

「その、お秋さまとやらは、吉利支丹になったのなら、洗礼ということをなされたのでございましょうね」

「むろんじゃ」

「では、洗礼名はどのような」

「うむ……忘れた。異国の言葉はおぼえにくい。おれに必要なのはおぼえるがな、たとえば、ムスケット銃なぞは」

とかわいた声で笑い、弾正はじっと、夕月を見た。

夕月のおもては、ほんのりと上気して、甘い女の肌の香が匂うようであった。

南蛮屋の梵天丸で、平戸からくる途中、瀬戸内海で海賊に襲われ、梵天丸は爆破、怒濤の中を

半死半生で、城之介に救けられながら、淡路島へたどりついたが、島民の好意で、堺へついたとたんに、こんどは無頼者八人の毒殺容疑で入牢――。

運が悪いとあきらめきれない波にもてあそばれて、それらもやっと疑いが解けて、白日の身になった。

ほっとした安らぎが、これまでの苦労も一ぺんで忘れさせた。

若いということは素晴らしい。夕月は気も心ものびやかになって、それが全身にゆたかな女の色香を満たしている。

（ここまでくれば、京は、もうすぐなのだから）

いつでも帰れるのだ。地つづきだというだけでも気が休まる。堺の町の殷賑ぶりも、孤立感や寂寥をまぎらしてくれる。

その夕月の美しさに、弾正久秀はあらためて、眼を見はらされたようである。

いつになく、しんみりと、昔の女のことなどを口にして、心が和んだあとだけに、冷酷無情といわれる弾正の心にも、甘い情感が泡立っていた。

「美しいな、そなたは」

と、弾正は言った。声がかすれている。

「お秋さまは」軽くそらすように夕月は応えた。「あたくしなどより、ずっと、おきれいどしたんやろ」

「――情強（じょうこわ）な女だった。いや、吉利支丹にかぶれて以来、女でなくなった。わしは、平戸を捨てた」

「……」

「わしも、人間が変わったかもしれぬ。女のことは忘れた。女には惚れぬ男になった。わしの生

甲斐は天下の……」

言いかけて、さすがにそれと気づき、口をつぐんだ。

夕月は黙って盃に、酒をそそいだ。

ずっとやめていた酒を、ふいに、今宵は飲もう、と言いだしたのである。少量でも、久々の酒は弾正久秀のからだにまわって、酔いを早めたようだ。

（わしの生甲斐は天下をこの手に奪ることにある。女のことなど眼中にない）

そう、心につぶやいている。

だが、忘れていた情感がゆるやかに痩軀を浸し、目の前の夕月があでやかな花が開いたように感じてくると、

（いかんな……わしは、いま何を考えているのだ？）

傾城傾国の美という。

城を傾け、国を動かすほどの美貌があろうとは思わなかった。

これまでの弾正は、おのれの力を信じ、天下への野望が、すべてであり、女色の欲望は一時の排泄作用にすぎないと思っていたのである。

（この女に、わしが……馬鹿な、わしは女に惚れぬ！）

（女には惚れぬ！）

そう自らに決意をもとめることは、そのおそれを感じているからではないか。

（一々、女に惚れていては、天下の大事をなすことはできぬ）

女々しくなることが、命とりになる。男にはきびしい時代である。

女を抱いても、女には惚れぬ。

それしかない。
（抱いてしまえ！）
命令する声が、うちにある。
（抱いてしまえば、それきりのことじゃ、すぐに忘れることができよう……）
夕月はそうした男の欲望に気づかぬような顔で、酌をしている。
その落ち着いた態度が、普通の娘や人妻と違っていた。
酌をする手つきにも、色気がある。少し横坐りになって、はふり髪をうしろでたばね、背に垂らしているのだが、額から耳のあたりの切り髪が、身を傾けるたびに、頬にかげをつくって、すくいあげるように弾正の表情をうかがう。
身についた動作で、別段の意味はないのであろうが、男心を妙にそそる。
そそられるような気がするのも、あるいは、
（酔ったのかもしれぬ……）
弾正久秀は陶然としながら考えた。
思考の周辺がぼけて、一つところを堂々めぐりしているようだった。
夕月の顔が、姿が、ぼんやりと輪郭がうすれて、別の顔が浮かび上ったような気がした。
（お秋だ、お秋ではないか？）
いや、お秋がこんなところにいるはずはない。
そう思うと、その顔が、城之介になった。
（城之介？）
はてな、と考えたのである。この一種の幻覚は、短い時間だったにもかかわらず、弾正久秀の

頭を奇妙にとらえて、混沌にひきこんだ。
「——おとのさま」
呼ばれて、ふっと、さめた。
（夢を見ていたようだな）
立っていたなら、立ちくらみしたかもしれぬ。このごろ、時々、こんなことがあった。
「うむ、いや、何でもない」
盃はからになっていた。
夕月がつごうとするのを、いやもうよい、と下へ置いた。
「夕月」
「はい……」
「美しい」
これへ、と招いた。
酌をするために、近くにいる。これ以上、近づくのは、特殊な場合だけだ。弾正は、とろんとした眼で、
「夕月」
と、また言った。
かすれた声に、男の欲情した匂いがした。その匂いは、なぜか嫌なものではなかった。夕月が、
（いけない！）
と、抵抗したのは、魅入られたように、ずるずると、弾正のほうへもたれてゆきかねない自分自身の情念への、戒めだった。

「美しいな、そなた。好きになったようじゃ、悪いか？」
手を差しのべた。
松永弾正久秀は、痩せてはいるが、骨が太い。
浅黒い顔に、鼻が高すぎるほど高く、眼の光りがきつい。それは時に、凶々(まがまが)しく光り、時に、深い淵をのぞき見るときのような、謎めいた奥行きを感じさせた。
尋常の男ではない。
うす気味の悪さとともに、一介の牢人から成り上って、天下の三好家を牛耳るほどの執政にまでのぼった〝男〟の魅力といったものがある。
あるいは、夕月が、そうした強さを、この男に感じたのも、平戸で多くの男を客にとったせいかもしれなかった。
老若を問わず、あらゆる階層の男を、肌で知っているだけに、若くても夕月には、どこか年齢以上の落ち着きがある。
まるきり男を知らない処女はいうまでもなく、一人の男しか知らない人妻などよりも、〝男〟というものの、裏も表も知りつくした女には、それなりの体験の強さが、ある種の自信を育(はぐ)くんでいるともいえる。
「好きになっても、よいか」
真正面から、弾正にそう言われて、
「忝ないお言葉でございます」
と、応じられたのも、その強さのせいだった。
「でも、あて……あきまへんのえ」

無意識に身をくねらせて夕月は頰を染めた。
「平戸で、十兵衛さまに買われた身どすよって」
「南蛮屋か……」
「大金どすさかい、かえせまへん。それに、十兵衛さまは、生きているか死なはったか、それもはっきりせえへんのやよってに、あての軀であてのもんやおへん」
梵天丸は沈んだ。
城之介とこの女だけが助かっている。もしも南蛮屋十兵衛が生きているなら、当然、もう戻ってくるはずだ。
たとえ、どこか負傷したとしても、連絡があるはずだった。
(奴は、もう死んでいるにちがいない……)
それを口にしなかったのは、弾正久秀の老獪さである。
「わしが買おう」
と、言って出た。
「十兵衛には、わしから話す。それならよいであろう」
「……」
「わしは、そなたを金で買いたくはなかった。が、やむを得ぬようじゃ、それでよいのであろうな」
思いきった言葉に、夕月は唖然として、すぐに返事が出来なかった。
「まいれ」
操られるように、夕月はにじり寄っている。
平戸を出てから、城之介も手を出すのは控えていたし、ずっと男の気なしで過ごしていたのだ。

夕月の女の肌が微妙に疼いている。理屈ではない情感だった。弾正久秀の軀から男の臭いがあふれ、夕月の女をとらえた。

弾正の手が、女の腕をつかんだ。

夕月のからだは柔らかく弾正の胸に崩れた。

回廊の入側(いるがわ)で足音がしたのはそのときである。

「申し上げます」

姿を見せず、声だけした。近習である。

「なんだ」

思わず手がとまる。

「湯殿の支度が、ととのいましてござる」

「風呂か……」

大事なときに――。

「わかった」

松永弾正は舌うちしたいような気持で、

うるさげに顎をしゃくった。

夕月も眼がさめたように身を起こし、座をひいて、衣紋をなおしている。

雰囲気をこわされて、弾正はいまいましい気持だったが、しかたはない。

さすがに、思いきりよく膝を起こしたのは、老齢のせいである。

「湯に入ろう」

と、夕月に言った。

「蒸し風呂じゃ……」

一緒に入ろうぞ、と言いかけて、

「垢を」

「……」

「垢をな、掻いてくれぬか」

「あの……」

「ははは、羞ずかしいか。なに湯気のこもった中じゃで、どうということはないわ。あとからまいれ」

「――はい」

「ほどよく蒸れたころにの」

弾正久秀は痩せているが背が高い。高髷が鴨居につかえそうになる。

脱衣を手伝わねばと夕月は思った。食客とも何とも説明のつかない奇妙な立場なのだ。

出しゃばってもいけない。身の回りの世話をする者はいる。それでも〈垢かき〉を弾正がのぞんだのだから、あとから湯殿に行かなければ。

蒸し風呂の場合、たいてい腰のものだけまとって入る。上半身はだかである。

弾正の眼に裸身をさらすことが何を意味するか。

(南蛮屋十兵衛どのに悪い……)

そう思いながらも、夕月は弾正久秀の魔力にかかったように、湯殿へ行く気になっていた。

娼家で過ごした歳月が男の情意には、敏感に反応するのか。無抵抗になるようにならされていた。

好き嫌いの意識の外である。
金しだいで肌の切り売りをする女は、金力に弱い。感情の潮にもさからえない。からだが引きずられてしまうといっていい。
夕月は、湯殿へ行くために立ち上った。
回廊へ出てから、渡殿へさしかかると、
「――夕月」
ひそめた声が、
「おれだ、城之介」
網代垣のところから顔がのぞいている。
「あれ、なんやねん、そないところで、何を」
「御家来に見られてはまずい」
と、あたりに気を配って、
「逃げるのだ、ここから」
(逃げる?……)
夕月には、意味がわからなかった。
少なくとも、そのときまで、この松永弾正久秀のもとで、危険を感じてはいない。
「逃げるって……どうして?」
「話はあとだ。さ、早く」
「でも……」
「京へ行こう、故郷へ帰りたいのだろう?」

「ええ、それは」
促されるままに、渡殿から下へおりた。
城之介はちゃんと、彼女の草履も持ってきている。
夜のなかに、甘い匂いが溶けている。沈丁花だろうか。
城之介に手を引かれて、脱け出すまで、夕月は夢見心地だった。
「あの、弾正さまは、いまお湯殿にお出でやさかい……」
「それだから、都合がいいのさ」
「でも、黙って、ぬけ出すなんて、なんや、足ぬきのごとあるもんね」
くすっと笑った。
京生まれだが、九州へ流れて、何年か、肥前訛りが飛びだしたり、そのときどきの感情で、いろんな調子になる。政所の脇門から出てゆく二人を、門番は何の不審も感じないように、
「気ィつけてお行き」
と声をかけた。
小路を塀に沿って出はずれたところに馬が三頭。小西弥九郎が身を起こした。
「どや、早手回しやろ、ちょいと調達して来よったねん。せやけど夕月は馬に乗れるのかいな」
「ええ、走らへなんだら……」
「そないこっちゃろ思うて、温和しい馬を探して来たん。この栗毛は六歳や、走れいうたかて、よう走らんわ」
なかなか気のつく弥九郎だ。
弥九郎は馬に乗ると、長柄の籠提燈で道を照らし先に立った。

あまりゆっくりも出来ない。いつまでたっても夕月があらわれないので、弾正がいきり立って、探させるにちがいない。

弾正の怒りは、常人では考えられない烈しいものだ。

夕月は鞍の上に横坐りになって馬を進めながら、それを思うと背すじが冷たくなるほどだった。

(なぜ、ちゃんとことわって、出ないのかしら……)

城之介たちの気持が、よくわからなかった。

京へ行くといえば、引きとめはしないだろうに。

弾正久秀の残忍な行為の数々を夕月が聞いたのは、浪速の大坂をすぎ、淀川沿いの道まで来てからだった。

「ほんとうかしら……」

「信じられないほどだ。だが、あの忍びノ者を殺したことは、この眼で見た。並のやりかたではない」

「そやけど、その怨みで、弾正はんの悪口を……」

「そうも思った。が、聞けば聞くほど、本当らしい。とにかく、一緒にいないほうがいい、それで急いだのだ」

「君子危うきに近寄らず、や」

弥九郎はへらへら笑った。

「なに、出ていったと？」

門番から、夕月と城之介が連れ立って外出したことを聞いた弾正久秀は、下帯一本の赤裸で、

足踏みして怒鳴りはじめた。

「たわけが、どこへ行くのかも聞かざったのか」

「は、はい。何やら、気軽にそこらへお出になるような按配やよってに」

叱りつけてもしかたはない。

すぐに家臣らをして八方へ走らせた。堺の町には、出入口のはね橋のたもとに木戸があるし、海側にも番屋がある。

報告があった。三人が馬で町を出たという。

「うぬ、わしに一言のことわりもなく……」

なぜ、無断で逃げたのか？

かれ自身、理由がわからなかった。

(あれだけ、厚遇してやったのになぜ、わしをないがしろにしおったのか)

忍者赤目ノ木鼠を刺したことであろうか。

おのれが傭った男を、おのれの手で刺す——それが恐怖せしめたのか？

(まさか、そのようなことはあるまい。彼奴はわしを裏切った、裏切り者じゃ、そのことはかれらも目のあたりにした。わしを非道とは見るまい)

逃げた、理由がわからぬ。

ともあれ、追跡させたのだが、家来たちにしても、三人を追う理由が見当たらなかったのだろう、ほどよいところで切り上げてもどってきた。

「どこにも見当たりませぬ」

「逃げ足の早いやつでござりまする」

などと口々に言うだけだった。

釣り落とした魚は大きい。弾正の失望落胆は少なくなかった。

(美い女だったな……)

夕月の肢体には、熟れたうまみが感じられた。

(あのまま、おさえこんでもよかったのだ)

それをしなかったのは、たかをくくったというより、夕月への思いが、意外に深かったのではないか。

(——いや、わしは女に惚れる男ではなかったのだ)

弾正久秀は、自分の心を否定した。

(あんな女は何処にでもいるわ。それよりも、城之介じゃ。あいつは、なぜか他人のような気がしないのだが……)

ただ、そんな気がするだけなのだが、それが、何に由来するのかはわからない。

(わしが、あのくらいの子がほしいからか？)

ひたすらに、天下の権力を望んで、家族のこととか、人間の安逸とか考えもしなかったのだが、やはり老齢かもしれぬ。

(なんの！　わしに老齢なぞあるものか)

弾正久秀は、事実、年齢は忘れている。忘れていることが、かれの若さなのだ。

堺の内外に散ったかれの家臣はその夜、意外な知らせを持って戻ってきた。

「南蛮屋十兵衛が戻ってまいりました」

「南蛮屋が……」

まさか、と聞いたとたんに、疑った。疑う理由はない。唐突すぎたのである。

「十兵衛が戻ってきたのか」

不死身といわれた男だ。鳴門の渦潮にも巻きこまれず、帰ってきたのだ。

「——めでたいの」

と、弾正久秀は言った。

「地獄から生き還ったようなものじゃ。わしが左様に申していたと伝えるがよい」

「かしこまりました」

「れいの鉄砲の件もある。もしも話せるような状態であったら、仔細聞いてまいれ」

その話の中に、夕月と城之介が出てくるに違いない。それが、行き先の手がかりになるかもしれない、と思った。

夕月が京生まれであることは聞いたが、それ以上は知らぬ。長い航海の間に、十兵衛は聞き出しているのではないか。

その家臣が戻ってくるまでの間、弾正久秀は、れいの鉄砲にゆっくりと眼を通した。

長さに比べて重さも日本製より軽い。見るからに精巧そうだ。中の一挺は、伊予御前の美沙と名乗る女が試し撃ちしている。

それが百挺。

火薬も弾丸も揃っている。

(これがあれば……)

弾正の胸は、また野望でふくらんでくる。

(天下はわしのものじゃ！)

国産の命中率の悪い鉄砲を持たせた足軽らには、盲撃ちに近い一せい射撃をさせ、この舶来品は、腕のいい鉄砲組みをして狙撃用とさせる。

威力が二倍三倍になるわけだ。

（目立たぬように運ばねばならぬな。そして、機会を見て、一度に攻める！）

それを思うと、痩軀に血がみなぎるのだ。

野望には常に、才智と戦力が要る。その〝力〟は、たとえば城之介のような若さと、恐れを知らぬ不逞の心が支えるのだ。弾正はいま、一人でもそうした〝力〟が必要だった。

かれには、沢山の家臣がいるが、

（心を許せる者は、一人もいないのだ）

時折、ふっと胸に空洞を感じるのである。

人を猜疑し、暗い欲望のままに生きてきた生涯は、心の友も一人も持つことがなかった。それを心の弱さとして、否定してきた弾正だったのである。

半刻ほどして、南蛮屋から戻った家臣は、

「十兵衛どのは足に傷を負うておりました」と、報告した。

梵天丸の爆発の際、負傷したものだという。ほかに助かったのは手代が二人。その一人は八丁徳という。

流れついたのが阿波で、傷養生をしていたために遅れたということだった。

その上、注文の鉄砲玉薬は海賊に奪われたということもわかった。弾正は、あの伊予御前の顔を思い浮かべた。

（あの女、海賊だったのか）

花の御所

城之介たちは二日目の夜を伏見の深草あたりで過ごした。

雑木林の中に、何かのお堂を見つけて、夜露をしのいだ。

「夕月の家はどの辺や」

「七条としかおぼえていません」

「七条いうたかて広いやろ、わかるやろか？」

京は度々、兵火にあっている。

大路小路は平安京以来、さしたる変わりはなくても、家や建物は戦さのたびに、焼かれたり打毀されたり、住人たちも変わっていよう。

第一、そのあたりに家があるかどうかもおぼつかなかった。

故郷が近づくにつれて、夕月はその不安でいっぱいになって、横になっても眠れぬ様子だ。

そんな様子を小西弥九郎は何と思ったか、

「どうも眠れへん、そこらを小半刻ばかり、馬を飛ばしてくるよってに」

と、出かけた。

（気を利かせたのだ）

夕月にはわかった。

若いくせに、弥九郎は情事に通じている。その点、城之介の生硬な青年気質と相対的で、夕月の女のからだが、何をもとめているのか、眠られぬ動きからも察したのではないか。

馬蹄の音が林間の小道を遠ざかるのを聞いてから、夕月は身をおこした。

暗くせまいお堂の中は、埃っぽくて、荒れきっていた。阿弥陀様でも祀ってあったのだろうか、それらしいものは、何一つない。

屋根も破れ、雨が降ったら、寝てはおれないだろう。見上げるとうるんだ星屑が優しく見おろしていた。

「城之介さま……」

小さな声で呼んでみた。

すやすやと寝息が聞こえる。暗い堂内で、顔を近づけなければ、表情もわからないが、夕月はこうして二人きりになれたことに安らぎと、喜びを感じていた。

梵天丸の中でも、多勢の眼があったし、南蛮屋十兵衛に身請けされたという負目があった。堺へ着いてからは、あわただしく逃げまわったり、一刻の放心も許されない時間だった。

さらには松永弾正の〝温かい檻〟であった。

こうして深沈たる夜の底に二人きりになってみると、こしかたが、悪夢でも見ていたかのようにふりかえられるのだ。

漸くにもたらされた静けさのなかで、城之介は眠りをむさぼっているのであろう。

夕月は起こすにしのびなかった。せっかく得た安らぎを奪うような気がした。

眠りの妨げにならぬように、そっと身を横たえると、この幸福のなかに自分も浸ろうとした。

（夢うつつでもいいから……抱かれたい）

男のそうした行為を知っている夕月は、かすかな期待を抱いた。

戸外で足音が聞こえたのは、その直後である。

「――ほう、馬だ」

男の声がした。

「――林の中に、馬が二頭……」

と、別の声がした。

「誰ぞわしらにくれるというのかいな」

これも別の声だ。

夕月は耳をすまし、軀を固くした。城之介を起こそうと思ったが、手が動こうとしなかった。

外の声は、

（三人……）

と、聞いた。

が、実際はもっといたのである。

野伏せりか、土地を離れた農民か。どちらにせよ、男たち数人ということは、警戒しなければならなかった。

世の中がこう乱れてくると、身分もへちまもない。人間は規律するものがなければ、野性にかえるものだ。

たとえ管領、将軍の家臣でも、宮仕えの北面の武士でも、人目と阻むものがなければ、刹那の

欲望をとげようとする。

ものを盗むくらいは、日常茶飯事であった。

(もう京まで、いくらもない)

これから先は歩いていってもいい。

馬を盗まれるくらいなら、がまんできる。

外では、がやがやと野放図な言葉を交しあっていた。

「面妖じゃな、放れ馬でもないわえ」

「放れ馬なら、こない温和しゅ、草を食うてはいないがの」

「そやそや、こりゃ持ち主があろうて」

「持ち主があろうとなかろうと、道に落ちていたものは、見つけた者が勝ちやないか」

「落ちていたのか」

「ああ、おれが拾うた」

「馬を拾うたか」

「ああ、チットばかし、大きいがの。持ち人が居らんよって、つまりは、落とし物ちゅうわけや」

「ふうん、どでかい落とし物やなあ」

「持ち主が居らんよってに、落とし物やないか。さ、鹿蔵、われはそっちの葦毛や、わいはこっちゃの栗毛や」

どうも声の様子では五、六人らしい。馬をとったやつはいいが、残りの者は、なんだか損をしたように感じたのであろうか。

「待て待て、おぬしらは好え拾いもンしよったが、わしらのほうはどうしてくれる」

「なんぞ、その堂内にあるかもしれん、勝手にさがせやい」

「なるほどな、ちぇッ、あっても死骸くらいのものじゃろ」

声が近づいた。

逃げ隠れするところはない。

もう駄目だ。夕月は城之介をゆり起こした。

「城之介さま、起きとくれやす、変な男たちが……」

「なに?」

眼がさめた。

が、突然のことで、咄嗟に何がなんだかわからない。濡れ縁に上ってくる音がした。夕月はあわてて、城之介の背後に隠れた。

破れ戸が開き、松明のあかりが堂内を照らした。

「ほう……こっちは人間さまが落ちているわ、女のな……」

「何者だ」

城之介は刀の鯉口をきった。

「入るな!」

不信と警戒がそう叫ばせたのだが、この夜の無頼者たちには、かえって、口実を与えたようなものだった。

「ほう、入っちゃいけねいかの」

「おめいの家かの」

「ふふん、立派な御殿だァな。入っちゃいけねいとよ」

嘲るような笑い声で、がやがやと雁首が並んだ。驚いたことに、五、六人いる。いずれも無精髭に小具足をまとったり、半裸の男たちだった。

着ているものも雑多な野伏せりと見える。槍も刀も拾い物であろう。眼だけが獣めいた光りを放っている。

空腹のときの獣の目だ、と、夕月は思った。

だが、獣のほうがまだ、始末にいい。獣はただ空腹を満たすだけだ。男は違う、空腹でも、色気は別だ。色と欲が良心を抹殺してしまった男は、野獣よりも始末に悪い。

白昼ではとり澄ました男も、夜と闇の中では獣になる。

（六人……）

と、城之介は数えた。もう、はっきりと眠気はさめていた。

（声を出しても、人里は遠い。とても誰も助けには来ない）

なぜだろう。一眠りしたあとだったからか。城之介は小西弥九郎のことは忘れていた。

弥九郎は眠れぬままに——というよりは夕月の気持を汲んで馬を走らせている。

妙な機縁で、同行しているが、城之介の気持の底には、夕月しかいなかったのだろう。乱世の若者には、その非情さがある。むしろ、弥九郎のことを思い出さなかっただけ、男らしいといえようか。

「夕月」

と、城之介はささやいた。

「イザとなったら、おれのことはかまわずに逃げろ」

「でも……」

「かえって足手まといになる」

「ええ……でも」

「いまにも、弥九郎さんが帰ってきます。ちょっと、出たのですから、ほら、すぐに……」

夕月はわざと声を大きくしていった。

六人の男たちは、これを一蹴した。

「なんやて、もう一人そこになかまがいるちゅうとるが」

「阿呆ぬかせ、こない夜なかに、一人で何しとるかいな」

「小便か」

「長い小便やな」

「なんの、あの女、嘘吐きよるねん。わしらを瞞くらかそう言うのや」

「一丁、懲らしてやろうかい」

「わしらを舐めてくさるんじゃ。舐めんように、男の強い力を見せてくれようわい」

「まァ待て、与作一人に勝手なことをされては、あとがたまらぬぞい」

「クジ引きだの。誰が一番先にあの女を抱くか。わしゃびりっけつは御免蒙るけんの」

この伏見界隈で、戦さでもあれば、死体や落武者から肌付き金を盗んだり、目ぼしい鎧刀などをひき剝いでいる輩なのであろう。

こうした浮浪の者たち、刀や槍を持ち、小具足をまとい、あるいは破れ小袖で、髪なども髷を結った者、ザンバラの者、藁シベでうしろに一束にくくって切り放した者——雑多な感じの連中である。

さむらい、は、高位の者に仕え、さぶらふ者、であるから、この連中は、侍とはいえない。浮浪の徒にすぎない。
「さあ、誰かクジを作れやい」
「なんでクジを作る」
「草でもなんでもよいぞな、早くしろや、もうわしゃ、あの女を抱きとうてたまらん、早よせんと、わしが先に」
「気の早いやつじゃ、そないにはやまってても味のよいものではないて。やい、三郎助、クジを作れ」
まるっきり、馬か牛の入札でもするような光景だ。
城之介はかれらから見れば小僧っ子にすぎないし、六人もの荒くれ男に敵対できるものではない、と、たかをくくっているのだ。
（よし、やってやる！）
城之介は唇を噛んだ。
機先を制するしかなかった。クジ引きをはじめた連中の背中が、城之介には、車座になった狼の群れのように見えた。
さっと刀を抜くと、一跳びに堂内から飛び出したのである。真っ正面の男の背幅が、広々と見えた。ぐさっと、突き刺すや、瞬後に片足あげて蹴倒しざま、はねとんで、片手振りに別の男の首のつけねへ叩きつけた。
これも的確にきまったのである。
瞬時に二人を倒したが、しかし城之介の刀が、容易に血を吸ったのはそれまでだった。

「やっ、やっつけろ」
野伏せりたちは、ぱっとひろがった。
クジどころではなかった。暁闇の中にしぶいた血を、二、三人がざぶっと浴びている。錆槍や刀をとりなおすと、ずらりと城之介を囲んだのは、こうしたことに馴れているのであろう。
城之介は血刀をかまえ、油断なく四人に眼をくれている。力の剣は、寸毫も、弱味を見せてはならなかった。多勢と戦うのに、もっとも効果的なのは、一直線に走ることだ。常に敵を一人にするために、連中の円陣に囲まれない。一直線に並ばせる方法は、一方に走るしかない。
それも、この斬り合い馴れた連中は察していたようだ。
「袋の中の鼠だな」と、一人がせせら笑った。
「小鼠だ。ふい討ちしなけりゃ、牙は立たん」
「来い！」
「吼えるな。どうせすぐに死ぬのだ。ゆっくりとキザんでやる」
髭面は、鼠を追い詰めた猫のような残忍な笑いに歪んでいて、
「どうじゃ三郎助。やっぱりあと先をきめようぜ。こいつに一太刀くれた奴が先に女を抱く、それならよかろ」
与作と呼ばれた男だった。四人の中でもっとも軀が大きい。
「殺しても殺さんでもいい、一太刀だ。先太刀をつけたやつが、それ一番槍の恩賞よ」
「女を恩賞たァ、こたえられねいわの」
「美い女や」
ちらと一人が夕月を見た。

夕月は逃げ出そうとしながらも足がすくんだ。首を半ば斬られてぶっ倒れたやつが、濡れ縁にしがみついたまま、時々、びくっびくっと、断末魔の動きを見せているのが無気味で、堂から飛び出せないのだ。

与作と呼ばれた男には、嗜虐的な好みがあるらしい。城之介を斬ることに、一種のなぶり殺しの残忍な喜びさえ感じているかのようであった。

城之介の真っ正面に対置して、大上段にふりかぶっている。じりじりと間合いを詰めながら、

「久六、惣左、包み討ちだ、いいな」

と、左右に目くばせしたのは、こうした陣法が、はじめてではないことを物語っていた。

(三方剣?)

ちらりと、絶望が城之介の脳裏を掠めた。

三人同時に斬りこまれたら、逃げ道はない。同時に斬りこむことは、しかし多勢のほうに有利かというと、必ずしもそうではない。

相手の軀への等分の間合が難しい。深く入りすぎては、味方同士、剣と剣が邪魔になるし、悪くすると同士討ちになる。

命知らずの無法者たちは、この危険だが、しかし快感を楽しむのに吝かではなかったのであろう。

音頭取りの与作の態度から見ても、

(久六か惣左か、どっちかが一番刀だ)と、見た。

左右からほとんど同時に斬りかけ、体の崩れに正面の与作が唐竹割りにくる。

左右の同時剣には、一瞬の遅速があるはずだ。久六と惣左には、その順序がすでに決まっているのであろうか。

(どっちが先か?)

態度にあらわれる。後者にはゆとりが生じるのだ。惣左が先手と見た城之介は、ぱっと久六に斬りかかった。

これは出鼻をくじくというより、意表をついたことになった。三人の呼吸が乱れたのだ。

その混乱の中で、城之介は身を転じて与作へ——。

四人の剣陣が崩れた。逃げるのなら、その隙に逃げることができたのである。が、夕月を捨てて逃げることはできない。

与作の巨軀へぶつかったのは殆ど捨身の攻撃だった。一声咆哮して与作は、大斧でもふりおろすように大刀を叩きつけてきた。ガッと鍔でうけた。鍔が割れるかと思われる衝撃に城之介はよろめいた。

夕月の悲鳴が次の瞬間に起こった。

三郎助が濡れ縁に飛びあがるのが視界の隅に見えた。

(男より女や……)

城之介を斬ることに三人が熱中している隙をうかがっていて、円陣には加わっていても、夕月のほうばかり意識していた三郎助である。

凄絶な響きを発して、与作と城之介の刀がからんだ瞬間、さっと刀を引いて、破れ堂の濡れ縁に飛びあがった。

逃げようとしながら、足が竦んでいた夕月の手をつかんでいた。

たまぎるような悲鳴をあげるのを横抱きにして、栗毛のところに走りよると、一跳びした。飛

び乗るのと、馬腹を蹴ったのが殆ど同時で、あざやかというしかない。
これには、与作たちも、愕然としたらしく、
「ちっ！　抜け駈けしおって」
と、与作が切歯したのは、予想外だったからである。
「夕月！」
刀をひっぱずしざまに、たっと城之介は横へ飛んで、久六に一太刀をくれた。
瞬後に惣左が斬りかける。与作はそのひまに葦毛へ走り寄っている。
「しまった」
城之介は足ずりした。惣左が立ちはだかって、馬へ近寄らせないのだ。与作が葦毛へ乗ったのは、城之介をして追い走らさせないためでもあったが、それよりも三郎助にだしぬかれたことの怒りであろう。
「うぬ！　夕月、しっかりしろ」
声を投げるのが精一杯だった。
「あきらめるんや、女はおれたちのものやで」
惣左の無精髭の顔が、このときほど、憎々しく見えたことはなかった。
「くそ！」
焦れば焦るほど、惣左の刀が邪魔になる。力量の差というより、目的意識が、弱味になったということだ。
その焦りのうちに、二頭の騎馬は林の彼方へ走り去り、夕月の悲鳴も遠ざかった。
「夕月！　夕月……」

絶叫もむなしかった。
「よさんけ、声が涸れるだけや」と惣左はせせら笑って、
「地獄へ行って閻魔(えんま)の庁で申しひらきがでけるのかいな」
「なにを、こやつ」
双手が必殺の意気をこめて、たっと突き込む。
「おう！」
剛刀がこれを横へ払った。払うと同時に、ぱっとうしろへ飛び退ったのは、逆波の剣を避けたのである。若いながら、城之介の兵法が、意外なワザを心得ていることに、惣左は慎重になっていた。
二頭の騎馬は視界から消え、馬蹄の音も聞こえなくなっていた。
「さあ、女は消えた。男同士の勝負やな。あいつら二人にナブリものにされよったら、あとは使いもンにならへん、女のことはあきらめや、あきらめて、さっさと死ぬがええ」
「黙れ！」
城之介は逆上した。猛然と斬りこんだ瞬間、つるっと足がすべり仰向けに倒れた。
夜露だろうか、さっきの通り雨だろうか。濡れた草が、城之介のいのちとりになると見えた。
すべった拍子に、木の根瘤か何かで、したたかに頭を打ち、城之介は一瞬、眼がくらんだ。
「念仏となえろ」
惣左は仁王立ちになり、拝み討ちに振りおろそうとした。
惣左の声も、気の遠くなった城之介は夢うつつに聞いたのである。
はっとした。目の前に、巨大なばかりに、惣左の顔が、からだがのしかかってきた。身を起こ

そうとする前に、夢中で、刀を振った、さーっと、血潮が顔にふってきた。
まるで巨木を倒すように、どさっと倒れかかってきたのを、身を起こしてさけた。
「しっかりしいな。危ねいところや」
意外にも、小西弥九郎の声だった。
馬からおりようとしている。
「野伏せりどもやな、ちょいと居らん間に、えらい難儀したやないか」
そのときになって、城之介は気がついた。
惣左の背に、脇差が突き立っていた。弥九郎が、馬上から投げたのであろう。
あまりにもあっけなく城之介の刃で胸を切り裂かれたのも、その寸前に、惣左は致命傷をうけていたのだ。
「たすかった、弥九郎」
と、肩で息をしながら、城之介は言った。
「なんの、わいの来るのが遅かったさかい……で、夕月はどないしてん」
「連れ去られた。馬も」
「どっちゃに逃げた？」
「向こうだ……」
血走った眼で、城之介は林のかなたを睨んだ。もう走っても追いつかない。
「京の方やな。行こ」
弥九郎は血刀を死体の衣類で拭うと、
「こいつら、なんぞ手がかりになるよなもん、持っとらんかいな」

懐中をまさぐった。
胴巻きをみんなあつめても、丁銀が百匁ばかり出てきただけで、素姓のわかるようなものは何もない。
「こうなったら、出たとこ勝負や、京へ行こ。ひょっとすると、夕月を探すことできるかもしれへん」
雲をつかむようなものだ。北上したというだけで、京へ向かったとは断定できない。横道へそれたかもしれない。
（運命だ）
棟山つづき、稲荷山を越えれば山科（やましな）である。左へ、西へ走れば鳥羽へゆく。
城之介もそう思うしかなかった。
弥九郎は、交替にしようといって、馬上で先へ進んだ。そのあとから、城之介も歩きだしながら、
（夕月！）
叫びたい思いに駈られた。いまとなって、はっきりと夕月を愛していることを自覚した城之介だった。
馬術はうまい。いや、〝術〟というほど、法にかなったものではなく、必要がおぼえさせた手綱さばきにすぎないが、三郎助は夕月を片手抱きにしたまま栗毛を飛ばしてゆく。
「放して！」
夕月はあばれた。

がっしりとふとく固い三郎助の腕が、樫の締め木のように、胴を抱え、叩いても、ひっ掻いてもびくりとも、こたえない。
「放して……」
「あばれるな。落ちるで」
「落ちても、死んでも、かめへんよって……」
「はははは、阿呆いいな、わいがたんと可愛がってくれるわな。死なせてたまるかいな」
ますます腕は固くなる。
夕月の黒髪が風になびき、裾があふられて、下肢がむきだしになっている。
春の夜である。走るほどに夜風は冷たかったが、冷たさを意識する余裕はない。人目がないのがせめてであった。
が、下半身をくすぐり、なぶる風は、この馬が走りやめたときの男の手を連想させずにはいなかった。
(いっそ死んで……)
疾走する馬から、ほうり出されれば、手足を折るか、悪くすれば首の骨を折って死ぬ。
死んでもよかった。助かる道は五分五分でも、このまま、この野伏せりに凌辱されるよりは、まだ希望がもてる。
が、三郎助にしてみれば、
(うまくいったわえ、こないうまくいくとは……)
多勢のなかまが、殺された隙に、ひっさらったのだ。はじめは、なかまで回して楽しもうと思ったのだが、こうして抱いていると、もう、誰にも、余人に渡すのが惜しくなっていた。

「おーい、待てェ三郎助よ」
与作の呼ぶ声と追ってくる蹄のひびきが、一層、三郎助に馬腹を蹴らせた。
(聞こえん、聞こえん、おりゃ耳が悪いのや)
聞こえぬふりで、さらに走らせる。
このまま、与作の手の届かぬところまで、逃げきってしまいたかった。
どうせ、利をもとめて便宜上連れだっているにすぎない野伏せりなかまである。〝義〟も〝信〟もない。あるものは功利性だけだ。
一つ間違うと敵になる。
「待てェ、汝れは、女を一人占めにする気けえ、待たんけえ」
声をかぎりに呼びつづける与作だ。激怒ぶりがわかる。それだけに、三郎助は尻に火がついたような気持だ。
(うるさいやっちゃ、なんで彼奴だけが生きのびたんやろ、ついでにあの若僧に斬られてしもうたらよかったのにな……)
段々、あいだがちぢまってくるのが、馬蹄と声でわかる。数間のうしろに迫った。
「やい！　三郎助」
もうあかん、聞こえんふりもでけへんな、と三郎助は馬を止めてふりかえった。
「やァ、来よったのかいな」
三郎助は、照れくさそうに笑って、馬をおりた。
「な、なんじゃと、来よったがあるものか、汝りゃァ、おれをだしぬいて、この女を」
「何言うてけつかるねん、おぬしとは知らんやったさかいな。あの若僧が追って来たと思うたの

や」
　ぬけぬけと三郎助は言い、
「なんせ、若いヘロヘロ腕や思うたら、なんと兵法つかいの……」
「汝れが逃げたおかげで、とんだ斬り負けじゃ。なぜ、みんなと戦わなんだぞ。あいつを斬りさえすれば、女をさらうこともなかったのじゃ」
　と、まだ、与作は怒りがしずまらない。汗をだらだら流して、荒い息をしている。
「斬る言うたかて、手強かったでな。うむ、そうや、女をさらえば若僧は、その仰天しよって、隙ができるゆえ……」
「おれに斬らして、女は汝れが抱くか」
「なんや、そないガリガリやないで、ちゃんとクジ引きちゅうことにしたやないか……」
　いくら弁解しても、与作には三郎助の根性は見通しだ。
「まァええわい。あの様子では久六も惣左も死んだろう。四人とも死んで、わしら二人だけ残った以上、この女は、二人のものじゃ」
「そ、そうや、そうや。二人で仲良う、抱こうで」
「よし。最初は、おれだ」
　と、はっきり言い、与作は三郎助を凝っと見つめた。
　ここで反対するようなら、
（斬っても）
　と、思った。
　強引にそう言ったことで、三郎助の狡さを見ぬいているのだぞ、と、言外にあらわしたのだ。

　からだもひとまわり大きいし、力もある。与作は三郎助と打ち合って十中八九、勝つ自信があった。
　三郎助は弱ったように、顔を歪めた。
「ええがな、ええがな、先にやりいな」
　そのやりとりを、草むらに突っ伏したまま、夕月は聞いていた。
　疲れきって、呼吸もできないくらいだった。裾がみだれ、足が出ているのも、気になりながら、衣紋をつくろうのも億劫だった。
　が、話がついて、与作が近よってくるのを見ると、がばとはねおきた。
「来ないで！」
「ほ。どうした？　睨むことはないわな。おりゃ、こやつほど乱暴はしないからな。うむ、片手抱きにされて馬を飛ばしては、骨も肉もひきち切れるようであったろう。わしなら、手荒にはせぬ。その痛いところもさすってやる。な、これよ、睨まんでもよいて」
「来ないで、近よったら……」
「ふ、どうする？」
　なおも、ずいと、近づき手をのばした。
　とたん、夢中でつかんだ土くれを、ぱっと投げた。与作の顔へである。
　夕月が夢中で投げた土くれである。
　のしかかろうとしていた与作の顔に、ぱっと砕けた。
「うっ、何をさらす」
　のけぞって、顔から払いおとす。

そのときだった。指をくわえて順番を待つつもりだった三郎助が、（いまだ！）とばかり、抜刀したのだ。

ものも言わずに背後から、一太刀浴びせたのである。

さすがの巨漢も、この奇襲をふせぐすべがなかった。ざくッと背を割られて、

「うぬは……なかまを」

と、刀を鞘走らせ、ふりむいた。

その真っ向に二ノ太刀が閃めいた。

土で眼もよく開かなくなっていたのだ。暁闇は眼性のいい者でも判然しない。与作は、激痛に耐えながら、刀をかまえた。二ノ太刀をそれと感じたのは、殺気である。

刃風と、三郎助の殺意と——感じた刹那に、横に薙いでいた。が、手ごたえはなかった。虚しく空を切らせて、三郎助の刀は前額から鼻柱へかけて切りさげている。

僅か一寸、いや五分の浅さでも顔面への斬り込みは深傷（ふかで）となる。

よろよろとなるところへ、

「くたばれやい」

勢いこんだ三撃。

だが、すでに安心感で三郎助は緊張を欠いている。それが虚となった。ずん、と右袈裟に切り下げた。常人なら、これでもう地上に倒れる前に死んでいる。

与作も死んでいた。死んだまま執念が、刀を動かしたといってよい。

あるいは、刀の重みだけのことであったかもしれないが、三郎助の膝を斬っていた。

「ううッ……こやつ」

与作が倒れるのと、ほとんど同時に三郎助もよろめいて、崩折れた。

「くそっ！　こない、こないことをしおって」

ぱっくりと口をあいて、おびただしい血泡を吹きだす膝がしらだ。三郎助は無念の歯がみをした。

夕月には、僥倖といえた。

まだ、運はつきていなかった。

狼と虎とが食いあって倒れたのだ。その狼は、片足を曳きずって、なおも夕月の方へいざり寄ろうとする。

夕月は立ち上った。

与作の刀を拾った。重い刀だったが、立つことの出来ない三郎助をひるませることはできた。

「こりゃ、女だてらに……」

むろん、斬る気はなかったのだ。

相手は斬り合い馴れた男、片足でも、夕月をあしらうことはできる。

分秒でも早く、この場を離れることだ。夕月は刀を杖突くようにして歩きだした。

そこは、賀茂川の下流と見えてゆるやかなうねりの川が流れ、田野がひろがっていた。

「ま、待てやい、女！」

執っこく三郎助が呼び止めながら立ち上るのが見えた。

馬上で横抱きにされて、林の中を走っている間は、まるきり方角もわからなかった。

どれくらい走ったのかもわからなかったのだ。暁闇の中に濃く血が臭い、その血の臭いから逃れるように歩きだしたとき、夕月は、水の音を聞いた。

このあたりに流れている川といえば、賀茂川。南へ走ったのなら宇治川が近くなるが、東山の南はずれ、伏見の稲荷山あたりだったから、山沿いの林を北へ——京へ向かってきたらしい。

賀茂川をさかのぼれば、京に入る。京へ行く目的ではあったが、

(城之介さまはどないなったやろ……あれだけお強いのやし……)

きっと、残りの二人も、斬ったにちがいない。そう思うことで安心したかった。

が、見捨てることはできない。京へ行く目的といっても、七条辺というだけのあいまいな記憶では心細い。

城之介と弥九郎がついていてくれていれば、安心なのだ。

(夜が明けさえすれば)

暁闇のなかに、うす黒く山稜が左手に見える。

稲荷山であろう。山の背が水いろに明るくなっているのは、陽の出も間近いのか。

魑魅魍魎も消える。恐いことはなくなる。小さいときから、そう思いこんでいた。昼の陽の明りでは、人間に害をなす悪はいたたまれないのだ。

さっきからの恐怖も、すべて夜の闇が生んだ出来事でしかない。

(早く夜あけが……)

夜が明けなければ、このまま、城之介とも逢えないかもしれないのだ。

「待てェ、女め、待てェ」

三郎助は足を曳きずりながら、執こく迫ってくる。

夕月は走ろう、と思った。が、走る気力がない。くたくたに疲れていた。十間ほどの距離を保って行くのが、やっとだった。

二人とも馬に乗ることすら出来ないのだ。それほど疲れ、傷ついている。奇妙なのろのろした男女の歩みは、のろいだけに、一層、恐怖と焦りは倍加した。

一歩でも遠くへ、離れようと、夢中で行くうちに、はっと気がついた。

このまま賀茂の流れに沿ってゆけば、淀のほうへ出てしまう。

さっきの深草の山裾へ行かなければ。気がついて夕月は、流れから左へそれた。草の中を、山の方へ東へ歩きはじめた。

春草は膝ほども延びてい、野面がつづいていた。くり返される兵火と劫掠に根がつきて、農民も鋤や鍬を手にしなくなったのであろうか。あきらかにこのあたりは田園のあとであった。

雑草の生えほうだいの野は畔道であったところと田園の段落が見えないから、時々、足を踏みはずした。

三郎助のほうは、一ぺん転んだら、立ち上るのも大変だったろう。

深草が近くなったあたりで、夕月は馬蹄の音を聞いたように思った。一頭や二頭ではない。少なくとも七、八頭はいるようであった。

夜は明けようとしている。見る間に東の空が明るい紫いろに光ってきて、稲荷山の輪郭をくっきりと描いた。

雀の声も、思いだしたように聞こえてきた。

朝の爽やかな涼気が夕月に気力をふるい起こさせたようである。ふりかえってみたが、もう三郎助の姿は見えなくなっていた。

(隠れたのかしら?)

起伏の少ない田野のところどころに疎林があったり藪があったりした。朝靄がその間を流れて

いる。もう間もなく勤勉な農民が田畑に出てくるにちがいない。
兵火に荒されても、劫掠されても、農民としては、小康をぬすんで田畑を耕すしかない。
朝靄の流れるほどに、山麓の暗がりから人馬があらわれてきた。
数頭の騎馬と、その供らしい家来たち、総勢二、三十人である。
（あれは？……）
やはり野伏せりだろうか。
夕月は草むらに身をひそめた。
野伏せりたちは、二、三人連れもあるが、四、五十人の集団もある。こうなると小城主の観がある。
その行列は何ものか。しだいに一行は服装まで見えるほどの距離になってきた。
いずれも服装は整っている。この時代には貴賤の差がはっきりしている。野伏せりの集団なら引き剝ぎしたり、強奪した具足や衣裳だからちぐはぐなのだ。
一行の殿と見られる騎馬の中央にいるのは、綾藺笠の直垂、鹿の夏毛のむかばき（膝蔽い）を着け、左の拳に俊敏そうな鷹をとまらせている。
その殿に従う騎馬は小姓や近習らしく、弓、槍をかいこんだ足軽小者の横柄な顔付きからも身分ある様子が知れた。
（あの方なら）
夕月は草むらから身を起こした。
「おたすけ下さいまし」
と、走り寄った。

「何者じゃ！」
馬回りの者が、槍をひきそばめた。突然だったので、馬が棒立ちになった。
「何じゃ、汝れは」
左右から腕をとられて、夕月は必死に、
「悪い人に追われています。助けて下さいまし」
「悪い奴に？」
あたりを見回した眼に、誰も見えない。
「居らんぞ、左様な者は」
「そこらに隠れているのでございます。連れの者が、野伏せりに襲われています。どなたか、すぐに助けて」
「どこじゃ、その者は」
どこと言われても、夕月には地名もわからない。深草のあたり、雑木林のなかの破れ堂というだけだ。うろおぼえの林まで、馬の背に揺られてやっと辿りついたときは、野伏せりの死体が転がっているだけで、城之介も弥九郎の姿もなかった。
「ほう、そなたの連れの者は、なかなかの手練と見ゆるな」
その殿は言った。
その綾藺笠の殿が、時の足利将軍義輝だと知ったのは、その直後である。
夕月は、ほとんど気を失わんばかりに驚いたが、
「無礼は許す。何やら深い事情があるとみゆる」
義輝は、こだわりのない態度を見せた。

三好一族との抗争に青壮期をおくった義輝は、時に身辺数人の供回りだけで、落ちのびたこともあり、敗亡の身を風雨に苛まれるなど苦労の味も知っている。

夕月の様子に同情したのであろう。

連れにはぐれて、途方にくれている姿も興味をひいた。義輝の好みの美貌だったのは、夕月のために幸いだったかどうか。

城之介と弥九郎の人相風体をくわしく聞きだすと、家臣らに、なおもこのあたり一帯を探すように言いつけ、

「見れば、疲れているようじゃ、屋形にともなうて、医師（くすし）にも診せてくれようぞ」

親切な申し出だった。

天下の将軍義輝ともあろう者が一介の、氏素姓も知れぬ女に、こうした好意を示したのも、鷹野に出た解放感が作用している。

義輝には、もともと、そんな気まぐれなところがある。足利将軍家という門閥に生まれて、細川氏と三好氏の間にはさまれて、永い間、戦さをしてきたが、はてしない戦いに嫌気がさして、和睦を申しこんで、漸く、平和が来ていた。

義輝の生涯の中では、もっとも充実して、将軍の権力と地位にあぐらをかいて、不足ない日々を楽しんでいたときである。

夕月という薄幸の女性への興味は、その閑暇にふと忍びこんだ気まぐれだった。

夕月は京へ連れてゆかれた。

足利将軍の〝御所〟は、二条にあった。

当時は七条のあたりまでが京の南限だから二条の御所は、ほぼ中央になる。

かつて義満義政のころから〝花の御所〟とうたわれた宏壮美麗の屋形であった。

幾度も戦火にあい、丸焼けになったのを、今度も、義輝が和睦するに及び、以前にも増して美美しく再建していた。

室町将軍家の安泰はそのまま、京の繁栄につながった。

京人の気持は、将軍家が安泰だというだけで、安らかになるようであった。

荒廃の京を見捨てて、離れていった者たちも、追々帰ってくるし、商人は見世棚をひらき、行商人で中立売の辻なども賑わい、洛中洛外、一時の平和に酔いしれていた。

「七条で生まれたのどす、でも、どこら辺かわからしまへん、すっかり町の様子が変わってしもうて」

この御所で暮らすようになってから何度か、七条へはいってみたが、生家も知人も探しようはなかった。

「もうあきらめます」

弱々しく微笑する夕月を、義輝は、美しいと思った。

義輝はあせらない。

（女の肌は……）

と、口ぐせのように言う。

「心をともなってこそ、美しく映（は）ゆるもの、心をともなわぬまぐわいは砂を噛むようなものじゃ」

敗亡の時でも、義輝は女に不自由しなかった。

生まれも、風采も、非のうちどころのない義輝であった。

出自を誇り、世襲の権門に身をゆだねた、ただの将軍ではない。

前にも述べたように塚原卜伝に師事して秘剣を習得した義輝は、将軍にあるまじき剣豪でもあった。

その兵法将軍たる鍛錬が、かれを愚かな将軍にしなかったともいえる。

剛毅の精神と耐忍の心を養った。

女にかけてもそうであった。

将軍の権威は、たいていのことは、意のままになる。好きな女は恣（ほしいまま）につまむことができる。

若いうちは、かれもこれまでの室町将軍と異なることがなかった。

兵法の道にはげむようになって、人間が変わってきた。

権威に服従して、人形のように横たわる女体には、興味を起こさなくなったのも、かれの人間的成長といえよう。

（愛の心が合致せねば、男女の真の合歓は得られぬ）

女の心をとる。

義輝には、その余裕があった。

この年、三十歳になっている。

夕月を、深草の野で、

（拾った）

ことは運命の出逢いにも似た感動がある。御所で暮らすようになって、一段と美しくなった夕月に、義輝はひかれながらも、強引に手を出すことをためらっていた。

（歌をおくるか？　だが、夕月には返歌も書けないだろうからな）

苦笑する。

義輝の誠意の見せようは、城之介と弥九郎の行方を突きとめることだった。

二人の名前、年恰好を配布して洛中洛外、さがしている。

当然、生きているなら京へ来ているはずだった。それが、将軍の威力でもってしても網にかからないのはどうしたわけだろう。

「京へ来ているなら、今日明日にも、行方がわかるであろう」

と、義輝はなぐさめて、

「麿（まろ）にまかせておけい。悪いようにははからわぬ」

「おそれ多いお言葉」

夕月は感謝した。

感謝でうるんだ眸には、畏敬がある。それが愛慕に移るのを、義輝は待っていた。

「そちが美しいゆえじゃ」

冗談にまぎらして言った。

「城之介とやらがにくいのう。そちをこれほど恋（こ）がれさすとは」

そして、夕月の好むままに、豪華な衣裳なども与えた。御所風を早く会得するため、侍女のほかに老女をつけてくれた。金糸銀糸の縫いとりに花文様を描いた衣裳に身を包んで、京の大路を歩くと、誰もがふりかえった。

「ええ女やないか」

「将軍さまの想い女やいうで」

「ほんに、きれいな上臈や」

そんな囁きも耳に入ってくる。
(私のことを……)
と、夕月はそんな京雀の囁き声には別段、腹はたたない。
こそばゆいような、まんざら、悪い気はしなかった。
(将軍さまの、お手つき、のように思っている……)
この時代、良家の子女でも、天下の将軍に情けをかけられて拒否する女は、まずいない。
いわんや、九州の肥前平戸で、僅かの銀銭で肌の切り売りをしていた夕月である。城之介には・操をたてる気持はあっても、将軍義輝の想い女と見られることはさしたる抵抗がない。
一つには、義輝の情けにほだされてもいたし、
(兵法将軍)
の名に恥じない、三十歳の壮者で凜々しく男らしい風貌が嫌ではなかったからである。
それだけに、
(大丈夫かしら……)
自分で自分の心が心配になってくる。
(このまま御所にいたら、いつかあの御方の……)
義輝が慎しみを破って積極的に出てきたら、拒めるかどうか。
自分の心があやふやで、安心ならなかった。
(――悪い女かしら)
思いたくはなかったが、娼婦の血のうごきが、おぞましくさえ意識される。すっかり忘れた気持で、身も心も洗われたつもりでも、やはり、永年の垢がしみついているのであろうか。

(いけない、こんなことではいけない、あては悪い女や、城之介はん、宥して!)
恐ろしいのは、安逸の日夜に、珍味佳肴の飽食が、性の欲望をそそりたてることだった。
小人閑居して不善をなす、というが、追われたり逃げたりの、いのちの危険を切りぬけるために、性欲など意識もしなかったのが、この生活ではあやしい虫の動きに耐え難くなっている。
(淫らな……)
淫虫といおうか。
かなしい女の性なのか。
生きていることの証明のように男の逞しい腕が、強い力がほしくなる。
眠りのなかに、男の影があらわれ、恥ずかしい姿態になっていることがある。
(城之介の……)
夢を見たいと思うのに、似てもつかない男に抱かれて、寝汗をかいて、はっとさめることもある。
南蛮屋十兵衛だったり、松永弾正だったり、将軍義輝だったりした。
その三人ともが、意外なほど、城之介とは対照的な壮年の〝男〟だったことだ。男の臭いというか、男の体臭をまきちらして、過剰なばかりの自信に満ちた男たち。
城之介を恋いながら、夢にあらわれる男は、そうした逞しい男であるのはどうしたことか。
(いやらしい!)
夕月は、意識下の、おんなの官能がかれらを望んでいると知ってそのおぞましさに、身ぶるいした。

野盗

五条の橋たもとだった。東山のほうから渡ってきた二人連れが、
「おい、高札だ」
と、あわてて顔をそむけた。
「心配せえへんでもええがな、役人は居らへんで」
「だが、名前が書いてある」
「そやかて、わてらちゅうことはわからへんがな」
「それもそうだが、あんなに執こく捜しているのを見ると……」
こう言ったのは城之介である。
いうまでもなく連れは小西弥九郎。二人とも、あれから十日ほどになるが、洛中洛外、夕月を探しまわって、失望を重ねていた。
むろん、七条にも行ってみたし、その辺で聞いてもまわったが、乱世の人心は荒廃している。
「ほ、そない美い女なら、誰ぞがとりこんどるのや」
と、嘲るような答えがはねかえってくるだけだった。

「美い女を、ほっとく阿呆は京に居らんよってに」
そうかもしれぬ。が、夕月の節操を疑いたくはなかった。二人は洛中洛外、探し歩いた。それを阻んだのは、足利将軍からの達しだった。
城之介と小西弥九郎の年齢、生国、人相などを克明に書いた高札が立っているし、役人たちは、
(手柄に……)
と、思って執拗に手を回している。二人はわざと他人面して、木戸を通ったりした。
まさか、夕月が室町御所で起居して、城之介さがしも、そこから出たとは、気がつかない。
(脛に傷持つ身やさかい)
松永弾正が手をまわしたにちがいない、と思った。
「執こいやっちゃな、なにも、京まで追って来んかてええやないかいな」
小西弥九郎はそろそろ懐中が淋しくなってきたので、腹が立つらしい。
「せやけど、ちくと変やな」
「何が?」
「弾正は夕月に惚れとるのやろ。夕月をとりもどしたいのやろ、ほなら、なんで夕月の名前を書かんのや、彼奴らも」と、役人らに顎をしゃくって、
「女の方には目もくれんやないか」
「わからぬ」
城之介も首をふった。
「おれたちが憎いのだ」
「そらそうや、せやけどな、女に惚れた男にしてみれば、わき目ふるひまはないもんや」

したり顔にいう弥九郎だ。青年のくせに、分別くさい四十男の表情を見せることがある。

「とにかく捕まったらおしまいやで、何がなんでも斬りぬけるんや。万一の場合の落ち合うところをきめておこ」

「そうだ。東寺がいい、東寺の塔の下で」

橋の袂や土堤に物売りや乞食が坐っている。

弦召という弓の弦売りが、さっきから凝っと二人を見上げていた。

二人がそれと気づかずに通りすぎるのを待って立ち上ると、そそくさと、歩きだした。

天下の室町将軍足利の権勢といっても、その直接の家臣というのは少ない。

伝統と肩書きがその権威をかたちづくっているだけで、それを支えているのが、三好三人衆の軍勢だった。

後に、同じ征夷大将軍になった徳川家康以降の十五代に及ぶ徳川の天下が世界でも珍しい権力を持続し得たのも、譜代大名らが、直接の軍事力を持っていたからである。

家康とその腹心らは、室町将軍の失敗を前車の轍として、ゆるぎない封建体制を築きあげたのだ。

もっとも、それだけ、秀吉家康の時代になると、世人が虚しい権威には服さなくなっていたせいもある。

この時代、まだ実力よりも朝廷と公卿の権威が遺っていた。

したがって洛中洛外に及ぶ室町将軍の組織力自体は、たいしたものではない。三好三人衆の武力という基盤をとりのぞいてしまえば、細川管領の没落したいま、将軍の兵力というものは、ほとんど無いにひとしかった。

その夜、城之介と小西弥九郎が泊まったのは七条の宿だった。木賃宿である。炊飯の薪代をとるので木賃という。

二人が泊まった夜、かなり更けてから、

「宿あらためだ」

松明を手にした役人の一団が乗りこんできた。

丁度、小西弥九郎は小用に起きて、外へ出たときだった。厠は母屋と離れたところにあるのだ。

表のほうで、時ならぬざわめきがしたので、はっとなった。追われる身の反射神経であろう。

二十人ちかくはいるらしい。

「この宿に、お尋ねの者がいるとの知らせがあった、人別あらためしたい」

言葉は、どちらかといえば穏やかなのだが、みんな小具足をつけて、動くたびに草摺の音がするし、槍の石突を地に突く音、重だった者数人が馬で、その蹄の音や嘶きが、松明の炎とあいまってものものしく、見えた。

(やっぱり、見つかったんや)

弥九郎、とたんに背すじが冷たくなった。

(早よ、城之介に知らせな、あかん)

と、あわてて戻ろうとしたが、

「小西弥九郎という奴と、城之介という……二人ともまだ二十歳前だ」

そう大声で言いながら、役人たちが入ってくるのを見ると、

(もう、あかん)

と、戸の外にうずくまってしまった。

（こうなったら、別々に逃げるしかねや）
　着のみ着のままだ。袴なし刀なし。脇差しだけの姿で、弥九郎は裏木戸から外へ出た。
　あれだけの人数なのに、この宿の脇や裏をなぜ固めなかったのか。不審だったが、弥九郎には僥倖としか感じられなかった。弥九郎は闇にまぎれて小路を走った。
（密告したやつがいる！）
　捕まったとき、城之介は感じた。
　役人たちは偶然入ってきたのではない。宿や町を虱つぶしに探してきたのではない。だから、木賃宿に踏みこんできても、老人や女には目もくれずまっすぐに、城之介のところにきた。
「城之介とはおぬしか」
　人相書を片手にして、横柄に役人は言った。
　逃げようにも逃げられない。城之介は観念した。
「わたしだ」
　昂然と答えると、待っていたように、数人が前後をとり囲んだ。
　すぐには手を出さなかったが、刀を抜く様子でも見えれば、さっと腕をおさえ、背後から羽交い締めにするという気がまえだ。
「何か用か。こんな夜分に……」
「ぬけぬけと、とぼけるな。もう一人の奴は何処へ行った？」
　夜具は二人前だ。小者が手を突っこんで、まだ温い、と言った。
「逃げたな、素早いやつだ」
　城之介も瞬間にそれを察した。何せ、早耳早足の小西弥九郎だ。

　それに比べれば、城之介は陸へ上った河童で、すべてに後手にまわっている。
　五島の海賊だった城之介には、陸の勝手がわからぬ。社会的な反応のおそさが、弥九郎のように機敏に立ちまわれない。
「とにかく、来てもらおう」
「どこへ？」
「政所（まんどころ）じゃ」
　あれだけ辻々に高札が出ているのに、出頭もしないのは、逃げ隠れする気持だといわれてもしかたはない。
　城之介はあきらめた。
（松永弾正の手であろう。だが、どうせ夕月の行方は知れないのだ。いかに責め問いされても、知らぬものは知らぬ）
　拷問されるかもしれぬ。覚悟を決めた。
　真夜中に叩き起こされて、同宿の者はえらい迷惑をこうむったものだが、こうしたことには馴れている乱世の人たちは、
「あれが悪い奴かいな、なんや、温和しそうな青二才やないか」
「人は見かけによらんもンや。なんぞ大それたことしよったんやろ」
「何をしよったんかいな」
　半分、寝ぼけ声で見送った。どっちみち自分たちとは関係ない。
　一応、身仕度をととのえる間、役人たちは待ってくれた。弥九郎の刀などは宿の主人に預けて、城之介は外へ出た。

城之介は両刀を奪われるかと思ったが、役人たちはそこまで考えていなかったようである。縄もかけなかったが、前後左右をはさむようにして、夜の京大路を歩きだした。

ところが三条のあたりまで来たときである。

「もし、お役人衆、押し込みじゃあ、助けとくなはれ」

塀の蔭から、喚きながら飛びだしてきた者がある。

押し込み強盗は珍しくはない。

「どこじゃ、多勢か」

「油小路どす、百人ばかしで、火ィつけたり、乱暴したり、あ、早よ行かんと、みな殺しにされてしまうがな」

「よし、案内せい」

「こっちゃどす」

その男は先に立った。

城之介護送の役目をかれらは忘れたのではない。抵抗もしない城之介に、これだけ多勢の必要はないという気持が、ゆるみとなったのだ。

城之介をつかまえるのに、意外に楽だったことも、役人たちに拍子ぬけさせていた。ふりあげた腕のおろし場のない気持が、押し込み強盗の報で、わっと気勢があがったことも否めない。

どっと駈け出して、残った者は僅か三人。

もう室町第も近いせいもあった。

ところが、三人になって十間と歩かぬうちに、突然、闇の中から矢が飛んできた。

数本の矢が、ほとんど同時に、夜気を裂いて飛来し、的確に三人の役人の胸を射ぬいていた。

「うわっ……」

三人は、瞬後に声を失って、転倒した。まるでサン俵か、棒のように、呆気のない死にかただった。

城之介は刀の柄に手をかけると、さっと塀ぎわに走りよって、闇のかなたを睨んだ。

こんど飛来する矢は、かれの心臓を狙ってくるにちがいなかった。矢切りのワザは難い。が、飛矢は防がねばならぬ。

闇に人影がにじんだ。五、六人の男たち。弓に矢をつがえたままの者がいたし、小薙刀を抱えている者もいた。

無言で城之介はこれを迎えた。手は刀の柄から放さない。

「案じることはないで」

と、一人が笑いかけた。

「おぬしを助けたんやないか」

「……」

「さ、早よ、行こ」

と、促した。

「おぬしらは？」

なおも用心を捨てずに城之介は連中を見回した。

暗いなかでもあったが、見おぼえはない。

「そないことは、あとから話すがな、さ、役人どもが戻ってこんうちに逃げんと」

「では、あの押し込みは」

「嘘や」

へらへらと笑った。

これは城之介は知らないことだったが、伊予海賊の美沙の配下の矢太だったのである。

ずんぐりで背の低い団六は鉄砲を抱えている。

「さ、行こ」

なぜ助けてくれたのか。どんな集団なのか。そうしたことを一々聞いているひまはなかった。

ともあれ、役人の手から助け出してくれたのだ。城之介はかれらについて走りだした。

嘘を吐いた男は空屋敷から籠抜けして消えてしまい、狐につままれたような気持で、役人たちがもどってきたときは、三人の死体が転がっているだけだった。

城之介が連れてゆかれたのは、洛北の声聞師村だった。

こんもりした松林に蔽われたその村には、えたいの知れない男女が巣食っていた。

乱世のひずみを受けた人々である。農民もいたし、家を兵火に焼かれて、浮浪者になった者もいる。夫を失った妻、両親に生き別れ、死に別れた子供まで、この村へやってきた。

もともと、この声聞師村というのは、賤業に従う者たちの閉鎖的な集団の聚落だった。

いわゆるくぐつ師や大道芸人たちなどが、風に吹き寄せられるように集まってきている。この村にだけは、室町将軍の権力も及ばないといわれている。

広大な村は松林の中に段落を利用して粗末な小屋が点在し、野卑な声が聞こえたり、蓆一枚の戸が風にあふられると、すぐ土間で男女が半裸でからみあっていたりした。

「救けてやったんや、礼を言わなあかんで」

矢太と団六は一つの小屋の前に立つと、城之介に念をおした。

その小屋は聚落のはずれで、林の窪地にあり、そばに青みどろの古池が蓮の葉を浮かべていた。

城之介が入ってゆくのを、七、八人のなかまが松の根方に坐って、刀に砥石をかけたり、弓の弦を締め直したりしながら、ちらちら眺めていた。

その中にあの五条の橋袂にいた弦召がいた。

この男が政所に密告したのだ。

わざと捕まえさせて助け出す——という手のこんだことをしたのは、恩を売るつもりだったのか。

もとより、城之介はそんなことは知らぬ。

小屋の蓆を矢太があけて、

「御前連れてきよったわな」

と、片膝ついた。

「お入り」

妙に甘く、ねっとりとした女の声である。

城之介が入ってみると、さして広くもない小屋の中に、蓆を重ね夜具をのべて、ひとりの女が寝そべっていた。

上半身をもたげて、凝っと見た。

「——城之介かえ?」

「どうして、おれの名を」

それには答えず、ふふふと身をくねらせて女は笑った。

まだ初夏には間がある。暑くもないのにうすものの胸をはだけ、双つの乳房がこんもりと盛り

あがっているのが見える。
そばに酒瓶をひきよせ、もうかなり飲んでいるようだった。上瞼がうすく紅く染まり、とろんとした眼は淫らなものの期待に、妖しく濡れている。
美沙である。
伊予御前といわれる村上水軍の流れをくむ海賊だ。
南蛮屋十兵衛の梵天丸を襲い、百挺の船載新式鉄砲を奪ったものの、忍者赤目ノ木鼠に横奪りされ、結局、松永弾正の収めるところとなっている。
木鼠に犯されたときから、美沙は変わった——。
忍びノ者は、人外の魔性をそなえている。生い立ちも外道が多く超人的な耐忍の生活が、さらにその気質に拍車をかける。
松永弾正に飼われていた伊賀の忍者赤目ノ木鼠が、伊予御前の美沙を犯したのは、性衝動からではない。
一つには復讐のためであった。
城之介らから市民の眼をそらすための囮（おとり）走りで、全裸の美沙を横抱きにして夜空を走ったのは、さしたることではない。
それくらいの辱しめで、美沙は衝撃を受けるような脆弱な神経ではなかった。
だが、あやしげな忍びのワザで異常な恍惚境を体験させられてから、腑抜けのようになってしまっている。
夜も昼も、うつろな眼をして、その焦点のさだまらぬ眸が男を見ると、濡れ濡れとなってくる。
（淫乱の性になってじゃ）

一党の者は呆れた。
呆れただけではない。驚きが、好奇に変わった。
これまでの美沙は、そのきりりっとした美しさ、野性美とでもいいたいような容姿が、輩下たちの憧憬の的となっていた。
むろん、荒々しい血のたぎる海の男たちだ。誰一人として、美沙の肌を望まない者はない。それをしかし許すことは、首領の地位を不安定にする。美沙は男ぎらいではないが、慎重だった。
それが一変した。
木鼠に砂丘にほうりだされたあと、矢太と団六が駈けつけて、宿へ連れもどったのだが、そのときから、様子がおかしくなった。
女首領の威厳がなくなり、男を見る眼に淫情が動いた。
（一時のこっちゃろう、すぐもとの伊予御前にもどろうわさ）
と、みんな話しあっていたのだが、それが、一向に旧に復しない。
海賊なかまには、海藻類や浜辺の草木で良薬をつくるワザが伝えられているが、そうした薬効があらわれない。
木鼠の催淫ノ法が、それだけ強烈だったのか。
美沙が腑抜けになった上に、かれらの立場もあやうくなった。
城之介や夕月たちに逃げられた松永弾正の捜索がきびしくなって、伊予海賊たちは堺にいられなくなったのである。
盗品の鉄砲を売りつけようとして、失敗している。
とにかく、堺から消えることだと、矢太や団六は判断した。

(どうせ人様のものをふんだくるのが、わいらの生活や。海の上も地上も変わりがない)
(どうせなら、賑やかなところがええわな、収入も多いやろ)
(近ごろは京も随分と賑やかになっちょるちゅうで)
という次第で、京へ来たのである。この声聞師村なら役人の眼も光らない。
が、美沙の淫乱症は治る様子もない。いまも、小屋の中で胸をはだけたまま寝そべって、
「おいで」
と、城之介を手招きした。
(どこかで見たような……)
ふと、城之介はおもった。
小屋の中には、欠け皿に灯油を光らせて、小さな灯が燃えているだけで、その明りが、美沙の顔を妖しく照らしている。
思わず、息をのんだ。
(どこだったろう……たしかに逢っている)いそがしく頭を働かせようとした。
が、急には思いだせない。
それも道理。あの伊予灘で見たとき——女海賊として小舟の上にいたときの記憶はない。距離もあったし、その後の戦闘の混乱が記憶をうすれさせている。
が、その後に、物売りに化姿して、梵天丸にあがってきたとき、城之介に笑いかけた。
その笑顔が、頭のどこかに残っていたのである。威勢のよい、明るい、きりっとした女——という印象が灼きついている。
むろん、その女が鉄砲を盗んで梵天丸を爆破したとは、九分九厘、察しがついている。

だが、いま小屋の中に自堕落に寝そべって、とろりと嬌めいた眼で男の手を待っている女と、そのときのぴちぴちとした女とが同一人であろうとは、どうしても思えなかった。
歳月でも経ていれば、変貌もあろうが、まだ半月あまり。
そんなに、人間が変わるとは思えない。よしんば、同一人の美沙だと教えられても信じ難い。この異様な声聞師村の雰囲気だけでも、城之介は気味悪く感じていたのだ。
「ねえ、お入りな……」
声も甘ったるい。
「お出で、若いひと……」
妖艶というべきか。からだ全体が、色香にあふれている。たいていの男は、このあまりにも淫蕩な女体の魔力にかけられたように引き寄せられるだろう。
灯のもとに、こんもりと盛り上った乳房は、みずみずしい弾力を持ち乳首はグミのように色づいて、若者を誘っている。
城之介は、何やらこの小屋の中にただよっている性的な匂いに危険を感じた。
(なぜ、おれを助けたのか)
その疑惑から、まだ解放されなかったせいもある。
流れに漂うように、無定見に衝動に身をまかせるほど、かれは絶望にとらわれていない。
「おれはいやだ」
と、身をひるがえして、蓆をはねた。
戸外で様子を見守っていた矢太たちはあわてて、

「これさ、どがいしたぞ」
かれらには、城之介の気持が理解できない。据膳を食わぬということが、不可解だった。
「なんだ、これは」と、城之介は怒りで眼を吊りあげて、
「なんだあの女は一体……おぬしらは、おれを何だと思っているのだ」
矢太たちは唖然として、息をひき、顔を見合わせた。が、すぐににやにやと笑いだした。
「何も、そない尖ることはないきに」
「そやそや、あない美しい肌やないか、可愛がられたら、一生の法楽やで」
ほかの者も、一せいに、手を打ってはやさんばかりだ。にたにたと、淫猥な笑いで顔が歪んでいる。
それらの不潔な顔にも、城之介は腹が立った。
「おれを、なんだと思っているのだ」
「若い……」
と、たしかに年かさの男が言った。虱でもいるのか、襟をぼりぼりかきながら、
「若いの、怒ることはない。女に見初められて怒ることはない」
「……」
「御前は、おぬしが好きだというておる」
御前といわれても、わからない。こんな呼び方は、かならずしも尊敬からばかり出てはいない。
「おれを、そんなつもりで助けたのか」
「そうや、それでのうて、なんで助けるかいな。一文にもならへんのに」

「……」
「ええ男やさかい、助けて来てや、と御前がダダこねるよってに、危ない橋も渡ったんやないか。有難い思わんとあかんがな」
「それは、助けてもろうたことは感謝している」
「そやろ。ほなら、なんぞお礼しいな。口でなんぼ感謝たら、言うたかて、一文半銭にもならへん」
「その通りや、城之介」
と、団六が刀の鐺の車を草で掃除しながら言う。
「御前がおぬしに惚れたんやないけ。女に惚れられて、いのち助けてもろうて、ろくに礼もせんでは犬畜生や。それとも、役人のところに帰りたいけ」
「いや、それは……」
城之介は詰まった。どうしてよいかわからぬ。が、ともかく、義理か、義務かどちらにせよ、女を喜ばす気になれない。
「何やら、おれには、さっきからわからぬことばかりだ」
と、城之介は言って出た。
「あの女——御前は、一体何者なのか」
「……」
「それに、おぬしらもだ。どういう主従か、それが知りたい」
「——そないこと、知らんでもよろし」
「知りたい」

「執っこいねや」
「大体、あの女が、どうしておれを知っているのだ」
「……」
「見初めたとはどこで、おれと逢った？」
また、みんなは沈黙した。
伊予の海賊とはいえない。梵天丸を爆破したのが、美沙とかれらと知ったら、城之介がどんな態度に出るか。はじめから、この一点だけは厳秘とすることに、口止めされている。
「――城之介」
沈黙を破って、美沙の声がした。蔀をあけて、白い顔がのぞいた。

せっかく捕えた城之介に逃げられてしまって、役人たちは面目なく、すごすごと室町御所にもどっている。
あの直後、三人の同輩が矢伏せされ、城之介の姿も見えなくなっていたが、
「計られたぞ」「まだ遠くへはゆくまい」
「草の根をわけても探しださねば」
みんな蒼くなって、そこらを探しまわった。
が、いつまでまごまごしてはいない。とっくに風を喰って、洛北へ逃げていた城之介たち。
役人らは死体を馬に乗せて、悄然と室町御所へ戻って、委細を報告した。
「たわけどもが」
と、将軍義輝は怒って、

「そこらの野伏せりどもに、まんまと計られたのであろう。性根が据っておらぬゆえ、口車にたやすく乗せられたのだ」
城之介は逃げたのではなく、怪しの者どもにさらわれたのだ、とかれらは言った。
夕月も、そうとしか思えなかった。
(あたしのことを忘れたのかしら)
城之介捜索が、家臣の卒爾から、まるで謀叛人捜索のような文章になっていたのを、夕月は知らない。
義輝の好意で、満ち足りた生活をしている夕月だった。城之介と弥九郎の行方を捜しているのも、親しい仲としてのことだから、まさか、謀叛人あつかいされているとは夢にも知らぬ。
「ともあれ、京にいることだけはわかった」
と、義輝は慰め顔に言った。
「なおも、手を尽くさせようぞ、そちの笑顔を見たいでの」
「勿体ない……」
天下の将軍にそんなふうに言われると、夕月は、ほんとうに幸福感で、しびれる思いがした。
権力者というものは、家臣の人格など考えない。いわんや、女心をいたわることなどない。
まして、娼婦としてのいやしい過去を持つ自分を、上臈あつかいして、男女のまぐわいも心のふれあいから入ろうとする義輝の男らしい気持に、惹かれてゆく自分を感じていた。
「どうした？　はははは、そう心配することもあるまい。京にいるならば、程なく見つかるであろうわさ」
「はい、御威光によりまして」

「いや、そちの思い詰めた一心であろう。何にてあれ、人の心の一途なるは美しいもの」
目の前に首垂れた女のゆたかな襟元から、しなやかなくびすじ、なめらかな頬にかけて甘い匂いが、ほのかに漂いでてくるようであった。
義輝は、ほっと吐息して、眼をそらした。
このままでは眠れない。こうしていると、夕月をその場で押し倒しかねない。意馬心猿におののいた。
「夕月、そちのことを思うと、もの狂おしゅうなる」
義輝は少年のように頬をそめて言った。
男に狎れた肌はこわい。
淫虫が敏感に反応するのかもしれない。壮年の精悍な男の体臭はこれすべて性的といってよい。娼婦としての月日が、いつか、そうした情欲にはするすると引き寄せられるようにできていた。
兵法将軍と畏敬される足利義輝には、血すじの気品と尊大さが、公卿の通有性としてそなわっていたが、剣の道をきわめた点で、他のにやけて陰険な公卿とはかなりに違っていた。
それが、男の魅力になっている。
一般的に古来、公卿がきらわれるのは（清朝を亡したのも宦官政治だといわれる）天皇の周辺にあって、下意上達をはばみ、勅諚と称して専横のふるまいがあったからである。近くは岩倉具視などの例を見てもわかる。
足利将軍家は、三、四代目から安泰に馴れて公卿と変わらぬ生活をするようになっている。公武をおさえた権勢は、もはや他に恐れるものがなかったのだ。
その馴れが、乱世を生んだともいえる。政権を把握しながら、真の政治をしなかった。

反抗と叛乱は当然、おこる。
義輝はこうしたなかで、兵法に興味をよせ、自ら剣を執った。
よくいわれるのだが、当時はまだ剣つかい、刀法はいまだ重要視されていない。
合戦の武器は槍であり弓であった。弓にとってかわって鉄砲の威力が認識されはじめてはいたが、槍の長所は、遠隔から〝殴る〟〝突く〟〝薙ぐ〟〝はねる〟などの多きにわたったため、刀は二の次とされていたのである。
当時の合戦の方法は、まず、矢を射合い、それから雑兵らの槍まぜがあり、機を見て騎馬が乗り出し、先鋒を蹴散らす。
騎馬の武士もまた、馬上の槍つかいを本旨としたのだ。
刀をつかうのは、そのあとだ。
〝戦場へ出る時は、始めより切覚えにおぼゆれば……〟
という、習うより馴れろ式の戦剣法で充分とされていた。
それを呼気、心気、胆気の三者に技量を合致せしめて、一つの法を確立したのが、剣法である。
剣法刀法のことを、当時は〝兵法〟といった。
その兵法は、鹿島、香取の神人から出たといわれる。ここに日本の剣が心を第一とし、技量はこれに次ぐとされる所以である。この鹿島流の松本尚勝、香取の飯篠家直らとともに、塚原卜伝の名をあまねくしたのが、この義輝の師となったことにある。
卜伝の高名な弟子は、他に伊勢の国司北畠具教などもいるが、義輝の場合、極意を受けて、虚名の将軍剣術ではなかった。
それだけに、

〝兵法将軍〟

の面目躍如たるものがある。豪華な長袖で、歌を詠んで女漁りしている連中とはちがう。八代の義政などは優柔不断で、男色に熱をあげていたから、日野富子をして女将軍といわしめるような、女上位の乱れた世を現出させてしまった。

歴代の将軍、足利と徳川を合わせて三十人（奇妙に両者とも十五代で滅亡している）のうちで、足利十三代義輝ほど武辺者はいない。

柳生を師として家康や秀忠がうんぬんという説もあるが、実際にどれだけの腕があったかは疑問だ。

その点、義輝は実証されている。

塚原卜伝に三千石（当時は貫）ほどの知行を与え、師として待遇し、兵法に精進した。

卜伝のことは、〔甲陽軍鑑〕にこうある。

――右の太刀は、一つの位、一つの太刀、一つ太刀、かくの如く太刀一つを、三段に見分け候……第一は天の時、第二は地の利、天地を合する太刀也。第三至極は一つ太刀、是は人の和と工夫の所也。と。

義輝が授かった極意こそ、その、

〈一つ太刀〉

詳しいことは伝わっていないが、当時の兵法が力の剣であったことは疑いない。

重い具足を着こんだ上での戦闘は、後の世の竹刀剣法のように、飛んだりはねたりできない。

突くにせよ、斬るにせよ、強い力が支配する。

義輝の体軀は、尊氏以来といわれるすぐれたものだった。

六尺は優に超えている。卜伝の鍛錬をうけて、ますます骨が固まっている。

将軍職や官位のすべてを剝いだ裸の男となっても、充分、兵法者としても通る体軀であった。

男が四十をすぎると、自分の顔に責任を持てといわれるのは、その過去の生活が、ある表情を作りだすからである。

思想や信念の如何だけでも、人相は変わる。芝居の役者や映画俳優の二枚目が、多く晩年には大根役者のさげすみで不遇になるのは色男役でいい気になったまま、おのれを陶冶することがないからだ。

その意味でも、義輝の場合、数度の合戦や流浪の困苦に耐え、兵法にはげんだ青年期の歳月が、男らしい凛然たるものを作りあげていた。

夕月への想いが強烈であっても欲望をおさえることができたし、ふかい思いやりの心で愛ることができたのも、そのゆえである。

逞しく、深い男の心が、夕月を温かく包みこんでいた。

「夕月、おもしろいものを見せてくれようぞ」

家臣に命じて、篝火を運びこませた。

三基。大篝火で庭前は昼のように明るくなると、

「犬槍の支度をせい」

と、命じた。

家臣たちは、はっと顔色を変えた。

近習の進士美作守が、

「それは、お取り止めのほどを」

「なぜじゃ」
「玉体に、もし万一のことあれば」
「ははは、案じるな。犬槍で万一のことがあれば、合戦で雑兵の槍先にかかって果てよう。太刀をもて。太刀蔵より十振持て来れ」
何を始めようというのか。
大篝火三基をともした将軍の新第である。
春の夜の闇にあかあかと炎は燃えさかり、火の粉が舞い飛ぶ。
この新第は正月から造営しはじめたもので、まだ完成してはいなかった。
周辺の築地なども半分ぐらいしか出来ていなかったし、厩や御鷹部屋や侍部屋などもまだ、屋根が出来たばかりだった。
したがって、数十羽の愛鷹や愛馬なども、その大部分は旧第においてある。
新第にはその代わりに、犬部屋があった。
犬部屋といっても、囲いと板屋根だけの簡単なものだが、小牛ほどもある猛犬が二十頭ばかり。西の塀際の囲いに収容されているのを見ては、不埒者も侵入できない。
「犬槍を……」
と、将軍義輝が命じて支度をさせたのは、この猛犬——むく犬、土佐犬、阪東犬（秋田犬）など種々雑多な犬どもの背に竹槍をくくりつけることだった。
〝当夜仰せ出だされ候処の犬槍、六本〟と記録にある。六頭といわずして槍の数を記したのは、賤ヶ嶽の七本槍などと同じ呼称である。
短槍長槍をあらわしているのであろう、竹槍の長さはまちまちであった。

犬どもは背覆いの布を掛けられ、そこに竹槍を結びつけられた。節ちかくに穴をあけて縄を通して結びつけてあるので、いかに暴走しても、落ちるようなことはない。
その上、するどく削いだ竹の先は上向きで地上三尺あるいは五尺にあげられている。
縁近くに坐らされて、
「見物せよ」
と、義輝は言ったが、曳きだされたこれらの犬槍を見ると、夕月は、さっと蒼ざめた。
「まさか、あの……」
語尾は口の中で消えている。
恐怖で背すじが寒くなった。
「ははは、見ものじゃぞ、夕月、案じることはない。笑うて見ていよ」
義輝は豪放に一笑した。
その面から、将軍の肩書きも足利の血脈も消え、不逞なばかりの戦国武士が感じられた。
剽悍蛮勇の男がそこにいた。
白小袖に腹巻（胴鎧）、草摺に脛当、猪毛の足袋沓をはいて厚重ねの太刀をひっさげて立った義輝は、戦場往来のすさまじい武辺者になりきっている。
「支度はととのうたか」
凜然と義輝は言い放った。
「いつでもよいぞ……」
竹槍を背負った猛犬たちは、塀ぎわに並べられた。
えんえんと燃えさかる大篝火の炎と火の粉が、犬どもの野性をかきたて、すっくと立った義輝

とその手にぎらぎら光る太刀に、敵がい心を起こしたように、ううう と、狼のような呻きを洩らし、一犬が吠えはじめると、みんな負けじと吠え声をあげた。

「やめて！　やめて下さいまし、上様の御身が……」

思わず夕月は叫んでいた。

いかに義輝が剣に長じているといっても、足利将軍ではないか。

それに、相手がひとりならまだしも、小牛ほどもある猛犬六頭。

その上、その背には、先端をするどく削ぎ尖らせた槍がくくりつけてある。

一度に放てば、六頭と六槍――義輝の孤身にむかって襲いかかるのだ。

「おやめになってくださいまし、そんな、危ないことは……」

夕月の声は涙声になって、とめようとした。

「なんの案じることはない、遊びじゃ、見ていよ」

義輝はこう言い放って、

「放て！」

と、命じた。

小者たちが、六人。それぞれ気をはやらせる犬を押さえていたのである。

「心得ました」

塀ぎわに控えた近習が小者たちに命じる。

「一つ息二つ数えじゃ。やれ！」

さっと右端の一人が首輪を放した。

はやりにはやっていたむく犬である。夜空に吠えたてて、走りだした。

「次！」

さっと二番手が走りだす。二つ数えて三番犬――次々と犬槍は義輝目がけて走り寄る。

五番目が走りだしたときは、すでに先頭の犬は義輝の眼前二間に迫っていた。

すさまじい牙、赤い口中。それより早く竹槍が胸を狙ってくる。

「来たな」

義輝の眼がかっと見ひらかれ、一足ひくや、さっと竹槍を薙ぎ払った。

かつん、とかん高い音をたてて先端が尺余、宙にとぶ。引き寄せられたように、犬はほとんど衝撃も受けずに、飛びかかってきた。

竹槍を切った刀を小手返しする間もおかせぬ犬の牙である。見ていた夕月は、あっと面を蔽った。

身を低めた義輝の掬い斬りが、しかしあざやかに犬を胴斬りにしている。

サーッと血の雨が降りそそぐのを拭うまもなく、次の竹槍が眼前に――。

これは身をひらいてぐいと掴んだ。

竹槍と犬の背覆いはしっかり結ばれているので、スライドしない。

たたらを踏む犬が、狂ったように吠えたてる。その間に三頭目が竹槍を突っかけてくる。これはすっぱりと切り落とした。血刀をそのままに、ぶすっと、口中を突き刺している。

がりっと牙が反射的に刃を噛んだが、噛み折るほどのことはできない。ぶるるっと四肢をふるわして崩れるのを、串抜きに蹴放すようにこそいで、四頭目を、これは竹槍から身をさけて、真っ向から、唐竹割りに土佐犬の脳天から打ち割っている。

左手はその間も、竹槍を掴んだままだったのである。その二頭目のやつを無造作にひねるよう

に首を打ち落とすや、竹槍を奪いとっている。

前にも書いたように、乱世にあっての刀法は、〃切り覚えにおぼゆる〃ことが習いとされていた。

つまり戦場往来でおのずと、剣の使い方はわかるというのである。

戦場往来の強者は、また、

〃他をとりておのれのものとするを上とす〃こともおぼえた。

つまり、剣はいかに名刀でも刃こぼれするし、折れることもある、曲ることもある。そんな場合、敵の刀、槍、薙刀、なんでも奪って闘う。

その場合、眼が大切で、なまくらと上物とを、一瞬に見わけなければならない。

死体の持っているものなら、敵も味方もなく、活用する。その臨機応変の行為も、戦場を馳駆しておぼえられるものだ。

いましも、犬槍に囲まれて、将軍義輝が、斬り伏せた犬の背から竹槍を奪ったのは、その活用にほかならない。

左手に竹槍をとるや、第五の犬槍をはらいのけ、第六の犬槍を切った。

が、さすがに、この休む間もない犬槍攻めに、義輝に疲れが出て、最初の機敏さに欠けていたのは疑いない。

切るには切ったが、僅か、四、五寸。

竹槍を切るには、手許を狙えといわれるように、先端近くを切ったのでは、そのまま、また竹槍になる。

手許の狂いが、無駄切りしている。狂った犬の動きに、義輝は顔をふったが、さっと、竹の先

端がどこかを掠めた。

「あっ！」

と、夕月は叫んだ。

義輝はしかし、そのまま一太刀に五頭目の犬を切り、その血刀を六頭目に投げつけていた。

犬のほうもひらりと、身をかわしている。が、それだけ、攻撃の手がゆるみ、義輝の体勢の立ち直りをゆるすことになった。

最後の一頭と思うと、ゆとりも出た。義輝は竹槍をしごくや、威嚇の声をあげて飛びかかって来た犬を叩き伏せ、急所をざくっと、貫いている。

「おお！」

みんなはどよめいた。

抜きとった血まみれの竹槍を杖ついて、義輝はふっと大きく息をついだ。

万一の場合を予測して、弓に矢をつがえていた弓組も、短槍をかいこんでいた者も、ほっとして、歓声を洩らした。

「上様！……」

たまらずに、夕月は転がるように縁からおりると、裸足のままかけより、仁王立ちの義輝にすがりついた。

「御無事で、御無事で……」

せきあぐる涙をこらえきれずに夕月は、泣きじゃくっている。

「はははは、泣くやつがあるか。犬などに咬み殺される義輝ではないわ」

一段とはげしく燃えさかる篝火に赤く照り映えて、男らしい義輝の顔をふり仰いだとき、

「ほほほほ、おみごとでございますこと」
どこやらで、とげを含んだ女の声がした。
「――おみごと」
と、その声は、皮肉たっぷりに言った。
「天下の将軍さまが、なんとまあおみごとなこと、ほほほほ、源氏の長者、征夷大将軍さまが、犬どもを相手になされて……」
きんきんとした、金属的な声である。
寝殿の入側（いるかわ）に一人の女性が立っていた。すらりとした鶴のような姿で、侍女が三人控えている。
むろん、夕月も知っている。
義輝の北ノ方――正室だ。
この女性は、五摂家の筆頭、近衛から来ている。稙家（たねいえ）の姫君だという。この年二十七歳だが、どことなく姫づくりから脱けきらず、二十歳そこそこに見える。
この時代の二十七歳といえば大年増なのだが、重いものとて箸より持ったことのない、それこそ厠へ入っても侍女に始末させるというふうで、文字通り、やんごとないお姫様だ。
そうした育ちは、名門足利将軍の正室にこそふさわしい。年齢も三つ違いで、夫婦雛のようなものだったが、そうした生まれにあり勝ちの高慢で、お姫様気分の脱けぬ北ノ方が、義輝の気にそまなかった。
男女の仲は――夫婦の仲で特にそうだが、琴瑟相和するまでには時間がかかる。
北ノ方は、夫婦の睦み事よりもお姫様の日常を崩したくないという幼稚さで、義輝との房事もうまくいくはずがなかった。

義輝の心は、とっくに他へ移っていた。むしろ、その方が、北ノ方には気楽だった。
髪の手入れに一刻もかけたり、歌を詠み、折紙や双六、投扇興などの遊びごとに日を送っている。
義輝が、他にもとめた女の数は知れぬが、夕月があらわれるまで、もっとも寵愛が深かったのは、
〝小侍従（こじじゅう）〟
と呼ばれる女性だった。
まだ十七歳で愛くるしい。冷たく美しく死蠟のような北ノ方から、心を移すには、恰好の若さと飾りのない無垢の心を持った娘だった。
義輝はかなり、この小侍従に打ちこんでいる。
寵愛すでに一年余。だが、なんといっても若い。
義輝の丁度半分に近い。倦きがくるのはしかたがない。義輝にしてみれば、北ノ方に対して、ややあてつけ気味なところもあったのだ。
そこにあらわれたのが夕月だった。
多くの男を受け入れた夕月は、その若さで、汚点を残すところまでいっていない。濡れ濡れと、花のひらいた新鮮さと、艶麗さが、ほどよく女ぶりをいかして、最も色香を放っているときである。
将軍義輝が迷ったのも無理はなかった。
小侍従は旧第におき、新第には夕月を置いているのも、まだ彼女の心が解けぬいま、北ノ方が目くじらを立てることはあるまい、と思ったからである。

だが、女性は敏感だ。
殊に、北ノ方にしてみれば、義輝の心が夕月に移っていることを側近から聞いている。
（どのような女か）
と、一応の関心を持った。
夫を寝取られる、というような女心とは違う。彼女の方には、義輝への愛情がないのだから、将軍家夫人としての権威をないがしろにする女への憎しみだ。
したがって、本来、義輝が手をつけた女は、いずれも北ノ方へ挨拶にゆかなければならない。この慣わしは、ずっと下って徳川時代の大奥をもって、頂点を示したが、説によると八代将軍義政と日野富子の代にはじまったといわれる。
もっとも義政は倒錯症で男色にしか興味を示さなかったという説も、あながち一笑に付されないものがあるから、どこまで正しいかわからない。
ともあれ、北ノ方が、夕月の存在に女らしい妬心を抱きはじめていたのは疑いない。
「ほほほほ、どこの迷い女狐か知らねども、公方にすがりついて、あられもない図よのう」
北ノ方は、けらけらと金属的な声で笑って、
「公方におかせられても、犬を斬る刀はお持ちでも、狐は斬れぬと見えまするな。なんと、御大層な犬槍斬りでありまする」
むごたらしい犬たちの死体と血の異臭に、北ノ方は仰々しく檜扇で半面を蔽った。
犬たちの半分は、まだ死にきれず、血のなかでもがいていた。その断末魔の呻きと咆哮が、無気味に夜空にひびいている。
「新第を自らけがれた血で汚しなされるとは、公方には、気狂い遊ばされたかと、世上の噂になりましょうものを」

その言葉には抵抗し難い。
が、義輝は夕月のてまえ、笑いでまぎらそうとした。
「否とよ。将軍健在なれば京は安泰ならんと、かえって安堵するであろうものよ」
「ほほほほ、女狐にたぶらかされての犬斬り、なんとてお健やかでありましょう」
こう言いだしたら、女の口は際限ない。
しまいには慎しみ忘れて、声あらげ、ヒステリックになる。泣く喚く、だ。近衛家の姫君でわがまま一杯の育ちは、当初は可愛ゆくとも、何年たってもその調子では男はやりきれなくなる。
近習に顎をしゃくって、
「やれやれ春の夜にこの汗じゃ、湯浴みするぞ」
と、きざはしをあがった。
北ノ方ははじけるような高笑いをした。勝った、と思ったのであろうか。
（いつもより烈しい）
と、義輝は思った。
小侍従に熱をあげていたころでもこうではなかった。女の本能的な直感で、夕月に対する思いの深さを、するどく見ぬいているのであろうか。
無邪気に見える、つるりとした能面のような表情の下に隠された妬心がうとましかった。

義輝が京の新第で猛犬どもを斬りまくっているころ、松永弾正は、北河内の飯盛山城に居た。
三好長慶と対面していた。
いや、正確には、長慶の死体の髭を剃っていたのである。
長慶はすでに死んでいた。前に伊賀忍者〝赤目ノ木鼠〟が告白したように、
（――毒をまいらせた）
地獄への道は善意で敷かれているという。木鼠は死に臨んで告白ざんげしないと、死にきれなかったのであろう。その最後の言葉は信じてよい。
松永弾正に最大限に利用された怨みを述べている。
一代の英傑三好修理大夫長慶は死んだが、死体は土葬もされず、荼毘にも附されなかった。
げんに長慶は、いま弾正の前に横たわっている。
「ずいぶんと、髭がのびましたなあ」
弾正は今宵、飯盛山城にくると長慶に対面して、そう言った。
「剃刀をもて、わしが剃りまいらせる」

塩漬けの死体の顔から、塩を刷毛で払い、髭を剃りおとしている。
人間は死んだ後にも髭はのびるのである。
剃刀を動かしながら弾正は、遠い昔、長慶に仕えたころのことを思いだしていた。
あらゆる忠勤に励んで、長慶の心を獲り、ここまでのし上る基礎をこしらえたころのことである。
（手のかかる主君であったが……死んでも手がかかる）
苦笑が浮かんだのを、ぐっと嚙み殺した。
まわりに近臣たちがいた。
この飯盛山城で、長慶の死を知っている者僅か数人にすぎなかった。
かれらはいずれも、松永弾正、それから三好三人衆の前で烏牛王（熊野牛王宝印の六字に神の使いといわれる霊鳥の象を印せる誓紙）の誓詞をしたため、血判して、秘密を誓っている。
ほかにも、女を含めて二十人ばかりの者が、死去当時に知ったが、これは、ことごとく惨殺、口をふさがれた。女や軽輩は、
〈口に戸を立てがたき、意志弱き者にてあれば〉
という。したがって、この長慶の居間に出入りを許されている者は少ない。
さらに、この居間に入っても、長慶の死体をすぐに発見することはできない。
この城の規模は後に述べるが、深い地下蔵に安置してあり、対面のたびに、滑車で引きあげるようになっている。
これを考案したのは、松永弾正である。
もともと、長慶の死体をこんなに長く保存している心算はなかったのだ。おのれの悪業を隠し

通すために、こうせざるをえなくなってしまったのだ。信じられる

権勢家の死を暫く秘めておくことは、珍しくはない。が、長慶の場合は長すぎた。記録としても、最長ではなかろうか。

ミイラを作る方法がある。

古代エジプトあたりで発達したもので、ミイラを見た人も少なくないと思うが、日本のような湿度の高い風土では、ミイラは難しい。

それでも、有名な中尊寺のそれや、他にも幾つか現存している。

だが、いずれも、からからに乾ききったもので、生前の面影は容易にうかがえない。

ところが乾燥地帯では、焼塩や油脂や香料などを巧みに使って、生前の面影を長くとどめるという方法を考えだした。

日本の高僧らが自らをミイラにする法の一つとして、

〈木食〉

ということがいわれる。

死の前数カ月、水気を段々少なくするために、草木を食とし、あるいは竹を削って食べるなどして、しだいに、五体をひからびさせてゆくのである。

そうしたことが可能かどうか、言明のかぎりではないが、三好長慶の場合は他殺だ。毒死だから、一層始末が悪い。

たしかに、三好一族にとっては、長慶の死は三好一党の凋落を感じさせる。

前述したように、有為の弟たちから倅まで変死したあとだから、〃草木黄落〃を思わせることになる。

直接的には、長慶半生の最大の敵であった細川晴元が死に、氏継も死んで、いま、三好衆の版図をうかがう実力者はいない。

後に松永弾正の野望を砕くに至る織田信長は、まだそれだけの力を示すに至っていない。

したがって、

〈長慶の死〉

が、世間に洩れて、すぐに三好衆の地盤が崩壊するわけではなかった。

すでに病弱になっていた生前から、松永弾正と三好三人衆というラインが、実際面での政治を執っていたのだし、それも世間は認識していたのだから、後世、史家の説くような、長慶の偉大さが、三好党のすべてだったとするのは当たらない。

多分に、松永弾正の、

〈都合〉

がある。

毒死の場合、常態の病死老衰死よりも、早く五体が腐るのは自明だ。

「上様の逝去は、固く秘めねばならぬ」

と、松永弾正は言い、その場で腹心に命じて、前記の小者ら雑輩二十数人の殺戮を行なったという。

その必要を強調するための果断な措置だというのである。三人衆も、気をのまれた。

弾正の謀才は、演技の巧みさと相まって、智と胆とが効果をあらわすにある。

「今生の温顔を保たねばならぬ。臓腑をとり除かねば」

と、医師を促し、胸を裂き、臓器をかき出させたという。

酸鼻な情景だが、戦国時代は、首級に化粧するのが女の役目だったほど、神経は図太い。むしろてきぱきとふるまう弾正の姿が頼もしく見えたことであろう。

お抱えの医者たちが、どのような執刀ぶりだったか、詳しくはわからない。が、この〝長慶の臓腑抜きとり〟が事実だとすると、医学史は書き替えられるべきかもしれない。

史上、初のいわゆる〝腑分け〟は、蘭医学が入ってきてのことだから、ずっと後になる。

「臓腑を抜きとり、傷口を縫いあわせよ。腹中に塩を詰めるのじゃ。さすれば、暫くは保とう」

傷口を縫うというのも、珍しい。当時は、焼きゴテなどで融合させるのが普通だった。ともあれ、こうして、松永弾正は、

〈御遺体保存〉

の大義名分の蔭で、〝毒殺〟の証拠を隠しおおせたのである。

そこまで気をつかったのは、少量ずつの毒の投与により、衰弱がつづいて、医師や祈禱師などの〝眼〟がありすぎた。

(いつ〝毒〟がばれるかもしれぬ)

と、弾正はそれが心配だったのだ。

〔三好記〕によると、

――医師数ヲ尽シテ参リ集リ、倉公華陀力術ヲ尽シ、君臣佐使ノ薬ヲ施シ奉レドモ更ニ験無ク、陰陽ノ頭有験ノ高僧集テ不動・慈救・使命ノ法、種々懇祈ヲ致セ共、病日日ニ随テ重ク成……

名医の聞こえ高い者が集められている。義輝も某を差し向けてきていたほどで、それらの中の一人でもが、不審を起こして、毒物詮議をはじめないうちに、死体を塩漬けにしてしまわねばならなかったのだ。

塩漬けにしただけでは長く保たない。その安置するところが問題だった。

この飯盛山城が、最初、城砦として築かれたのは古い。

建武年間というから、この時代より遡ること二百三十年も前だ。北条氏の被官であった佐々目某だといわれている。

この地名は北河内郡四条畷町南野で、いうまでもなく四条畷は楠木正行が敗死したところだ。

山城の規模としては、かなり大きい方で、標高三百十八メートル。生駒連山と南方だけ峰つづきになっていて、三方は急斜面だから山城の条件を備えている。

いまも高櫓の名称が残っている本丸跡は六段の平地よりなり、二ノ丸は南方の峰につづく千畳敷があり、南ノ丸、北方の屋根ぞいには三本松丸、御体塚丸、北ノ丸、それに出丸が幾つかあり、東西の屋根には、それぞれ東ノ丸、西ノ丸のあとがある。現在の遺構から見ても城の主要部だけで、南北の距離は二キロに及んでいる。

山城のあとは、たいてい、砦にすぎないようなものが多く、したがって、これくらい城址が窺われるのは、山城としても少ない。

さすがに、「天下の副王」とうたわれた三好長慶の居城だけのことがある。

この城主の居間は、万一の落城をおもんぱかって抜け穴が出来ていた。

当時の城には、山城と平城、あるいは浮城いずれも抜け穴はあったものだが、この飯盛山城のそれは、その形状に於て特異であった。

乱世に於ける忍びノ者の役目は大半が、城の秘密を探るにあったという。

濠の深さ、塀の仕掛けから、天守へ辿りつく経路、陥し穴、それら、もろもろの城の秘密を探るが、就中、要求されるのは、城主一族の落城の際の逃げ道だった。

名誉を重んじる武将は、落城に際して割腹する。
が、戦国という時代は、かなりに即物的で、名誉よりも〝利〟を重んじる気風が少なくなかったのである。
意外なほどに、生に執着しているし、名誉よりも実利をもとめた点で、奇妙に今日の様相に似ている。
したがって、落城すれば、
〈城を枕に討死〉
というのは、逃げ道を失ってからのことが多い。
つまり、抜け穴で、逆に、敵から内懐へ入りこまれる穴でもある。
忍者が必死に探すのは、抜け穴を発見すれば、その城は如何に金城鉄壁を誇っていても、もろく崩壊落城するからにほかならない。
したがって、城の抜け穴は、城主一族のほか、家臣にも知らさないのが普通であった。
この河内の飯盛山の抜け穴は、城主の居間の片隅にある、
〈内井戸〉
だった。
この部屋の中の井戸というのは、家臣の中に叛逆の企てがきざし、外の井戸に毒物を投げこまれることがあっても、大丈夫という、敵はむろん、味方といえども信じ難い時代の必然の対応策によるものであった。
眼のある忍者なら、おそろしく頑丈な滑車と、太綱に、不審を感じるにちがいなかった。
むろん、井戸で深く、夏でも冷たい水が汲めるのだが、その途中に横穴がある。

そこから各曲輪の下をくぐって城裏の谷へ抜けられるようになっているのだ。
この横穴を、松永弾正は、長慶の死体の、
〈保存場所〉
とした。
谷から吹きあげる風が冷たく、地下の洞窟を吹きぬけて、塩漬け死体の腐敗を遅らしたのである。
魚は眼から腐るという。長慶の眼玉も早くにえぐりとられ、義眼を嵌(は)めこんだ。
玻璃の玉である。ポルトガルで王侯の死後、等身大の木彫で〝現身(うつしみ)〟とするため、両眼にはめこむものという。
松永弾正は、これを堺の納屋衆からもとめている。
物好きな納屋衆で、虎の毛皮にはめていたものである。
長慶の死体は、だから、いつも眼をむいていた。
松永弾正は髭を剃りながら、
（いつも眼をむいて御苦労なことじゃ）
と、思った。
（それにしても、かなり臭いな、塩を代えるだけでは保たん、なんとかしなければ）
毒殺した主人三好修理大夫長慶を生きているが如く見せかけているのは、もう一つ理由がある。
（天下を奪るには、思いきったことをせねばならぬ。そのためにしかし、世間の悪評を受けるのは、愚かなことだ……）
常々、松永弾正は考えていた。

（悪事は、みんな長慶のしわざということにしてしまうのだ）
執事という立場は、その場合、まことに好都合であった。
「主人の命令で、しかたなしにやった」
といえば、通る。
命令は絶対だった。首斬り役人を非難する者はいない。
松永弾正の老獪さは、長慶の死体が腐り果てるまで、
（世間の悪罵の楯に）
使おうというのだ。
（それにしても、急がねばならんな、長慶どのが腐れ骨になってしまったら、楯にもならん）
こう思ったとき、ある考えが閃めいた。
翌日――。
弾正は腹心の者三名を連れただけで、裏谷へおりた。
熊笹に蔽われた細いけもの道がある。弾正が、愛馬を巧みに馭しつつ、その小径をおりてゆく、あとから、家臣が三人、小走りについてゆく。
そこは搦手（からめて）近くで抜け穴の出口が近い。
弾正はやや平らなところで馬を止め、あたりを見回した。
「暑い……」
と、くびすじの汗を拭った。
「はい、まるで、夏のようでございます」
走ってきた家来たちは、だらだら汗を流している。

空には、一朶の白雲もなく、手の染まりそうな青空で、黄いろい蝶が飛んでいる。
「夏のようだと申して、もはや初夏ではないか」
と、訓しながら、弾正の眼は、何かを探すように、四方に投げられている。
その探しものが見つかったように、ひたと眼を据えた。
「あれを……」
と、扇子をあげて指した。
ずっと下のほうに、キラキラ光る谷川が見える。
その畔を網代笠に墨染の衣の旅僧がゆくのが見える。
「あの者を呼べ」
かしこまりました、と、二人の家来が走りだした。
一人で行かなかったのは、抵抗して拒んだ場合は、無理やりでも連行するためである。
弾正が見守っていると、件の旅僧は、素直に二人にはさまれるようにして、斜面をのぼってきた。
旅僧は、馬前にくると、膝を折っておじぎをした。
「何処の寺じゃな」
「はい、高野でございます」
「ふむ、名は」
問いかけるのと、抜刀するのが同時だった。弾正は馬上から身を乗りだすように、片手斬りに旅僧を斬り下げていた。
馬上から抜打ちの一刀――。

松永弾正は兵法を知らぬ。戦場の斬りおぼえ兵法である。
兜の八幡座を斬り割るばかりのすさまじい一刀が剃りこぼちた青頭を割った。
そのときまで、家来たち三人は弾正の真意を計りかねていたのだ。
あっと思ったときは、旅僧の頭が割れ、すさまじい血しぶきが噴いていた。
初夏の、濃淡さまざまの緑に蔽われた静かな山あいである。
乱世ということすら、この静かな山谷では忘れてしまう。空も青く、さんさんたる陽の光りにあふれ、噴血は一種の爽やかさをすら感じさせた。
一太刀である。草の中にむくろとなって横たわった旅僧は、びくびくと四肢をふるわしていたが、それも十と数えぬうちに、動かなくなった。
「おやりなされましたな」
三人は、やっと声を出して、
「無礼者ということで、烏に突っつかせまするか」
「透破(すっぱ)じゃ」
そう言ったとき、弾正の顔は真実、死体を憎いものに思っているように歪んでいた。
家来たちには、しかし、まだ弾正の真意は計りかねたようである。
この場所が、どういう意味を持つのかも知らぬ。
谷をさらに少し下ったところ、山腹をびっしりと雑木が埋めつくしている沢が見えた。山肌も見えない樹海である。
さり気ない顔で、弾正はその下の小径を通った。
樹海はおそらく、踏みこんだらふたたび出て来られないのではないかと思われるほど、密であ

った。
(――この穴を知っている者は、わしと、三人衆と……)
数人の顔を思い浮かべた。
例の城内の抜け穴は、実は、ここが出口なのであった。
沢のどんな角度から見ても、穴は見えない。
微妙な角度で、岩廂がせり出して、人一人やっと潜りぬけられるくらいの穴を黒くあけているだけで、それも、まわりには灌木が繁茂している。
馬酔木(あせび)が多かった。この人畜に害を与える木は、そのまま、外来者への防砦をなしていた。たとえ知らずに樹海に入る者があっても、雨のあとや、この春暖夏暑の季節では特に強烈な臭気が、阻んでくれるのである。
この樹海の下の小径を通りかかった弾正の胸は、次への計画でふくれ上っていた。
と――。
突然、目の前の明るい光りが翳り霞んだ。弾正はおのれの眼を疑った。
次の瞬間、はげしく嘶いて、愛馬が棒立ちになっている。
「ど、どう！　なんとした？」
落馬しなかったのは奇蹟といってよかった。馬を乗りしずめてから弾正は、口取りもしなかった家来たちを叱るべくふりかえると、三人の家来たちは路傍に、芋虫のように丸くなって転がっているではないか。
空には初夏の陽が強烈に輝いている。
森閑たる山中の谷である。あるいは濃く、あるいはうすく、さまざまの緑の樹々が谷を埋めて

いてかれらのほかに、動く人影とて見えなかった。
　鳥の声ばかりがあたりを占めていた。
　ものうく、けだるい初夏の陽に照らされすぎた〝立ちくらみ〟かと思った。
　が、馬まで立ちくらみするだろうか？
　やっと馬を乗り鎮めた弾正は、家来たち三人が芋虫のようになって転がり気を失っているのを知ると、何やら魔風に包まれているような気がして、ぞっと背中が寒くなった。
　冷たい汗を額に感じた。
　弾正は汗を乱暴に手の甲で拭い眼を凝らした。
（誰だ？……）
　人がいた。
　いや、最初は、人とは感じなかった。異様な物体としか思わなかった。
　小径に柿色の衣が一枚、ふわりとひろがっていた。
　衣が捨ててある、と思っただけである。
　ところが、近寄ると、もぐらの這い出るように、衣はむくむくと盛り上って、人の形をなした。
　顔が出た。赤茶けた長い髪をうしろで、縄で束ねただけの異様な老人――。
　その枯木のような痩軀と異風体は読者に記憶があろう。
「何者じゃ！」
　おどろきを隠せず、松永弾正は叫んでいる。
　馬上で、手が刀に走ったが、馬があばれ、抜くどころではない。
　異形の老人はにやりと笑った。

「騒ぐことはないぞな」
　空洞を吹き抜ける風のような、奇妙な無気味さをこもらせた声である。
「おぬしの凶々（まがまが）しい心、わしの他は誰も知らぬでの……」
「……」
「あの抜け穴のことも……」
と、老人はれいの蛇杖をあげてさした。
はっとした。その杖から真っ直ぐ線を引いた樹海の中、抜け穴が黒い口をあけている。
「あの抜け穴から入ってゆけば、長慶の死体にぶつかるというわけじゃの」
「きさま！」
「怒るまいぞ、弾正。誰にも洩らしはせぬわさ。おぬしには〝悪〟の諸相がある、悪の権化（ごんげ）かもしれぬな、おもしろい」
「……」
「本朝は唐土と違うて、〝悪〟の権化が少ないのう、おもしろい男じゃ」
　弾正の馬は静かになっていたが、かれの心は、嵐に弄（もてあそば）れる水面のように、狼狽と不安で逆立っていた。
　敵か味方か？
　端倪すべからざる異形の老人である。
「名を……聞きたい」
　弾正はやっと、そう言った。
　その奇妙な老人は、凝っと弾正を見た。

瞳の色が、灰色のようであり、青味を帯びているようにも見えた。
「さっきの旅僧を斬ったとき、おぬしの心には、悪の炎が燃えたはずじゃ」
名を聞かれても名乗ろうとせず老人は弾正に言った。
「この地上で、おぬしの〝悪〟がどこまで天下を制するかじゃな。なんなら、わしが手伝うてやってもよい」
「――御坊が」
「坊主ではないな」
さらりと歯の欠けた口が笑いで受け流して、
「居士じゃ」
「……」
「果心居士と人は呼ぶな」
読者の記憶にあろう、長崎・平戸で、城之介を救った奇怪な幻術師であった。
どうして、この河内に来ていたのか。乱世の風雲は奇妙な人間を中央に集めるようである。風のように生きている人外の人間には名利をもとめて争う修羅の相が、地獄絵巻をひもといているような面白さがあるのかもしれぬ。
「おぬしの心に雲がかかっているようじゃ」
と、果心居士は、蛇杖を真っ直ぐに、かれの胸に向けて、
「その心痛をはらしてやろうかの」
「――わしには、何も心痛はない」
「長慶はムクロよ」

ずばりと果心居士は言った。
「もはや、腐るのう、蛆がわきはじめているじゃろ」
「……」
「よい方法があるが、聞きとうはないかの？」
しかし、果心居士の言葉に素直に耳を傾けるには、弾正の心は荒みきっていた。
(信じていいか？)
どうして信じられよう。
突然〝影〟のようにあらわれた老人。老翁といっていい。異形といい、おそろしい洞察力といい、無気味なまでの存在である。
素直にその言葉を信じる気になれないのも当然だった。
こうまで弾正の秘密を知るのは、どんな能力があるのか。
腹の中まで見透された不安が、この男の言葉に動かされることに抵抗を強めるのだ。
(いっそ斬ってしまおうか)
と、思ったとたんに、
「それは無駄じゃな、弾正」
黒い口が笑った。
「わしを斬ることは出来ぬ。抜いてみよ、刀は抜けぬて」
言われて、あわてて、抜こうとした。が、抜けぬ。
刀身は鞘と一つに溶けあったもののごとく、ぴたりとくっついていた。弾正は狼狽した。蒼くなったり赤くなったりした。

「どうしたことだ」

そして、眼をあげたとき、果心居士の姿は、かき消すように消え、あくまで明るい初夏の光りがみちていた。

(奇怪な男……)

城へ帰ってからも、弾正の頭からは、その老翁の姿や声がはなれなかった。

(果心居士、とかいうたな)

忍びのワザは、あくまで超人的な訓練と小道具の使い方できまる。木鼠などは、その意味では完全な伊賀者だった。

したがって、その行為が、たとえ卓抜なものでも理解はできる。

が、幻術——となると、これは常人の理解の外であった。

〈めくらまし〉

と、一般では呼ばれる。

源流はペルシャあたりにはじまり、古代シナを経て朝鮮から日本に入ってきたようだが、その奇怪さは、現代でも、解明し難い。

簡単なものは、一種の催眠術などの応用ということになるが、天候を左右したような記録などある。これも被術者の幻覚、幻聴、もうろう状態が描きだしたものならばわかるのだが、そうともいえないような話も残っている。

ともあれ、果心居士が、幻術にたけた男であることを弾正は知らされた。

影のようにあらわれた老翁は、けむりのように消えた。

目くるめくような白日のなかに暫く、その実体さえ、白昼夢のように淡い。

二人の間で交わされた会話ですら仮眠の中のことかのように、うつろで、奇妙だった。ただ、頭がずきずき痛んだ。

家来たち三人も同様だった。

果心居士の姿が消えると同時にかれらも醒めている。

「一体どうしたのかのう」

「なんや、ちょっと居眠っていたような気持や」

「暑い、くらくらするわ」

そんな言葉をぼそぼそと語りあっている。

まるっきり、二人の対話は夢の中にも聞こえなかったようである。

城へ帰ってくると、松永弾正は、ただちに、三好三人衆へ密使をだした。

〈上様御談合の儀これあり……〉

という。

長慶の死を知っている三人衆にあててである。

万一の場合も、長慶生存、を裏付けることになるし、また三人衆の談合は、長慶の生存中からのことだから、その意志を継いでのことといえば、あながち嘘でもない。

そして、こうして三人衆が顔を合わせて談合するのは、必ず重大事にかぎっている。

それをとりはからうのが、松永弾正だった。

長慶の意を体したこの有能な執事は、一族会議をとりはからったように、いままでは、謙虚な姿勢を見せながら、しかし三人の意見のまとめ役的な地位を占め、おのれの意見を通させる実力者に変わってきていた。

が、態度はあくまで、へりくだっている。
「故修理大夫さまの御意志で」
といい、
「幼君の行末を慮りますれば」
と、忠臣顔をする。三好三人衆はこれに瞞されていた。
呼ばれてきた三人。
翌日、顔を合わせたのは、三好日向守長逸、同下野守政康、岩成主税助友通で、それぞれの城から飛んできた。
といっても、常時、百人くらいの家来は連れている。乱世だから一族の間でも、用心の手はぬかない。
かれらの方でも、それぞれサグリの手は入れていて、
「昨日は、裏谷で、人が斬られたそうじゃの」
と、日向守が、じろりと弾正を眺めた。
「それがしが」
と、うすく微笑すら含んで、弾正が言った。
「斬りました」
「なに、おてまえが」
三人は一様に驚き、眼を見合わした。
三人とも三好一族として、権勢を持ち、小大名の格があるが、兵法に於いては足軽に劣る。
弾正にそのような手練があるとはじめて知ったようである。

「乱破・透破のたぐいは、見逃せませぬ。それに彼奴……」
と、声をひそめて、
「馬酔木林から出て来ましたれば。抜け穴を発見したと見えまする」
「なるほど」
「さらに重大なることは……京よりの指令にて参った者」
「なんと？」
驚きは、さらに重なった。
弾正の狙いはそこにあったのである。
「将軍家が……」
「左様、修理大夫の生存を確かめてまいれと、白状したなれば」
長慶の死が、下々で、こそこそと囁かれているのは、前から気になっていたのだ。
京へ噂が流れ、足利将軍義輝の胸にも疑心が影さす。
あり得ることだった。
「されば」
と、主税助が膝を進めて、
「透破を殺されては、かえって将軍家は、疑いを増すことになろうが」
「たしかに、やむを得ませぬ」
弾正の頬骨の高い、削げた頬の面に、このときほど不逞な影が掠めたことはなかった。
「いっそ、こちらから、手を出すことです」
「――弾正、おぬし、何を言いだすのだ」

「食われるならば、その前に食え、かように申しました」
「叩き潰されるまえに、叩く……それしかありますまい」
「……」
「将軍家を！」
　ほとんど同時に三人は言い、そのあと、絶句した。
「将軍であれ誰であれ、向こうが害意を持てば、それは思案にとどまらず、行動に出る。出る前に、こちらが殺る！　それしかありますまい」
　三人は声がなかった。天下の足利将軍を、ひとむかし前のように干戈をまじえているときならばいざ知らず、この平和時に襲撃しようなどとは。
ほどよい酔いが、からだの中心にある。
微醺を帯びる、という語感には、それ自体、ほろ酔いの感じがある。
弾正は三好三人衆との密談に酒を飲まなかった。
この一世一代の陰謀を強力に推し進めるいま、酒に手を出す気はなかった。
熱情は熱弁となって口を奔り、あふれ、三人を巻きこんだ。
弁口の達者は、相手に熱弁を意識させないことにある。熱は時に相手を逆比例して冷静にさせてゆく作用もあるからだ。
　だが、
（この期をおいてほかにない）
　一世一代の大事だと思う弾正の野望が、これを押し切った。熱で溶かした。三人はその弾正の

いう、
「力が正義」
という論理の渦に巻きこまれて、かれの口から吹きだす炎が、地獄火のそれだと気がつかなかったのである。
　三人がそれぞれの城へ帰っていったあと、弾正はこころよい疲労の中にいた。
　酔ったような気持なのだ。
（やった！）
と、かれは思った。
「おれは、やった……」
　三人衆が三好家を永遠ならしめるために天下をとる！　すなわち将軍義輝を討つ！
　この陰謀に、結果として賛意を表したことは、弾正の野望の半ばが、成ったことを意味していた。
（おれが義輝を討つのではない。三好が討つのだ、三好長慶が討つのだ……）
　世間はそう思う。
　強い者が正義の時代でも、将軍という権威や足利家という名家への愛着や哀惜が、三好長慶を憎むことになるだろう。
（憎むがよい、長慶を憎むだけ憎め、本人は死骸だ）
　弾正はあざわらった。
（憎み疲れたら、おれがそっくり三好の地盤をもらう……）
　そう思ったとき、弾正は、灯がゆらりと揺れるのを見た。
　燭の火は、風もないままに、まっすぐ燃え、一炷の青いけむりを天井にたちのぼらせている。

隙間風が入ったように、灯が揺れた。
(異様な?……)
弾正は身を起こした。
その耳に、あの声が聞こえてきたのだ。
〈早くせぬと、腐るぞよ……〉
枯木の空洞を吹きぬけるような声。
〈長慶が腐れば、弾正、そちも腐るわな、ふふふふ〉
無気味さは、あまりにも核心を衝いていたことである。
「どこにいる?」
弾正はあたりを見まわした。
影は見えない。声だけが、耳に入ってくる。
弾正は佩刀に手をのばした。
それを嗤うように、
〈わしは斬れぬぞ。それより、わしに逢いたくば、梁の上を見よ……〉
〈わしは斬れぬぞ〉
と、その声はいう。
影の声である。妖しい夜気からにじみ出たような影の声は、まさしく、気泡のように思われた。
〈影が斬れるか?〉
弾正は無言だった。
どこからその声が聞こえてくるかもわからない。

〈影を斬る刃はないて……の〉
弾正は、おのれに舌打ちしたいような気持で、うなずくしかなかった。
〈わしの申し出を受けるがよいぞ弾正〉
「声だけでは」
と、咽喉が詰まるように、息苦しげに弾正は応酬した。
「姿を見せい……あいたい」
〈ふふふふ、わしにあいたくば、梁の上を見よ〉
ぎょっとして弾正は上を見た。
〈そこにわしが居る〉
梁に?　一抱え以上もあるような、大きな梁が横たわっている。手斧で荒く削った欅からしい。
そこはしかし暗く、一灶の火では、何も見えなかった。
ただ、暗いだけの天井であった。
〈見えぬか?〉
と、その声は蔑みをこめて、
〈ならば、屏風の蔭を見よ〉
「……」
〈そこに、わしが居る〉
弾正はあわてて、金屏風のうしろを見た。
そこに唐金の手焙りがあった。

手焙りの中には、灰も炭もなく、何やら芳香の高い液体がたたえられていた。
（これは？……）
酒の臭いにちがいないのだが――。
琥珀色である。
が、弾正ばかりではなく、当時の酒の概念は現在のわれわれが〃酒〃に抱いているイメージとは違う。
精製したものではない。つまり清酒ではない。どろりと濃いものだ。白濁のいわゆるどぶろくが一般的であったし、したがって、口ざわりのあるものが、酒であり、この唐金の手焙りの中にたたえられたものを、
（酒）
と、感じるには、距離があった。
その澄んだ液体の中に、異様なものが見えた。
鼠――。
鼠の死骸ではないか。その鼠は、昨日死んだもののように丸々ふとり、中で横たわっていた。
〈見たか？〉
と、また、あの声がした。
〈そやつを長慶に入れ代えたくはないかな〉
「……」
〈その鼠、死んで半年になる。長慶もその秘薬に漬けておけば、二年は保つ〉
「この薬……酒の臭いがするが」

〈左様、酒の水よ。それに天竺の秘薬を加えてある。崑崙（コンロン）にのみ生える不老不死の妙薬などを混じたものじゃ、ほしいか弾正〉
（この秘薬を用いれば、死体が何年でも保てるのか？）
松永弾正は、内心驚きながらもその澄みきった奇妙な〃酒〃の臭いのする〃不老不死〃の秘液を見まもっている。
主人の三好長慶に足利将軍殺しの悪名をかぶせるには、長慶の死体を腐らしてはならなかった。
「どこに居るのじゃ？」
弾正は見えぬ影に向かって呼びかけた。
「そちの秘薬、もとめよう、これへ出でよ」
その言葉が終わらぬうちに、返事があった。
〈これへ罷り出て居るわ〉
部屋の一隅に黒いけむりのようにもやもやと漂いにじみ出た影がある。しだいに形をあらわしてきた影は、網代笠を被り、黒衣を着ていた。
「あっ」
と、弾正はのけぞらんばかりに驚いた。
裏谷で、おのれの手にかけた旅の僧ではないか。
その仰天し、瞠目した目の前で網代笠が二つに裂け、ゆらりと両側に落ちた。
「奇ッ怪な……」
網代笠の落ちたあとに、頭がなかった。黒衣は人体にまとわれたかたちで、首だけがなかった。
瞬間、弾正は悪夢を見ているのではないか、と思った。おのれの手にかけた名もしれぬ雲水の

亡霊があらわれたか。

「……」

呆然と見ているまえで、その黒い僧衣は、衣桁からすべり落ちるようにはらりと崩れ落ちた。

あとは、何もない――。

〈ふふふふ、影じゃ〉

あの声が背後でした。

〈わかったかの、それが影じゃ、わが身はこれにあるわえ〉

たしかに果心居士。

例の唐金の手焙りをのぞきこんでいるではないか。弾正の驚愕も怒りも感じないように、琥珀色の液体の中に手を突っこんで、鼠の尻尾をつまんで、するりと引き上げた。

「どうじゃな、弾正どの、長慶をこのようにするか」

「その秘薬、人体を浸すがほどにあるか」

果心居士は返事もなく、ぼとりと鼠をもどした。

いまさら聞かれるまでもない、というのであろう。それがなくばわざわざ、こうやってあらわれはしない。

「――頼むことにする」

重々しく弾正は言った。先ほどからの、ぶざまなおのれを糊塗するように、ゆとりを見せながら、

「成功の暁には充分に礼銀はとらせよう。そちの望み申すがよい」

「さて」

と、果心居士は歯の抜けた口をあけて、かたかたと笑った。

「何を望むかの……ふふふふ、ほしいときに申すわな」

タダほど高いものはないという。果心居士がそのとき明示しないのが、一塊の鉛を呑みこんだような重い澱りとなった。

城之介の立場はおかしなものになっていた。
(あんな女に精を抜かれてはたまらない)
逃げなければ、と思った。
が、矢太や団六たちが放してくれるはずがない。地の理もよくわからないのだ。
この数日の間、洛中洛外を潜行はしたが、漸く東西の見当がつくだけだった。
この千年王城の地には、上ルとか下ルとか方向指示の独自の表現があるし、左京だとか右京だとかいうのも、どこからどっちを向いての右左か、上か下か、よくわからない。
(だが、逃げなければ……)
こんな連中と一緒にいては夕月も探せない。小西弥九郎とも離れればなれになってしまったままだ。
「城之介、御前がお前を見初めたんや、そいつをムダに振るなァ酷いだろうぜ」
と、矢太がいうし、団六も、
「そやそや、男らしゅせなのゥ、ガイに弱いんじゃの」

弱くてもいい。同じ女のために尽くすのなら、夕月のために尽くしたいのだ。
城之介が、この群れから逃げだしたいことがわかると、団六が人の善い顔を近づけて、囁いた。
「御前が怒りださんうちに、なんかせにゃならんがの」
「なんかとは?」
「銭や」
「………」
「金銀財宝、なんでもええ、布でもええからの、御前の気に入るよなものを持ってくるんや」
持ってくるといっても、裸はだしの城之介だ。無一物。どこから持ってくればいいのか。
団六がいう。
「簡単なこっちゃ」
「わいが案内したるで」
「——頼む」
城之介としては、そう言わざるを得ない。
団六はしかし、直ぐ行こうといわない。何を待っているのか、一日、二日と経っていった。
城之介には針の蓆だ。一日も早く、この群れから脱け出したい。折りあるごとに、伊予御前の美沙は城之介を引きずりこもうとする。
そのうちに雨が降った。
「さあ、今夜行くぜよ」
団六は勇みたった。
雨ははじめ小雨だったが、午後になってから激しくなった。風まで出て来たようである。

団六に促されて城之介は雨の中を出た。簑笠に身を包み、真っ暗な街を走った。
「何処にゆくのだ」
「黙ってついて来るがええがな」
団六の長い刀の鐺には車がついている。そいつがくるくると回って雨をはじいた。ぬかるみがあったり、泥がふかくなると、団六は刀を閂(かんぬき)にして、走るのである。
この暗闇では、城之介には方角もわからない。いつもは賑やかな見世棚も店を閉めて、ひっそりとした京の大路小路に、簑虫が、二匹丸くなって走ってゆく。
「ここや」
団六が立ち止まったのは、御所に近い大路の一角で、築地塀が長々とつづき、鬱蒼たる樹木が塀上からのぞいている屋形だった。
「ここが……知り合いか」
「知り合い？　まあ、なんじゃわい、ちょいと知っとらいなァ」
「どこに門があるのだ」
「門まで回ることないけに、ここから入りゃええぞな」
用意の縄をぱっと樹木に投げた。楠か何かの太枝である。馴れている。城之介はそれを見たとき、ふと水夫を思いだした。
南蛮屋もそうだが、城之介自身五島育ちで東シナ海の海賊だ。帆の操作や麻縄の使い方に馴れている。
団六が頭上の枝に投げて巻きつけた、その動作に、船上のそれを感じたのである。
ふと胸に浮かんだ疑惑は、

（海に馴れているような……）
連れてこられた日から、折りふし感じていたものだ。言葉の訛りが四国あたり。伊予を中心に感じられたが、若い城之介にはその判別がはっきりしていたわけではない。
ともあれ、投げ縄によって塀を乗り越えるというのだ。
雨はざんざ降りだ。周辺に見ている眼はない。
団六は巧みに巻きつけると、縄を二、三度強く引いてみて、
「ほれや、上ってつかァせ」
質問するひまはない。城之介は反射的に縄をつかみ、よじのぼった。塀に足をかけ、縄をたぐって一文字瓦にのぼると、
「誰も居らんかの」
「うむ……」
「見張っとれや」
つづいて団六があがってきた。小兵で横に転がった方が早いくらい肥っているが、意外に敏捷なのだ。
「さあ、降りるんじゃ」
言下に飛び降りた。
広い。森閑と鎮まりかえった邸内には雨の音だけである。城之介が、ここが足利将軍家の室町第だと知ったのは、寝殿作りの母屋の近くまで来てからである。
「えっ、義輝公の？」
「そうや、じゃけんどな、将軍はおらんがの」

「……」

「新第をあっちゃに造営して、ここには女ばかりじゃけん」

やっと呑みこめた。女ばかりの将軍家の旧第に入って、金品を掠めようというのだ。

「強盗か……」

城之介の声は自嘲のひびきがある。団六は明るくこれを受け流して、

「さァな、留守侍の出方次第や」

「……」

「手向いするか、逃げるか、どっちかぞな。気づかれんように、金目のもンを持ち出すのが一番じゃがの」

そんな器用なことが出来るだろうか。

城之介はこの場に来て、自分が〝強盗〟を働くということに、それほど驚かなくなっていることを悲しく思った。

(こんなことをしなくては、あの群れから抜けられないのか)

団六はこの邸内の様子を知っているのだろうか。京の大路小路を走り回るのと同じように、渋滞なく、闇と雨の中を進んだ。

中門は開いていた。度々の戦火を受け、手入れもしないままに、古くなった門扉は半ば腐っている。

手直しをしなかったのは、新第を造る予定があったためである。

いずれ二条の新第が完成すれば、この室町御所は廃される。

ここに愛妾だった小侍従を置いたままにしているということは、将軍義輝の気持がすでに離れ

ている証左だった。

中仕切から入った団六と城之介は東の対ノ屋に近づいた。

そこだけ灯がともっている。

雨と闇の広い邸内に、板戸の隙間から洩れる灯が、黄金の針を立てたように光ってい、近づくと雨のしぶきが見えた。

「おれがやろう」

城之介は言った。

度胸を決めた。天下の将軍は庶人に棟別銭を課したり、献上品で肥えている。今度の新第造営の費用も畿内五カ国に課したものである。

(将軍の金は天下の庶民のものだ、一人占めさせておくことはない)

城之介はおのれを、そう納得させた。

石階(きざはし)をあがると回廊で城之介は脇差しを抜いた。

簑笠を脱ぎ捨てるだけの余裕があった。室内では打ち刀も使い難い。

左手でさっと板戸を開ける——抜刀を突き出すようにして、城之介は躍りこんだ。

「静かに」

几帳をさっと斜めに切った。

一基の燭台が部屋の中を灰明るくしていて、几帳の中には一人の佳人が臥せていたが、驚いて身を起こした。

「静かにするのだ。声をたてると斬らねばならぬ」

刀を胸もとに突きつけると、こっくりした。

白い面が紙のようだった。瞠目して、声も出ない。あまりに突然だったし、夢を見ているような気持であろう。

(美しいな)

と、感じた。

義輝の侍妾の一人であろう。そう思うと、むらむらと欲望が頭をもたげた。男の征服欲だ。高貴のものを汚す、その快感は抵抗し難い。

城之介は近よると、女をとらえた。

「名は？」

「……」

「名は何という」

「小侍従」

蚊の鳴くような声だった。

朱の唇が眼の下でふるえていた。寝衣の襟もとがみだれ、若い女の肌の甘い匂いが立ちのぼってくる。

「小侍従……将軍の想いものか」

小侍従が漸く驚きからさめ、この雨夜の闖入者が意外に若く、思ったより優しげであることに気づくと、大胆になった。

小侍従は微笑した。

「想いものかしら」

小侍従は嫣然と微笑した。

自分では意識にない。十七歳で将軍義輝の愛妾となって、室町御所で文字通りのおかいこぐるみの生活を送ってきた。

沈香や麝香など香をふんだんに用い、髪を洗うにも香を溶かした水ですすぎ、香油をたっぷりとつける。

一日に三度、湯浴びし、したがって三度、肌衣を代える。磨きぬかれた玉の肌であった。

女にとって媚は先天的なものであり、また生きる必然であった。

そのとろけるような媚態に、城之介の胸はぶるっとふるえた。

「小侍従、たばかるな」

「ほほほほ、想いものとは寵を受けている女性のこと」

「……」

「いまの小侍従は捨てられたも同然なのを」

ねっとりとからみつくような目差しは、男の手から離れて、かなりになることを物語っているようであった。

「公方の気持が他の方へ移ったのか」

「さあ……」

小首をかしげる。それとは口に出せぬのであろう。

「存じませぬ」

その声も、城之介の耳にはこころよくひびいた。

(公方の想い女を抱く！)

なんという果報か。若者の心がおどったのも無理はない。公方の財宝を奪うことの正当性を信

じたとき、愛妾を犯すことにも、抵抗をおぼえなかった。
（金は、あとだ）
　城之介は刀を捨てた。小侍従を抱き寄せると、唇を吸った。
　ほとんど、女はあらがわなかった。羞恥のもがきは、男の獣性をあふるものでしかない。
　抱いたまま、その場へ倒れたとき、
「不埒者が、何を……」
　頸すじに冷たいものが触れた。
　薙刀の刃先だ。いつの間にか、老女が入ってきて、ぴたりと薙刀をあてていたのである。
「さ、お方さまを放しや、放さねば……」
「——斬るか」
「……」
「斬ってみろ」
　恐れげもなく城之介は言い放った。
「おれの首が飛んだ刹那に、小侍従の息の根がとまる」
「……」
　老女はとまどった。まさかそこまで放胆に構えるとは思っていなかったのであろう。
　そのとき、板戸のところに団六がのぞいた。
「城之介、やられたけ」
　何やら投げた。
　他の部屋から盗んできた白磁の香炉だった。

　老女は身をひねった。香炉は老女の顔を掠め、壁代に当たった。
　刹那、城之介ははね起きざまに脇差しを拾うや、掬い斬りの一刀を逆巻かせていた。
　老女といっても四十過ぎであったろう、食いたいだけ食って肥ったというような、肥満体だけに、掬い斬りの一刀で、吹き出した血潮はおびただしかった。
　ぎゃあーっと、怪鳥のような叫びで、老女は重い音を立てて転がっている。
　頭からその血しぶきを浴びたような気持だった。
「大丈夫けえ、城之介よ」
「うむ、よいところに来てくれた」
「あっちこっち、部屋を探ったが目ぼしいものはないぞなもし」
　団六は布を何丈分か抱えている。ほかにも什器など、手当たりしだいに掠めこんだのか、懐ろがふくらんでいる。
「香炉を損したぞな」
「そのお蔭で助かったのさ」
　薙刀を執念の手がつかんだまま老女は断末魔の苦悶をつづけていた。
　さすがに城之介も、小侍従を抱く気がしなくなっていた。この血の海と異臭のなかでは、いかに美しい女でも、興がのらぬ。
「ほたら、仕事を急ごうぜよ。金銭ありたけもろうてゆくぞな」
　団六はきょときょと見回している。
「そうするか」と、城之介は小侍従に向かって、
「砂金と銀子、もろうてゆきたい」

「進ぜます」
小侍従には燃えかけたからだの処理の方が問題だったようである。虚ろな眼になって、あらぬ方を見ながら、他人事のように言った。
いやだと言うても、持ってゆくわい、と団六は二階棚や御厨子棚の文宮経宮などを乱暴にあけて、さぐった。
「けちな奴は、こがァな所にも隠しとるけんな」
と、唾壺までひっくりかえした。
錦布の砂金の包みが三袋、ゆずり葉が三百匁ばかり。
「おとろしや！　こんだけ持ってけば、御前が喜ぶぞなもし」
「よいか」
城之介はほっとして、
「それでは持って帰れ。おれはこれきり別れよう」
「ほたら、去によるのけ、御前のところに一言礼を……」
「いやだ」
「そがァ言わいと、一緒に」
小侍従は、そんな二人を虚ろな眼で見ている。二人というより城之介を見ている。盗賊を見る眼ではなかった。
「――城之介どの」
すがるように呼んだ。
「砂金がほしいのならば……」

「……」
「もっと進ぜます」
団六が身を乗りだして、
「どこにあるぜよ」
「いまはないけれど……」
「ちぇッ、あさっての話かの、来年の話かの」
阿呆らし、早よ去のうぜよ、と、城之介を促すのへ、
「城之介、おまえに進ぜます。小侍従の頼みをもし聞いてくれるならば……」
男は強く、女は弱い、という。弱げに見える。が、実際には女の方が強い。体力的にも、皮下脂肪が耐熱耐寒度に於て勝る。身二つになって子を産むという苦しみに耐えられるように、女の軀は出来ている。
男を樫の木にたとえるなら、女を柔軟で強い竹にたとえてもよい。その粘りと、外柔内剛は、美しい仮面の下に、残忍なまでの嗜虐性を秘めている。
「頼みがあります……」
雨にとざされた室町御所の寝所で、将軍義輝の愛妾（であった）が囁いたのは、その優しげな目鼻を配した無垢の肌とはうらはらな女夜叉の表情だった。
「殺してほしい」
「……」
「公方の寵を受けている女子を」
城之介は無言だった。啞然としていた。

女の頼みとは、どのようなものか。たかをくくっていたのが、まさか〝殺し〟を頼まれようとは。

「どこの馬の骨ともしれぬ女子が公方の心をとらえたのです。これは公方の御為にも凶兆なれば」

「……」

「足利家の行末も案じられまするゆえ」

何を白々しい。

なまじ美しい顔だけに、その言葉が虚しくひびく。おのれの欲望を素直には吐露できぬのか。

「――その女を殺せば、足利家が安泰か」

「安泰なのは、そなたではないか」

この城之介の皮肉を、小侍従はけらけらと狂女のような笑いで受け流した。

檜扇で口もとを蔽ってはいたが声は弾んだものだった。

「公方のお心の底には、この小侍従があるはず、この肌があるはず、この軀を愛しゅうおぼしめされているはず」

「……」

「なれど、女狐にたぶらかされて一時の迷いに陥っておられるのです」

おまえは女狐ではないのか、と言おうとしてやめた。

「なんせ、伏見の深草あたりで拾うてきた女子」

「なに、深草辺で？」

「女狐でのうて、なんでありましょう」

「それは、いつのことだ」

「よくは知らぬ」

ふっと、顔をそむけた。

憎い敵のことを考えるのもいやだ、という表情だった。

あるいは――と、城之介、夕月のことを思った。

(夕月かもしれぬ。公方に見初められて……夕月の美しさなら、あり得ることだ)

だが、まさか、と否定するものもある。

「ここまで打ち明けてはいまさら、否やを申されては」

「おらがやるぞな」

団六がしゃしゃり出た。

「公方の想い女を殺すのは難儀じゃけんな、馬鹿ったらしい取り引きはでけんぞな。砂金をなんぼくれるんぞな」

人間には誰でも、自分を不幸だと思いこむようなところがある。社会の存在といい、生きていること自体が、すでに不安定なのだから、幸福を感じることはあっても、つかの間のものとしか、思えない。

殊に、この乱世である。

今日の幸福が明日につながるとは誰も保証しない。宗教もアテにならないし、となると、運命的になる。風吹きゃ桶屋が儲かる式に、乱世ほど陰陽師（おんみょうじ）が流行った。

(わたくしくらい、不幸な女はいない……)

将軍義輝の北ノ方は思った。

五摂家の筆頭近衛家から輿入れしてきて、天下の将軍の室となった身は、はた目には何不自由なく見える。

人も羨む身分にはちがいないが、義輝の寵が他の女にいってしまって、もはや、あとへ戻らない感情の溝は、女盛りの身を夜毎、ひとり寝に甘んじなければならなくなっている。

侍女の愛らしい女に夜伽をさせてみても、男とは違い、熟れきった軀が堪能するにはほど遠かった。

(ええ、憎や、憎や)

夜毎もだえることがある。

巫女に命じて、小侍従を呪殺しようとしたりした。まるきり効果はなかったが、

「悪運も強い星の生まれじゃほどに、すぐには、きき目はあらわれぬ、半年先か、一年先か」

そんな巫女の言葉をアテにした。

アテにせねば生きていられなかった。義輝とたまに顔を合わせるときは、悶え苦しみなど、気ぶりにもあらわさぬ。

平静に、おっとりと澄まして見せる。それが近衛の姫のプライドなのだが、それだけに、胸の中はきりきりと煮えくりかえるようだった。

(巫女のきき目がうすければ)

呪師しかない。北ノ方は、夜中にふと自分も顔が能面のなめらかな美しさから、女夜叉に変じているような恐怖に襲われることがあった。

(あたしは、そんな、恐ろしい女ではない……)

そう弁解するのだが、小侍従への怨みは消えるどころか、ますます燃えさかった。

ふしぎなものだ。小侍従への怨みの炎に、幾分なりと、水をかけることになったのは、夕月の出現だった。

義輝の寵が、夕月にうつったことを北ノ方は知った。

(よい気味じゃ、小侍従の顔が見たい……)

その快さも、しかし、一時的なものだった。

義輝の性格では、やがてまた別の女を好んで、夕月が憂目を見る——。

そう思おうとしたが、今度は様子が違った。

一時の浮き心ではなしに、義輝が心底から、夕月を愛しく思っているらしい。

(なげかわしや、道ノ者にひとしい、よごれた女を)

北ノ方は陰陽師を呼んだ。

「わたくしの行先きを教えてたもれ」

殿上人など、庶民とかけ離れた生活をしていると、往々、気狂いする者が多い。

生活の張りというものがなくなり、僅かのことにでも、傷つく。その傷の大きさが発狂を招く。

巫女や陰陽師などは、不安定な心理や病苦のときの、一時の気休めをもたらす存在でしかなかった。

北ノ方の眼を陰陽師はじっと見た。

「よろしゅうございます」

祈禱した。生年月日の星を案じ日暦をめくった。こういう類いのものは、シナの道教——道士などの吉凶占い、星占術などあやしげなものに拠ることで、せいぜい大げさにやる。大げさなほ

ど、愚かな弱い者は信じこむ。
　いくら気を張っていても北ノ方は、神示にでもすがらねば、どうしていいかわからなくなったのだ。
「東方に明あり、花粉舞い、羽衣浮かびて登仙す、の兆にございます」
「東に……」
　北ノ方はうっとりと、眼をうるませた。
　東方に曙光を見たような気がした。
「明日にでも清水寺にお詣りなされれば、佳きことがございましょう」
　清水寺は東山にある。早速北ノ方は輿に乗って出かけた。
　梅雨空がどんよりとして、灰色の雲が垂れた空模様ではあったが朝から一粒の雨も降らず、それだけに、蒸し蒸しした日だった。
　供回りは、牛追いの童や侍女、青侍など十人ばかりの一行で、将軍の北ノ方という身分よりも、近衛家の姫という出自の方を誇示したがっている。侍女など、乳母やむつきのころからのお守り役などが多いのだ。
　そうした出自を鼻にかける妻の態度が、義輝をうとましくしたことにも気のつかない北ノ方であった。
　六道ノ辻から少し登ったあたりで、追いついてきた者がある。
「御方さまには、清水への御参詣はおやめ遊ばされるようにと、陰陽師の申し付けで御注進にあがりました」
　と、息を切らしている。

「なに、陰陽師が詣でるようにとのことゆえ、まいったものを」
「はい、それが今朝に至って、凶相が東雲に出たとのこと」
「……」
「御身体に間違いがあってはと、急ぎ御知らせにまいったのでございます」
「ここから引き返すのか」
「師の申されようには……」
　と、その弟子はいかにも、もっともらしい面持ちで、雲相は時々刻々に変化する。されば、凶より吉に転じるまで、そのあたりで御休息あるがよろしかろう、という。
「このあたりと申しても」
　困惑したとき、一人の武士が近寄ってくるのが見えた。
「これは、御方さまの輿ではないか」
　その武士は、三好義継の家老、池田丹後守であった。
　供侍も、かれの顔は知っているから、
「これは池田さま、どちらへ」
「思い立ったことがあって、清水寺へ詣でようと思うて来たが」
　子息の主殿のほか、供侍が三人ばかり。いずれも平服である。整った面立ちで、平服の父子には和やかな雰囲気がある。
「御方さまにお目通り、かなうか」
　むろん、こうした会話は、輿の中で北ノ方は聞いている。
　公卿の姫によくあるように、姫は荒々しい武人がきらいだ。

池田丹後父子はどちらかというと、好みにあっている。
「丹後どのか」
輿の中から声をかけた。
子息の主殿の顔を、近々と見たのははじめてであった。
（美しい……）
と、思った。
当時、男色は珍しくない。八代将軍の義政などは男色のために子をもうけていないといわれる。
（このような美しい少年が……）
荒々しい武士に想われるのであろうか。そう見ると、いたいけな花を手折るにも似た嗜虐的な興をおぼえた。
（いっそ、あたくしが手折りたい）
そんな想いを読んだように、池田丹後守は言った。
「ここでお逢いしたのも、御縁でござる。すぐ、そこの小路に、てまえの控え屋敷がござれば、御休息なされませぬか」
北ノ方は、すぐに、のった。
まことに縁だと思った。陰陽師は休息せよという。その休息に近くに屋敷があるという。縁でなくて何であろう。
「案内してたも」
北ノ方は檜扇をゆるやかにつかった。
奇妙に胸がおどった。

（暑さのせいにちがいない）
と、思った。
（風がないのだもの……）
男といえば、義輝しか知らない姫育ちであった。
その屋敷に着いて、風通しのいい泉殿に案内されてから、
「おくつろぎを」
と、酒を運ばれると、もう北ノ方は完全に、罠に嵌まった兎にひとしかった。
陰陽師が金をもらって、この罠に一役買ったとは知る由もない。
その点、たしかに姫育ちの、疑いを知らない素直さが北ノ方にはあった。
義輝の寵が他の女へ移ったことの妬心、それだけが、北ノ方を夜叉にしているにすぎない。他のことには、うとい。
「さ、一口、お飲み下されば、輿疲れもなおりましょうほどに」
主殿に上手に奨められると、
「では、一口ですよ」
と、盃を口につけた。
酒がこんなにうまいものと知ったのは、雰囲気のせいだろうか。主殿の微笑が、妖しく彼女をとらえた。
若者の手が、背をさすり、脇の下へ入って、抱きかかえる格好になったのも、なかば夢心地で
北ノ方は、
（ここはどこかしら……）

うっとりとなっていた。

(あたくしは、何をしているのかしら……)

僅かの酒が、波に揺られる木ノ葉のように、彼女のからだを骨ぬきにしていた。

(清水詣でをするつもりで……そうだ陰陽師の使いが来て……池田丹後に逢うて……)

その虚ろな眼の中に、美貌の少年の顔が近々と迫って、

「お方さま……」

熱い息とともに、はげしく唇を吸われた。

そのときは、あっと眼ざめるような気持で、突っぱねようとした。

が、すぐに、その腕の力がなえ、官能の甘い疼きの中に、とろとろと溶けていった。

公卿の姫には、もともと、貞操観念はない。往昔の通い婚の名残りがある。もう、この時代は、そうした風習はなくなってはいたが、血の中に素地がある。

男の強い力に否定できないものが、からだをひらかせ、応(こた)えさせてしまうのだ。

とはいえ、北ノ方にははじめての経験だった。

夫以外の男に肌を許すなどということは、いまのいままで考えもしなかったことである。

夫、義輝が何人かの女を愛し、先に小侍従、いまは夕月に心奪われて、うつつになっているとはいえ、その復讐に、男を漁ろうという気はなかった。

が、姫が思いもしない——潜在意識の復讐心が、主殿に抱かれると、否定よりも、自然と、応えていったのである。

「お方さま、お美しい!」

主殿の言葉は、妖しく天上の囁きとなって、耳たぶにふきこまれた。

「お慕いしておりました」

「本当かえ、本当かえ」

うつつにそう言い、黒髪を乱して、北ノ方は主殿をむさぼった。

義輝にはない若さと肌の張りが北ノ方には甘美な恋の戯れに興じているような喜びを与えたのは否めない。

北ノ方はうつつな声を奔らせ、日ごろの慎ましさも投げうって、情感に溺れて痴態をくりひろげた。

生まれてはじめての歓喜であり、恍惚であった。

おちてのち——。

主殿の姿が消えたのも知らず、放心したように、乱れた姿で横たわっていた。

その虚ろな眼は、何を見ていたのだろうか、天井や、庭や、御簾(みす)や几帳や、それらのものを見ながら実は見ていなかった。おぼろに、眼の表面にうつっているにすぎなかった。

その虚ろな眼の中に、影が入ってきた。

「お楽しみでござりましたな」

北ノ方は、その声に打たれたように、眼をあげ、あっと言った。

あわてて北ノ方は身を起こした。

衣裳をつくろおうとした。が、蒸し暑い曇り空で、ただですら汗ばむ日に、狂おしく歓を尽くしたのだ。

なおそうとしても、その手の下から、衣裳は崩れ、真っ赤になって、言葉も出ない。

「そのまま、そのまま」

と、わけ知りの大人らしく、松永弾正は笑みをたたえて、
「御方さまの勇気には感服つかまつりましたぞ」
「……」
「公方の乱倫に拮抗すべく、御自らも、不倫の道を」
「いいえ、あたくしは……」
「わかっております。御方さまの苦しみはわかりませいでか」
「弾正……」
「はい、この弾正は、御方さまの味方でござりますぞ」
うれしい、と喜ぶべきか。
まだ、からだの中には、主殿の若い、いのちが残っていた。腰のあたりに、異物感がある。長い間、義輝に抱かれなかった北ノ方のからだは、男を受け入れるにも、はじめてのように、ぎごちなさがあったのだ。
「御方さま、御安心なされませ」
「……」
「このことは、誰にも秘密にしておきます」
いまの北ノ方にとって、これ以上の殺し文句があろうか。
「弾正、ほんとうに、誰にも」
「誰にも洩らしはせぬ」
「頼みます、頼みます」
「この秘密は、われら二人だけのものとしておきまする……左様じゃ、主殿にも口どめしておく」

「よしなに」
北ノ方は、いつの間にか、弱い一人の女になっていた。
高貴を誇り、驕慢な面が影をひそめ、哀れに弱い女になっている。
「実を申せば……」
と、弾正はにじり寄って、
「てまえは、主殿が憎い」
「……」
「御方さまの心を奪った主殿が憎うござる」
「いいえ、弾正どの、そのような仲ではありませぬえ」
「と、申されると、主殿は」
「わたくしが、お酒に酔うたところを……羞ずかしい」
「なんと、それは不埒な」
「でも、しかたはありませぬ。主殿を責めないでおくれ」
「せっかくのお言葉、なれば、しかたが……、男と女のまぐわいは、心が通うて、はじめてからだでたしかめあうこそ、愛の美しさと存ずるに」
「はい」
「御方さま」
弾正の息が熱かった。北ノ方は次の瞬間、強く抱きしめられていた。
「弾正が、この世でもっとも美しいと存ずる御方さま」

「いけませぬ、弾正……」
拒む声も力がなく、北ノ方はただ、男の腕の中で小鳩のようにふるえていた。
ひとたび濡れた女体は、ふたたびの露をいとわないのか。北ノ方が、弾正の腕の中で、喜悦の声を放って狂うまでに、いくらもかからなかった。
罪悪感はない。
主殿に抱かれたときは、まだ、それがあった。弾正の逞しい男を受け入れたときから、北ノ方は、ふてぶてしく居直ったといってよかった。
女の強さだった。
女は男によって強くも弱くもなるという。強い男が、おのれに惚れたと思うとき、その男以上の存在だとうぬぼれるのだ。
たしかに一面の真実はある。恋は、如何なる強い男も、女の前に奴隷にしてしまうのだ。
だが、それはあくまでも、真実の恋に於てである。
この場合――。
松永弾正には一片の、
〝恋情〟
もなかった。
恋だの愛だの、真情はとっくの昔に失くしている。好奇心はある、が、あくまでも、それだけのものだ。
人が人を恋うる、この美しさなど、権力の野望に憑かれた男には不必要なものであろう。
「ああ、御方さま、弾正は、もはや御方さまを放しとうない」

女体が狂い、しとどに乱倫の汗を流してから、ぐたりとなったところに、弾正は悪魔の囁きを吹きこんでいる。
「御所に忍んでゆきたいほどじゃ、本心でござる」
「そのようなことは」
と、拒みながらも、北ノ方はそのスリルを予想すると、こころよいときめきを感じた。
御所内で弾正と不倫を楽しむ。これほどの痛烈な復讐があろうか。
さぞ、義輝の顔が阿呆面に見えるであろう。
ふふふふふ、と全身で北ノ方は笑った。
その乳房を弾正の掌が円を描くように愛撫している。
「おもしろい……」
「でござろう」
「ふふふふ」
「されば、新屋形のうちに、公方の隠し目などあれば困るによって、そのような目の存在をお聞きしたいのじゃ」
「隠し目？……」
「たとえば、武者隠し、サグリ目、抜け穴など、こたびの造営に細工しているとか、巷間噂が流れておりまするぞ」
「左様なことは……」
「無い？」
「と思いまする。が、左様な噂あるなれば、さぐらせましょう」

「それは重畳……」
弾正は、
（成った）
と、思った。
（公方の首は、もはやこの手に）
その喜びの表情を、ぐっと唇をひきしめて耐えた。
北ノ方は気がつかぬ。まだ、波間にいた。久々のまぐわいに、腰がぬけたようになり、ふわふわと、まだ羽化登仙にさまよっている。
弾正の口髭が、たわむれて乳房を這いまわり、乳首にふれる。
ぞくぞくと快感が四肢をふるわせるのだ。北ノ方は呻いた。
「気を、気を狂わせるつもりかえ弾正！」

文春文庫
230—1
権　謀（上）
定価 400円
1979年12月25日　第1刷

著　者　早乙女貢

発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3　〒102
TEL 03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan